女子プロレス
グランプリ
SONY MAGAZINES
DELUXE
ハイパー・ビジュアル&
インタビュー・マガジン
VOL-6
980YEN
WPG
JWPとLLPW、それぞれの3年。

6

1995年(平成7年)7月15日発行第5巻第20号通巻第143号
発行所:ソニー・マガジンズ 〒102東京都千代田区五番町6の2
電話:03-3234-5811(販売)03-3234-5101(広告)03-3234-6711(編集)
印刷所:凸版印刷株式会社

私たちはファンの皆様と共に
伝統あるハワイアンジュエリーを守っています。
日本国内では唯一本格的な
ハワイアンジュエリーをお届け致しております。

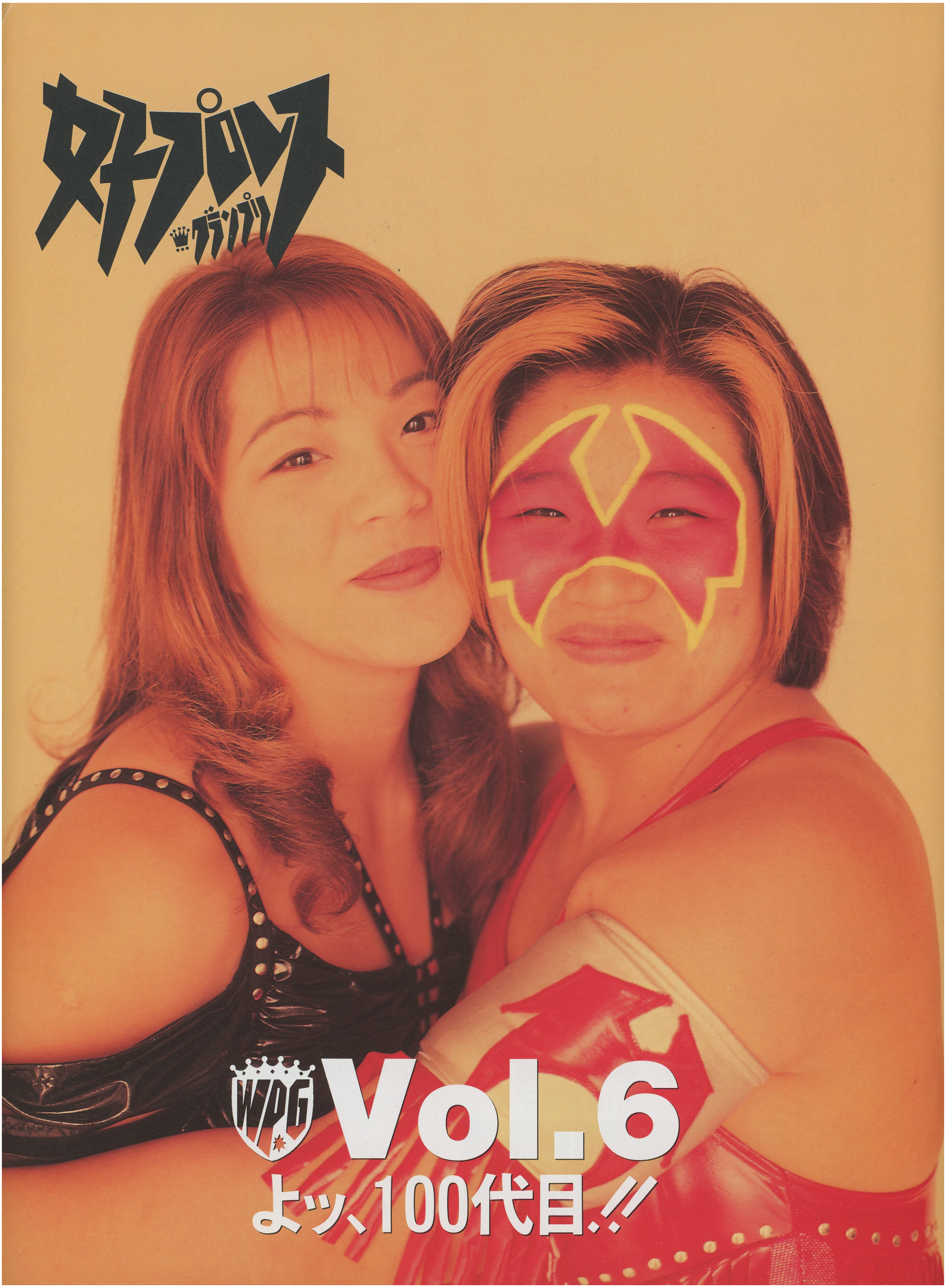
ハワイアンジュエリーのお求めは
伝統・信頼・実績を誇るハワイ最大のメーカー
Classic Creations, Inc.

Hawaiian Jewelry Club Member募集中

お問い合せ・資料請求は下記まで
TEL 0473-98-2345
FAX 0473-98-2347

HAWAIIAN RINGS JAPAN CO., LTD.
TOKYO OFFICE 307, 14-1, TAKARA 1CHOME, ICHIKAWA-CITY, CHIBA 272-01, JAPAN
PHONE:0473-98-2345~46 FAX:0473-98-2347
HAWAII OFFICE 2479 AKEPA ST. PEARL CITY HAWAII 96782 PHONE:455-5386

雑誌65842-44 定価◉980円(本体951円) T1065842440987
©1995 Sony Magazines Inc. Printed in Japan.


WPG
Vol.6
よッ、100代目!!

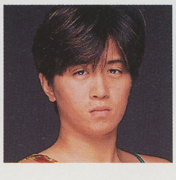
そして彼女たちは、別々の道を歩む。
大向美智子&遠藤美月 21

3年間の"華激"、統括。
風間ルミ&神取忍 26

天下獲り計画　其ノ"後"
紅夜叉 28

王者として。
イーグル沢井 30

巻末特集
"豊田軍団"正式結成
豊田真奈美　長谷川咲恵
伊藤薫　吉田万里子 112



このぉ、100代目!!
井上貴子&井上京子 32

inゆうえんち。
府川由美 37

旗揚げ後。
長与千種 52

Back 2 Steet（ストリートに帰ろう）
工藤めぐみ 57

静思のとき。
山田敏代 42

びち^{2}リターンズ。
中山香里 61

女帝、帰還す。
ブル中野 107

脱・共存共栄!?
下田美馬&三田英津子 75

がんタツスーパーわいど 72
GAEA JAPAN新人特集 67
バッドナース中村 64
KAORU 80
バイソン木村 84
コンバット豊田 88
遠藤信江&加藤直美 66
LIVE AKTION 46
堀田祐美子、渡辺智子（全女）
クラッシャー前泊&シャーク土屋（FMW）
半田美希（LLPW）
キューティー鈴木（JWP）

女子プロレスグランプリ出張所CORE 97
ゆかい次号予告 106
プレゼント&編集後記 122

女子プロレス グランプリ

contents

COVER

Art Direction **Junichi Someya**
Photography **Kazuhiro Kitaoka**
Stvling **Chisato Kamiya**
Hair&Make-up **Akihiko Yasumura**
Model **Candy Okutsu&Hiromi Yagi**

3 YEARS

JWP & LLPW 3 YEARS

Jrのせめぎあい、未来の担いあい。
キャンディー奥津&矢樹広弓 8

ピュアハートの3年、統括。
デビル雅美&ダイナマイト関西 14

もう、答えを出さなきゃならない。
福岡晶 16

武闘派、ここに極まれり。
尾崎魔弓 18

JWP中国遠征で撮られた、あんな光景こんな光景。
写真日記JWP中国の旅 70

レスラー訣別。
さよなら、みなみ鈴香 92

1995年（平成7年）7月15日発行
第5巻第20号通巻第143号
発行人／塚本忠夫
発行所／ソニー・マガジンズ
〒102　東京都千代田区五番町6-2
電話／03-3234-6711〈編集〉

Ⓒ1995. Sony Magazines Inc. Printed in Japan.
本誌の無断複製・複写・転載を禁じます

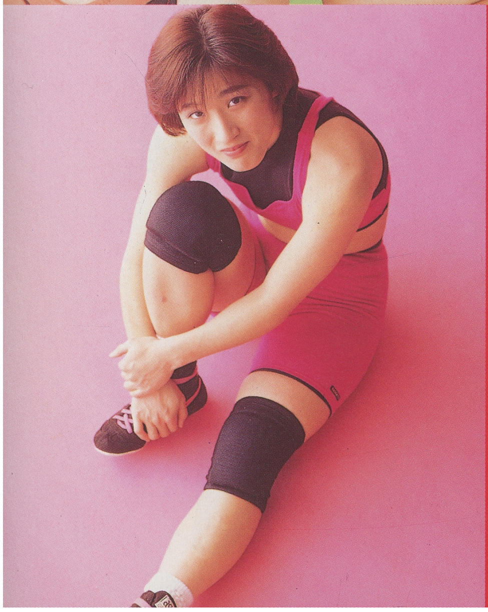
STAFF

Art Diretion
染谷淳一〈**HEAD BUTT**〉
Design
染谷淳一／村井美香／中村慎吾
松藤ひろみ／竹内恵美〈**HEAD BUTT**〉
Edition
金井覚／安川達也／丸山泉
芳賀崇〈**Klavitz**〉

1992年１月26日、熊谷市民体育館。
全日本女子プロレスに対するオポジション団体であるジャパン女子プロレスが終焉。５年５か月の歴史に終わりを告げた。
そして、そこから産み落とされたふたつの種子が、芽を出し花を咲かせた。
“ピュアハート、ピュアレスリング”をスローガンに掲げたＪＷＰ。
“華激”なるキーワードをモットーにしたＬＬＰＷ。
もはや交わることはないかもしれない。もしかすると再びあいまみえることもあるかもしれない。でも、ここまで来ればそんなことはどうでもいい。
そんなＪＷＰとＬＬＰＷ、それぞれの歩みと未来を聞いてみよう。

巻頭特集。

JWP AND LLPW 3.YEARS



PART.1

ＪＷＰの３年。

●たった９人。旗揚げ時のＪＷＰの全選手数である。
しかし、その選手層の薄さを全力ファイトとプロレスに対する純粋な想いを表現することでカバーし、また数々の斬新なルール設定や新人選手の驚異的な完成度をアピールすることで、女子プロレス・シーンに新たな波を起こしたＪＷＰ。中国遠征の成功に続き韓国進出、そして６・16両国国技館での興行で、さらなる飛躍を狙う。

キャンディー奥津、矢樹広弓。

Jr.のせめぎあい、未来の担いあい。

●JWPの6・16両国大会において、ダイナマイト関西VS長与千種戦と並んでの最大のウリがJWP初代Jr.王座決定戦。そしてその本命となるのが、キャンディー奥津と矢樹広弓だ。奥津はJWPの旗揚げとともにデビューしたのち急成長、いまだに〝最強のJr.戦士〟という称号がふさわしい。一方の矢樹はキャリア2年に満たぬうちに奥津の最大のライバルとなった。そんな2人が、ここに揃う。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA Text●SATORU KANAI Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA Styling●CHISATO KAMIYA
Back Drop●SET WORK JAPAN SET TWO(03-3555-0664) Costume●CHEROKEE(03-3475-8228)

JWP AND LLPW
3.YEARS

もしも6・16両国で、この2人が決勝を争うならば、
それはJWPのJr.最強を競う闘いというだけでなく、
JWPの未来を担う者の前哨戦となるのかもしれない。

——まず、ここんところのお2人の状況から話をしましょうか。まず奥津選手の場合は、3・26横浜アリーナで全日本Jr.王座を失い、二冠王の夢がもろくも……。

奥津　崩れ落ちてしまいました（笑）。

——あの試合はどうだったんですか？

奥津　辛かったです。全女の人とやるとアクシデントが多いんですよね。そのときも場外エスケープした際に溝に落ちちゃった……。でも、これ言い訳ですよね。前回闘ったとき以上にASARIが攻め込んできたというのもありますけど。

——一方の矢樹選手は、柔道着で闘ったりストリートファイト・スタイルにチャレンジしたりと。

矢樹　でも、そんなに良い気持ちでやってないんですよ、ストリートファイトは。柔道着も絶対着たいなんて思ってないし。プロレスラーである以上、柔道着を着るってことは、変なリスクまで背負うわけじゃないですか。もし負けたら、コイツは柔道やってるくせにあんなレスラーに負けやがって、みたいな。

——レスラー以前のキャリアを引きずって云々ってカンジで。

矢樹　うん、あのときは本当に戦争という気持ちでいたんですよ。自分のいちばん最高の。本当はTシャツにGパンでも良かったんですけど、自分にとっていちばん失礼にならないのはそれしかなかったんで。

——さて、奥津選手は矢樹選手をデビューから見てるわけですよね。矢樹選手はどのような点が成長したと思いますか。

奥津　デビューしたときから新人離れしてましたよね。目つきも新人らしくないし、いままでの新人とはぜんぜん違うなって。

矢樹　席はずしましょうか（笑）。

奥津　注目されてたと思います。ほかの人たちよりも全然。

——そんなこと言わず（笑）。でもデビュー時から完成されてたってのはあるでしょ。

——矢樹選手自身が、デビュー1年でこれだけ成長した原因を自己分析するならば？

矢樹　う～ん、同期……といっても3人しかいないんですけど、その3人の中でこれだけは絶対負けないっていうのが一つだけあるんです。なんて言ったらいいんだろう……難しいけどあるんですよね。

——それはある種ハートの部分でのもの？

矢樹　はい。

奥津　それは見ててわかりますね。自分たちは。言葉で表しにくいんですけど、なんて言うんだろう、プロレスに対する気持ちっていうか。自分がどうしなければいけないという立場もすごくわかってるし。

——そういう意味ではほかの同期とは明らかに違う。

奥津　見ててぜんぜん違いますね。

矢樹　例えば人の凄いところがあるじゃないですか。そのときいいなあって思うんじゃなくて、自分もがんばってそこまでなろうというか。

——貪欲さみたいなもの？

矢樹　ああ、それもあるかもしれません。そこがたぶん、ほかの2人よりもあったから第三者の観てくださる人が気づいたっていうか、応援してくれるものがあったのかなと思うんですけどね。

奥津　声が小さくなってない（笑）？

——そんな自信なさげにならなくとも。じゃあ逆に、矢樹選手から見たキャンディー奥津評は？

奥津　こんなの目じゃないやと思ってるでしょ？

——最近勝ってるもんだから調子に乗ってるってか（笑）。

奥津　このタヌキとか思ってる（笑）。

矢樹　思ってないですよー。でもね、未知の部分がまだあるんですよ。奥津さんとは何回当たりました？　けっこうシングル、タッグと当たってるんですけど、ちょっと研究してみようかなと思ったりしても、まだまだ隠してる部分があるから作戦の立てようがないんですよ。

奥津　全部出しきってるんだけどね。

矢樹　いやいや、出しきってないですよ。自分がこれでもか、これでもかっていっても、それ以上のものを持ってる人だから。

——奥が深いのね。

矢樹　たまたま、まぐれで2回ぐらい勝ってるんですけど、これからどうなるかわからないし。本当に追いつけ追い越せですよね。

——奥津選手がJWPに入って現在までの3年間で、幼児期とか絶頂期とか倦怠期とか（笑）、そういう時期で分けるならばいまはどんな状態なんでしょうか。

奥津　デビューしたてのころはどんどん上がっていっちゃって。矢樹と似てるような感じなんですけど、同期も下の子もいなかったから行けるだけ行ってたんですけど。だんだん下の子も増えてきて、上にだけ食らいついていくだけじゃダメなんだというのがわかってきたし、下の子と試合やったときに良い試合ができないと、いままでやってきたことが意味なくなっちゃう。そういう面でいまは勉強する、いろんな選手と当たっていく時期。

——まあ自分の下にいないのならばムチャなことがいっぱいできるわけですからねえ。どうせキャリアの長い選手には勝てないから、負けるなら派手に玉砕せねばみたいな。それがデビュー時の上り調子になったと。

奥津　もうやりたい放題（笑）。誰でもそういう考え、あると思うんですけど。

——スランプみたいなものってないの？

矢樹　自分はけっこうありますよ。大きなものから小さなものまで。

——ヤンマー状態ですか、ってくだらねー。

矢樹　（笑）自分でためこんじゃうんですよ。でも、ためこむうちに忘れちゃうんですね（笑）。

——良い性格だ（笑）。でも矢樹選手の場合、一本背負いのみでのし上がってきて煮詰まった時期があったじゃないですか。

矢樹　あそこでもし悪い方に向かってたら難しかったですよね。考えに考えぬいて、結局答えが出ずに。

——そのままやってたら、いつの間にかなんとかなっちゃったみたいな（笑）。

矢樹　気がついたら状況も変わってましたからね。

——奥津選手の場合、腰を傷めたときが転機かな。

奥津　それまで異常に上がってたのが、アレで止まりましたね。

——あのときがいちばんキツかった？

奥津　それをきっかけに少しずつキツくなってきてますけど。でも、悩むことは悩むんですけど、何かしら解決策をすぐに立てちゃう。どうすれば解決できるかという方法を先に考えるんですね。

——答えをすぐに出しちゃうんだ。

奥津　そうですね。それが間違ってるかどうかは周りの人が判断してくれればいいし。思いついたらすぐ行動しちゃうんです、あとのことは何も考えずに。

——すべては結果オーライってカンジで。

奥津　たまにずっこけるけど（笑）。

——腰を傷めたときの解決策は？

奥津　開き直るしかなかったですね。腰が直らないって言われたから、じゃあ開き直って一生つきあっていこうと。その痛さは慣れるしかないんです。

——痛さとお友達になるってことですね。じゃあ、選手の側としてJWPを見るとどんな団体ですか？　もし仮にJWP以外の団体に入ってたら、それぞれいまのポジションにはいなかったと思う？

奥津　それは間違いなくあると思います。JWPは人数が少なかったし、上の先輩しかいなかったからどんどんやっちゃうしかないというのが逆に（良い結果となった）。

矢樹　先輩方が、本当に広い心で受け止めてくれるんですよ、ほかの団体と違って。普通、出る杭は打たれるみたいなカンジで新人の子でも目立つと叩かれちゃうじゃないですか。逆にウチは伸ばしてくれるところなんですよ。

——それはかえすがえすも、現在の新人7人を見てて思いましたね。選手の育て方が上手いなあと。

奥津　試合のときでも、デビルさんは新人であろうと、ちゃんと受けてくれますし。

矢樹　良いところと悪いところがあるとして、普通、下の子に教えるとしたら悪いところを少しでもなくすようにって教え方をすると思うんですけど、ウチは良いところをすごく伸ばして悪いところを隠しちゃえみたいな。

——つまり加算法ってことですか。

矢樹　そう、それがいいと思うんですよね。

——でもってだ。最初の話に戻しますがJWP初代Jr.王座決定戦が、6・16両国で行われるわけですが。奥津・矢樹・菅生による三つ巴のリーグ戦になるんでしょ、能智選手が欠場してるんで。

矢樹　そうなるんでしょうね。でも自分は決勝に奥津さんが上がってくるとしか考えてないし、自分も決勝に行くと思ってるし。

奥津　自分も99%、いや100%矢樹が上がってくるものと信じています。

——そして、その晴れ舞台で思う存分復讐してやる、と（笑）。

奥津　復讐します。2連敗がなかったことのように（笑）。

——アレは夢だったと思い知らせてやりたいと。一方の矢樹選手は、それが現実なんだよと教えてあげたいと（笑）。

矢樹　ええ（笑）、プレッシャーに負けないように。

CANDY OKUTSU Profile
キャンディー奥津【JWP】本名：奥津智子。S50年1月16日生まれ。広島県広島市出身。H4年8月にデビュー。155センチ、57キロ。

HIROMI YAGI Profile
矢樹広弓【JWP】本名：柳沼広美。S46年8月5日生まれ。福島県福島市出身。H6年1月にデビュー。152センチ、53キロ。

キャンディー奥津、矢樹広弓。

Jr.のせめぎあい、未来の担いあい。

デビル雅美、ダイナマイト関西。

ピュアハートの3年、総括。

●JWPの2大巨頭、デビル雅美とダイナマイト関西。あるときはトップレスラーとして、いずれこの2人を超える存在を迎え撃つべく、またあるときは後進の育成者として団体内に鎮座する。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA Text●HIDENORI KOKUBO
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA
Back Drop●SET WORK JAPAN SET TWO

—このページでは、トップのお二人に、JWPの3年間を総括していただきたいと思っております。

デビル 疲れたかなと(笑)。

関西 いや、疲れてないな。もう、飽きたって感じかな。ウソウソ(笑)。そやね、まず、JWPと言えば合宿やね。旗揚げする前に合宿をしてたんで、そのときが一番団結心というか、全員が一つのものに向かって燃えてるという感じはしたね。もちろん、いまでも同じなんですけどね。ただ、あのときはなんか〝あぁ、自分はプロレスラーしてるな〟って思ったね。

デビル そう。練習を見るのも自分でやるのも、みんなとしゃべるのも食事するのも。全部、楽しかった。

—みんなで一致団結して、新しいものをつくっていく楽しみがあったと。

関西 うん。本当に、もうプロレスはできないんじゃないかと思ってたから。みんな無職の状態で、何も色も決まっていなくて。で、もし、JWPが白なら、みんなでそれになろうっていう気持ちがあったような感じがする。

デビル 旗揚げするのって、不安じゃないですか。でも、逆に言うと、みんなが一緒だからコワイものがなかったっていうか。

関西 うん。コワかったのはデビルさんぐらいやね。いや、ホンマ、デビルさんの寝起きはコワイ(笑)。

—旗揚げから関わってきたから、JWPのみんなが一枚岩になれたんでしょうね。

デビル でも、旗揚げからということで言えば、FMWもLLPWもガイアも同じなんですけどね。

関西 やっぱ、JWPのひとりひとりの人間性がいいんじゃないの。アハハハ(笑)。

デビル バランスがいいんでしょうね。自己顕示欲の強いコもいないし、かといって、弱気なコもいないし。

関西 一番弱気なのは私です。ミーや(笑)。

デビル そんな感じや(笑)。

—あの、このままいくと、お笑いページになりそうな気がするんですけど(笑)。

関西 これ、マジメな特集なんでしょ? 真剣にやんなきゃダメ、デビルさん(笑)。

デビル でも、ある意味ではそれがJWPなのかもしんない。みんな、真剣には考えてるんだけど、いつも笑ってごまかしてしまう。あまり、深刻になることがない(笑)。

—えーっと。話を変えまして(笑)。JWPは新人を育てることには定評がありますよね。その秘訣って、何なんですか?

デビル これ、力込めて言いますけど、絶対、早くはないですよ。逆に言うと、ほかが遅すぎるんじゃないですか。

関西 育ってへん、育ってへん。お客さんでも〝JWPは新人がいいね〟とか言うてくれる人がいるんですけど、実際、フタを開けてみると全然そんなことはないですよ。ただね、いまのコは勘が良いというのは言えるかもしれない。ある程度、教えたらできちゃうから。それに、ものすごくていねいに教えてあげるしね。たまに、ピチーンとキレちゃうと、手や脚が出ちゃうけど(笑)。

デビル ただ、一緒になって怒ることはないですよね。私がキレたときは、関西や尾崎がやさしくしたりとか、逆に関西がキレれば私と尾崎がフォローしたりとか。まぁ、教え方で言えば、くだきながら教えるから、たぶんわかりやすいと思いますよ。その分、教える方は大変だけど。

関西 本当、シンドイ。だって、自分がまだ育ててほしいと思ってるもん。勉強しなくてはいけないこともあるしね。にも関わらず、いま自分が持ってる範囲内で教えていかなくちゃいけないからね。特に、ちょっと前までは人数がいなかったら、いいコがいたら、とにかくひきずりあげるように一心に育ててたから。そういう面では、才能もあったんだろうけど、順調に育ってくれたよね。

デビル あの、教えてる人間も、自分たちがまだ成長してる過程だっていうことを忘れちゃいけないですよね。いま、私たちが教えてる新人たちが将来、どういう指導方法をするかといえば、たぶん私たちがやってるように育てると思うんですよ。それを考えるとコワイとこもありますよ。でも、だからこそ自分たちも勉強しなくちゃいけないって気持ちになれるじゃないですか。それに、やっぱり、新人に教えられることもたくさんありますからね。

—やっと、トップ対談って感じになってきましたね(笑)。では、今後は、JWPのカラーがどのように変化していくのかをお聞かせください。

関西 今後はJWP内での個人闘争でしょうね。ずっと、対抗戦ってカタチできてたじゃないですか。だから自分、最近もう一度土台を固めてみようかと思ってたんですよ。そういう福岡とか矢樹とかが少し自信をつけて、中で敵を見つけてぶつかってくるようになった。若手のコの挑戦してくる姿勢を見てると、すごくうれしくなってくるんですよ。もっとかかってこいと思うし。もっとやれって思うし。だから、これからはJWP内での闘争みたいなものを見せていきたいですね。

デビル 色ということで言えば、これまではとにかくみんなが同化することが第一条件だったわけです。で、3年が経って、いろんな選手が出てきて、あのころペーペーだった福岡も成長してくれて、関西も尾崎もそれなりのステイタスを築いてるわけじゃないですか。例えて言うならまずJWPという円ができて、3年たって、ようやくその中で核分裂ができるような状態になったかなと。円の中でそれぞれが自分の色を出せて、なおかつ個人ががんばることで本体の円じたいも大きくなれるような状態に。で、会社の中での戦いがあるからこそ、再度、対抗戦をやる事態になったときもおもしろいわけで。たぶん、そのことに一番最初に気づいたのはJWPだと思います。

—今後、しばらくはJWPという円を成長させる時期。で、そのためにJWP内での闘争をやっていくということですよね。では、3年後はどうなってると思われます。

関西 もう、福岡がトップになってるでしょ。いま、すごく上り調子ですからね。福岡もそろそろトップに近づいてこなきゃウソだし。そうですね、3年後は福岡とキャンディーの二枚看板の体制になってるんじゃないですか。

デビル 私はいないでしょ、3年後は。

関西 いーひんかな、デビルさん。

デビル いないよ。20年過ぎたら辞める。20周年パーティーやって辞めるんだもん。

関西 20周年までいるの。ヤだな(笑)。でも、自分もわかんないな。デビルさんと自分が抜けたら、体制も少しずつ変わっていくでしょう。問題は、そのときに誰が仕切る人間になるかですよね。

デビル それも育てなければダメだよね。試合がうんと最高でバカな人より、試合はほどほどなんだけど頭の良い人がいい。そういう人がいれば、会社は成り立つから。

—いろいろと考えてらっしゃるんですね。

関西 3年後、またこういう企画をやりましょうよ。〝あんときはこう言ってたんですよ〟ってやつを。

デビル これの30号かなんかでね(笑)。

関西 でも、そんな先のことより、この本が出たとき、言うてることとやってることが全然ちゃうやんって、言われないかどうかの方が心配やわ(笑)。

DEVIL MASAMI Profile
デビル雅美【JWP】本名：吉田雅美。S37年1月7日生まれ。福岡県北九州市出身。S53年8月にデビュー。168センチ、70キロ。

DYNAMITE KANSAI Profile
ダイナマイト関西【JWP】本名：鈴木智江子。S44年12月4日生まれ。京都府京都市出身。S61年8月にデビュー。172センチ。85キロ。

真剣だけど深刻にならない。それがＪＷＰかも。（デビル）

一枚岩になれたのはみんなの人間性の良さや（笑）。（関西）

Hikari Fukuoka

●ＪＷＰの次代エース候補の最右翼である福岡晶。
だが、そこまでの道のりはまだまだ遠く、
またＪＷＰの３年は、彼女にとって苦闘の時期だった。
しかし、そろそろ苦悩の回答を出せるかもしれない。
そんな期待を始終孕みながら、彼女は闘いを止めない。

Photography●TAISHIN AOKI
Text●HIDENORI KOKUBU
Hair&Make-up●TAKASHI KAMIYA

もう、答えを出さなきゃならない。
やりたいと考えていたことが表現できない。目をつぶりたいほど何もできなかった……。

──まず、この3年間を回想していただき、そのあと、これからの福岡晶選手の目指すところを話してもらえればと考えています。

福岡　旗揚げ戦は特別でしたよね。ＪＷＰに入ってからが、本当の意味でレスラー1年目になったって感じですから。そういう意味でも、やっぱり旗揚げ戦は思い出深いですね。

──個人的に思い出に残っているのは？

福岡　えー、私自身は目をつぶりたいくらい何もやれてない。自分がやりたいと考えてたことがストレートに表現できなくていいものが残せなかったというか……。そういうことが多かったと思う。最初のころとかけっこう、チャンスをもらったりしてたのに、それを活かしきれてなかったし。地方で普通にやる試合とかだといいんですけどね。でも、後楽園になると……。

──やっぱり、後楽園でビッグカードを組むことが多いですもんね。

福岡　私、"後楽園のお客さん恐怖症"なんですよ。別にブーイングがどうとかってことじゃないんです。でも、いまだに緊張するんです。ダメなんです、後楽園。たぶん、この3年間でやろうと思ってたことができた試合って、後楽園では1回もないかもしれない。本当はいけないんですけどね。苦手だって思ってると、絶対、潜在意識の中に残っちゃいますから。

──それは観ていて、何となくわかるような気もします。で、いま、自分のやりたいことがうまくできずに、試行錯誤してるのかなという感じがするのですが……。

福岡　たぶん、観ているお客さんが一番そう感じてるんだと思うんですよ。"福岡は何をやっても中途半端だ"って手紙とかもらいますし。でも、いま、壁にぶちあたっているわけでも、スランプになってるわけでもないんです。自分では、すごく楽しくっていうか充実してやってると思ってるんです。だけど、後楽園で力が出せないのは自分のせいだし。なんか最近、けっこういろいろと深く考え込んでしまってて……。

──その悩みには、ストリートファイトも含まれるんでしょうか？

福岡　うーん。私には合わない。というか、いまの私にはストリートファイトはできない。この間、後楽園のときのビデオを観たんですね。で、久しぶりっていうか初めてかな。1回しか観なかったのって。普通はあまり良くない試合でも何度も観るんですよ。でも、あのときは自分がダメだったから。"あぁ、こんな試合をお客さんの前でやっちゃったんだ"って思って、ぜんぜん観なくなって。だけど、やってみたからわかったんです。できるんじゃないかと思ってましたけど、2回やってみていまの私にはまだ、ストリートファイトみたいな戦い方はこなせないってことがわかった。あと2,3年経って自分に自信がついて、自分でやりたいと思えるときが来ればできるかもしれないとは思うんですけど。

──話がいきなり飛んでしまうんですけど、写真集の撮影を体験してみていかがでした？

福岡　こんなことを言ってはいけないんですけど、私、あの件についてはあまり乗り気ではなかったんですよ。で、ある先輩に相談したら"そういうのをやるのも、プロレスをやっていくうえでいろいろとプラスになることもあるから"って言われて。

──実際、効果はありました？

福岡　わかんないです。ただ、ほかの人をどうこう言うつもりはないけど、やっぱりプロレスの方で注目されたいなと思ってます。

──では、写真集はこれで見納めになっちゃう可能性もある？

福岡　うーん。どうでしょう。いま、試合でもそういう方面でも自分のやりたいと思うことと、会社の考えてることがうまくかみあっていないというか。タイミングが悪いというか。何だか私、いろいろなことを考えて複雑になってきてる状況なんで。

──突破口は見えない？

福岡　いろいろなことがありますけど、いい方に考えていかないとね。2年前のジャパングランプリのときとかだと、壁にぶち当たって、どんどん悪い方へ悪い方へと考えてましたけど、あのときと同じだとダメですからね。一生、いまの福岡晶のまま終わっちゃいますからね。

──具体的な目標は？

福岡　脱ピュアハート宣言したとき"デビル雅美とダイナマイト関西を倒したいからシングルでやらせてくれ"みたいなことを言ったじゃないですか。で、その前に3人の先輩とやって。結果的には勝ったけど、実力でそうなったわけじゃないですか。だから、今年やりたいことっていうのは、あのときからずっとそうなんですけど、上の先輩を倒すこと。そして、その先の目標にベルトがあるかなと。まだまだ、ベルトが近くにあるとは思っていません。でも、変な言い方ですけど、順当に行けば、先輩の方が私より先に引退されると思うじゃないですか。そのときに、ＪＷＰを引っ張っていくのは私。いや、私でありたいなと。そういう意味でも、いま自分をしっかり作って、ベルトに挑戦できる位置、上の人と対等なレベルまで上がっていかなくてはなと思ってます。

──多くのファンが、将来、福岡選手がＪＷＰの柱となることを期待しています。

福岡　はい。だからこそ、今年は一昨年、去年とは違う年にしなくてはいけないですよね。もう、お客さんに"1年後の福岡を期待してる"と言ってもらえる状況じゃないし。上に行くためにもやっぱり、今年、自分の存在をアピールできるようにがんばるしかないですよね。

HIKARI FUKUOKA Profile
福岡晶【ＪＷＰ】本名：同じ。Ｓ46年2月23日生まれ秋田県秋田市出身。Ｈ元年12月にデビュー。160センチ、63キロ。

福岡晶。

Mayumi Ozaki

●ともすれば“中堅”になりかねなかった尾崎魔弓。
そんな彼女がまさに“天職”ともいえるスタイル、
ストリートファイトに開眼し、D関西の牙城を崩した。
ジャパン時代のヒールぶりを顧みれば、
それはまるで、進化した先祖帰りのようなものだ。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA
Text●HIDENORI KOKUBU
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA
Back Drop●SET WORK JAPAN SET TWO

武闘派、ここに極まれり。

自分の性格、スタイルにハマったストリートファイト。だからこそ大事にしたい。

——JWPもいよいよ4年目に突入。この3年間を振り返ってみていかがですか?

尾崎 月並みだけど、アッという間でした。そうですね、やっぱり、一番印象に残ってるのは旗揚げ戦ですね。ジャパンのときはまたモメごとが起こったらとか、潰れちゃったらとか。そういうことを気にかけなくちゃいけなかったんで、ずっとプロレスのことだけ考えられる環境になれるといいなと思ってたんです。だから、旗揚げできたときは、すごくうれしかった。

あと、この3年間で一番変わったのは、奥津とか矢樹とか後輩が順調に伸びてきたこと。最初、9人でスタートしたときは、まさかこんなに早く育つとは思ってなかったから、1日2試合を何年もやんなくちゃいけないだろうなって覚悟してたんです。でも、意外と早く、卒業できた。まぁ、2年半くらいはやってましたけどね。それに、1日2試合に触れずに、JWPの歴史は語れないし(笑)。

——なるほど(笑)。変化したといえば、尾崎さん自身にもいろいろありましたよね。個人として、振り返ってみての感想は?

尾崎 うーん、旗揚げしてから前半は、全女との絡みとかがありましたよね。関西と一緒に、WWWAのタッグを獲れたのはすごくうれしかったし、山田(敏代)・豊田(真奈美)と闘ったのも印象に残ってるんです。でも、ほかの試合は何だったんだろうって気はしますよね、いま考えると。ファンの人たちにとっては非常に楽しみなカードだったのかもしれませんけど、自分にとっては結局、無意味だったのかなって感じが……。

あっ、そう、それから変わったといえば、JWPになって、地方に行っても、すごいたくさんのお客さんが入ってくれるんですよ。ジャパンのときは、50人とかが多かったですからね。うれしいですよ。地方でいっぱいになるのと、東京、大阪、博多でそうなるのとじゃ意味が違いますから。JWPが、少しは全国区になってきたことの証明ですからね。

——それから、尾崎さん自身のことで言えば、交流戦後、ストリートファイトで“新たな尾崎魔弓”を観せてくれましたよね。

尾崎 ストリートファイトはおもしろい!もう、初めてやったとき“もっと早くやってれば良かった”と思いましたもん。開放的だし、反則もOKだから何をやってもいいし。やっぱり、自分の性格、ファイトスタイルにバチッとハマってるんでしょうね。いまは普通の試合よりそっちの方が楽しいかも。

——天職じゃないですけど、もしかすると、ストリートファイトは尾崎さんのためにあるようなものなのかもしれませんね?

尾崎 どうでしょうね(笑)。ただ、乱発はしたくないんですよ。大事にしたいと思ってるから、やる必要がないと思う人とはやりたくない。この件だけは、ワガママかもしれないけど、会社にやるときは“私が指名する”って形にしてもらってるんです。デビルさんがスーパーヒールを大事にしてるのと同じぐらい、自分にとっては大切なものですからね。やりたい相手? そうですね。いま、思い浮かぶのはやっぱり関西かな。

——ストリートファイトをやったことで、今後、レスリングが変わる可能性は?

尾崎 どうでしょう。難しいことは考えずに、好きなことを好きなようにやってるだけですから(笑)。それに、普通の試合でもラフなことしちゃうし。ただ、自分ではこれまでのものが全部うまくつながったからこそ、ストリートファイトがやれると思ってるんですね。だから、もう、ジャパン時代にヒールをやってなかったら、ストリートファイトは生まれてなかったかもしれませんね。

——3年間を経て、団体としての礎はほぼ完成したと思われます。さて、今後、JWPと尾崎さんはどのような方向に進んでいくんでしょうか?

尾崎 個人的にはシングル。これまで“獲りたい、獲りたい”と言ってきたのに、実現してないですからね。正直に言うと、タッグの方が休む時間があるから、いいんですけど(笑)。でも、やっぱり、今後はシングルを狙います。これまで、関西と組んで全女とやったり、それが終わったら終わったで、キューティーとのタッグでベルトを獲ったりしててきっかけがなかったんで。だけど、いまは何もない状態ですから。がんばって、シングルのベルト奪取を目指します。

あとは、やっぱり新人のことになっちゃいますね。確かに、がんばってはいます。でも、ウチら人数が少ないですから。メインでタッグをやっちゃうと、どうしても前半の試合はぜんぶ新人になる。で、地方では比較的観る機会があるんで、彼女たちの試合をのぞいてみると、まだ“アーッ”ってため息が出ちゃうんですよ。だから、もっともっと新人のコが成長するように指導して。で、彼女たちががんばってるから、ウチらも盛り上げるぞ、っていう風になれるようにしなくてはと思ってます。これまでのように、選手、会社の人全員が気持ちをひとつにしてね。

——この3年でいろんな変化がありましたが、もしかすると、JWPの“強い絆”だけは今後も変わらないのかもしれませんね。

尾崎 うん。みんなが同じ気持ちで仕事をしてるっていうのはウチの強み。やっぱり、まだ、誰一人として“もう、JWPは大丈夫だ”って思っていませんからね。そう、みんな図々しく見えても、実は意外と謙虚なままなんですよ(笑)。

MAYUMI OZAKI Profile
尾崎魔弓【JWP】本名:尾崎まゆみ。S43年10月28日生まれ。埼玉県川口市出身。S61年8月17日にデビュー。156センチ、55キロ。

尾崎魔弓。
JWP & LLPW
3
3.YEARS

PART.2
LLPWの3年。

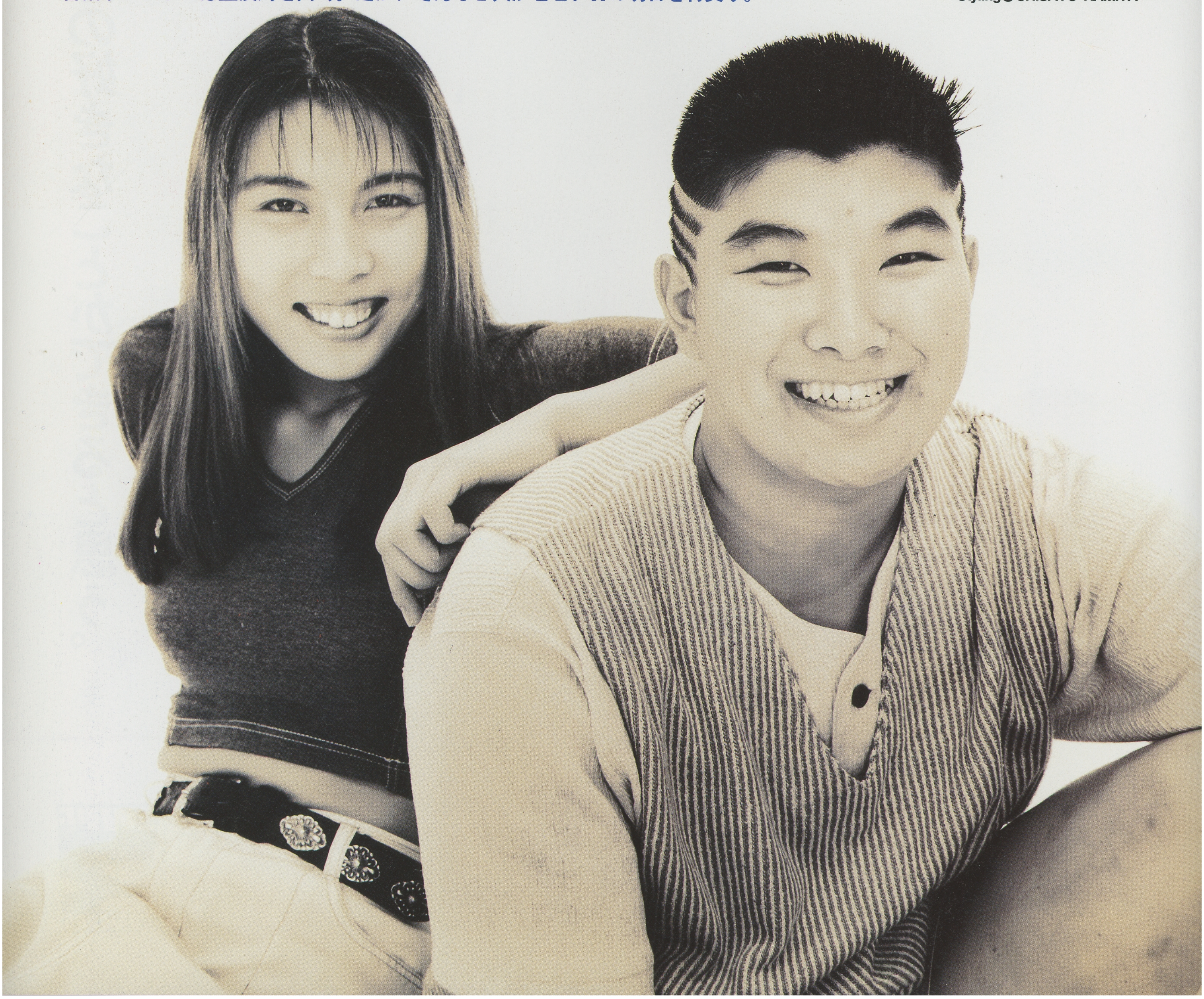
●唯一の現役女性レスラーが社長である団体、ＬＬPW。
神取忍という、プロレス界のみならず女子格闘技界にも認知させうる絶対的存在を抱え、
団体対抗戦のコアとなりながら、さらなる脱皮には至らなかった。
しかし７月18日、駒沢公園体育館で開催される世界初の女子版アルティメット大会、
『THE STRONGEST LADY “L-1”』で、勝負に打って出る。

大向美智子、遠藤美月。

そして彼女たちは、別々(それぞれ)の道を歩む。

●ＬＬＰＷの未来を担う存在となりうる大向美智子と遠藤美月。しかし、かたや女子プロレスの王道、かたやアルティメット・ファイトも辞さぬ格闘技指向と、目指すベクトルは正反対を向く。だが、そんな２人がＬＬＰＷの明日を背負う。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA
Text●SATORU KANAI
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA
Styling●CHISATO KAMIYA



LLPWにいるから、自分の好きなことができると思う。

JWP AND LLPW 3 YEARS

LLPWは、自分にとっての“ラッキー団体”かも(笑)。

大向美智子、遠藤美月。

そして彼女たちは、別々（それぞれ）の道を歩む。

JWP & LLPW 3 3.YEARS

“王道”と“究極”――。
そんな多様な志向の同居が許されるのがLLPWかもしれない。

――まず遠藤選手の場合、ジャパン女子を経てLLPW旗揚げに参画したわけですけど、旗揚げ当初と現在で変わった部分はあります？　LLPW、もしくは自分自身が。

遠藤　自分ではよくわからないんですけど、人からは試合じたいが変わったねって。確かに前よりは落ち着いて、お客さんの言うことが聞こえてくるようになったかなと。

――ジャパン女子が解散した際に2つの選択肢があったわけでしょ？　そこでLLPWを選んだのはなぜ？

遠藤　一からスタートして、始めからやりたかったんです。とにかく最初からやり直したかったんですね。

――JWPがどういうものかはいまではだいたいわかるわけだけど、それを踏まえたうえで、選んだ選択肢は間違いない？

遠藤　うーん、難しいです。でも、LLPWの方が自分の好きなことができると思う。

――まず遠藤さんの場合、パワーファイトを信条としている部分があるから、そういう男型女子プロレスはLLPWの方が出しやすいかもしれない。ジャパン女子時代から、目指すレスリングは一緒なの？

遠藤　そうですね。大向みたいにピョンピョン飛ぶようなタイプではないですから。でも、身軽なデブにはなりたい（笑）。どっしりしてる中にも、できるんだぞっていうのを見せたいな。

――一方の大向選手は全女をリタイアしてLLPWになんとか入って、そしていまや殿方ファン人気ナンバーワンという今日このごろなわけですが（笑）。でもLLPWの志向するものと大向さんの目指すものって正反対な部分もありますけど。

大向　確かにそうかもしれないですけど。全女は私の故郷みたいなものだからすごい好きなんですね。でもLLPWは自分を変えてくれた団体だから。いろんな面で。

――具体的には？

大向　全女にいたときは同期の中でもぜんぜん目立たない存在でした。「ああ、大向ってのもいたっけかなあ」って感じ。でもいまは“LLPWの大向”って言われるじゃないですか。そういう部分もそうだし、積極性から何から全部、風間さんに引き出していただいてるわけで。

――では全女の世界も知っている大向選手に聞きますけど、全女みたいな完全なタテ社会と比べると、LLPWの方が緩やかで心地良くて、その結果自分を出しやすいっていうのはある？

大向　そうですね。プロレスの技にしろ何にしろ規制されないですし、やりたいことやらしてくれるし。自分を変えたいと思えばコスチュームも好き勝手にできますよね、紅さんみたいに。そういう面では伸び伸びできるじゃないですか。だからこそ、ウチの団体にはいろんなタイプの選手がいるわけで。ヤンキーもいれば……。

――限りなく男に近い女もいる（笑）。

大向　（笑）宝塚もいるし……。

――SMの女王様もいると、言葉だけで考えるとムチャクチャですけど（笑）。でもって、LLPWの3周年を記念して行われるビッグ・イベントが7・18の“L―1”。この女性版アルティメット大会、遠藤選手は興味津々でしょうけど、大向選手はNO眼中でしょ（笑）。

大向　ウフフ（笑）。

――そんな眼中ナシの側から見て、この大会を経て一気に盛り立てようとするLLPWという団体をどう思いますか。

大向　ほかとは違う、というカラーがウチにはたぶんあると思うんですよ。それはそれでモノにしちゃえばいいと思います。自分はあまりそういうのには無関心ですけどね。格闘技戦とかをあまり好んでやりたいと思ったことがないんで。

――なんで興味ないんスかね。プロレスの方がだんぜん好きっていう、ごく当たり前の理由かなあ。

大向　そうですね。だいたい不向きなのかな？　自分がやりたいプロレスとちょっとかけ離れちゃってるの。やっぱり飛び技とかね、私、豊田真奈美さんが好きなんですよ。ああいう試合が。本当に“女子プロレス”っていう感じのプロレスが好きだから。

――いわゆる“王道”ですね。

大向　関節技にもそんなに興味ないですからねぇ。試合観ててもわかると思いますけど、関節技は使わないですから。でもかけられると弱いんですよ（笑）。

――そりゃマズい。

大向　でも、逃げるのはけっこうウマいんです（笑）。

遠藤　エビのように。

大向　逃げ足は速いですから（笑）。

――その一方で、遠藤さんはアルティメットに出てみたいとさえ思うと。

遠藤　自分を試したいんです。

大向　遠藤さんの場合、アルティメットを経験したら、何か変われそう。ばんっと殴られたときに、本当の遠藤さんが見られそうな気がして。そんな気しません？　自分から見たら、遠藤さんが出ることになったらすごく楽しみなんですよ。

遠藤　人ごとなんですね（笑）。

――自分自身でも、ひょっとしたら変われるかもしれないって期待感、あります？

遠藤　違う自分が出せるかもしれない。でもとにかく、自分を試したいですね。どこまでできるのかを。

――4・2東京ドームで、神取さんとハーレーさんによるアルティメット・ルールの試合があったでしょ。観ててどう思った？

遠藤　あのときはアッという間に終わっちゃったんで。セコンドで観づらかったし。でも、自分だったらこうするって考えたりはしました。

大向　私もセコンドについてたんですけど、鳥肌立ちましたね。でもウズウズしなかった。やりたいとは思わなかった。「すげー」と思ったけど、遠藤さんみたいにウズウズはしなかった。そこの違いなんでしょうね。

――女性がアルティメットやるのは無理じゃないかという話があったんですよね。なぜなら女性は感情の生き物だから、際限なくなってシャレにならなくなるのではと。

大向　でも神取さんや斉藤さんはそうじゃない。確かに私とか長嶋さんがやったらキャーキャーという女の闘いになっちゃうと思いますけど（笑）。

――遠藤選手はLLPWに3年、大向選手は2年半いるわけですけど、それぞれLLPWで印象に残ってることは？　遠藤さんの場合、全日本Jr王座を奪ったことかな？

遠藤　でもすぐ取られちゃいました（笑）。

――今年の1月のクラブチッタ川崎は？　良い試合したじゃないですか。

遠藤　アレは覚えてないんです（笑）。そういう良い試合と人に言われるのって必ず覚えてない。記憶が飛んじゃうんですよ。

――損な人生を歩んでますね（笑）。

大向　最近、遠藤さんが斉藤さんに歯向かったじゃないですか。アレはおもしろかったです、はたから見てて（笑）。

――大向選手は？

大向　LLPWに入ってからは本当にいっぱいありますよ。6番勝負もそうだし、昔いた全女のベルトをまさかこの団体で取れるとは思わなかったし。

――もう幸せ三昧。

大向　ほんと幸せだし、恵まれてますよね。ひょっとしたら、LLPWは占いのラッキーカラーじゃないけどラッキー団体かもしれない（笑）。

MIZUKI ENDOH Profile
遠藤美月【LLPW】本名：同じ。S46年11月9日生まれ。山梨県中巨摩郡出身。H3年8月にデビュー。160センチ、70キロ。

MICHIKO O-MUKAI Profile
大向美智子【LLPW】本名：同じ。S50年5月30日生まれ。岩手県久慈市出身。H4年1月にデビュー。171センチ、65キロ。

風間ルミ、神取忍。

3年間の"華激"、総括。

●"華激"をスローガンに、格闘技色の強いプロレスを宣言したLLPWが7月18日、ついに当初のコンセプトに忠実な女性版アルティメット大会『L―1』を行う。では、その一方で本来のプロレスをどう並行させてゆくのか。女子プロレス界きっての凸凹コンビ（笑）が、LLPWの現在と未来を考察する。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA Text●GO YOSHIDA
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA Back Drop●SET WORK JAPAN SET TWO

—さて、今回はお2人にこれまでのLLPWを振り返っていただこうと思いまして。

神取 過去は振り返らないタイプだから、何があったか忘れちゃったなあ、ガハハハ。

—いやあ、男らしいですねえ（笑）。

神取 やっぱ目の前のものを確実にこなしていくって姿勢だからね。順調には行ってないけど、これがLLPWのいいところで、苦労を楽しさに変えてしまうという（笑）。

風間 でもLLPWには、産んだ苦しみと育てていく苦しみとがありましたよね。

—はあ。産みの苦しみと育ての苦しみでは、どちらが辛かったですか？

神取 いやあ、カッコいいねえ（笑）。

風間 両方とも辛いですよ。産めるかどうかの瀬戸際にも立たされたし、産んだはいいけど、育てる苦労は永久に続くでしょ。

—ところで団体の知名度を上げるためには芸能活動も重要だっていうのは、ジャパン時代に身をもって味わいましたよね。

風間 それは私、いまでも思ってます。だからいまはテレビ局の方でも「LLPWに電話すれば、試合がないからすぐ出演OK出るぞ」って言われてるみたいで（笑）。

—そこでズバリ言ってボクは、風間さんにアイドル活動を再開してほしいなあと。

風間 でも、この体型になってからお話は来ませんねえ。最近、AV監督のお話は来ましたけど、丁重にお断りしました（笑）。

神取 いやあ、すごいね（笑）。

風間 そういうカンちゃんだって、男優さんで話が来てたじゃない（笑）。

神取 ガハハハ、そうなんだよ。困っちゃうよなあ、ンムフフフ。

—そんな日本初の女性男優・神取さんは、LLPWでどんな苦労がありました？

神取 苦労は苦労と思わないからね。でも風当たりは、団体の長だから風間の方に行くわけじゃない。だから楽だよ〜。何かあるとヒュッと風間に隠れて（笑）。

風間 立場がぜんぜん違うじゃないですか。会社としての風当たりはこっちに来るけど、対抗戦とか実力的なことはどうしても神取に目が向くから、その辺でのプレッシャーは常に感じてるんじゃないですか？

神取 だけど、苦労に思っちゃったら全部苦労になっちゃうしさ。物の捉え方だよ。同じやるんだったら楽しい方がいいじゃん。

風間 最初のころなんか道場もなくてディスコを借りてたりとかあって、すごい貧乏から始まってるわけですけど、そのときにもマスコミの人に「悲壮感がぜんぜんないね」って言われたんですよ（笑）。

神取 それがいけないのかな（笑）。涙ながらに語れるぐらいの苦労はしてるんだよ。それをあえて話さないだけであってさ。語れって言ったら、いくらでも語れちゃうよ。

—一升瓶片手に、夜通しで（笑）。

神取 そうだよ（笑）。そんなの語らないでも。わかるもんはわかってくれるはずだしさ。だから、そういう苦労話は辞めたとき涙ながらに語ってあげるよ、うん（笑）。

—でも神取さんはジャパン時代にフラフラした立場でしたから、こういうカチッとした立場になると苦労も多いですよねえ。

神取 いやあ。でも、この団体はみんなで力を合わせて作ってるわけじゃない。それが「こんなに小さい団体」だとか馬鹿にされると、「お前、見てろよ」って思うよ。

—反発心を燃やしてるわけですね。

神取 いやあ、輪に入れなかっただけじゃない、ウチが。ガーッハハハハハ。

風間 なんか一歩、外れてるよね（笑）。そういった点では、団体っていうビジネスの中で付き合いが不器用なんだと思う。ほんとに「嫌なものは嫌」っていう部分だけ共通してるんですよ。妥協しなきゃいけないっていうのもあるんだけど。

神取 大人になれよってね、ガハハハハ。

—みんなが輪の中で楽しくやってるのを、ちょっと遠くからスネて見ていると（笑）。

神取 ガハハハハハ。あえてしてるわけじゃないんですけどね。うん（笑）。

—で、これまでLLPWを運営してきて、いちばんのヤマ場というと何でした？

風間 常にヤマ場だった（笑）。

—あら、常に崖っぷちと（笑）。

風間 そうなの〜（笑）。

神取 いつだって社運かかってるよ（笑）。

—落ちつく暇もないわけですね。

風間 だから試合なくても雑用ばっかで。

神取 ガハハハ、そのせいで、「あいつら絶対に暇人だよ」とか思われてるんだよ。だけどけっこうねえ、バタバタしてるんだ。

—おそらく「あいつら酒ばっか飲みやがって」とか思われてますよね。

神取 そうそう。「酒ばっか飲んで、遊んでんだぜ」とか思われがちなんだけどね。逆にそれはいいんだけどね。

—"遊んでるのに強い"っていうのはカッコイイですからねえ（笑）。

神取 ガハハハハハ。やっぱ、飲みながら鍛えなきゃいけないよ、ンムフフフフ。

風間 お酒も体力だって（笑）。

—そんなLLPWの問題点といえば、新人が育ちづらいってことぐらいですかね。

風間 そうなんですよね〜。

神取 でも、それこそ確率の問題もあるじゃない。取る人材じたい少ないんだからさ。

風間 でも、それ言っちゃったら、じゃあなんで募集しても新人が来ないんだってことになっちゃうじゃん（笑）。

神取 あっ、そうか。困ったなあ（笑）。ウチってまあ、問題はあるんですけどね。

—えっ、ズバリそれは何ですか？

神取 わからない（笑）。でも食わず嫌いが多いんだと思うよ。

—「神取さんが怖いんじゃないかなあ」ってイメージも強いんでしょうね。

風間 まあ、見てる分にはいいけれど、下になりたくないみたいな（笑）。

—レスラーとしての凄味がマイナス方面にも発散されて、他団体だけでなく新人にまで睨みをきかせちゃってるという（笑）。

神取 ガハハハハ、それはマイナスだな。

—でもまあ、対抗戦とかではそれが非常にプラスになってたわけですけど、そんな凄味は今度の女性版アルティメット大会でも発揮されるわけですよね。

神取 やっぱり、ほかの女子の団体でやってもあの程度だろっていうのがあるじゃない。だから、ウチならではっていう意味ではやらなきゃいけないっていうのもあるしね。

—これに風間さんが元シュート・ボクサーとして参加したらおもしろいですよ（笑）。

風間 でもシーザー武志さんに、なんて言われるか（笑）。まあ、レスラーとして出たいとは思うんですけどね。

—やっぱり参戦するとすると、肉体改造もしなきゃならないわけですか？

風間 やっぱ、しなきゃダメですね。いまは投げに対抗できるように太ってますけど……、なんて言い訳（笑）？

—神取さんはアルティメット大会を見てどう思われました？

神取 おもしろいと思ったよ。スッキリしてるじゃない（笑）。もうほんとに白黒ハッキリしちゃってるし、余分なものが排除されちゃってるじゃない。それでいて、逆に美しさもあるからね。でまあ、グレイシー柔術っていうものが出てきてさ、やっぱ柔道家としては悔しいものがあるわけよ。

—あっ、柔道家の血が騒いだと。

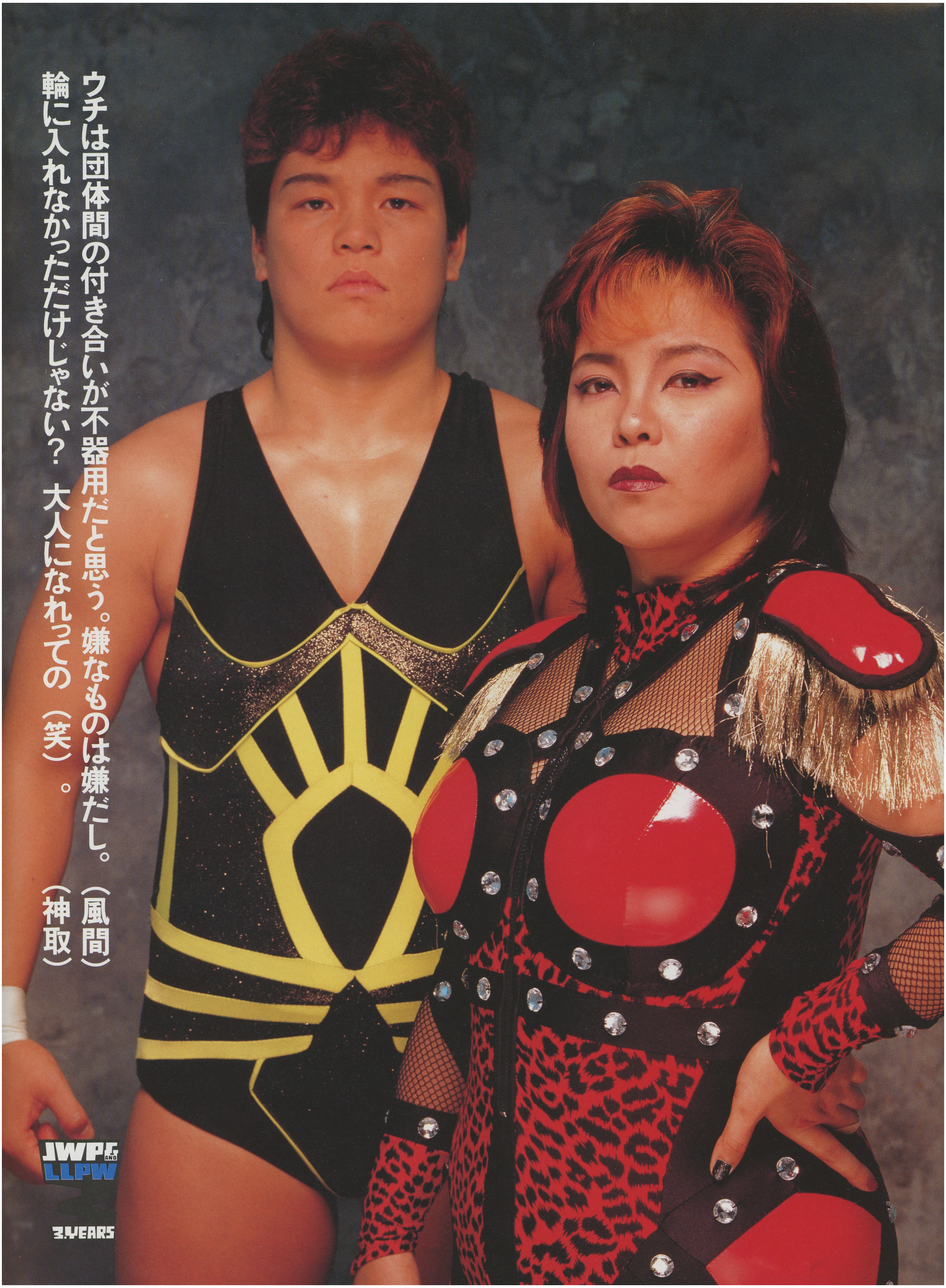
神取 だけどレスラーという看板も背負ってかなきゃいけないし。でも自分は武道家じゃないから、相手を傷つけちゃいけないなんて、ちゃんちゃらおかしいよ（笑）。

—でもそこまでやっちゃったら、また確実に入門者が減っちゃいますよ（笑）。

神取 ガハハハ、そうなんだろうなあ。

RUMI KAZAMA Profile
風間ルミ【LLPW】本名：斎藤ルミエ。S40年11月28日生まれ。東京都台東区出身。S61年8月にデビュー。153センチ、60キロ。

SHINOBU KANDORI Profile
神取忍【LLPW】本名：神取しのぶ。S39年11月3日生まれ。神奈川県横浜市出身。S61年8月にデビュー。170センチ、75キロ。



ウチは団体間の付き合いが不器用だと思う。嫌なものは嫌だし。（風間）

輪に入れなかっただけじゃない？ 大人になれっての（笑）。（神取）

紅夜叉。

天下獲り計画 其ノ“後”

●LLPWで最も大化けしたレスラーといえば、紅夜叉をおいてほかにいないだろう。当時のコスプレ・ブームと見事にシンクロし、そして唯一生き残った。しかし過日、朋友の長嶋美智子の造反により孤立。これからは一匹狼の道を歩まざるを得なくなった。そんな彼女の“天下獲り計画”その後。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA
Text●SATORU KANAI
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA
Back Drop●SET WORK JAPAN SET TWO

これからは〝女一匹狼〟として生き抜くぜ。

紅　また取材かよ。かったりぃからとっとと済ませタコ。

—ま、そんなこと言わず。今回は姉御にとってのLLPWの3年間はどういうものだったかというのがテーマなんですけど。やっぱ最大のポイントは、紅夜叉として生まれ変わったことにつきますか？

紅　おうよ。LLPWを旗揚げして1年ぐらいのとき、紅夜叉として生まれ変わった最初の1年がすんげー充実してたな。でもよ、そのあと現在に至るまでは落ち着きすぎてきたっちゅーか。

—怪我もありましたしねぇ。

紅　そうなんだよな。だからえれぇツイてねぇ2年目だったわけよ。長嶋もどっかに行っちまったし。

—でも、あの件は何で腹を立てたのか、ぜ〜んぜん理解できないんですけど。vsKAORU戦は良い試合だったのになぁ。

紅　だろ？　GAEAの旗揚げでのKAORU戦のあと、控室に戻ったらもういなかったし。あとで聞いた話じゃよ、〝あんな情けない紅とは組めない〟だと。オメーに言われたくねぇっての。いままでどれだけオレさまがかばってきたか。

—この恩を忘れたかと。

紅　ホント、信じられねぇクソガキだよ長嶋は。前回の『女子プロGP』の取材で、〝これからはタッグ屋として……〟なんてヌカしてたくせに……許せねぇ。

—でもま、やる気になったっつーのは長嶋選手にとってはいいことかもしれませんよね。確かに半田選手と組んでの一連の試合では、従来の長嶋選手らしからぬ堂々とした部分が出てきてましたし。

紅　でもよ、どうせやるんだったら一人でやれって言いてぇな。だってよ、前にも二人で話してたことがあってな〝半田は試合放棄したりFAX流して会場行くだの行かねーだのってやってるけど、ウチらはプロとして、ワルでも筋を通してるよな〟ってな。それにも関わらず、何考えてんだあのバカ。やっぱあのヤローは、誰かの下にいなきゃやってられねぇのかなと思うと、すげぇガッカリしたぜ。オレさまについてきた意味がねぇっつーか。

—じゃあアレなんスかね、紅夜叉に変わったことと長嶋美智子との出会いと別れ（笑）ってのが、LLPWでの大きな出来事になりますかねぇ。

紅　でもアイツとも1年ぐらいしか組んでねーから。

—さんざん土下座してお願いしますと言っといて、それで勝手に去ってっちゃうんだから、姉御にとっても迷惑なメモリーでやんスねぇ（笑）。でもま、これ以上長嶋選手の話になると姉御はブチ切れちゃうかもしれないんで（笑）、話題を変えましょう。

紅　その方がいいな。いまはあのヤローのこと思い出すだけでムカツクからよ。

—じゃあ、姉御がブレイクする追い風となったコスプレ・ブームについて。あの当時脚光を浴びた選手で残っているのは姉御ぐらいで。この前、全女の会場にぬまっちが観に来てたんですけど、髪の毛もロングになってスリムになって、すげぇ良い女になってましたぜ。けっこー羽野晶紀に似てたッス（笑）。

紅　良い女？　へぇ、あのぬまっちが。

—そうなんスよ。で、姉御が唯一生き残れたというのは、格好以外に別のものがあったからと我々は見るわけですが。

紅　気づいたらよ、あのころバーッと言われてたヤツらがいねぇなってぐれぇのもんだよ。あとテメェのことでいろいろありすぎたからよ、それで紅夜叉なりに落ち込んだり、何かに向けて燃えたりしてたからな。オレさまの口から言うのも何だけどよ、よくも悪くも少しずつ成長してんじゃねーのかなって思うぜ。やっぱよ、最初は確かにキャラクター・レスラーとして出たよ。でもそのブームが終わったあともオレさまはいつでも特攻服着て闘ってた。やっぱそれ以外のものをずっと追い求めてたっちゅーか、ずっとコスプレだけじゃいけねぇって危機感があったんじゃねぇか!?　自分自身でもイマイチわかってねーけど。……話は変わるけどよ、最近は試合してもすげー楽しいときと、すげーツマんねぇときがあるんだよ。相手が例えば同じ人、神取とやったとしても、その楽しくなさっつーの？　それは観てる人にもわかるって言われたんだけどよ。やっぱそれは長嶋のことがあって、テメェではそんなつもりはなくても試合に出ちまうんだよ。

—プロとしてはいちばん良くないと。

紅　そんな状態が1年ぐらい続いてるんだよ。

—でも、姉御ってほかのLLPWの選手に比べて、危機感というか、このままじゃいけないと思う気持ちをいちばん持ってますよね。

紅　そうか？　でもオレさまはよ、いくら周りが良い試合だと褒めてくれても、自分が満足する試合ってのがいまだにねーんだよな。

—なるほど。で、ここ最近の姉御の野望というと、タッグで頂点を極めて、そこからシングルに持っていきたいというのがあったわけですが、もはやその考えが崩壊してしまいました。

紅　でもよ、今回の長嶋の造反は良い機会だと思うぜ。余計なのがいなくなったし、やっぱオレさま紅夜叉のモットーは〝女一匹狼〟だったからなそもそも。それがまた元に戻っただけで、でも中身は昔よりちょっとガッチリしてきたというのはあっからよ。また、これから始めていきゃいいってこった。

KURENAIYASYA Profile
紅夜叉【LLPW】本名：安田留美。S45年4月23日生まれ。福井県小浜市出身。H元年12月にデビュー。161センチ、70キロ。

イーグル沢井。

王者として。

●ジャパン女子崩壊時に引退という道を選びかけていたところを風間ルミに引き止められてLLPW入りしたイーグル沢井。そんな彼女が第2代LLPWシングル・チャンピオンになってしまうのだから世の中わからないもの。団体の象徴＝王者としてのLLPW観。

合宿で、風間社長も食事当番に入るのがウチのいいところ。

Photography●TAISHIN AOKI
Text●GO YOSHIDA
(Kami No Pro-Wrestling)
Hair & Make-up●AKIHIKO YASUMUR

――そもそもLLPWを選んだ理由は?

沢井 全女に行きたいとも思わなかったたし、やるところがなかったじゃないですか。でもプロレスは好きだし、やったからには3カウント聞くまでやりたいと思ったから。

――それってテンカウントですよねえ?

沢井 あはは、それそれ(笑)。遊んででもしょうがないしバイトしようと思ってたら、ちょうど面接の前日に風間さんから電話がかかってきたんですよ。「やりたくないのはわかるけど、アメリカ遠征に行きたくない?それからプロレスやるのかどうか考えればいい」って。ギャラもいいし、1週間で1試合だからすごいおいしいなあと(笑)。それでアメリカに行ったらすごいおもしろくて、風間さんに「私はいまの気持ちじゃすぐに辞めたくなっちゃうかもしれないから、みんなが1年なら半年契約でもいいですか?」って言って。すごいワガママですけど、それでまだいるんです(笑)。

――LLPWはそれほど楽しいわけですか。

沢井 やっぱ社長がレスラーだから選手の気持ちをわかってくれるんで、やり甲斐もあるんですよ。みんな一丸となって「この団体を良くしていかなきゃ」ってなってるから、辞めたいなんて思いませんでしたね。

――これまでLLPWをやってきた3年間いちばんキツかったのは何ですか?

沢井 キツかったの……。練習ですか?

――あ、練習がいちばんでしたか(笑)。

沢井 年寄りなんでキツいんですよ~、もうシゴかれてます(笑)。まあ、ちゃんと自分でやってますけど。あと、ベルトに何回挑戦しても取れないし、交流戦にいっぱい出てるわりに成績も悪いし、振り返ってみると下の子がすごい伸びてて、この間も半田に負けてしまったみたいな。みんなが伸びることはいいんですけど、自分が置いてかれちゃったみたいな感じで。

――はあ、イーグルさんがグングン伸びるのは体重ぐらいという感じで(笑)?

沢井 ひっど~い(笑)。痩せようかなあ。

――で、LLPWは何が楽しいですか?

沢井 う~ん、楽しいことは多いですよ。がんばれば社員旅行に連れて行ってもらえるとか(笑)。あと、いろんないい人に巡り合わせてもらえるっていうのもあるし、いっぱいありすぎて(笑)。いちばん最初の合宿で、風間さんとかも食事当番に入るのがいいと思ったんですよ。先輩とかがリーダーとなってご飯作って、残ったら次の日にそれを工夫して作ったりするから合宿もすごい楽しいし。よくLLPWは暗いって言われるんですけど、明るいですよ。若い人はいませんけど、25歳以上はいっぱいいるし。

――新人は辞めちゃうし(笑)。

沢井 まあズバリ言って、LLPWは大人のプロレスなんですよ。まあ、ジャパン女子でもジュニアのベルトは巻いてたけどあまり印象にないから、LLPWでやっとチャンピオンになれたって感じでしょ。だからもっとがんばらなきゃいけないんですけど、歳が歳ですからね(笑)。いまはまだ若手の子に任せられないし、自分がやらなきゃいけないこともいっぱいあるから、あまりそういうことは考えてないですけどね。体に限界が来るまではやりたいし、結婚引退が夢ですから(笑)。

――ちなみに理想の結婚相手というと?

沢井 優しさが顔に滲み出てるような人♡あと価値観が一緒だったらいいなあ♡

――イーグルさんの価値観というと、「御食事第一主義」とかですか?

沢井 ひっど~い(笑)。なんですかねえ。

――でもまあ、いまは結婚しないでもいいくらいの楽しさがプロレスにはあると。

沢井 そうですね~。

――ほんとにそう言いきれます?

沢井 や、言いきれない(笑)。仕事は仕事でプライベートはプライベートだし。練習は練習でするんですけど、やっぱり水着とリングシューズ付けて、自分のテーマ曲が鳴ったときにだけ、私はイーグル沢井に変われるような気がするんですよ。

――リング上では人の良さとか消せます?

沢井 う~ん、よく消せないって言われるんですよ。それで悩んだこともあるんですけど……がんばんなきゃいけないことがいっぱいあるんですよねえ、ほんと(笑)。

――そんなイーグルさんとしては、格闘技的なものとか興味あります?

沢井 興味ないわけじゃないけど、自分とスタイルがぜんぜん違うと思うんで。ちょっとはやってみたい気持ちはありますけどね。アルティメットもビデオで見ましたし。

――で、いかがでした?

沢井 やだ~(笑)。見てたら、大きい人は足を狙われたら終わりなんじゃないのかなって場面があったんで、やだ~と思って。やろうと思えばできると思うんですけど。

――正直に「やだ~」と言えちゃうのが、イーグルさんのいいところですよね(笑)。

沢井 でもリングに上がったら「やだって言ってたのに」ってなるんですよね。

――いまはトッコちゃん状態だから「やだ~」と言えると。でもこれはイーグル沢井のインタビューなんですから(笑)。

沢井 ああ、じゃあ怖くなんかないんですよって書いといてください(笑)。でも自分は格闘技的な路線じゃなくて、男子みたいにパワーのある試合をしたいんですよ。女子は軽いイメージがありますけど、もっと技にも重量感を与えて、「これが出たら終わりだ」っていうぐらい技も大切にしたいし。

――はあ、重量感を出すために重量を増やして十両になったと(笑)。イーグルさんは重量を増やして十両になったと(笑)。

沢井 増やしてるわけじゃないんです。ただ太っていっちゃうんです(笑)。

EAGLE SAWAI Profile
イーグル沢井【LLPW】本名:沢井知子。S42年12月16日生まれ。東京都新宿区出身。S61年9月にデビュー。170センチ、110キロ。

TAG TEAM CHAMPIONS
WORLD
TAG TEAM

このお、100代目.!!

●見事、念願の100代目WWWAタッグ王者に輝いたW（ダブル）井上こと、京子&貴子。いま、名実共に女子マット界の最高峰タッグ・チームとして君臨する二人。その強さの秘密とは一体？　何のしがらみなしの、この言いたい放題対談でその答えがわかるはず!?

kyoko and takako W.INOUE

――遅ればせながら、WWWAタッグ王者に返り咲き、おめでとうございます。

京子・貴子　イエー。（自分たちに）おめでとーございまーす。パチパチパチ。

――念願の100代目になられてから、約3か月が経ちました。いまの実感は……。

貴子　うーん、王者チームらしくはなってきたんじゃないでしょうかね。

――いままでの歴史を振りかえると、WWWAシングル王者はもとより、タッグ王者チームが、人気を一手に引き受け、全女内を活性化してきたと思うんです。ビューティー・ペアーにはじまり、クラッシュギャルズ、最近ではアジャ&バイソン、山田&豊田チームなど。

京子　自分たちではその位置に達したと思ってるんですけどね……。

貴子　そうしていくつもりなんですけどね。

――お互い〝げどね〟ということは、何かいま納得いかないものがあるのですか。

京子　良い、悪いっていうのはお客さんが決めるものだからいいんですけど、豊田軍団のおかげで事が思うように運ばない。

貴子　おっと、早くも、ピー（笑）。

京子　悪口いってるわけじゃないんだけど、一応は（笑）。私たちがやりたいことと、会社の意見も食い違ってるしね。

――その〝やりたいこと〟とは。

京子　いま私のやってるプロレスが私のやりたいこと。それが会社にはまったく受け入れてもらえない。それが私としてはちょっと悔しい。まあ、お客さんがついてきてくれれば良いと思ってます。

――貴子さんも同じ意見ですか。

貴子　そうですね。いろんな選手がいるから、いろんなプロレス、いろんな意見がありますよね。それを会社にはわかってもらいたい。難しいですよね。

――やっぱり豊田軍団の存在ですか……。

京子　まあ、軍団といってもあそこは豊田さんだけですから……。

貴子　ホントに。あとの3人はカス！　もしくは金魚のフンみたいなもんだから。

京子　貴子節ですね、これは（笑）。

――軍団の中にはお二人の同期の吉田万里子選手がいるわけですが。

貴子　かつては同期でしたけど、いまは同期だと思ってないから。

京子　楽な道を行こうしてる奴はだめです。結局、そっち（軍団）に入れば目立てるかなって考えでしょ。自分でも努力もしないで……。甘い甘い。

貴子　みんなの中の一人より、そっちのNo.2になれればと思ったんでしょ。人の下にくっついていくという考えがおかしいよ。そういう甘い奴は許せません。

――後輩の長谷川咲恵、伊藤薫選手も脅威には値しないと……。

京子　あー、もう、全然。あの二人はいまもう目が死んでるからね。

貴子　軍団に入る前の方がまだ良かったよね。私たちにも対等に真正面からぶつかってきたのに、いまあの二人はどうしちゃったのかね。そういう死んだ顔の奴がリングに上がるからケガするんだよね。

京子　上の二人に気を遣ってて、ビクビクしちゃってんだよね。〝どうしよう、どうしよう〟って。もったいないよね。

貴子　はっきりいって大失敗だね、あの軍団は。軍団としてはこの3か月間、何も全

Photography●SHUSUKE NAKAMURA　Text●YOKOHAMA JAMES DEAN　Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA

府川由美。

inゆうえんち。

●おめでとー♡　4・16後楽園ホールでついに復活（再デビュー）することができた僕らの府川由美ちゃん。そのご褒美として、よみうりランドにご招待したのじゃ。天気は良くなかったけど、由美ちゃんは楽しんでたぞ。

Photography●TAISHIN AOKI　Text●SATORU KANAI

special thanx 2:
YOMIURI LAND
よみうりランド

府川由美。

遊園地に来るのは久々だし、本当に念願だったんです。今日は思う存分、めいっぱい遊んじゃうぞぉ♡

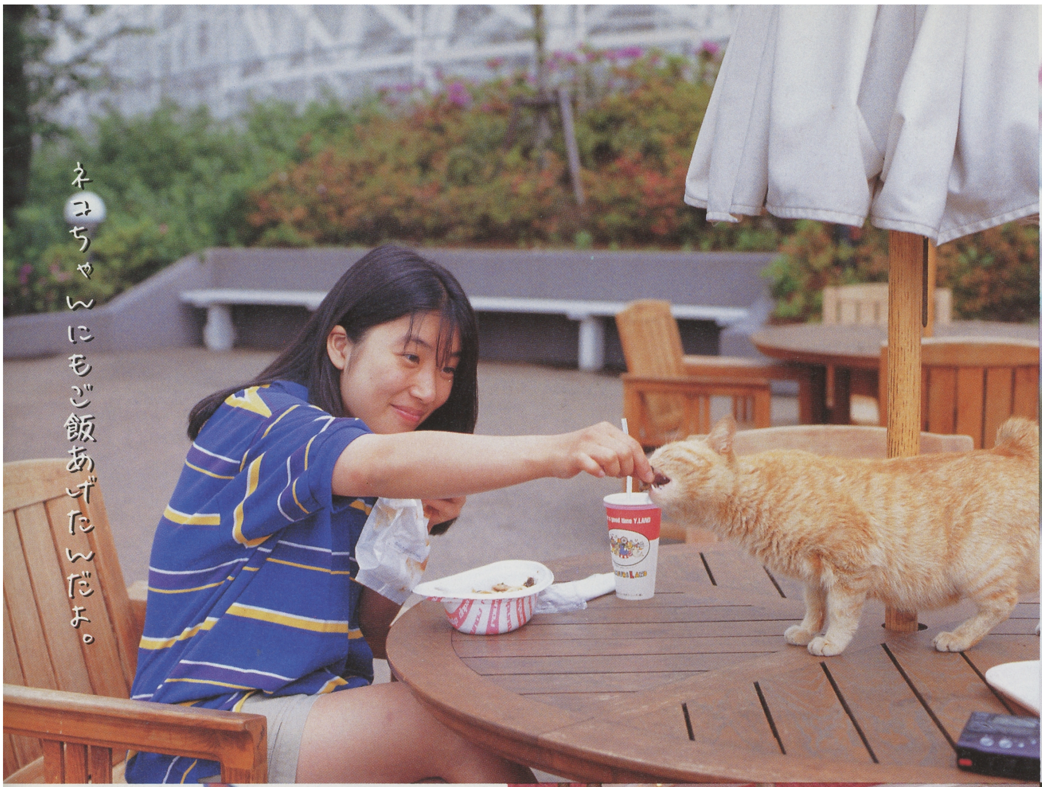
ソフトクリーム、大好きなの♡

もー、やっ♡（©やーとぴあ）

お化け屋敷なんか怖くないぞ。

これ、あげる♡

えーん、身長が足りないよぉ。



再デビュー戦ですか？　あの声援はすごく嬉しかったし〝復帰できておめでとう〟っていう暖かい声援だったけど……。でもその〝復活できておめでとう〟はあの1試合で終わってるから。もう、復帰さえしちゃえばあとはみんなと同じになるわけだから。危機感だらけですよ。みなさんが注目してくださってるのに、試合内容がついていかないからイライラしちゃうんです。

いま欲しいものはスタミナ・体力・瞬発力の3つ。小さいくせに動きが鈍いし反応も遅いし。大きい人の倍は動きたいんで。もちろん、身長と体重も欲しいけど（笑）。巡業に行きだすと痩せちゃうんですよね。私の場合1、2キロ減るのが大きいから。だから休みに入ったら思いきり食べて蓄えて。まるで熊さんの冬眠みたいですね♡

一人暮らしして、1年3か月ぐらいですけど、ワンルームでキッチンがすごく狭くって。ガスコンロが置けなくて、電気の蚊取り線香みたいなのが1個しか付いてないの。料理は得意じゃないけど作れますよ。一応、小学校のとき料理クラブの部長だったんですよ。でも作るよりもっぱら食べるの専門だった（笑）。

オフはお部屋の掃除や電話とかお買い物。カーテンとかベッドカバーを替えたいんですけど、いまはお金がないんで雑貨類を集めてます。もう可愛い♡　と思ったらすぐに買っちゃう。最近のお気に入りは写真立て。480円ぐらいで安かったけど、木のフレームがすごく可愛いの。

夢ですか？　いつになるかわからないですけど、辞めたらお金を一生懸命ためて喫茶店を開きたいんです。できれば鎌倉あたりで、お母さんと一緒に。結婚願望はいまはないです。好きなタイプの男性は……優しくて頼りになる人♡　自分がこんななんで。優柔不断だからみんなが迷惑しちゃう。

自分は、ばかだなあと思いますよ（笑）。例えば、コインランドリーに行って洗い物を入れた洗濯機の隣に200円入れて空回りさせたり、シャンプー、リンス、トリートメントを買いに行くと、なぜかシャンプー、シャンプー、トリートメントとか、リンス、リンスでシャンプー買うの忘れちゃったり。どこかひとつ外しちゃうんです。

YUMI FUKAWA Profile
府川由美【全日本女子プロレス】本名：同じ。S51年5月22日生まれ。神奈川県横須賀市出身。H5年11月にデビュー。152センチ、50キロ。

山田敏代

Toshiyo Yamada

静思のとき。

●1年ぶりにオール・パシフィック王座に返り咲き、“完全復活”のきざしを見せた矢先、左足首負傷のため試合欠場を余儀なくされてしまった山田敏代。この間(かん)、全女は激しい戦国時代に突入してしまった。戦線から離れた“戦士”は、一人、自身の姿を問う。

Photography●SHUSUKE NAKAMURA
Text●YOKOHAMA JAMES DEAN
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA

山田敏代／静思のとき。

豊田の"軍団""赤いベルト"？
いまは、好きなようにやってればいいんじゃない。
でも、自分がこのままにさせてはおかないよ。

—やってしまいましたねー。

山田　はい、やってしまいました（笑）。

—いやー、それにしても痛々しいですね、松葉杖とその左足のギプス姿は。

山田　まー、自分は痛いというより……ギプスの中がかゆいんですけどね（笑）。

—いまさらながらですが、今回のそのケガの経緯を詳しく教えていただきますか。

山田　益田（4月22日、島根県益田市体育館）で貴子とのタッグで堀田さんとみなみ（5月引退）さんと試合をしてるときでした。堀田さんのキックをかわそうと思って、股下にスライディングしたら、滑らないで止まっちゃったんですよ。で、グギッて。

—左足首骨折ですか。

山田　くるぶしの上あたりの細い骨のなので、正確には左足首腓(ひ)骨骨折ということみたいです。あっ、ちなみに恥(ち)骨って書かないでくださいよ（笑）。

—はいはい（笑）。えーと、1か月以上の試合欠場は平成2年の春以来ですね。

山田　ホント、久々ですね。首（頸椎(けいつい)）のケガのときは"下半身不随になるかもしれないよ"って言われたことがあるんで、それに比べたら、これくらいの骨折はケガのうちには入りませんよ。

—頼もしいですね。

山田　今回は親も"あー、そう"って感じでぜんぜん心配してません。自分だけじゃなくて親も強くなりましたね（笑）。

—首のケガのときは8か月間の治療期間を費やしましたけど、今回はどのくらいかかるのでしょうか。

山田　大したことないですから、この本が出るころにはエキビジョン試合ぐらいはやってると思いますよ。みんなけっこう落ち込んでると思ってるみたいですけど、自分にしてみればとうぜん命にはまったく別状ないわけですから"毎日試合してればケガぐらいするだろう"って感じですよ。最近は、長谷川とかみんなケガしてますからね。て、いばってどうするよ（笑）。

—いや、まったく（笑）。ということは、一部の関係者やファンが心配している最悪の事態には……。

山田　"辞めちゃうんじゃないか"って？

—ええ。

山田　今回また首をやってたら、引退は決意してたと思います。もう年齢も年齢ですし。でも心配しないでください。応援してくれるファンのためにも、まだまだ辞められません。

—それにしてもタイミングが悪かったですね。昨年のインタビュー（本誌Vol.4）で"どん底まで落ちてそこから這い上がってみたい"という発言をしていた山田さんが、今年3月26日の横浜アリーナで、1年ぶりにオール・パシフィック王座に返り咲きました。まさに、自力で這い上がってきて、"これから"ってときに……。

山田　いつも"これから"ってときにケガするんですよ。でも、横浜の試合は自分ではぜんぜん納得してないんですよ。あそこで負けてたらホントにもうダメだったと思うんですけど、"まあ、とりあえずはどん底からの第1歩は踏み出したかな"ってぐらいですかね。

—一部のプロレス誌では"山田敏代、復活！"みたいな記事が書いてあったんですけど、正直いって、僕もあの日の試合を観て"復活"とは思えませんでした。翌日からの試合でも、まだ精彩に欠けているように見受けられましたし。

山田　そうですね。実際、あれ以降、別に以前とは何も変わってないんですよ。変な言い方ですけど、だからこそかえって"ケガして良かったな"って……。"いま休めってことかな"って……。

—しばらくリングから離れていれば、何か突破口みたいなものを違ったところから見つけられるかもしれませんしね。

山田　ええ。この時期はムダにしたくはないですね。いい機会だから客観的に先輩・同期・後輩の試合を観戦しようと思って、松葉杖つきながら巡業にはついて行ってるんです。いま、全部の試合を観てますよ。

—何かを得られたら良いですね。

山田　そうですね。

—さて、同期でかつてのタッグ・パートナーでもあった豊田真奈美選手が、全女の象徴である"赤いベルト"を手中に収めてしまいました。

山田　やっぱり悔しいですよ。いま自分が持ってるオール・パシフィックのベルトも、"豊田が返上したベルト"っていうのがどっかに引っかかってますしね。自分がケガしてるときに豊田がポンって上昇することが多いんですよ。首のケガのときは『ジャパングランプリ』で優勝しちゃったりとか。時期はちょっとずれてますけど、今回の"豊田軍団""赤いベルト"もそんな感じですよね。

—"豊田軍団"に関しては、山田さんはあまり自身の意見を公言してませんよね。どう、お考えなのですか。

山田　別にやりたいようにやればいいんじゃないですか。アレコレと文句を言ってもしょうがないですからね。でも"このままにさせてはおかないぞ！"とは思ってます。こんな状態ですから"いますぐ"というわけにはいきませんけど……。

—そうすると、復帰後の山田さんのターゲットは豊田さんになるわけですか。

山田　そりゃそうですよ。みんなもそう思ってるんでしょうけど、自分にとって豊田はライバルですから。新人のころからずっと一緒にやってきたし、タッグも組んできたから、豊田には負けたくないんですよ。

—ある時期までは、暗黙の了解のランク付けにおいて山田さんが常に豊田さんの上に位置していたんですよね。"山田・豊田チーム"の順で呼ばれていたように。

山田　確かにそういう時期はありましたね。結局、訪れたチャンスをものにするかしないかなんですよね。誰でも上昇する時期ってありますから。

—5月の後楽園ホールでの豊田真奈美VS井上京子のWWAシングル選手権試合をしばらく通路の奥で観戦してましたね。あのときの山田さんのやりきれないような表情が印象的でした。"なんで私がこのリングにいないんだ！　やっぱり休んでなんかいられない！"とでも言いたげな……。

山田　それは思いましたよ。ましてや60分もフルにやってくれるんですから（笑）。ま、そういう場面にはよく直面してますから……（笑）。

—あのお二人はもちろん、アジャ選手、そして北斗選手も"赤いベルト"獲りに名乗りを上げました。いまは"考えるとき"の山田さんかもしれませんが、"1日も早くこの中に名前を連ねてほしい"というのがすべてのファンの願いだと思うのですが。

山田　5月の後楽園ホールで本当は自分はアジャさんとのシングル試合が組まれていたんです。いいチャンスだと思ったんで、もし試合に勝てたら"豊田のベルトに挑戦させろ！"って言うつもりだったんですよ。それが、ケガで流れちゃって……。だから、やっぱり"いまは休め"っていう時期かなあって。

—長いトンネルを抜けたとき"真の山田敏代"を僕らに見せてくれるのでしょうか。

山田　一時期よりは考え方も変わってきてるし、"精神的には充実してる"っていったら変かもしれないですけど、良い方向に抜けようとしてます。

—それじゃ、次回のページ・タイトルは"完全復活！"で予定しておきます。

山田　はい、よろしくお願いします（笑）。

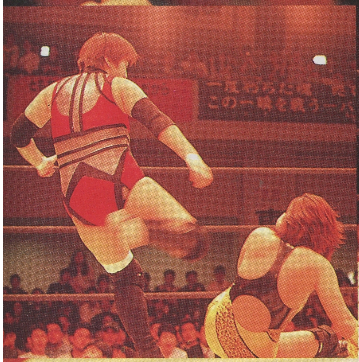
TOSHIYO YAMADA Profile
山田敏代【全日本女子プロレス】本名：同じ。S44年2月27日生まれ。埼玉県浦和市出身。S62年7月にデビュー。168センチ、65キロ。

LIVE AKTION 1995 APR.-MAY

Long as we got the ring,We fight foever

●おのれのレスリングを磨くため、ファンとのコミュニケーションを図るため、何が何でも勝利をその手で掴みとるため……今日も彼女たちはリングに向かう。その行く手を誰も妨げることはできない。その行く手を誰も妨げてもいけない。そう、そこにリングがある限り彼女たちは永遠に戦い続けるのだから──。

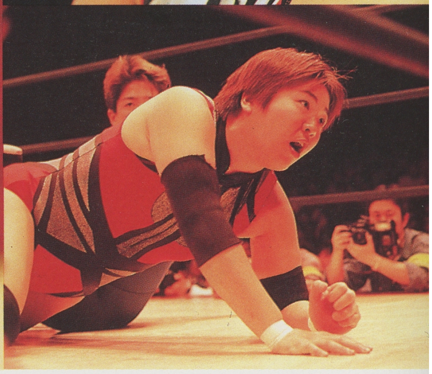
Photography●SHUSUKE NAKAMURA



堀田祐美子。

等身大の最強レスラー。

SHOOT POINTS●16 APR.,2&7 MAY KORAKUEN HALL



〝堀田よ、自身のため〝いざ〟出番のとき。

どこのクラスにも一人はいるものだ。——気は優しくて力持ち。大きな身体には似合わない憎めない笑顔の持ち主。ふだんはおっとりしているが、〝いざ〟というときには頼りになる——堀田祐美子もそんな女の子だったに違いない。

堀田はいわば等身大のプロレスラーである。普通のちょっと太っちょの女の子ががんばってるという感じだ。見ている方としては非常に親近感がある。〝いざ〟というときには確かに頼りになる。団体対抗戦の初期にはJWPに乗り込み、全日本女子プロレスの底力を見せつけたし、最近では復帰したライオネス飛鳥を現役選手を代表するような意地でボコボコにした。しかし、彼女は〝いざ〟というときがちょっと少ない。というより、自分自身のためだけには〝いざ〟という気持ちになりにくいようだ。だから、プロレスラー堀田のチャンスたる場面では惜しいところで星を落とす。『V★TOP WOMAN』でもコンバット豊田にまさかの敗北。WWWAシングル・チャンピオンへの挑戦権のかかったタッグマッチでも豊田真奈美にしてやられた。人の良い堀田らしいと言ってしまえばそれまでだが、どうにもはがゆい気分になってくる。

堀田は強い。単純に強い。例えば、現WWWAシングル・チャンピオンの豊田といま闘っても、たぶん堀田の方が強いだろう。しかし、やっぱり勝てるかどうかは別である。強い人が勝つとは限らないし、強さだけでトップが取れるとは限らない。ああ、プロレスは難しい。

ある女性ファンは言った。〝チケットを買ったお客さんと選手が握手をするとき、堀田は相手の顔をちゃんと見て、誰よりも誠意の感じられる握手をする〟。こういう場合にどの程度の握手が適当かはともかくとして、堀田はほんとにいい奴らしい。

〝強くていい奴〟——そんな堀田にもっともっと弾けてほしいと思っているファンはたくさんいる。そうだ。北斗晶は引退を撤回した。これは堀田にとってチャンスである。〝そうそう勝手なことはさせないぞ〟とニヤリと笑って北斗の前に立ちはだかる堀田が見たい！

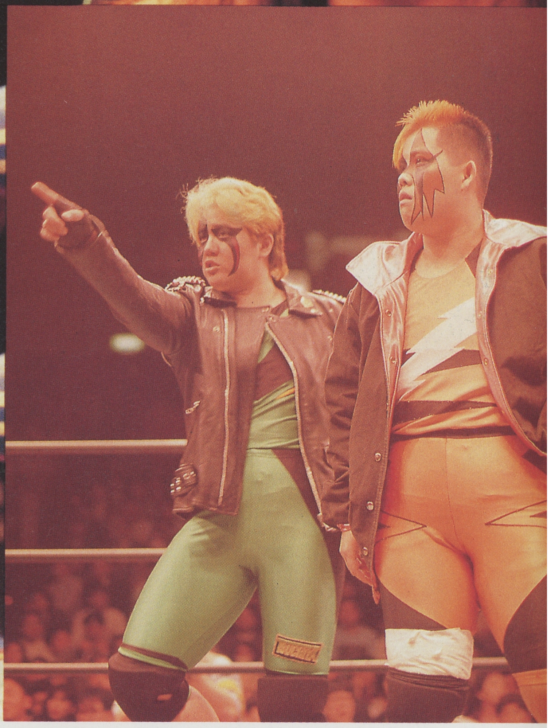
〝いざ〟堀田祐美子の出番である。

Text●SHINO HOJOH

シャーク土屋。クラッシャー前泊。

異端レスラーとしての誇色。

SHOOT POINT●21 APR. KORAKUEN HALL



自ら〝女子〟であることを拒んだ女たち。

シャーク土屋とクラッシャー前泊は、女子プロレスラーとしての実力を正当に評価されていない不幸な存在だと思う。

一部のカルトなファン（例えば私）は、昨今の女子プロレス・ブームのきっかけをつくったのが土屋と前泊の全女（山田敏代と豊田真奈美組のWWWAタッグ）への挑戦だったということを決して忘れはしないが、そのあとの大交流戦時代の中で彼女たちはなぜか、対戦の前面には出ず、FMW内部での闘いに閉じこもってしまう。そのためほかの団体の女子レスラーとの相対的な実力の比較ができず、結局、過小評価されてしまっているというわけだ。

二人の実力はちゃんと試合を見ているファンには自明のことなので、ここでは彼女たちのレスラーとしての特異性について語ってみたい。

土屋と前泊がほかの女子レスラーと決定的に異なる点は、つまりは男のレスラーに育てられたということである。あのターザン後藤が二人のプロレスの師匠なのだ。全女はもちろんJWPやLLPWの選手たちはみな先輩の女子レスラーの指導でプロレスのイロハを習っている（神取忍でさえ旧ジャパン女子でデビューする前はジャッキー佐藤のコーチを受けている）。FMWでもバッドナース中村やキラー岩見あたりになると工藤めぐみやコンバット豊田の指導で育てられたはずだ。

かつて土屋、前泊組が全女のタッグ・リーグ戦に参戦したとき、バット吉永、渡辺智子組、長谷川咲恵、デビー・マレンコ組と闘ったのだが、共にハードな喧嘩マッチとなり、全女の選手からは〝こんなのプロレスじゃない〟と辛辣な言葉を浴びせられた。つまり、土屋と前泊は女子プロレスではないプロレスをしているということなのだ。

女でありながら女子プロレスではないプロレスをする異端のレスラー。このような異種が存在するFMWもまたプロレスという異界の中の極限の異端ではなかったか。

異界から師のターザン後藤が去ったいまこそ土屋と前泊は最後の異端の誇りを主張し、正統なる女子プロレスの世界に再び波乱を起こしてほしいのだ。

Text●RYUICHIRO FUJIWARA

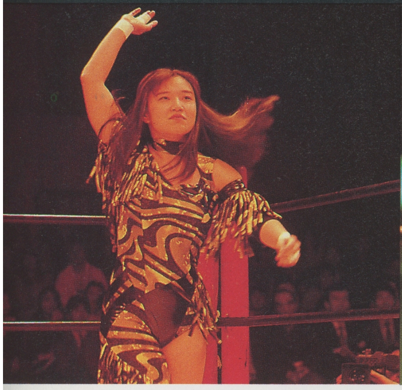
LIVE AKTION 1995 APR.-MAY.

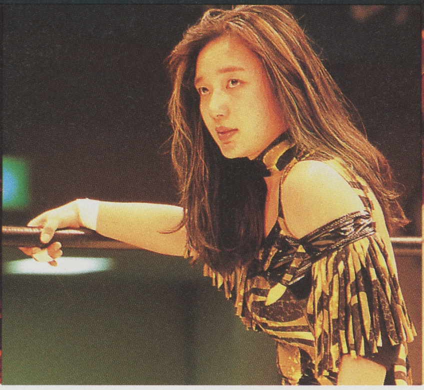
Long as we got the ring,We fight foever

半田美希。

理由ありき反抗!?

SHOOT POINT ●25 APR. KORAKUEN HALL





未だ摩訶不思議な〝ミッキー〟の変事。

巨乳社長秘書ミッキーこと半田美希は、ただいま絶賛反乱中とのことである。

風間ルミ&神取忍のＬＬＰＷ苦労話対談でも、

〝ウチはいま内部がガタガタだからね。飼い主に手を噛まれちゃってさ（笑）〟

と神取が語ると、すかさず風間が、

〝飼い犬でしょ（怒）!!〟

と突っ込んだりの実に楽しげな雰囲気なのであまり深刻には見えないが、ズバリ言ってこの問題もかなり根深いようなのだ。

団体にアイドル的な存在が少ないため、自分でもとまどうほどに『巨乳アイドル』『ミッキー』などともてはやされた半田。『風間イズムを色濃く受け継いだ』とまでパンフレットに書かれるほどだった浅草生まれの相撲好き少女が、なぜに反逆ののろしを上げなければいけなかったのか。

平気で下ネタを語れるタイプか、語るに値するだけの経験すらないタイプしか存在しないと言われるこの女子プロレス界において、過去の恋愛経験を追求してもかたくなに〝ノーコメントです（笑）〟と言い続ける半田は、非常にフツーな女子であった。それゆえに、これまで半田の反発心は表に出てくることもなかったのだろう。

なにしろ、たまに出てきたとしたところで〝お腹が目立つから二度とビキニにはなりたくない〟や〝アイドルって言われるけど、私なんか別にかわいくもないのに〟など、その程度でしかなかったのだ。

それがなぜに長嶋と共闘へ!?

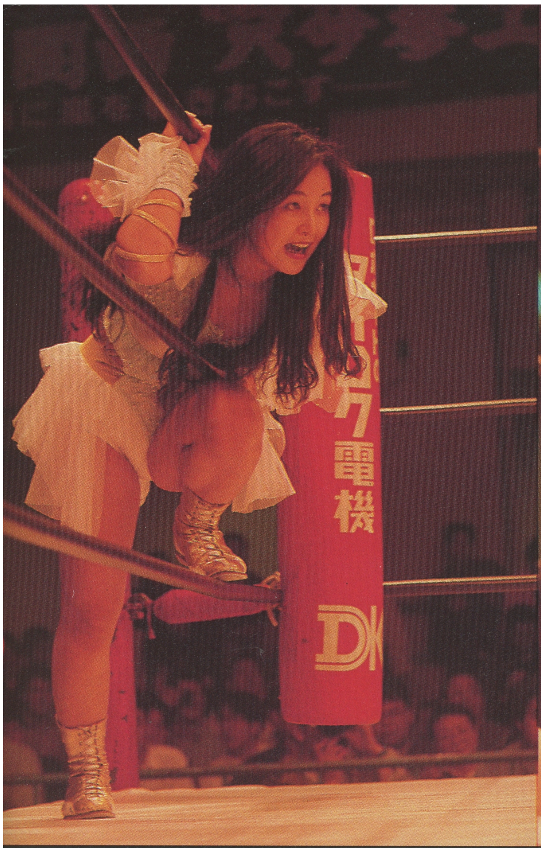
ホワイ？　なぜか？　と思うような出来事が、プロレス界にはあまりにも多い。そしてプロレス界には『プロレス的な出来事』と『そうでない出来事』の2種類がある。

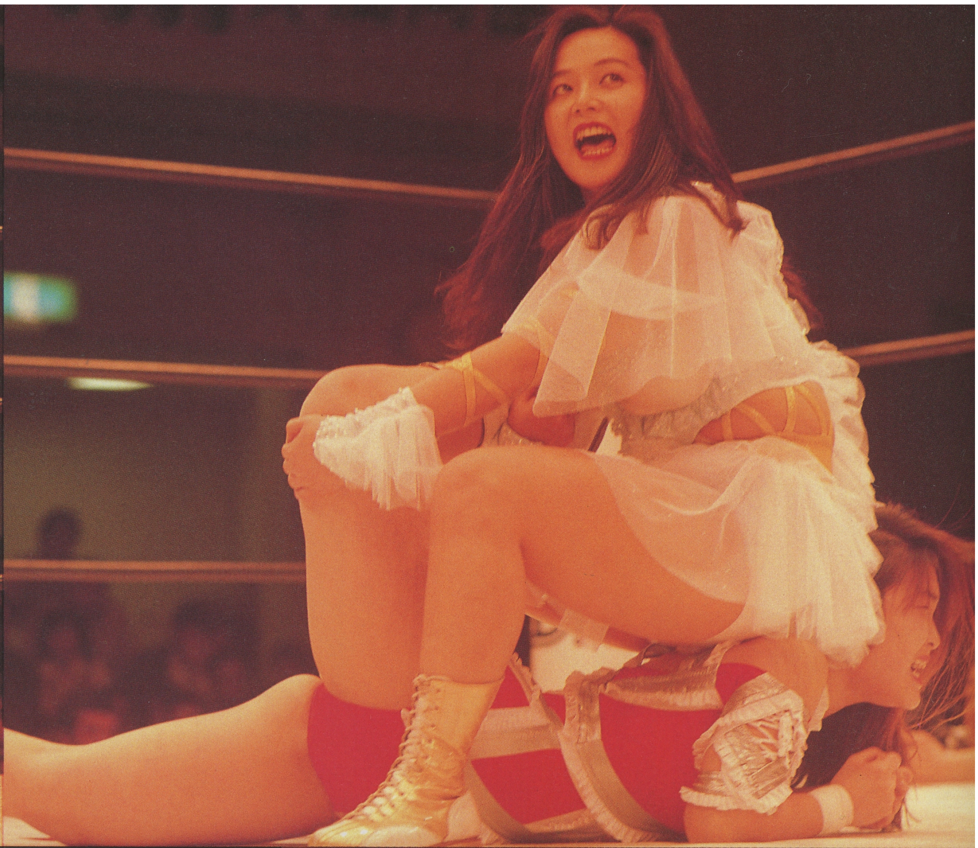
しかしほとんどの場合、どんなアクシデントであろうともすべてを力ずくで『プロレス的な出来事』へと変化させてしまうことになるのだ。それはズバリ言って、プロレスというジャンルのみが持つ魅力だろう。

半田の革命は『よくあるプロレス界のエピソード』で終わってしまうのか？　それはボクが知る由もないが、とりあえず半田&長嶋組に素敵なチーム名を贈るとしよう。

ズバリ名付けて『ハンダース』って、ダメですかねえ、これ……？

Text●Go“HISAO-KUN”YOSHIDA(Kami-No-Puroresu)

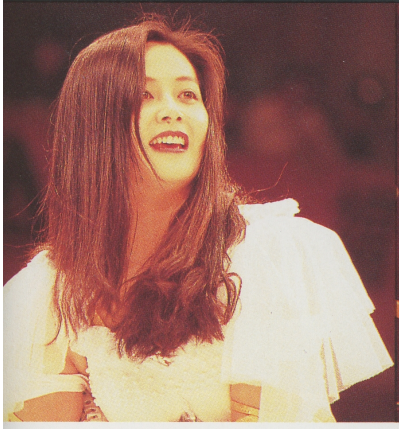


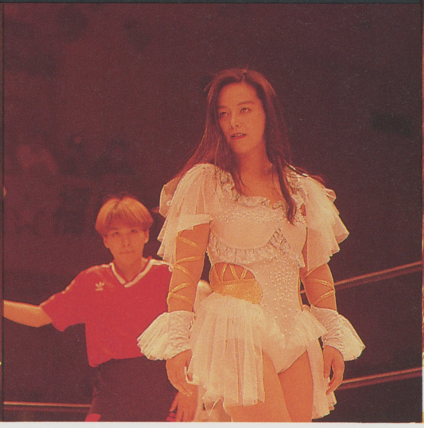


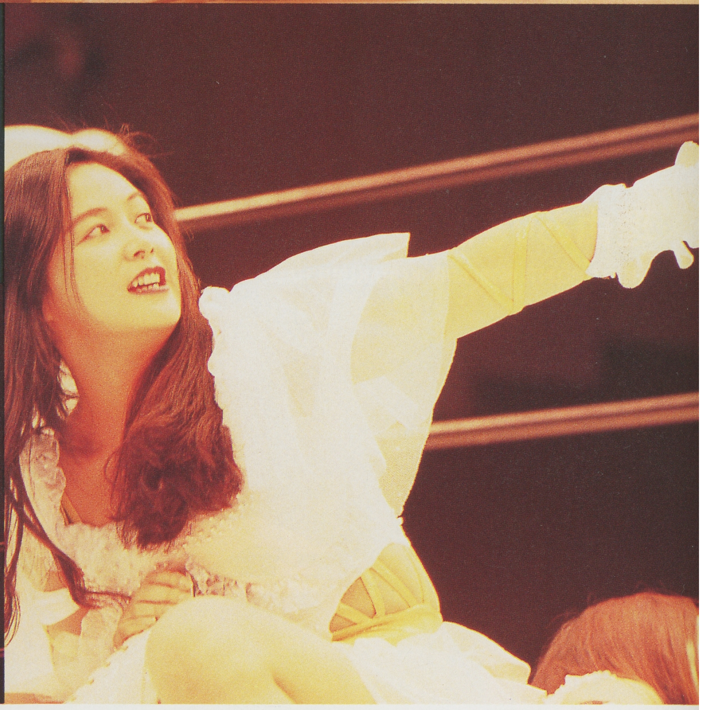
キューティー鈴木。

“やられた蓄積”の賜もの。

SHOOT POINT●16 APR. KORAKUEN HALL







“キューティー”という名の絶叫マシン!?

「やられてばかりいる、可愛いだけのレスラー」～キューティー鈴木（以下キューちゃん（笑））のジャパン女子時代のパブリック・イメージであった。しかし、当時ボコボコにされたことは蓄積され、全女のレスラーがJWPのレスラーを語る際に異口同音に出る「見かけによらぬ、驚異的な打たれ強さ」という財産となったわけだ。

だがですよ!! そんなキューちゃんが往年の弱々しげな部分を垣間見せる瞬間がある。それが、デビル雅美との絡みで必ず出る、パワーボムの受けでの“絶叫”である。

話は飛ぶが、先日取材でよみうりランドに行きましたですよ（©山本晋也）。そんなとき思ったのが、やっぱ絶叫マシンちゅーもんは、利用客の絶叫があってこそ初めて遊戯施設として機能するもんだなあと。考えてもみてくださいませよ。まさか全員無言でホワイトキャニオンだのバンデッドだのバンジージャンプだので遊んでたら、ってそんなんありえねーよ。でもま、そんな静寂なノリの客ばっかだったら一緒に乗っててもツマンナいし、遊園地内を歩いてて、ふと近くのジェットコースターから絶叫が聞こえてこようもんなら、もーその声だけで、そのマシンに興味しんしん丸になるでしょ？ つまり、絶叫マシンというものにリアリティを付加する存在として、客＝乗り手の絶叫は必要不可欠なのだ。

そこでキューちゃんだ。キューちゃんがデビルのパワーボムを受ける際のあの「あぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!」には、以下の要素が付加され、観る者に伝わってゆく。

①パワーボムの高さ
②パワーボムで持ち上げられる際の速度
③および、その恐怖感

これらがすべて計算ずくで、あの絶叫に結びついているのならそれは実にしたたかであるし、無意識に発せられているのならば、それはそれで天性の“プロレス家”として評価したいもの。

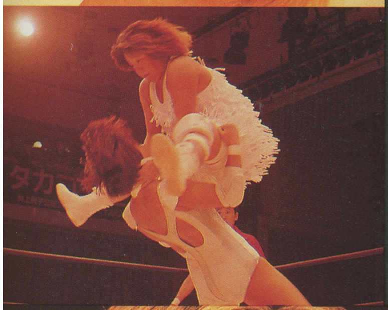
でもやっぱ、ジャパン時代にやられにやられた体験の蓄積の結果、無意識に出てしまう、という方がいいなあ。だって、その方がキューちゃんらしくて、カッチョ良いんだもーん。

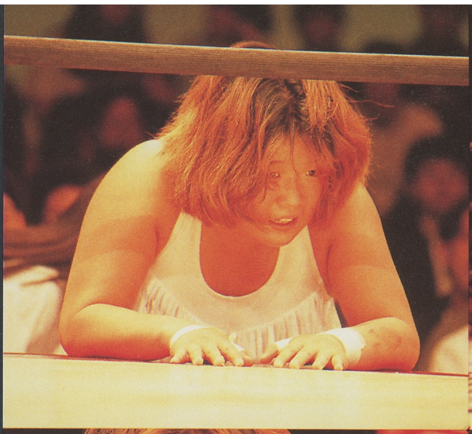
Text●SATORU KANAI

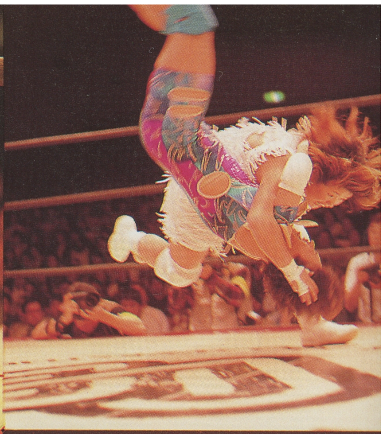
渡辺智子。

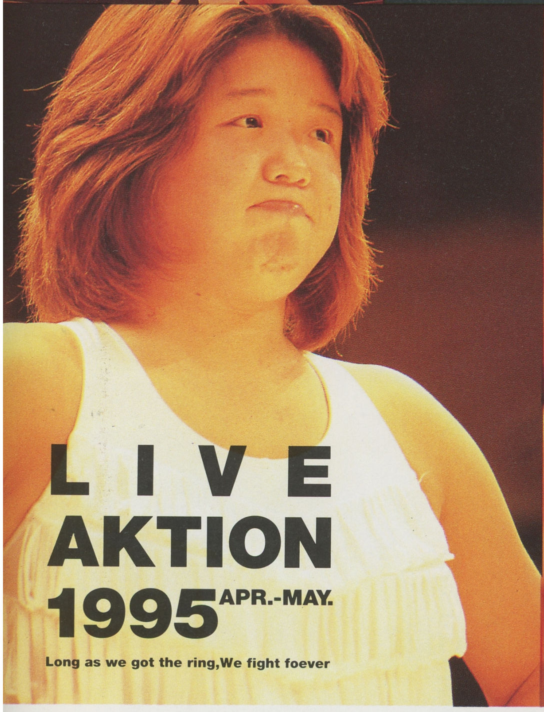
その気になれば。

SHOOT POINTS●16 APR, 2&7 MAY KORAKUEN HALL









LIVE AKTION 1995 APR.-MAY.

Long as we got the ring,We fight foever

全女の最終兵器、ついに始動!!

渡辺智子が吉田万里子をフォールした瞬間、〝ヴァッ〟という歓声がリングを包んだ。期せずして起こる〝ワタナベ〟コール。智ちゃんは、喜びをどう表現していいかわからない子供のように、やおらトップ・ロープをわし掴みにすると〝ヴォー〟という雄叫びをあげ両足をバタつかせた。そして、その瞳はうっすらと潤んでいた。平成7年5月7日、後楽園ホールでの出来事である。

フォールを奪ったのは、井上京子ばりの全体重を預けるラリアットの連発からの久々のキャノンボール・バスターである。いままでも試合の随所でキラリと光るものは観せていた智ちゃんだがこの日は大技の連発で止めを差した。この〝止めを差す〟勇気こそいままでの彼女に欠けていたものだ。最終的に負け役に甘んじることの多かった彼女がこの一勝で勝利の快感に病みつきになってくれればいうことはない。

資質に恵まれながらもその存在をなかなかアピールできなかったのは、簡単に言ってしまえば〝順番待ち〟みたいなものだった。智ちゃんは平成元年組の、いや全日本女子プロレスの隠し玉である。彼女のような実力派がトップレスラーの底辺にドーンと控えていることが全女の強みである。

智ちゃんは身体に似合わず(?)天才肌のレスラーであるからして、難しい技も苦もなくこなしてしまう。ロープ技だってお手のものだ。でも私はせっかくあれだけ安定した体格の持ち主なのだから(いまやアジャ様やブル様にも見劣りしないだろう)、魂のこもった重いラリアットや、力強く相手をたたきつける一本背負いにこだわってほしいと思う。智ちゃんのプロレスはトップ・クラスにも十分に通用するものだ。

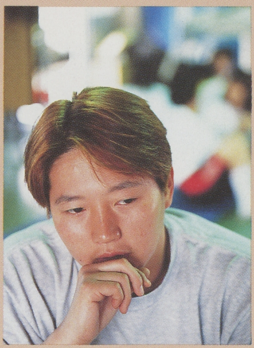
この日の智ちゃんは花道を引き揚げる途中、観戦していたバット吉永(引退)の姿を見つけると走り寄って抱きついた。

〝よくやった!〟バットの声も明るい。二人が抱き合って喜ぶ姿に思わず周りにいた人たちの顔もほころぶ。でも、無念のリタイアを余儀なくされたバットの分もレスラー人生を謳歌するためにはこれぐらいで満足していてはいけない。

魂のラリアットを時代にたたき込め!!

Text●SHINO HOJOH

長与千種。



●4・15、長与千種率いるGAEA JAPANがついにその全貌を現した。そこで数々の衝撃を与えたこの団体は今後どのような道を歩むのか。そして、待望のダイナマイト関西戦は――。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA
Text●SATORU KANAI

――良い試合なり興行の基準として、僕は記憶力でよく判断することが多いんですけど、その点から考えてもガイア旗揚げにおける長与選手の試合じたいは、やはり新人のインパクトには負けてると思うんですよ。

長与　いや、それは狙ってたからねやっぱり。旗揚げまでは、自分の時間をどれだけ作ったかといったら、ほとんどないに等しかった。

――4・15のカードを最初に観たとき、失礼ながらコレで客を呼べるのかとまで思ってたんです。長与さんがらみのものなどはJWPそのまんまだったし。いわゆる堅実なカードというか、団体がずーっと興行やってるうちにボコッとあったりする、エアポケット的なマッチメイクを持ってきてるわけだから。

長与　ある種のご祝儀ですからね、彼女たちからの。と同時に本当の狙いは、あの人たち自身もそういうレスリングがやりたいの。堅実で、かつ技にあまり走らないで。そういう人たちが集まったんですよ、あの日はたまたま。今風の技を使えばそうじゃない技もあるし。ただ、形は違えど心の響きはあった。

――だからこそ、JWPの興行とどう差別化するかが観る側としての関心ではあったんですけどね。

長与　あのカードにしてみれば選手がウンって言わないでしょ。JWPでやる場合はなかなか。だったらウチでやってくださいという感覚かな。あそこでアレをやってしまえば下がなくなっちゃうような、危険な賭けという要素もありましたよね。でも、だからこそかなってところもあるし。あのカード以外にも、もっと違った意味でシングル対決だって可能であったし、1対6で新人相手のマッチメイクもできた、やろうと思えば。ただ、旗揚げ戦でのメインのカードは、私自身が単に楽しみたかったんだよ、ゴメンねって(笑)。そういう、選手が楽しめることをやらせる団体があってもいいんじゃないっていう。

――別の団体にいたとしてもね。

長与　メインは新人だよって言い方もしてるしね。そのインパクトが強いだけにいいじゃない、という。だから、好き勝手なレスリングを1回やってみたかったの。だって、私はそのために프로レスもう1回やり始めたんだし。雑誌作ってでもあるでしょ?

旗揚げ後。

好き勝手な内容を1ページぐらい作らせてくれ、これが俺のページだっていう感覚。それと同じですよ。私もそういうことがやってみたかった。そこで、それじゃプロとして失格だよって言われたらそれまで。でも逆に、そういうこともできなくて何がプロだって。

――そういう比喩をしてくださるとよくわかります。僕たちがこの雑誌を作るうえでそういう感覚は常に持ち合わせているし、そういう自分のエゴでありながら商品として成立させることがプロなわけであって。

長与　そう。それと私自身、旗揚げまではストレスもたまってたし疲れてたし。でもレスラーはみんなストレスがたまってるんだと思う、堅実に試合やってても。だからこそどっかで気を抜かしてあげないと。

――レスラーにとってのガス抜きの場があってもいいという。

長与　でも、ガス抜きされたときの試合ってすごいよね。成り立っちゃうもんね。賛否両論あっていっぱい考えたけど、あのカードを出したことは決して（ファンに対しての）甘えじゃないんだよね。コレで堅実にお客さんが入るとは思ってなかったし。だからビックリした。でも、レスラーが楽しまなければお客さんだって楽しむことはできないし。ガイアってさ、ヘンなしがらみの枠をのけたかったわけだからさ。

――そのために旗揚げしたんですもんね。

長与　井上貴子とかからね〝ガイアに出してよチコさん〟って電話がかかってくるの。私はそのとき〝あんた一人で来てくれるならいいよ、でも会社はどうするのよ〟って言うの。そうすると〝あっそうか〟ってなるんだけど。でもね、みんな好き勝手なことがやりたいんだよきっと。

――ところで、6・16両国のJWP興行でとうとうダイナマイト関西との一線が控えてますよね。これは長与vs神取と並ぶ、ファンはおろかご本人も待望のカードなわけですよね。

長与　やりたいって言ってたでしょ、よく。

――ずーっとね。でもJWPという、他人の土俵ではある。

長与　そうだなあ、でもJWPでのガチッガチッて決めてる試合も楽しんじゃってるんだよね。よそに出ていくからガッチリやるってわけじゃなくて。彼女がどんなものか楽しみたいから一生懸命やる。私にだっ

長与千種。
旗揚げ後。

6・16のダイナマイト関西戦はひとつのプロローグ。たとえ大将の私が勝とうが負けようが、ウチの子はみんな育ってゆく。

て楽しませてよ、そっちのワールドを、うちのワールドも楽しんでくれればいい〜そんな感覚かな。

―何か、勝敗は度外視してるのかなあと捉えられそうな気がしますけど。いまの発言を聞くと。

長与　もちろん勝負は賭けてるよ。勝敗がつきものなのがプロレスなんだからさ。ただ、それは楽しみたいからやりたいっていうのが強い。その〝楽しむ〟という中には苦しさや辛さがいっぱい含まれて楽しいって言い方をしてるんだけど。ただ、そこから何かがスタートするかなって気がする。

―何かというと?

長与　確かに、要は大将同士がぶつかるわけだから、威厳がかかってると言われればそうなのかなと思うけど。でも、私が勝とうが負けようがみんな育ってゆくよ、きっと。そういう術を教えてるもん。だからこそ好き勝手にやらせてよって。それに、私自身がまだ大将じゃないんだよね。いちおう大将ぶってるだけで。

―ひょっとしてガイアには、大将という存在がいない?

長与　だってそこそこみんな良いから。誰が大将やねん、一応年齢でいく?　それとも年数でいく?　って程度の決め方だし。

―今度の長与vs関西戦はこの時期に行われるべきものだと思いますか?　例えば3年前に組まれてたちょっと……とか。

長与　今度の両国でも……ちょっと早いな。だってよく考えてよ。これには2通りの考え方があるから。まずは早いと思う場合。それは尾崎を倒しプラムを倒しキューティーを倒し、デビルさんで挫折して、また這い上がろうとしてる。いろんなストーリーがあったよね。でもさ、そのあと私は旗揚げのことで忙しかったし、1〜2か月間まったくリングに立たなかったこともあって、ちょっと番狂わせしちゃったなというのもあるわけ。

―つまり中断したストーリーの再開が唐突になってしまうと。

長与　そうですね。そしてもうひとつは(この時期だからこそ)良いと思うときもある。それはさっきも言ったようにここからがプロローグだから。いままでアプローチしていた事実がさんざんあるわけだから、じゃあいざ実際闘ってみて結果が出たそのあと、どうするんだという。その方が可能性としてはおもしろいんじゃないかと。この関西戦があった6月は、一種の節目になるよね。そこから新しいものへの展開も考えたい。ただ勝負だから勝ち負けは意識していく。それが何かということは、当日試合をやってみればわかることであって。そのとき来てくださって自分に聞いてくれれば、〝あのときの答え出ましたか?〟って言ってくれれば何か出ると思う。それがどんな答えであっても素直なものだと思うし、今後はそれを皮切りにしていきたい。

―あと、ガイアの興行を観てていちばんの敵は何だろう?　って考えたとき、それはお客さんなんじゃないかなあと思ったんですよね。ガイアのチケットを買って観に来てくれるファンの方々は優しいから、逆にその優しさが裏目に出るのがいちばん怖いなと。

長与　そうなんだよね。どうしようか……。何かいい話あったら今度教えて(笑)。でも、要は長与が鼻につくんだよ。自分がもしいなくなれば、ひょっとしたら鼻につかないかもしれないし、お客さんが。ただひとこと言わせてもらえば、プロレス全団体のお客さんを相手にしてる。その中には鼻についた奴が好きだっていう人もいるもんね。人数が少ないけど、その人たちのためにがんばる、いまのところ。アンチはいっぱいいるよ。〝てめー長与、何やってんだよ〟ってファンレターが来るのよ、男の子から。〝来たー〟って喜んで封を開けたらすごく嫌なことが延々と書いてあって。でも〝また観に行くよ〟って、手紙の最後は締めてある。お前どっちなんだよって(笑)。どっちかにしてくれよな、また苦しめやがって。じゃあ私もそれを楽しんじゃうぞって。悲観的にならないんだよ、楽しいんだよすごく。男のファンの人ってこうなのかなって。だから自分がいなければいいのかなっていうことも考えることあるよ。あまりにもキツい言葉なんで挫折しそうになるよ、自分だってやっぱり。

―いくら何でもここまで、って内容なんですか?

長与　うん、クソミソ言われるからさ。ちょっとリングに上がってやってみろ、と言いたいけど(笑)。でもそれを言っちゃオシマイだから、何も考えないで一生懸命やるしかないんですよね。

CHIGUSA NAGAYO Profile
長与千種【ガイア　ジャパン】本名：同じ。S39年12月8日生まれ。長崎県大村市出身。S55年8月にデビュー。166センチ、80キロ。

Megumi Kudoh
Back 2 street
（ストリートに帰ろう。）

●怖いくどめが、久々に観られた。5月5日・川崎球場でバッドナース中村を破り、FMW女子二冠王に返り咲いた。そのときの彼女は、今回特写したストリートファイト・スタイルで闘った。このスタイルに込められた意味とは。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA　Text●SATORU KANAI
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA
Back Drop●SET WORK JAPAN SET TWO

ストリートファイトから、本当の私が始まったのだから。

自分のいちばん素直な表現の仕方っていうんですか。そのときの感情をプロレスの形にしたらストリートファイト的なスタイルになった、というのがあって。例えばこれがノリにノッてるようだったら絶対出しえなかったものだと思うんです。もし出したとしても明るく楽しいキャラクター〜こういう言い方はあまり好きじゃないけど〜そういうものになったと思うんですね。でも、ここまで来た経緯が、なんというか屈辱的なものがあったんで。そこに蓄積された気持ちを晴らしたいと思ったときに、最も素直に表現できるのがこの形だったんです。

いままでは、いろんな歯止めが、自分の中でかかってたんですね。それを含めて、自分の中にある一要素がポンと飛び出たものでもあるんです。

だって、このスタイルがいちばんの原形なんですもの。私がもともとアウトブレイカーズとしてFMWに入ったときにいちばん近い形で。

あとは他団体へのアピールという部分も、このスタイルには含まれてます。これまでは他団体に対して自分の存在を示す発言はなかったと思うんですけど、やっぱり自分の中に〝ストリートファイト〟に対するこだわりがすごくあるんで。そういう形式が多くなったいまではやっぱり。もちろん大仁田さんのFMW魂を引き継ぎたいというのもありますけど。

4月21日の後楽園ホールで初めてこのスタイルでやってみて、自分の中でも久々にテンションが上がってるっていうか、手応えは感じましたね。初めてやることへの不安と期待が入り交じった部分もそうですし、試合内容に関しても自分にとってはまた新鮮な気持ちでやれたんで。あのときは別に結果どうこうと言うよりも、自分の中ではすごく意味があった。武者震いに近い感じがありましたね。

このスタイルには意味合いがすごく含まれてるものなんです。例えばビッグマッチに必ずコレ、といったものではなくて、状況の流れで出るんで。何月何日のどこそこの大会で、という風には決まってません。メッセージ色の非常に強いものなんです。

以前『週刊プロレス』で披露したキョンシー系のコスチュームも含め、いまの私には3つのスタイルがあるわけです。どれにも良いところと悪いところがあるんですね。アーミー的なものを着たら、どうしてもラフファイトが中心になってきちゃうんで、技が観たい人はちょっと物足りないと思うかもしれないんですよ。逆に通常の水着の場はテクニック中心でラフは抑え気味になりますよね。そこで激しさを求める人にはちょっと……と思うかもしれない。そういう部分では、出すべき時期に、そのときいちばん良いところを強く出せるようにしたいんで、その点をお客さんにも納得してもらいたいんです。

じゃあキョンシー系のは？　って聞かれると……。実はまだ出してないスタイルがあるんですよ。私自身は準備万端でいつでもOKなんですけど……教えられませんね（笑）。とかいって、本当は何もなかったりして（笑）。だから、本当に一瞬でも見逃したらわからなくなっちゃいますよ。感動が味わえなくなる。

さっきも話しましたけど、〝ストリート〟ってキーワード。それが大仁田さんが私たちに残した遺産なんです。アウトブレイカーズを経てFMWに入って、初めてやった試合が汐留でのストリートファイトだったし、私が初めて大仁田さんの試合を観たときもストリートファイトで、すごくカルチャーショックを受けたんです。それまで普通のプロレスしか知らなかった私に、いきなり突きつけられたわけですから。そのあともFMW1周年のとき天田麗文とやった試合も、FMWが叩かれたときも〝ストリートファイトしかできない〟とか言われたし、あらゆる節目節目で必ずストリートファイトがあって。自分が進路を決断するのもストリートファイトが追っかけてきた感じがするんですよね。試合内容どうのこうのというより、言葉の響きすべてが自分にとっては離れにくいものっていうんですか。そこから始まったわけですから、愛着がすごくあるんです。

いままでストリートファイトって、けっこうダメなものという評価があったわけじゃないですか。通常のレスリングよりワンランク下のものという。それに対して何でかなあという部分があったんで、これからはその認識をどんどん変えていきたいです。

MEGUMI KUDOH Profile
工藤めぐみ【FMW】本名：同じ。S44年9月20日生まれ。埼玉県越谷市出身。S61年8月にデビュー。162センチ、60キロ。

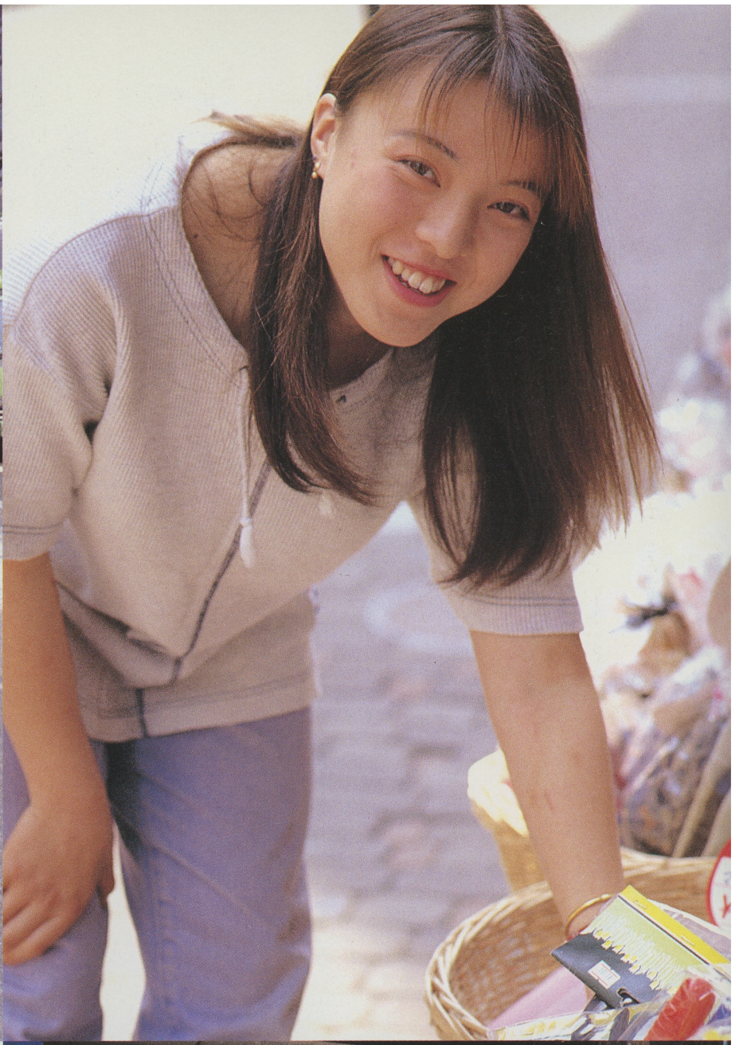
中山香里。

kaori nakayama

ぴち^{2}returns（苦笑）

●読者さまのみならず、プロレス業界でもかなりの物議をかもした（ホンマか）“もぐもぐインタビュー”でおなじみの中山香里が帰ってきたぞ!! あの意味不明さは衰え知らず、さぁさっそくGOGO!!

Photography●TAISHIN AOKI Text●SATORU KANAI Hari&Make-up●AKIHIKO YASUMURA



—復帰おめでとうございます。アレですか、相変わらずご飯とおかずは別々に食べてるんですか(笑)。

中山 や、前回の取材で指摘されてから、最近は意識して一緒に食べるようになったんですけど。どんな味になるのかなあと思って。でも、気がつくとご飯ならご飯だけになっちゃう(笑)。

—進歩してないですね(笑)。でも今日に至るまではいろいろあったでしょ。17歳になったとか。

中山 でも実感は……特にない(笑)。

—はあ(笑)。あとは、右腕の骨折とか。どこの骨をやっちゃったの?

中山 トウ骨といって、上腕部の2本ある骨のうちの1本で、以前も折ったところだったんですけどまたやっちゃって。11月に折っちゃって、3〜4週間ほど実家に戻って入院してたんです。

—なんで実家の方で入院したの? FMWといえば、病院はいくらでも知ってるでしょ、さんざん利用してるゆえに。だから心配しちゃいましたよ、そのまま辞めちゃうんじゃないかと。

中山 や、デビューする前に行った医者がヤブなもんで(笑)、親が紹介してくれた医者に治してもらおうと。

—伝説のレスラー、星野美代子がマミーなんだもんねぇ(笑)。でもさ、入門する際に反対されてたわけだから、実家に戻ったらまた説得されちゃったりしたんじゃないの?

中山 ええ、〝辞めろ〟って言われましたけど、でもテキトーに流しました(笑)。

—さすが、強い意志を持ってるんだなあ。……で、復帰したのは3月ですよね。その間、何をしてたの?

中山 ずっと食っちゃ寝を。

—はあ(笑)。リハビリはしなかったのですかい?

中山 や、片っぽの腕ばかり鍛えるとイビツになるので、走るぐらいで。

—走るのって得意なの?

中山 や、遅いんですよ。短距離は速かったんですけど。

—にゃるほど。そして、晴れて復帰できたわけですが、いきなり工藤めぐみ・コンバット豊田vsシャーク土屋・クラッシャー前泊の抗戦に巻き込まれてさんざんなメにあってますね(笑)。復帰後初めて後楽園の試合に出たとき(3月21日)、いきなり大流血されて場外でブッ倒れてたでしょ。心配しましたぜ、あんときゃ。

中山 ええ、ビックリしました。

—……そーゆーリアクションじゃなくて(笑)。あと5月5日の川崎球場では、こともあろうに土屋&前泊と組まされてしまったあげく、試合終了後にボコボコにされちゃうし。……いったい、なんであんなマッチメイクされちゃうんでしょうか。いくら最近はケガ人続出で大変なFMW女子とはいえ。

中山 私も、試合してるときぜんぜんわからなかったです。試合前も、ひとことも口を聞いてくださらなかったし。

—そして、やっぱ中山選手不在中の最大の事件といえば、やっぱ憧れの人・サブゥーのFMW離脱でしょ。

中山 ええ。サブゥーがいなくなって寂しいです。

—そのままサブゥーを追って、平成維震軍なり蝶野の軍団に入るとかは思わなかったの(笑)?

中山 いや、それは(笑)。

—サブゥーがいなくなったいま、それでもサブゥーは理想のレスラーでもあるの?

中山 ええ。サブゥーみたいになりたいです。

—サブゥーといえば、ムチャクチャな空中殺法だよね。

中山 あのですね、実家に帰ったとき、地元の体操クラブで練習したんですよ。……でも、飛べないんですよね(笑)。

—あらまあ(笑)。あのさ、女子レスラーで憧れの存在とか理想のスタイルの選手っていないの?

中山 女子だと……豊田真奈美さんみたいなの。

—みたいなの(笑)。具体的には?

中山 華やかで激しいの。

—まるでLLPWみたいですね(笑)。ほんじゃま、ここらへんでプライベートに迫りましょうか。いまって1人暮らし?

中山 や、寮です。同期とか下の子とかと一緒に住んでて。

—同期って五所川原吾作くんとか?

中山 いえ(笑)。石倉(由加利)と清水(真弓)と、あとデビューしてない新人が一人。上林愛貴(かんばやしあき)っていうんですけど。

—へぇ。マンションか何か?

中山 や、一軒家で。

—どんなお部屋に住んでるのか、教えてほしいなあ(笑)。

中山 えっと、間取りは6畳で、使用禁止のナゾのトイレがあるんですよ。

—はぁ(笑)!? 何ですかソレ。

中山 ガムテープが貼ってあって、使えないようになってるんです。でも、この前コッソリと開けてみたけど、フツーのトイレでした。

—それは使って確かめたとか(笑)。

中山 いえ(笑)。

—プライベートは何してるの?

中山 買い物とかです。

—買い物スポットというと? 池袋とかになるんでしょうか。

中山 や、川越(笑)。

—いかにも大都会という、華やかなところには行かないんだ。

中山 川越も華やかですよ。

—はぁ、確かに(笑)。

中山 あとは食う・寝る・遊ぶですか。

—じゃまず〝食う〟は?

中山 休養中、食べてばっかりいたんですね。で、私、痩せたいんですよ。

—痩せたいって、いま体重52キロでしょ。それ以下になるとレスラーとしてマズいのでは。

中山 でも体が重いんで。肉を1回落として、それから筋肉を付けたいんですね。

—まるで、パンクラスのような。

中山 私、雑誌は買うけどすぐ飽きちゃうんです。もっぱら記事で買うんですけど、最近は『CanCam』とかで〝これは痩せる〟みたいな記事が載ってると買うんですよ。

—なるほど、では〝寝る〟は?

中山 私、いちばん長くて1日ちょっと寝てしまったことがあります。

—あらまあ(笑)。

中山 中学の夏休みのときだったんですけど、夜に寝て、起きたら朝方だったんです。

—寝る前の時間帯と、あんま変わってなかったと(笑)。

中山 テレビ観たら、日付けが違ってたんでわかりました(笑)。

—最後に〝遊ぶ〟は?

中山 寮にあるスーファミ。面をクリアするのが好き。『スーパーマリオ』とか。

—カラオケとかはしないの?

中山 前は石倉とかと行ってたけど……。

—ちなみに得意なレパートリーは?

中山 森高千里の『17歳』。

—うまいね、どーも(笑)。

KAORI NAKAYAMA Profile

中山香里【FMW】本名:同じ。S53年3月14日生まれ。大阪府羽曳野市出身。H6年7月にデビュー。150センチ、52キロ。

私の部屋、ガムテープ貼りで使用禁止になったナゾのトイレがあるんですよ。

中山香里。

kaori nakayama

じゃんけん

ぽんっ!!

ぐー

りー

こー

っ!!

●しばらく会わなかったらこんなんなっちゃいました（笑）。本誌Vol.1で取材したときとはまるで逆のオドロなイメージに。でもそれが幸いしてか、5月5日・川崎球場でその座を奪われてしまったものの、一度はFMW女子の頂点に立ったことになるバッドナース中村。でも本性は変わってませ〜ん。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA　Text●GO YOSHIDA　Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA　Back Drop●SET WORK JAPAN SET TWO

BAD-NURSE, But NICE

バッドナース中村。

これからも大暴れするんで、応援してくださいね♡

—しかし、この強烈な顔は誰の考案で？

中村 大仁田さんです。ヒールになって目元だけペイントしてたんですけど、熊本のビッグマッチで"顔を白く塗れ"って言われて、そうしたらず〜っとそのままになっちゃったんです（笑）。ナース中村になったときと同じようなパターンですね。

—それに、このバッドナースという名前じたいもかなり強烈ですよね（笑）。

中村 これも大仁田さんが（笑）。

—バッドナースさんは、普段からレスラーとしての自覚とかってある方ですか？

中村 自分、何も変わりませんよ（笑）。でも、世間で恥ずかしいようなことはしてません。よくいるじゃないですか、電車の中とかでハメ外してる人とか、行儀悪い人とか。それはないですけど、自覚は田舎に帰ったときぐらいですね。小さい町だから、自分がレスラーだってすぐ広まっちゃったんですよ。だから自覚持って歩いてますよ。身だしなみをちゃんとして（笑）。

—はあ。しかし発言にバッドナース的なものがとことん欠けてますねえ（笑）。

中村 すいませ〜ん。自分、人見知りが激しいんですよ。喋るの苦手なんです。

—あら。そんなバッドナースさんが好きなものは、どんな凶悪なものでしょう？

中村 自分、ディズニーとか大好きなんです♡ あと長電話ですね。それに自分、鍋野と仲がいいんですけど、朝10時ぐらいからパチンコに行って、夜の10時までずっとやりっ放しとかよくありますよ（笑）。朝9時半ぐらいに練習に行こうって待ち合わせしていても、パチンコ屋が目の前にあると、フラフラって入っちゃうんです（笑）。フランスベッドで働いてたころも、よく休憩時間にパチンコ行きましたよ。

—あれっ、そのころって未成年じゃ？

中村 16歳ですよ、まだ（笑）。

—それはワルですね。ズバリ言って十分にバッドです（笑）。しかし良く言えば、集中力はあるってことなんですかね。

中村 でも飽きっぽいんですよ。何でも続かないんです。いままで習い事して続いたのは水泳とプロレスぐらいで。

—プロレスは習い事ですか、キミ（笑）。スポーツはいろいろやってるんですよね。

中村 でも高校入って、スポーツをやらなくなっちゃったんです。遊びたかったから。

—あら、いけない遊びを（笑）？

中村 いや、友達と自転車2人乗りしたぐらいで、悪いことはしてないですよ。（笑）。

—あなた、ヒールなんだから悪いことしなきゃ（笑）。ヒールは肌に合ってます？

中村 いやいや、まだわからないです。とにかく難しいんですよ、ヒールって（笑）。

—あら、二冠王になったじゃないですか。

中村 もう取られちゃいましたし、それに自分の力でなったわけじゃないですから。

—ベルトを取られた川崎球場での工藤さんとのシングルマッチはいかがでした？

中村 緊張しちゃって、何も覚えてないです。もう自分の入場テーマが鳴ったとき、逃げ出したくなりましたから。

—あらら、二冠王なのに。

中村 何が怖いっていうのはわからないんですけど、とにかく怖いんです。この間、剥離骨折しちゃったときも"手術するんだったら辞めたい"とか思っちゃいましたし。

—はあ。じゃあ何がバッドナースに引退を思い止まらせたんですか？

中村 言い出せなかったんですよ。ここまで先輩に良くしてもらって、それに大仁田さんがいなくなるのもわかってるじゃないですか。大仁田さんの顔を見ると、嫌なことって忘れちゃうんです。自分にしてみれば神様みたいな人ですよ、ほんとに。それに手術しないでもいいようになりましたしね。自分、注射が大嫌いなんですよ（笑）。

—あら、ナースなのに。あなた自分で注射器持ってたじゃないですか（笑）。

中村 注射と雷と地震は大ッ嫌いですから。

—お化けはどうですか？

中村 夜道も一人で歩けませんよ、怖くて。

—バッドナースはお化けが苦手と。その顔でよく言いますね。そんなこと（笑）。

中村 この顔はお化け入ってますよね。暗い所で見ると自分でも怖いですよ（笑）。

—ちなみに好きな男子のタイプは？

中村 ガッチリして優しい人♡

—それは頼りたいってことなんですかね。

中村 でも自分、1人でいるのが嫌なんです。だから長電話しちゃうんでしょうね。

—はあ。ズバリ言ってバッドナースさんは寂しがり屋さんってわけですね。

中村 誰かがいてくれないとダメなんです。

—そんなバッドナースさんは、ヒールとしてやっていきたいこととかあります？

中村 もっと悪くなりたい。会場に来てるお客さん全員が"えげつない"と思うように。

—火を吹くとかどうですか？

中村 自分、火も怖いんですよ（笑）。花火も手で持てないぐらいなんですから。

—んあ〜。そんな怖がりで、よくプロレスやってますね。しかもヒールで（笑）。

中村 ほんとに（笑）。料理しててちょっと銀紙に火がついただけで、目の前が真っ暗になっちゃいますからね。

—あら（笑）。ちょっとはバッドナースらしいワルな部分とかないんですかねえ。

中村 あっ、マナーの悪いお客さんを見ると、腹立ちますよ。お客さん同士の乱闘を止めに入ったら殴られたことがあって、そのときは誰が殴ったかわからないからその辺にいる奴を片っ端から殴りましたから（笑）。

—あっ、それはかなりバッドですね（笑）。じゃあ最後に凄味を効かせたバッドな一言を。

中村 普通に言っていいですか？ これからも大暴れしますんで、応援してくださいね♡

—んあ〜。

BAD-NURSE NAKAMURA Profile
バッドナース中村【FMW】本名：中村理恵。S49年2月1日生まれ。大阪府大阪市出身。H2年12月にデビュー。160センチ。62キロ。

アンタねー、笑ってばっかりで失礼だよ。（遠藤）
あ、いや、ブフフフ。（加藤）

Photography●TAISHIN AOKI　Text●YOKOHAMA JAMES DEAN　Hair&Make-up●TAKASHI KAMIYA

加藤直美+遠藤信江

●やはり、笑いたくなる年ごろなのだろうか？　全女の現役最年少の加藤直美はとにかくよく笑う。ブフフフ（ちょっと変な笑い方だが）。それを見つめる（冷めた目だが）遠藤信江が、ミョーに大人に見えてしまった今日このごろ。とにかく。前号に引き続き全女の平成６年組を紹介しよう。

──お約束の質問です（笑）。プロレスとの出会いを聞かせてください。

遠藤　小学校５年生のときでした。横浜文化体育館でクラッシュギャルズ対極悪同盟の試合を観たんですよ。その試合はクラッシュが負けちゃったんですけど、〝いつか自分がレスラーになって、極悪を倒してやる〞って思いました（笑）。

加藤（突然）ブフフフ。

──どうしたんですか、加藤さん？

加藤　あ、いや、ブフフフ（笑）。

──……ま、いっか。で、加藤さんの方は？

加藤　小学校１年生ときに地元（都内）で観た全女の興行がプロレスとの出会いでした。

──お二人のスポーツ歴は？

遠藤　中・高校とバレーボールをやってました。

──レスラーでは珍しいですね。

遠藤　その当時からレスラーにはなりたいと思ってたんですけど、オーディションとかがあるの知らなかったんですよ。道を歩いてたら、スカウトされるもんだと思ってて。

──あのね、自衛官の勧誘じゃないないんですから（笑）。

遠藤　はい。いまになってみると恥ずかしいんですけど。そういうのがあること知ってたら柔道とかやってたと思います。

加藤（また突然）ブフフフ。

遠藤　アンタねー、さっきから笑ってばっかで失礼だよ。

──……。で、加藤さんの方は？

加藤　中学校１年生のときから全女のスポーツ・クラブに通ってました。

──お互い全女入門はすんなりと？

加藤　私は両親に大反対されました。〝入門するんだったら親子の縁を切る〞って言われましたから。結局、説得して何とか了解を得ました。

遠藤　私はいちど就職してから、親の手からはもう離れてる状態だったから、心配はされませんでした。

──お互いデビュー戦はまだ記憶に新しいですよね。

加藤　私はプロ・テストが補欠合格だったので、デビューできないと思ってたから、すごく嬉しかったです。

遠藤　私も嬉しかったのはもちろんですが、同期の高橋と渡辺は後楽園ホールでデビューしたのに、私は３日後の大阪っていうのが引っかかってました。〝なんで自分だけ〞って。

──その悔しさが、先日の『全日本ジュニア選手権挑戦者決定リーグ戦』の結果に繋がったんじゃないですか？　全勝で６人中トップの成績。

遠藤　その前の『新人王決定戦』では３位（１位＝田村、２位＝渡辺）でしたから。〝もう、負けてられないな〞って気持ちで戦いました。

加藤（またまた突然）ブフフフ。

──……。で、加藤さんは？　ん？　加藤さん笑ってる場合じゃないじゃないですか！　リーグ戦、全敗じゃないですか。もっとがんばらないと。

加藤　あー、リーグ戦のことには触れないでください。ブフフフ。

──……。では、最後にお二人の夢を聞かせてください。

遠藤　私の目標としている選手、伊藤薫さんのように真っ正面からぶつかっていくレスラーになりたいですね。将来的には、ベビーフェイスよりもヒール選手になりたいです。そっちの方がルックス的にも向いていると思っていますので（笑）。

加藤　ルックス悪いからね、遠藤。

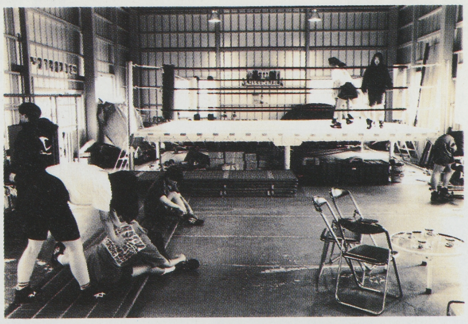
遠藤　オメエに言われたかねーよ。

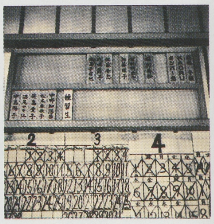
──ブフフフ。で、加藤さんの夢は？

加藤　いまは負けてばっかりなんで、１試合、１試合を大切に、勝ちを狙っていきたいと思います。ブフフフ。

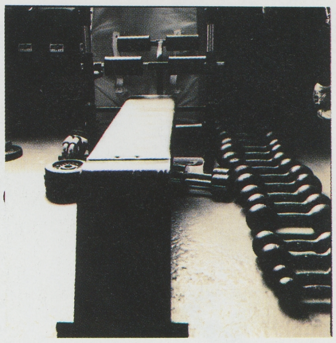
NOBUE ENDO Profile
遠藤信江【全日本女子プロレス】本名：同じ。Ｓ48年４月22日生まれ。神奈川県横浜市出身。Ｈ６年８月にデビュー。165センチ、67キロ。

NAOMI KATO Profile
加藤直美【全日本女子プロレス】本名：同じ。Ｓ52年10月８日生まれ。東京都板橋区出身。Ｈ６年11月にデビュー。157センチ、56キロ。





Photography●KAZUHIRO KITAOKA
Text●SATORU KANAI



ガイア、新人。

●GAEA　JAPANの誕生で何が衝撃的だったか。それはやはり、旗揚げ戦でデビューした新人選手の驚異的な完成度である。入門から8か月の間、彼女たちはどのように育てられたのか。11人の原石を、育ての親である長与千種が語る。

佐藤季恵。

TOSHIE SATO

Ｓ53年11月29日生まれ。福島県出身。Ｈ７年４月15日、後楽園ホールにてデビュー。166センチ、60キロ。

里村明衣子。

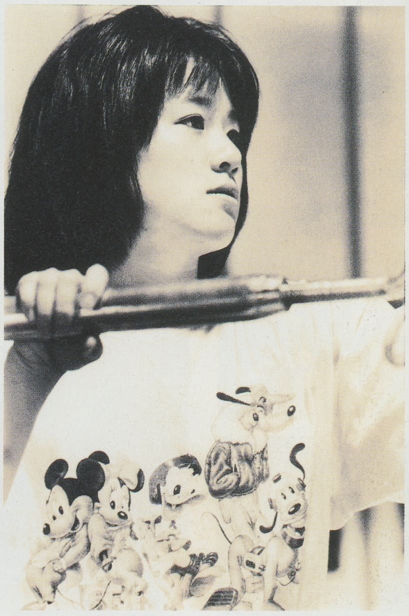
MEIKO SATOMURA

Ｓ54年11月17日生まれ。新潟県出身。Ｈ７年４月15日、後楽園ホールにてデビュー。160センチ、58キロ。

植松寿絵。

TOSHIE UEMATSU

Ｓ49年４月14日生まれ。静岡県出身。Ｈ７年４月15日、後楽園ホールにてデビュー。157センチ、55キロ。



大地の女神が産み落とした11の進化形。彼女たちが新たな女子プロレスをクリエイトする。

成田舞子。

MAIKO NARITA

Ｓ52年２月21日生まれ。青森県出身。Ｈ７年４月15日、後楽園ホールにてデビュー。158センチ、60キロ。

加藤園子。

SONOKO KATO

Ｓ51年６月11日生まれ。愛知県出身。Ｈ７年４月15日、後楽園ホールにてデビュー。158センチ、61キロ。

永島千佳世。

CHIKAYO NAGASHIMA

Ｓ51年１月24日生まれ。千葉県出身。Ｈ７年４月15日、後楽園ホールにてデビュー。158センチ、49キロ。

沼尾マキエ。

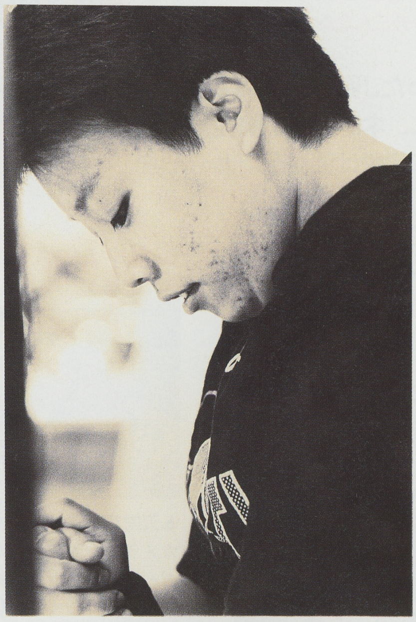
MAKIE NUMANO

S48年4月15日生まれ。栃木県出身。未デビュー。158センチ、62キロ。

松本麻衣子。

MAIKO MATSUMOTO

S49年10月6日生まれ。兵庫県出身。未デビュー。165センチ、68キロ。



中野知陽呂。

CHIHIRO NAKANO

S52年7月3日生まれ。東京都出身。H7年5月14日、後楽園ホールにてデビュー。158センチ、61キロ。

いま使ってる彼女たちの技がありますよね。あれは、自分たちが新人のときに使っていた技なんですよ。それがなぜお客さんの目に鮮明に映ったのか？ それは昔のプロレスの再認識がなかったせいなのかなあって。ヘッドシザースなりローリング・ヘッドバットって、いま使ってる人がいないでしょ。だけど、私たちが新人のときに教わったことを思い出して再認識して、完璧にこなせるようにする。そこでいまの時代のエッセンスと昔の忠実な技をリミックスしたどうなるかということなんですよね。

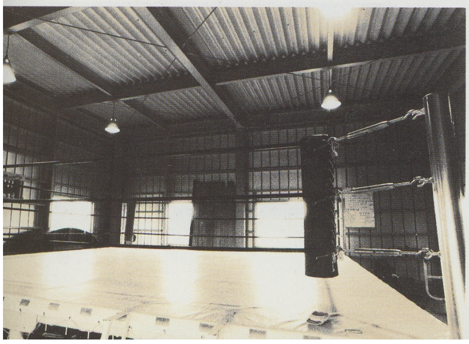
旗揚げ戦のアンケートを見たら「新人らしくない技を使わせるな。5つなら5つの、基本どおりの技でやってほしい」と書いてあったんです。でも私の新人のときの基本は5つじゃなかった。それがいつの間にか5つになってしまった。じゃあいつから5つに決まったのかって、私は時代に問いたいし、すごくナンセンスだと思うんですね。

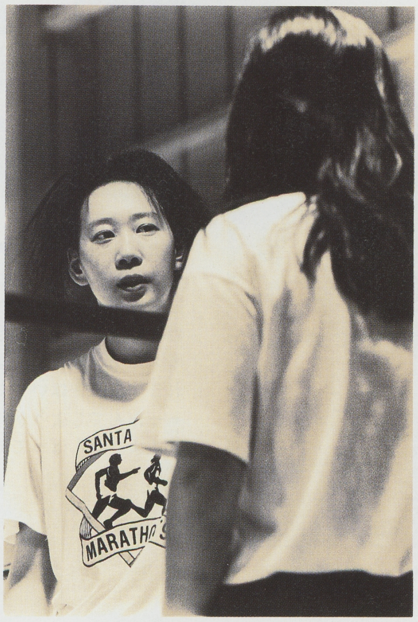
新人の子たちには自由であってほしい。ただし、あくまでも軽く覚えられても困る。完成度を高くするためにはそりゃ制限もするよね。いろんな高度な技を使うためには、いまある新人のステイタスの中の技を100％磨きをかけて完璧に仕上げてくれと。当時はこれも習った、あれも習ったというのを小出しにて覚えさせてるだけ。でも彼女たちにとってはいままでにない技みたいで〝使ってて嬉しいです〟って。

あと、考え方も私がこうしろああしろじゃなくて、考えさせとく。この技は1つじゃなくて10通りの入り方があるはずだから、それを一生懸命考えなさいと。ウチほどミーティングしてるところはないと思うし。練習のときも自己採点させるし、なぜダメなところが出てきたのかをみんなで考えたり。

育てる側としては、それぞれの子たちの気性をつかんで、それに対して最良のエッセンスをふりかけてあげること。ご飯のふりかけと一緒ですよ。すごくおいしく召し上がれるときもあれば、合わないときもある。それさえつかめば、こっちがいちいち言わなくても育ってくれるんです。（長与千種・談）

ガイア、新人。

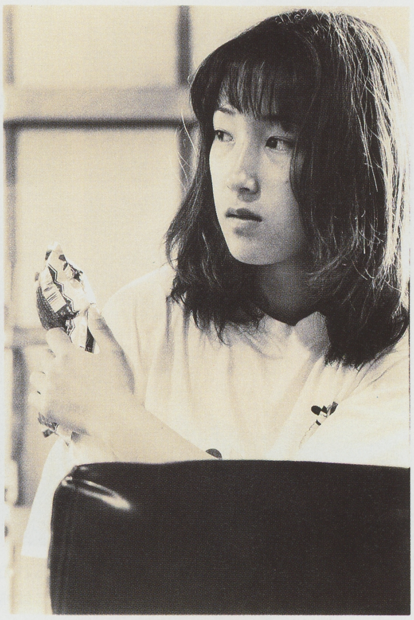




笹島愛子。

AIKO SASAJIMA

S48年1月6日生まれ。埼玉県出身。未デビュー。170センチ、64キロ。



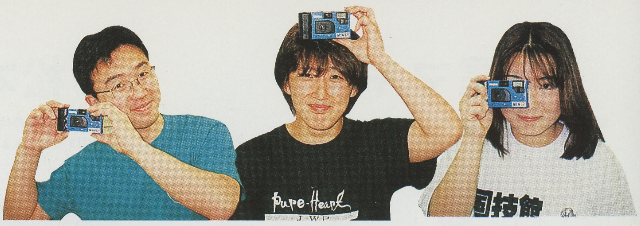
中島陽子。

YOKO NAKAJIMA

S52年2月23日生まれ。愛知県出身。未デビュー。166センチ、58キロ。

JWP中国の旅・写真日記

JWP中国遠征で撮られた、あんなショットこんなショット。



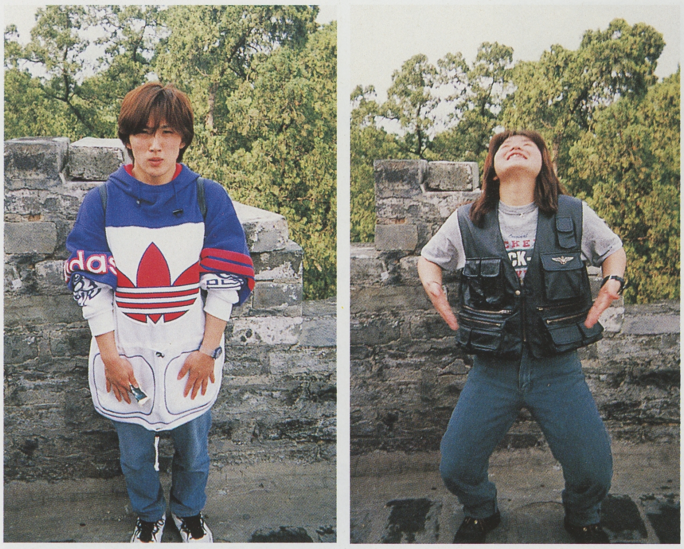
▲特別特派員の（左から）千葉道也さん、矢樹広弓さん、キャンディー奥津さん

●5月13日から17日にかけて中国遠征を行ったJWP。どんな模様かは各専門誌で報道されたとおりだが、もっと身近な選手の表情が見たい、知りたい。そんな貴兄のために、本誌ではJWPの各選手＆リングアナの流血王・千葉道也にレンズ付きフィルムを提供、ゆかいな旅を記録してもらったッス。解説は流血王だよ〜ん。

ステキなスリーショット

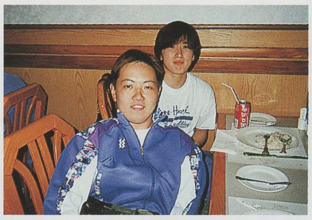
▲ゴリラ顔の影響はキャンディー奥津、そしてついに矢樹広弓にまで波及してしまった……。よくあるパターンで〝海外に来たことで解放的な気分になった〟結果がこの顔なんでしょーか。トホホホホ。あとアレだよアレ、中央の、赤い帽子を被った篠崎社長も見逃せませんね。

表紙のお２人・中国編



▲誰かのお墓に行ったんですけど……名前忘れちゃいました（笑)。遠征に同行したファンの前でのコマネチ、いまの奥津には怖いものなし。矢樹は困る。

中国でも困る（笑）



▲天安門広場での朝食タイムにて。カメラマンは奥津。なぜこの写真を選んだかというと、単に矢樹の困った顔が写ってたから（笑)。何を困ってるのやら。

能智、元気です。

▲能智房代選手です。国内同様、残念ながら北京大会と天津大会は欠場でしたが、セコンドとして今回の中国遠征に同行しました。カメラを向けると、ちっちゃい目を大きく開けてノーテンキな表情ばかり見せてくれます。能智はいったい、どーしちゃったんでしょうか!?　早く復帰できるようがんばってくれ〜い!!

ひーちゃんったら……

▲中国といえば万里の長城。そんな中国の象徴でゴリラ顔を見せる福岡晶。最近の福岡はですねー、昔さんざんやってたゴリラ顔を嫌がるようになってたんですけど、〝ハイ、ゴリラ顔〟というとついその表情を作ってしまうのが悲しいですねー。もはや、性（さが）なんでしょうか……。

プラムったら……２連発

▼レスラーという人種は、欠場が続くとどうかしちゃうんでしょうか。プラム麻里子選手もイッちゃってます。上の写真は天安門広場で『赤い糸』のごとく尾崎魔弓選手と……。しかも毛沢東の目の前で。これを中国政府が見たら……。
　と思いきや、今度は帰りの北京空港でキューティーとカラミを。しかもプラムの左手は胸に……。いったいプラムに何があったのか……。

乱馬翔ったら……

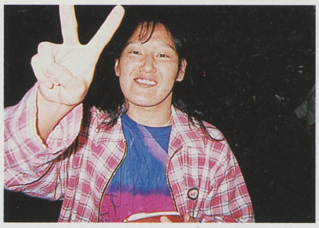
▲北京大会にて。一部マニアの間でナイスバディとウワサの乱馬翔レフェリーの「きて……♡」ポーズです。ちなみにコレは〝カントク〞関西の指導はナシ（笑）。

キャンディー、泣く

▲マスコミ初登場!! キャディー奥津の泣き顔です。あの!! ジェットコースター大好き＆バンジージャンプ大好きっ子の奥津が、帰りの飛行機がエアーポケットに落ちて大揺れであわや墜落かって騒ぎのときに見せた顔です。ちなみに隣に座ってた宮口は平気な顔して座ってましたとさ。

◀その飛行機で、僕が寝てる間に撮られてました。まったくもープンプン!! ビール飲んで寝ちゃったんだよぉ。

いい気になんなよデビル



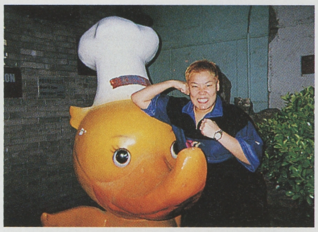
▲コメントは控えさせていただきます。……でも言っちゃお。ったく笑うならちゃんと笑え!! いい年してまったくもー。笑ってんだかボケーっとしてんだかわかんねーよ!!

↓

またやられた……

▶……なんて思ってたら、天安門広場でチョークスリーパーをキメられてしまいました。中国にまで来てまさかまたやられるとは……。くそー、覚えてろ!!

チエちゃん大暴れ



▲北京ダックを食べに行ったとき、店の前に飾ってあった可愛いアヒルちゃんに「これからチエちゃんが食うたるでー」と、いつも僕を脅すときのように蹴りやパンチをかましてます。たらふく食べとりました。

何やっとんだー

▲レフェリーのチャーリー東が新人の宮口に「最近お腹が出てきたんじゃないの〜」と突っ込まれ、思わずチェックしてます。でも大丈夫、福岡がいるさ（笑）。

〝カントク〞関西指導による集合写真コレクション

▲JWPのエース・ダイナマイト関西自ら、今回の写真日記のディレクションを買って出た!! 「『女子プロGP』に載る写真はこーやるんや!!」と全選手のポーズを仕切ってました。JWPの頂点に立つには、こんな多彩な才能がなければいけない修羅の道なのでしょうか……。

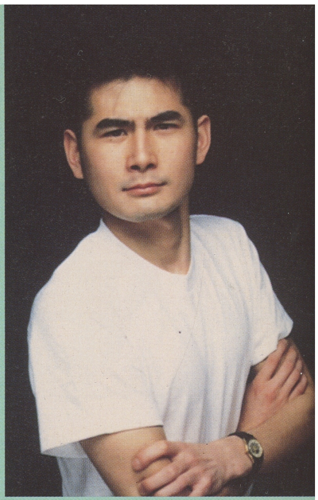
もぐもぐもぐもぐ……

▲ファンの集い（ピュアな宴会in China）で行われた、中華まん早喰い大会から。よーく見ると、矢樹ちゃんの口からはみ出てる。結果は……矢樹、負けてました。

『女子プロGP Vol.6』取材テンマツ記

スーパーわいど。

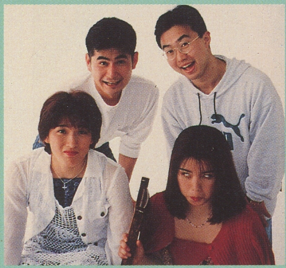
がんばれタツャ。



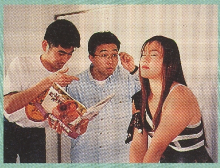
●ここでちょっとひと休みして『女子プロレスグランプリ』のメイキング・コウナア“がんタツ”の始まりだ〜い。レスラーさまの意外な一面と、タツヤのマヌケぶりを堪能してちょ。

●つあっ、あー。D雅美選手とD関西のセクシーポーズッス。レアッスよ〜

●つあっ、あー。ごめんなさいッス。自分、尾崎魔弓の取材のとき寝坊してしまったッス。そこで代打として流血王・千葉道也さんに尾崎選手のイヌになってもらったッス



●つあっ、あー。往年の『月刊明星』の表紙チックな撮影を試みたところ、C奥津選手がゴリ顔をしてしまい台無しになったッス



●つあっ、あー。福岡晶選手が写真集を出したッス。思わず写真集と本物を見比べたッス

横浜ブルース・リー、見参!!

●つあっ、あー。今回の取材始めはブル中野ッス。久々の取材だったので、何とも言えぬものがあったッス。でもって、ブル様が「女子プロGPって、おもしろいことやればいっぱい載るんですよね……がんばります」とのことで撮影されたのがこの写真。どうッスか、自分メチャクチャカッコ良いッスよね……みんな、自分のことバカにしてますでしょ

●つあっ、あー。セクシーな大向選手の着替えを覗こうとしたら、遠藤選手にボコボコにされたッス

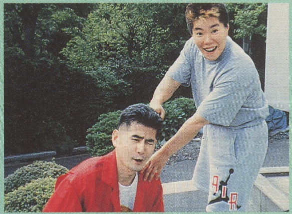
●つあっ、あー。記念撮影での風間社長の異常なノリノリぶりには神取選手も呆れてたッス

ラスカチョの奴隷ッス

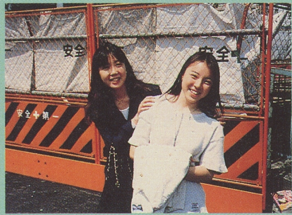
●つあっ、あー。女子プロ界が誇るいじめっ子タッグといえばラスカチョッス。そして案の定、自分がその毒牙にかかってしまったッス。「アタシたちを取材したいなら、今日1日奴隷におなり」と脅されてしまい、シューズの紐をほどいたりなどと、さんざんコキ使われたッス

GAEAの道場に行ったッス

●つあっ、あー。道場で練習以外の唯一の楽しみが毎週水・土曜日に訪れるパン屋さんの車ッス。コレが来たときは練習を中止して、長与選手から新人までみんながパンを買い求めるんス



●つあっ、あー。GAEAの道場に取材に行こうと思ったら、道がぜんぜんわからなかったッス。そこで練習中のボンバー選手に迎えに来てもらい、すんげー迷惑かけてしまったッス……

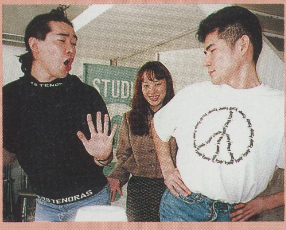


●つあっ、あー。骨折から復帰したぴち²中山香里選手と、FMWが誇る美人広報・樋口香織嬢のツーショットッス。とても年齢差が10歳あるとは思えないッス。樋口さん、ごめんッス〜

●つあっ、あー。左足首を骨折してしまった山田敏代選手。でも、あの爽やかさは衰え知らず。そんな山さんがラクラク移動できるように、台車で運んであげたッス

いけいけワッキー♡

●つあっ、あー。そんな“おイタ”が過ぎたことに業を煮やしたのか、大向美智子&遠藤美月選手に「いーかげんにしろ!!」と制裁を食らうワッキーッス。ちなみに彼女の一発芸で“提灯アンコウ”というのがあるので、会場で見かけたら見せてもらうといいッス



●つあっ、あー。LLPWの第2の美人広報といえば“ワッキー”こと枠島美佐子嬢ッス。大学の先輩にあたる編集長に、ことあるごとにイジメ&セクハラされたことでついに爆発。2人まとめて逆セクハラされたッス。……でも、気持ち良いッス……

豊田軍団に加入!?

●つぁつ、あー。やはりプロレス・マスコミたるもの、取材拒否や出入り禁止のひとつやふたつぐらいなきゃ一流とは言えないッス。でもって、実は本誌も、FMW・特にくどめから後楽園ホールの入場通路の出入り禁止処分を食らってるんス。その理由は「工藤が笑ってしまって、試合に集中できないから」（樋口香織談）だからなんス。バカにしてるでしょ!!

●つぁつ、あー。今日は豊田軍団の撮影ッス。でも長谷川の咲ちゃんは目のケガで負傷欠場のため、後日別撮りということになったッス。そこでしょうがないから、自分が咲ちゃんの代打として豊田軍団入りしたッス。どうスか、自分ってセクシー?……やっぱ本当に自分のこと、バカだと思ってるんでしょ。でも、ぁっ背中と背中が……ま、まなまなの体温が、伝わってくるッス〜!! ブ・ブ・ブ・ブーッ!! また鼻血が出たッス……。誰か止めてくれッス〜

GABBA GABBA HEY!!

●つぁつ、あー。W井上の撮影は、もーほとんどドンチャン騒ぎッス。ガバガバ喰うわ、EAST END×YURIを歌いまくるわとやりたい放題。でも王者だから許すッス

●つぁつ、あー。みなみ鈴香選手のファイナル撮影で花束を贈呈したッス。メイク中のバイソン木村選手とともに、第2の門出を祝福したッス。さよならみなみ、フォーエヴァー（©ロッキー）!!

●つあつ、あー。メイク途中のバッドナース中村選手ッス……。スゴイ……

●つあつ、あー。恒例の"レスラーさまの技を食らう"ッス。今回は伊藤薫選手のフットスタンプ……ぐ、ぐるぢいッス

●つぁつ、あー。グラビア&ピンナップ撮影と、"大奥探検隊"でバンジージャンプの体験取材をしてもらうべく、府川由美ちゃんをよみうりランドに連れてったッス。実はこの日、自分は同行せずに編集長が引率（笑）したんスけど、由美ちゃんたらもー、やたらとはしゃぎまくってたそうッス。当日は降水確率90%の天気予報だったんスけど、無事撮影は成功。自分も行きたかったなあ……。

●つぁつ、あー。よみうりランドに巣くう猫をナデナデする府川由美ちゃんッス。ガーン、やっぱ由美ちゃんも動物好きなんスね……。どこかに動物嫌いなレスラーはいないかなあ……。

横浜ブルース・リー、再び。

●つあつ、あー。今回の"がんタツ"の最後を締めくくるのはまたまたブルース・リーッス。バイソン木村選手のトンファーを借りてキメたッス。今後会場で見かけたら、"横浜ジェームス・ディーン"でもいいけど"横浜ブルース・リー"と呼んでくれッス!! ……ほらやっぱバカにしてるんだ、みんな

●つぁつ、あー。前号のC鈴木選手のグラビアを真似る流血王ッス

●つぁつ、あー。流血王と編集長の通称プレポラ兄弟のツーショットッス

道也のばか。

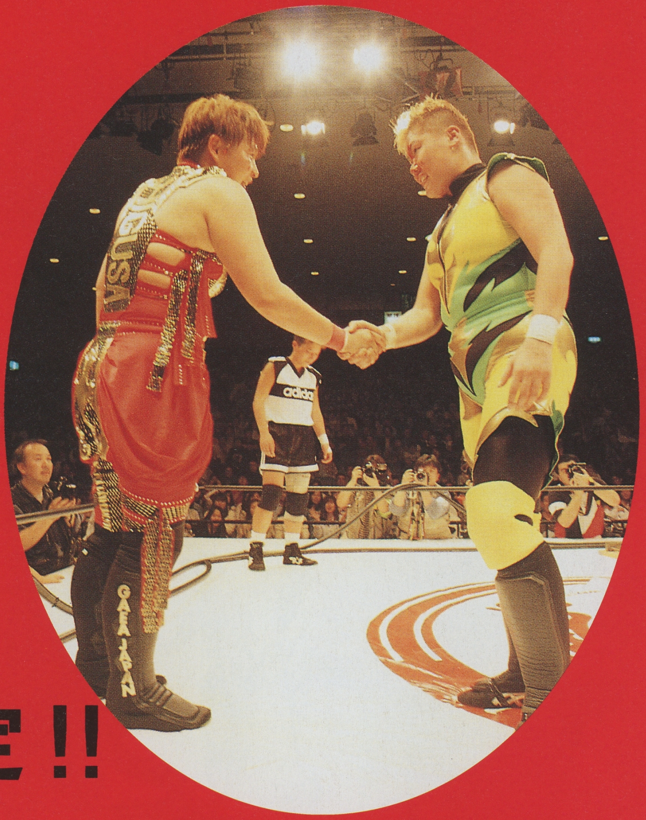
※タツヤ……って!?：『女子プロGP』副編集長・安川達也のこと。林家こぶ平〜上島竜兵に酷似した肥満児時代を経て、現在横浜ジェームス・ディーン、Mr.トヨタスキー、マハーマーナラヴァ、7インチ・ネイルズなど多数のホーリー・ネームを持つ。S45年10月19日埼玉生まれの横浜育ち、でも本籍は東京。好きな言葉はボーン・イン・ザ・USA、趣味は外国での狩り。ちなみにタツヤの着るGジャン（通称ジミー・ジャケ）は一説によると、エリの部分に強固な糊を塗ってあるため始終ビンビンに立っているらしい。

夢の対決、実現!!

(JWP)ダイナマイト関西 VS 長与千種(GAEA JAPAN)

WOWOW

JWP女子プロレス・スペシャル



6月17日(土)
17:30〜19:30
放送決定!!

6.16東京・両国国技館

「サンダークイーン両国ワンダーランド」

●噂がついに現実のものとなった。ファン待望のエース対決、JWPのダイナマイト関西とGAEA JAPANの長与千種の激突が実現する。しかも場所は、数々の名勝負を生んだ両国国技館。ふたりにとっては願ってもない舞台だ。それぞれの団体のメンツと、レスラーとしてのプライドを賭けた戦いとなることは必至。WOWOWでは大会の翌日6月17日(土)、さっそくこの熱戦の模様をオンエア!! ハイビジョン収録の迫力ある画面で、両選手のリングいっぱいに展開される熱戦を、よりワイドに、より鮮明にお届けします。お楽しみに!!

JWP代表“ヤマモ”が両国大会までの道のりを語る

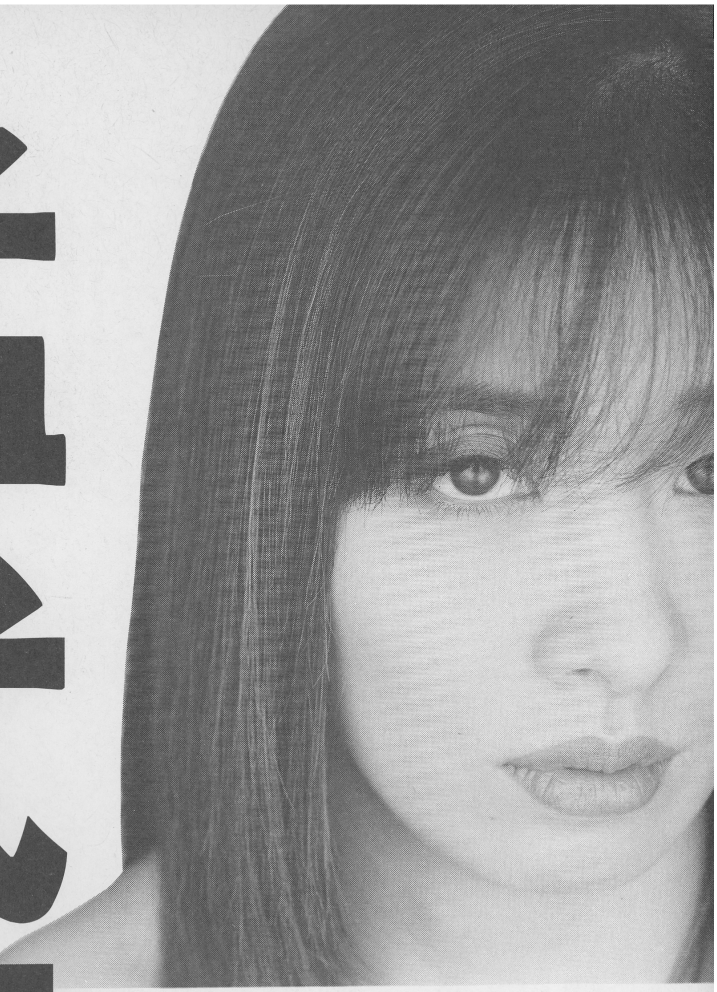
「ROAD TO 両国」

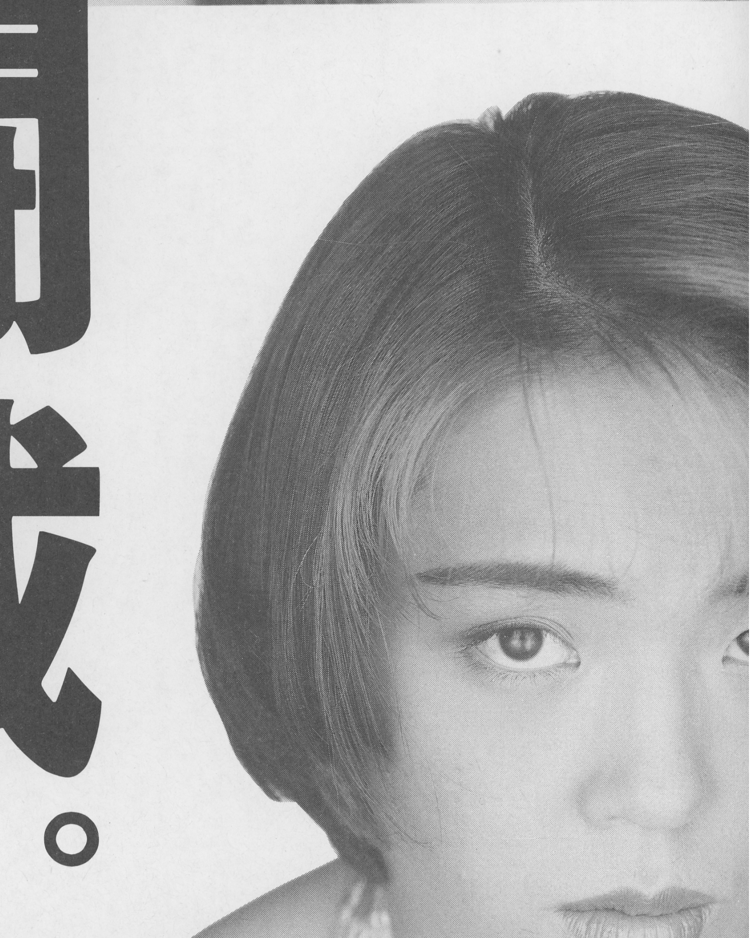
6月10日(土)18:00〜19:30放送

●両国大会プレ番組。JWP代表である“ヤマモ”こと山本雅俊氏が、昨年5月の有明大会から本年6月16日に行なわれる両国国技館大会(放送は17日)までの約1年間の道のりを主観的手記で振りかえる。単に試合結果を回想するだけでなく、団体を運営しマッチメイクする立場でのエピソードや苦労話なども交えた、ありのままのJWPの1年間を紹介。併せて見れば両国大会の感動も2倍。

山本小鉄&高柳謙一の強力タッグ!!

●強く、美しく、リングに舞う女たちの戦い……JWP女子プロレス。現在、装いも新たに放送中!! 解説には、あの山本小鉄氏を起用。百戦錬磨をくぐり抜けてきた厳しい目で、熱戦を鋭く斬る。また実況はリングスやボクシング中継でお馴染みの高柳謙一アナが担当。





猛武闘賊。

ラス・カチョーラス・オリエンタレス

●三田英津子と下田美馬から成る猛武闘賊も今年で結成4年を迎えた。総師、北斗晶の意思を受け継ぎ、これまでルーダとしてリング狭しと暴れまわってきたが、ここにきてチームとしての存在意義を唱えられている。かつての目標であった豊田真奈美、山田敏代チームはもういない。〝東洋の猛女たち〟はいま何処に向かおうとしているのだろうか？

脱・共存共栄!?

Photography●KAZUHIRO KITAOKA
Text●SHINO HOJOH
Hair&Make-up●TAKASHI KAMIYA

三田英津子

えっ、美馬もライバル？ 私たちはあくまで〝チーム〟ですから……。

猛武闘賊｜脱・共存共栄!?

「そんなぁ、私たち、離しちゃったらダメですよぉ！」

そろそろ下田美馬とのタッグにこだわらず、シングルの方へ力を入れようと思っていませんかと尋ねると、三田英津子は目をまるくしてそう言った。

「……ただね、シングルは自分を大きくするから、自分の力を高めるためにはいいと思いますね。あくまでタッグのプラスにするためですけど。プロレスラーはみんな結局は一人だってみんな言いますよね。シングルのベルトを目指さなきゃ嘘だって。でも私は、これは恥ずかしいことかもしれないけど〝赤いベルトが巻きたいな〟って心の底から思ったことがないんです。そのかわりWWWAタッグが欲しいと思う気持ちは誰より強かったと思うんです。そういうレスラーが一人ぐらいいたっていいんじゃないかな。だめですか？」

〝WWWAタッグのベルトを下田とのコンビで取りたい〟。ここ1年半、三田はこう言い続けている。UWA、JWPの二つのタッグベルトは腰に巻いたもののWWWAタッグには手が届いていない。100代目を決めるトーナメントでも、その夢を果たすことはできなかった。

「何ていうのかな。美馬とのタッグが完璧になりすぎちゃったっていうか、お互いに次に何をやりたいのか全部わかっちゃう。前の私たちってハラハラドキドキが魅力だったと思うんですよ。自分たちも、お客さんもハラハラドキドキしてた（笑）。でもいまはそういうのがなくなって、試合前でも落ち着いている。私たちも見ている人もそれがちょっと寂しいかも（笑）」

色紙を差し出されると、無意識に二人分のサインができるように、端（はし）に自分の名前を書いてしまうという。それくらい、〝ゼット〟でいることが当たり前になった下田とのコンビ。UWAタッグのベルトは気がつけば6回も防衛していた。WWWAタッグにこだわる彼女にとってこのベルトはどんな価値を持っているのだろう。

「初めは通過点に過ぎないベルトだって思ってましたけど、いまは愛着がありますね。団体対抗戦が盛んだったころは、その中に防衛戦が組み込まれて、ちょっと対戦相手に不満もあったけど、最近は全女の選手が相手なんできついです。3月の横浜アリーナのみなみ（鈴香）&渡辺（智子）戦とか、この前の伊藤（薫）&レジー（ベネット）戦とか。UWAのベルトを守るってこんなに大変なことだったのかって……。防衛記録を延ばして全日本プロレスの渕さんみたいになりたいと思ってます（笑）」

そのUWAタッグのベルトの向こうに、WWWAタッグのベルトが輝いている。現在は、井上京子・貴子チームが保持しているが、その二人に対してはどんな思いを抱いているのだろうか。

「あの二人はぜんぜん違うタイプのレスラーなのに、合体攻撃もうまくいってるし、さすがWWWAタッグチャンピオンだと思わせるものがありますね。あっ、でも褒めてちゃいけないんですよね。勝たないと（笑）。W井上はどうしても倒したいっていうより、いいプロレスをしたい相手です。それで勝てれば一番いい。いまは、とにかく豊田軍団をなんとかしたいんで（笑）」

豊田軍団。いま、全日本女子プロレスでもっとも旬な軍団である。リーダー格の豊田真奈美はWWWAシングルのチャンピオンとなり、その勢いは注目の的である。同期である三田や下田との訣別が軍団発足のきっかけとなっており、彼女たちとは行きがかり上、敵対関係にある。

「私、ある意味では軍団を作ったことは失敗だったと思います。というのは、特に伊藤なんですけど、彼女はシングルか軍団以外の組み合わせのタッグでは彼女らしい動きをするんです。軍団の中に入るとどうしても伊藤が先にやられて、吉田が、長谷川が……ってなって豊田が最後にやり返すっていうパターンになっちゃう。私は伊藤は豊田にひけをとらない勢いのある闘い方のできる選手、自分で試合のペースが作れる選手だと思うんですよ。軍団以外のときの伊藤の方が、〝楽しく、苦しく〟試合ができるような気がします」

〝楽しく、苦しく〟——いい表現である。プロレスはあくまでも相手あってのものである。苦しいからこそ楽しい。相手の実力を認めてこそ燃えられる。先輩としての三田の伊藤に関する分析はうなずける部分が多い。伊藤の成長を熱っぽく語る三田に、彼女自身の成長をひしひしと感じる。

「豊田が一人で赤いベルトを獲ったんだったら認めたかもしれないけど、軍団を率いた豊田に関してはなんか認めたくないんですよね」

豊田軍団の話になると温厚な三田の口からかなり手厳しい言葉が吐かれる。しかし豊田は輝きながら三田のはるか前方を走っている。それは事実である。豊田のひたむきに勝利を目指す姿は見る者を魅了し、それは逆に三田には欠ける部分である。

「試合じゃなくても、とにかく〝勝つ〟ってことに対しては彼女は凄いですよね。でもプロレスってそれでいいのかなって思うこともあるし。ああ、でも私が勝てなきゃしょうがないですよね」

そう言って、深々と溜め息をついた。たぶん、自分なりのイズムでぶつかっているつもりでも、思うように結果を出せないことがはがゆいのだろう。しかし、最近は〝三田にWWWAシングルを狙ってほしい〟という声が高まっている。なにしろ、三田には恵まれた体格に加え、協力な必殺技、デスバレー・ボムがあるのだ。

「デスバレー・ボムがなかったら、私はとっくに引退してましたね。あの技に救われたんです。初めはいろいろ考えて、道場でぬまっち（引退）を相手にやってみたんです。そのときは頭からは落とさなかったんですけど、すごく効いちゃって（笑）。ただ、もうありとあらゆる方法で切り返されるんですよ。みんながそれだけアレを怖がってる証拠かななんて思ってるんですけど（笑）。なんとかもう少し私も入り方を研究しないといけないですね。一瞬なんですけど、担いでから態勢を整える時間がかかるんで難しいんですよね」

プロレスラーとそのオリジナル・ホールドの出会い。三田とデスバレー・ボムの出会いは運命的でさえある。デスバレー・ボムさえあれば本当に赤いベルトを巻くことも夢ではないのだが……。

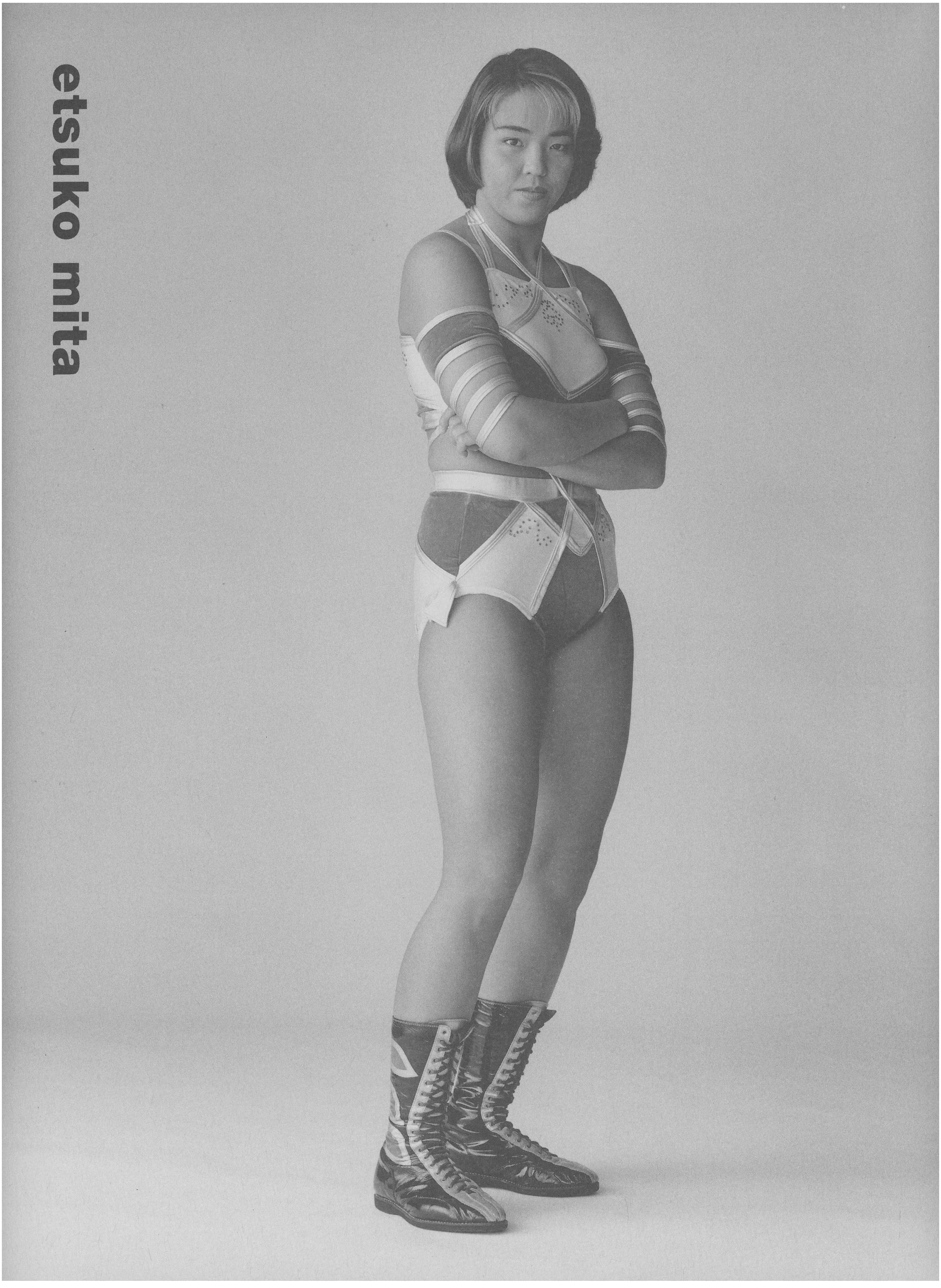
〝いまはまだ、あくまでもタッグのために、シングルで自分の力をつけていきたい〟という三田。いま、いちばん闘いたい相手は誰なのだろう。長い沈黙のあとに彼女は答えた。

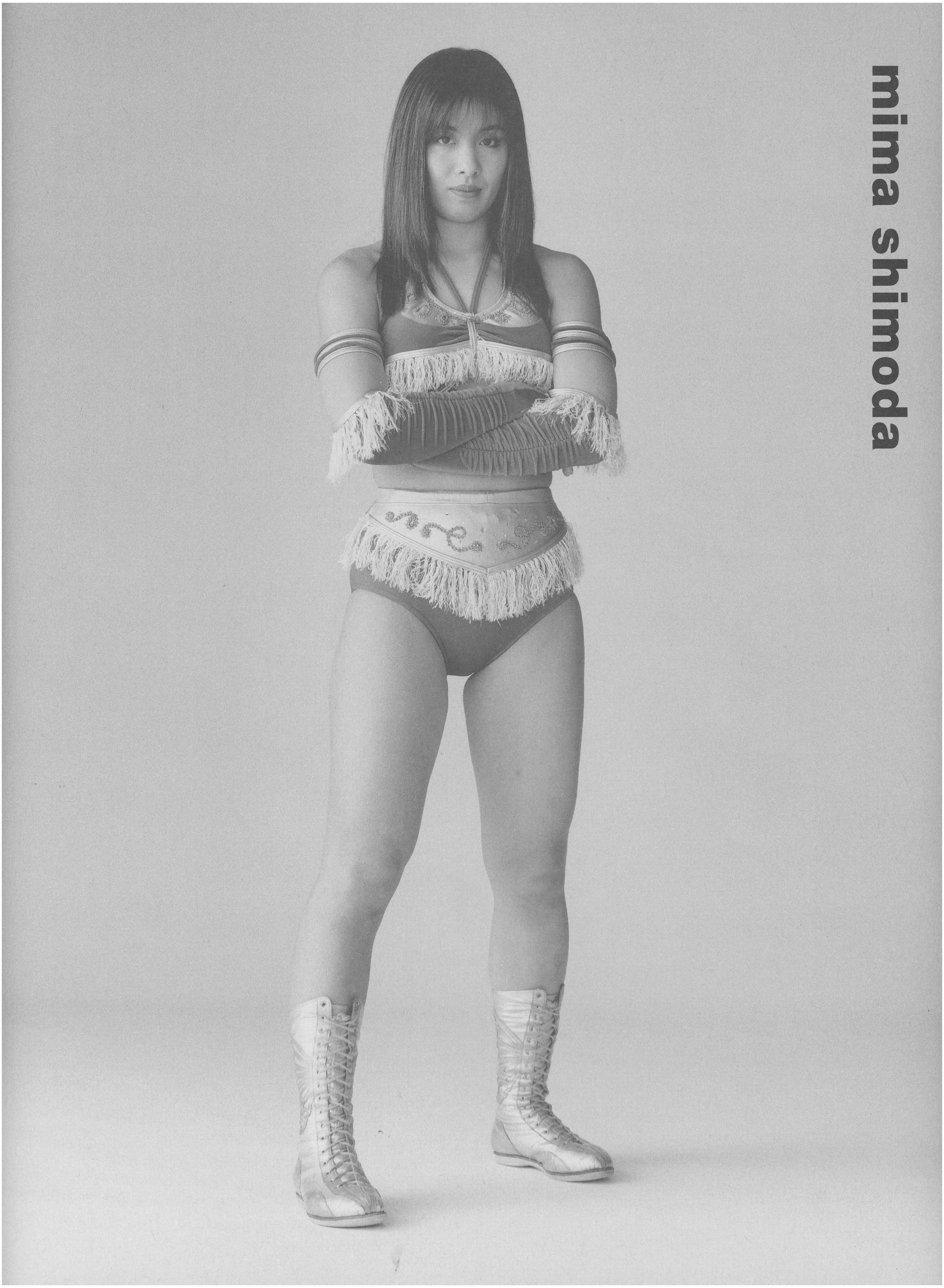
「やっぱり、豊田。豊田のことは気になるけど、山田（敏代）もね。山田はいま、オール・パシフィックのベルトを持ってるし、自分があのベルトに挑戦するとすれば山田が持っている間の方がいいですね。豊田に対する気持ちとはまた違うけれど、山田と闘っていっぱいブーイングを浴びたい（笑）！えっ、美馬？……考えたことないですねえ。私たちは二人で助け合ってきたチームなんで……そうか美馬もライバルなのかなあ。でもやっぱりそうは考えられないですね（笑）」

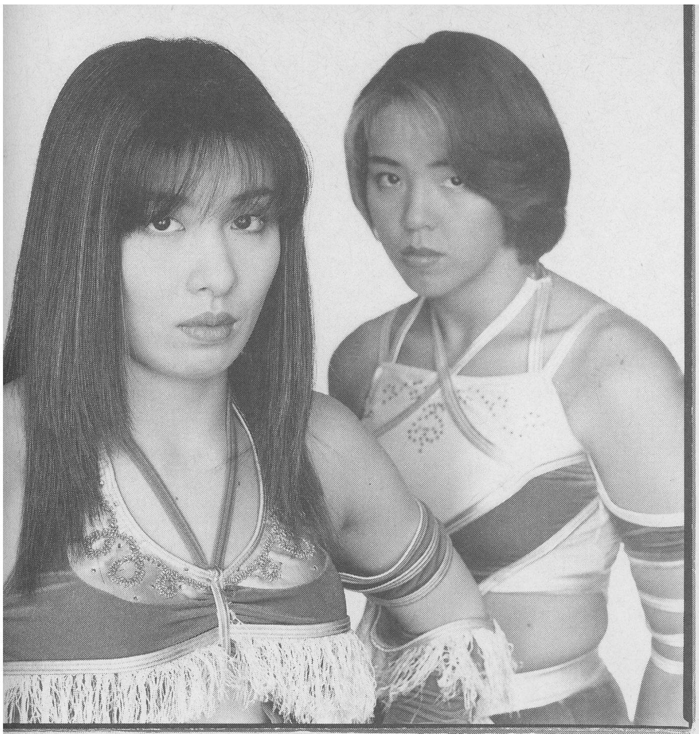
三田の口から、アジャ・コングやブル中野、あるいは復帰を決めた恩師の、北斗晶の名前は決して出てこない。そろそろ大物をあっと言わせるようなスケールの大きなプロレスを三田から見せてもらいたいものである。

全日本女子プロレスのマットにいっそうダイナミックなドラマを呼び込む鍵は、三田英津子が握っている。

ETSUKO MITA Profile
三田英津子【全日本女子プロレス】本名：同じ。S44年5月28日生まれ。東京都世田谷区出身。S62年8月にデビュー。173センチ、75キロ。


etsuko mita


mima shimoda



下田美馬。

〝チーム〟として……ちょっと悩んでます。やっぱり、二人はひとつじゃないんです。

猛武闘賊｜脱・共存共栄!?

最近の下田美馬は誰とでも喧嘩をする。試合の前後によく対戦相手につっかかっていく。豊田軍団はもとより、雷神隊、レジー・ベネットなど。彼女は勇猛果敢に敵意を表わし、向こう見ずな暴挙とマイク・アピールで楽しませてくれる。北斗晶が日本マットを離れている間、その手のいざこざでもファンをワクワクさせてきてくれたのは彼女である。

「会社の人にも〝お前はいつも文句ばっかり言ってるなあ〟って言われます（笑）。欲求不満なのかな（笑）。自分とかいろんないまの状況に対して。でも、逆にああいう風に試合のあとにもめたりできるのは、ある程度、試合じたいがうまくいったときかもしれないですね。調子に乗ってるときっていうか。よくわかんないですけど（笑）」

確かに試合が納得できるものでなければマイク・パフォーマンスどころではない。下田の喧嘩はなんだか楽しい。茶目っ気に溢れ、深刻な陰湿さがない。彼女の艶やかなムードとあいまって絵にもなる。

「すごい嫌な奴とか思われてるでしょうねえ（笑）。豊田軍団のことにしても、私ひとりが悪く言ってるみたいで。でも、対抗戦のころとは変わってきてるんですよ。いま考えるとあのころは子供だったなあって思いますね。汚い部分を見せすぎたというか、どうしてあんなこと言っちゃったのかなとか思うこともあるし」

下田にはあんまり大人になってほしくはないという気がするが、ラス・カチョーラス・オリエンタレスとしての試合ぶりも、最近は完璧な連係を見せ、ひとつの形を完成しつつある。

「ずっと欲しいって言ってるWWWAタッグを獲らなきゃいけないんですよね。でもいま、ちょっと悩んでますね。二人の定番の攻撃を見せていくことも限界かも。新しい連係を考えるよりも一人一人の力をつける時期だと思う。新しい連係を出せば会場は沸くかもしれないけど、それはちょっと違うと思う。二人はひとつってずっと自分たちで言ってきたけど、二人は二人だし、逆に3人にも4人にもなっていかなければいけないですよね」

いまや女子プロレス界を代表する正式なタッグチームである二人の〝いつもの〟が観られなくなるのは寂しいが。

「全然やらないとかじゃないです。定番の流れがうまくいくと気持ちがいいし、でも、なんかそれだけで浮かれちゃってる自分に気がついたんです」

総帥、北斗晶の去就とともに暖かく注目されてきた二人の上昇気流もここへきて落ち着きを見せている。女子プロレス界の名物のひとつになったことは間違いないが。

「〝名物〟かもしれないけど、大場所の試合ではそこそこの位置で自分たちの試合が組まれるっていうのが決まってきちゃってる。それでいつものものを見せてくれればいいって。それは悔しいことですよね。このままでは〝名物〟以上にはなれない。二人でひとつだって思われるようにしてきたのは自分たちだし、そう望んでたけどあんまりまわりにそう言われると、なんか頭にくるっていうか……（笑）」

昨年10月（本誌Vol.4）のインタビューでは三田と下田は二人で一緒にいることがひたすら楽しくてしょうがないと語っていたが、そのころとはだいぶ変わってきているようだ。それはプロレスラーとしての欲が出てきている証拠ではないだろうか。

「天狗になりやがってとか思われるかなあ（笑）。シングルのベルトにはやはりいままでもこだわりはないんですけどね。だってそれはWWWAタッグを獲れないうちは言っちゃいけないでしょう。自分の気持ちが済まないし。個人個人のレベルアップを心がけてタッグの力に繋げたいです」

シングルのベルトにはこだわらない。それでもやっぱりシングルで倒したいのは豊田真奈美、山田敏代である。

「あの二人には、ホントに一度も勝ったことないんですよー（笑）。私のやることはあの二人には全部お見通しなんでしょうね。豊田はWWWAシングルのチャンピオンだし、山田はオール・パシフィックのチャンピオン。でも私にとってはあくまで豊田は豊田なんですよ（笑）。山田は山田だし。ベルトとか関係ないですね。とにかく、豊田、山田、（井上）京子に勝ちたい。でも、やっぱり豊田かな。あっ、何を言ってるかわかんなくなってきた！（笑）ただ、私が豊田のことをこんなに言っても、彼女はアジャ・コングさんとか北斗晶さんとかのことしか見えてない。まず、豊田の視界に入らないと」

ひとつ上のクラスに下田が入っていくためにはどうすればいいか。それが下田の課題である。例えば、かつての山田・豊田ペアに比べて下田・三田ペアには少々緊張感に欠けるという意見もあるが。

「ああ、そう言われてみればそうかな。そうかもしれないですね」

厳しい言い方をすれば、そこが〝全女のエース〟の看板を背負ったチームと〝名物〟チームの違いかもしれない。二人がWWWAタッグのベルトを奪取する試合はもちろん早く観たいが、もっと楽しみなのは〝絶対に負けられない〟という状況下での防衛戦である。そのとき、下田と三田は何かとんでもない力を出すような予感がする。

「W井上は、向こうはライバルとは思ってないかもしれないけど、WWWAタッグの価値をまたあの二人が高めてくれたと思ってるから、自分としては絶対あのチャンピオン・チームに挑戦したいですね。山田・豊田と対戦するときはガチガチになってたけど、あの二人とは何にも縛られず自然体でできるっていうか……私がこんなこと言ったら失礼かもしれないけど（笑）」

下田はおもしろい。リング上ではメチャクチャ強気なマイクアピールをするくせに、こういうインタビューでは後輩のタッグ・チームにも遠慮がちにエクスキューズをつける。どこかにまだ〝私なんかがこんなこと言ってもいいのかしら〟という気の小ささが覗く。

「それと、いまはなんか星のめぐりが悪いかなと思う。なんかちょっとずつタイミングがずれてる。いろんなことの。でも、実力で運を呼びこまないと。難しいですけど」

下田美馬と言えば確かにいま、女子プロレス界に欠かせない魅力ある選手である。一見、好き勝手に暴れまわっているように見える。しかし彼女は彼女なりに自分のプロレスについてかなり深く考え込んでいるようだ。次の日の試合のことが気になって眠れないこともしばしばだと言う。

「いっそのこと、辞めちゃおうかなあって思うこともあるんですよ。明日どうしよう、これからどうしようって、こんなに悩むなら、別の人生もあるかなって。……でも、やっぱり好きだから辞められない（笑）」

辞めるなんてとんでもない。喜々として対戦相手をいたぶる下田の姿を楽しみに会場に足を運ぶファンはたくさんいるのだ。

「そうかなあ。〝次は下田の試合だからトイレに行こう〟とか思われてるかも（笑）。とにかく、もっと憎まれてブーイングを浴びられるようにならないといけないですね。いじめ方が足りないのかなあ（笑）。前回のインタビューのときに、〝私、もう誰にも媚びたくない〟って言ってたのに、知らないうちに媚びてましたね。どこかで〝応援してもらおう〟って……」

三田同様、下田もブーイングを浴びることを熱望している。彼女たちにとって、それはそんなに重要なことなのだろうか。

「だって、私たちラス・カチョーラス・オリエンタレスはルーダですから」

下田美馬の目がキラリと光った。

MIMA SHIMODA Profile
下田美馬【全日本女子プロレス】本名：同じ。S45年12月23日生まれ。東京都目黒区出身。S62年8月にデビュー。166センチ、60キロ。

欲張ってよ、
Kaoru

●ガイアの№.2として、また驚異的な完成度を誇る新人レスラーの良き指導者として位置するKAORU。だが、いちレスラーとして彼女を見た場合、ガツガツした欲望が見えないところに、僕たちは何とも言えぬ“じれったさ”を感じてしまう。いまはまだそれで良いのかもしれないけれど、僕たちが本当に観たいのは、団体の長・長与千種とシノギを削るKAORUの姿なのだ。だからこそ、欲張ってよKAORU、ギラギラした姿勢を見せておくれよ。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA
Text●SHINO HOJOH

欲張ってよ、Kaoru

一人の新人選手がバス停まで迎えに来てくれた。彼女は私を見つけると全速力で走って来た。私も思わず走り寄る。

「悪いね。練習中なのに」

「いいえ！」ハアハアと息を切らしながらも元気に答える。道場までの道を並んで歩く。5月の鮮烈な陽光が眩しい。

「毎日、楽しい？」と尋ねると、

「いいえ、辛いです」と言いながら素敵な笑顔を見せた。辛いことは辛い。当然だろう。ただ彼女にはその辛さの向こうにある輝く何かが、はっきりと見えているに違いない。そして、そんな風に新人たちを導いてきたのはもちろん長与千種である。しかし、長与という絶対的な存在に対して、優しいお姉さんとしてのKAORUの存在は重要だったのではないだろうか。

やがて、ハッとするほど綺麗なキャベツ畑の真ん中に、GAEA JAPANの立派な道場が見えた。

＊　＊　＊

4月15日、GAEA JAPAN旗揚げ。KAORUは真っ白なコスチュームで登場した。胸からお腹のあたりにかけてGAEA JAPANのロゴマークが大きくプリントされている。スクッとリングに立ったその姿には透明感ののある美しさがあった。

紅夜叉という個性あふれる対戦相手を迎え、スワンダイブ式の斬新な2連発で堂々たる勝利を飾ったが、彼女自身の満足度はそう高くないようだ。

「自分の試合じたいは……ちょっと納得いきませんね。70点ぐらいかな。ちょっと予想外の相手だったし……決して闘いたくない相手ではなかったけど。でも興行としては最高でしたよね。超満員だったし、もう1試合目からすごくテンションが高くて。新人たちには百点満点をあげたいです」

やはり自分のことより新人たちの試合が心配だったらしい。確かに新人選手が育ってくれないことにはGAEA JAPANは成り立たない。長与同様、その育成に心血を注いできたのだ。それはそれで素晴らしい。ただ、だからと言って彼女たちのお姉さんという立場だけに甘んじてほしくはない。

「やっぱり新人を育てるってことがいちばん頭にありますね。自分のことは二の次で。自分のことだけ考えられるならそうしたいけど……新人がいなければもちろんもっと楽な部分があるだろうし。でも難しいです。……結局、私ってまだまだ欲がないんだと思うんですよ」

新団体の発足に一から関われるということは、たいへんな苦労を背負い込むことと同時に胸ときめく作業だったにちがいない。しかし、プロレスラーKAORUの焦点は少々ぼやけてしまった感は否めない。KAORU自身のいまのテーマは何なのだろう。

「とにかく同期と闘いたいってことを目標にしています。みんながんばっているので早く追いつきたいです」

同期……全日本女子プロレスに一緒に入門した仲間たちである。いまや全女を、いや日本を代表する選手になったアジャ・コング、FMWのトップである工藤めぐみ、コンバット豊田、最近ではバイソン木村も復帰した。KAORUも含めてそれぞれが紆余曲折を経て現在に至っている。身を置く団体は違ってもこの61年組の絆は強い。

「もちろん、最終目的は長与千種選手を倒すことなんですけど、それまでにやらなきゃならないことがいっぱいあって、いまはまだ、それは声を大にしては言えません。シングルで試合をしたいっていう気持ちはありますけど、どんな試合になるのかは予想がつかないですね」

KAORUは長与をまるで雲の上の人のように感じているようだ。しかし、長与のブランクを考慮すれば2人のキャリアはそれほど変わらない。例えばKAORUのこだわる他団体の同期たちが長与と闘って勝ったとしても少しも不自然ではない。

「そうか、そう考えたら私も勝てるかもしれないんですね（笑）。考え直します」

そう言ってKAORUは何度も頷いた。なんとも素直である。このあたりの素直さ、言い替えればアクのなさがKAORUの課題であり、また魅力でもある。技もスタイルもルックスも美しい彼女には大人の男性ファンが多い。

「ええっ、あんまり実感ないです。人気はない方じゃないですか。お手紙とかはいただきますけど。ファンの方と話しをする機会もないですしね」

KAORUにはハニーウイングス時代からの隠れファンも多い。高橋美華（引退）とのこのコンビは、小気味の良い動きで当時の全女マットに爽やかな風を運んだものだ。もちろん、あのころよりもずっとKAORUは成長している。ただ、いまの彼女の試合ぶりは落ち着きすぎている感があり、本来の躍動感には少々欠ける。

「何となくやってるように見えるとか、よく言われますね。勝ちたい気持ちが見えないとか。……もちろん勝ちたいんですけどねえ（笑）。表情が出にくいんです」

スタイルが良すぎて身体の線が細いのも、闘志を感じさせない要因の一つかも。

「いま、60キロなんです。メキシコに行ったころは75キロあったんですよ（笑）。それでも動きにくいということはなかったんで、あと10キロは太りたいですね」

KAORUがレスラーとしていまの位置よりも上のランクに食い込んでいくためには体重の増加は急務であろう。どんなに美しいフォームでムーンサルトを決めても、相手に与えられるダメージには限りがある。もっとも、若い女性としては、現在のプロポーションは最高なのだが。

「アハハ。でも、女性である前にプロレスラーですから、やっぱり太りたいです」

KAORUはよく笑う。イメージよりも、ずっと彼女は明るくて鷹揚であり、リングの上とは打って変わってその表情は雄弁である。リング上でももっと個性を出すために秘策を練っているようだ。

「木刀とかなんか持って出てみようかなとか（笑）思いますよ。もっとラフなファイトとかしてみたいし、でもあれもこれもになっちゃうし……自分のレスリングスタイルをなんとか確立しないと上には行けないですよね。ルチャはやっぱり好きなんでそれは捨てられないけど、それだけじゃなくてもっとガンガンやりたいんですけど……」

話しながらだんだん声が小さくなっていった。自分のレスリングスタイルに対し、まだ迷いがあるのだろう。

「そう、まだ迷いがありますね。だから、何か一つ、威力のあるオリジナルの必殺技が欲しいですね。旗揚げ戦で出したトップロープからのセントーンもアレじゃだめなんです。道場で練習してたときはもっとうまくいったのに。あと、ロープを使わないでその場でできる必殺技が欲しいんですよね。ロープを使った技は出すタイミングが難しい。相手が動いちゃうし」

得意の飛び技に加えて、有効な力技を模索しているようである。レスラーと技との出会い……浮上の鍵はそこにある。そしてもう一つ、気になるのはKAORUがあまりにも"謙虚"なことである。他団体の選手との抗争にしても、彼女のプロレスのレベルを考えればもっと強気に仕掛けていってもよさそうなものだが。

「そうか（笑）。じゃ、もっと堂々としていいんですね。このあたりでいつまでも止まっていてはいけないんですよね」

GAEA JAPANという小さな新興団体のナンバー2である立場の人間が他団体のどのあたりの選手と抗争するのが適当なのか。そんな気の使い方が見え隠れする。

「長与さんにも何でも言うようにしてるし、でもまだ足りないのかなあ（笑）。ちょっとそういうところ……ないとは言えないかも。自分で自分を格下に置くようなことはいけないですね。ハイ。気をつけます」

KAORUはやっぱりこの素直さがいい。そんな彼女の性格を自己分析してもらった。

「芯は強いと思うんですよ。奥の、奥の芯は（笑）。頑固だし。でも、なるべく問題は起こさないように通るタイプだと思う」

KAORUは全女、ユニバーサル、メキシコ、そして、再びフリーとして全女へとプロレス界を一人で彷徨ってきた。それでもプロレスを続けてきた。芯が強くなければできないことである。

「やっぱり、フリーで全女へ戻ったときとか、なんか居候みたいでちょっと辛かったですね。"出戻り"ですからね」

KAORUはいま、GAEA JAPANにやっと自分のいるべき場所、座るべき椅子を見つけた。それは彼女にとってどんなに嬉しいことだろう。だが、それを確保したということだけにホッとしてしまってはいないだろうか。

「ああ、それはあるかもしれないなあ。確かに。でも、これで満足してちゃいけないんですよね。ここが始まりですから」

旗揚げ戦の翌日、アジャから電話が入ったと言う。

「"新人が良かったらしいね。やられたなって思った。うちももっとがんばって新人を育ててるからね"って言ってくれました。嬉しかったですね」

プロレスを、そして生きざまを競い合える仲間がいる。さらなる飛躍の日は近い。

「ガイアのマークはコスチュームにずっと入れていこうと思ってるんですよ」

少し誇らしげにそう言った。

KAORU Profile

KAORU【GAEA JAPAN】本名：前田薫。S44年2月9日生まれ。長崎県佐世保市出身。S61年8月にデビュー。165センチ、60キロ。

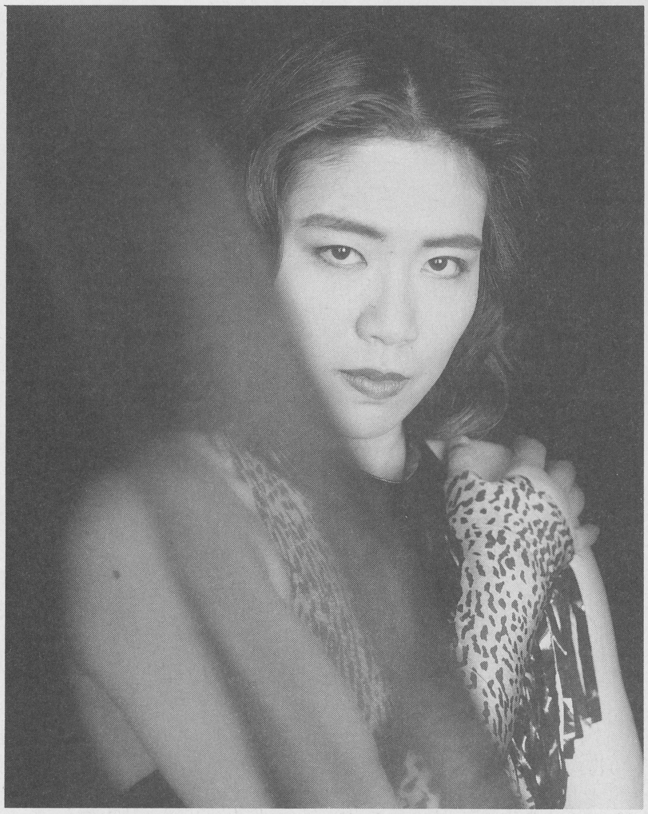
やっぱり新人を育てることがいちばん頭にあるんです。もちろん長与選手を倒すのが最終目的ですけど、それまでにやらなきゃいけないことがいっぱいあって。それはまだ声を大にして言えません。自分のことだけ考えられるのならそうしたいけど……結局、私ってまだまだ欲がないと思うんです。

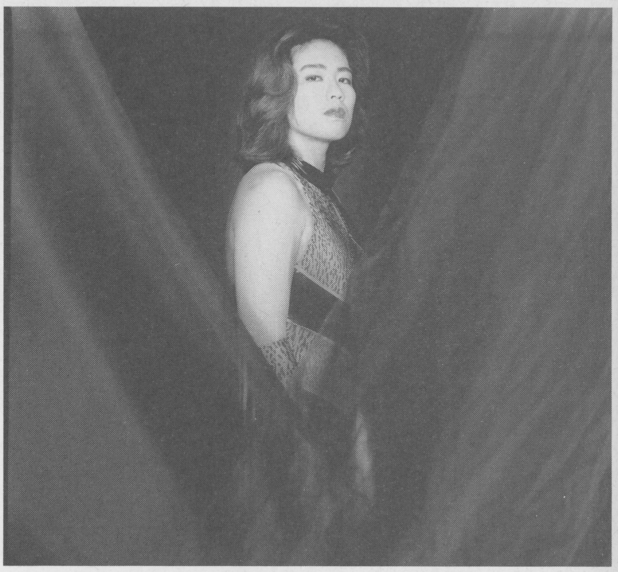
復帰してはみたけれど。

バイソン木村。

●バイソン木村が約3年ぶりにリング復帰してから、すでに100日が経とうとしている。しかし、未だ彼女は現役レスラーになりきれていない。3年という空白期間を埋めること。これが、いまの彼女に課せられた義務である。〝GO！ GO！バイソン〟の声援が再び飛び交う日は……そんなに遠くはない。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA
Text●SHINO HOJOH
Hair&Make-up●KOHJI SHIMAZAKI





バイソン木村。
復帰してはみたけれど。

〝インタビューで聞かれても話せるようなことなんかあるのかなあ〟

バイソン木村は苦笑いをしながらそう言った。復帰から数か月。あらゆる意味で苦闘の日々が続く。そんな中、5月7日の後楽園ホールでは早くもアジャ・コングとの初遭遇が実現した。

「見てる人もよくわかったと思うけど、全く相手にしてもらえなかったし、相手にしてもらえるようにも自分でできなかった。アジャは私に試練を与えてくれたんだと思います。でもそうじゃなきゃ嘘だと思うし、当然ですね」

アジャと組み合おうとするバイソンを軽くいなして、アジャはバイソンのパートナーであるライオネス飛鳥をリングに呼び込む……そんな場面が試合中幾度も見られた。しかしそんなアジャのつれない態度に〝アジャはひどい奴だ〟と思った観客は一人もいなかったはずだ。アジャは心を鬼にしている。それは誰の目にも明らかだった。

「思ったより早くアジャとあたるチャンスが来て心の準備ができてなかったです。とにかくいまの自分を全部ぶつけていくしかなかったんだけど、ぶつけるところまでもいかなかった。裏拳もアジャは力をセーブしてたし、それがわかってたのにその一発でフォールを取られて……情けないのひとことです。でもね、なんか逆に言えば、この復帰した私と初めて真剣に闘ってくれたのがアジャだったのかもしれないとも思うんですよ。それまでにあたった選手たちは様子を見ていたというか、たぶんこんなものだろうと見くびられていたというか、無難な試合に終わっていたと思います」

2年以上のブランクがあるのだ。そういう選手と真剣にぶつかるとき、むしろアジャの闘い方は当然なのかもしれない。少なくとも〝バイソン木村〟と闘うということを十分に意識した試合だったことは間違いない。赤いベルトを失ったアジャも巻き返しに必死である。バイソンががんばることでアジャもまたがんばれるのだ。

「〝優しさ〟って言ったらアジャも嬉しくないと思います。そういうんじゃないけど、とにかく現役に復帰したんだなあっていうことを改めて実感させてくれました」

バイソンはいま全日本女子プロレスのリングに月1、2回上がっている。試合数が少ない現在の状況は、彼女にとってあらゆる意味で厳しいものになっている。

「試合数が少ないから、試合カンが戻らない。とにかく試合中に次に何をしようっていうのが出てこない。でも試合に出してもらっても内容がともなわないから、そんなには使ってもらえない。全女には全女のいまの流れがあるわけだし。……でも、もしかしたら全部そのせいにして言いわけにしてるのかもしれないですね。試合の数をこなせばいいってものでもないでしょうね」

ライオネス飛鳥、ジャガー横田、バイソン木村の復帰は確かに女子プロレス・ファンにとって楽しい話題だった。しかし、混沌としながらも、レベルの高いレスラーたちが過激な出世争いを繰り広げている全日本女子プロレスにおいて存在感を出すのは並大抵のことではない。

「このまんま終わっちゃったら自然消滅。せっかくもらったチャンスも活かしきれていない状況で……なんとかしないと」

そう言って天を仰いだ。当初は新団体を結成する予定だった話も、現在は宙に浮いている。飛鳥には芸能の仕事もあり、ジャガーは全日本女子プロレスのコーチという職があるが、バイソンは現在、アルバイトをしながら練習に通いひたすら試合の日を待っている。

「正直言って、プロレス一本に絞りたいのはやまやまだけど、それじゃあ生活していけないですから。ただ、そういう状況をまわりに委ねてしまっている自分がいけないんだと思います。いろいろ葛藤があって、逃げ出したくなるときもありますね」

フリーという立場でプロレスラーを続けていくことはかくも厳しいものなのである。レスラーとしての闘いの前に、生きていくこととの闘いがある。ひとたびリングに立てばたくさんの声援を浴びるスター選手が次の日にはアルバイトに出かけなければならない。

「……やっぱり、そのあたりのことが問題なんだと思います。最近はアルバイトで疲れて、つい練習を休んじゃうこともあるし。練習は本当は私も好きじゃないんですけど(笑)、力を継続できないのは自分でイヤですから、できる限りしたいんですよ。いまのプロレスとのギャップってわかってるつもりだったけど、試合をするたびに肌で感じてますからいまは練習するしかないのに。でも、こうしてあれこれ悩めるのも幸せなのかもしれない。好きなプロレスのことで悩む……そうなりたかったんです」

生活の基盤がないフリーという立場は確かに不安だ。しかし、たったひとつ良いことがある。それは文字通り〝自由〟であるということだ。例えばGAEA JAPANにはKAORU、FMWには工藤めぐみ、コンバット豊田という同期がいる。この際、全日本女子プロレス以外のリングにも闘いの場を広げて、自分のプロレスを探して行脚するのもいいのではないだろうか。

「同期はもちろん、私は団体対抗戦とはすれちがっているので、ほかの団体の選手は闘ったことがないから魅力はあるけど、いま、ほかの団体へ上がることは逃げるみたいで抵抗があるんですよね。でも確かに与えられたものをこなしていくだけでなく、自分で動いていかなくてはダメですね」

いまのバイソンに必要なのはフリーという言葉を逆手に取り、マイナスをプラスにすることだ。さまざまなしがらみはあるのだろうが、なんとか団体行脚を実現してほしいと思う。

「いまはまだ昔の〝バイソン木村〟を自分で追いかけてる。自分で自分をコピーしてるみたいな(笑)。でもあのころには追いつかないんですよ。昔の自分にこだわらないように、水着も変えて、新人として出直す方がいいと思うときもあるけど、そうしたらまた一からキャラクターも考えなきゃならないし……。ああ、もう考えすぎるこの性格がいけないのかもしれない(笑)」

すでに過去に一度〝バイソン木村〟は頂点に近い位置まで上ったレスラーである。赤いベルトまでは手が届かなかったもののオール・パシフィックの白いベルトは巻いている。人気という面では頂点に立ったと言っても過言ではない。ましてそれがそれほど昔のことではない分、〝バイソン木村〟という名前との闘いは思ったより熾烈だ。

「よく考えれば、現役の選手と対等に闘えたらその方がおかしいんですよね。実力が伴わないのに前のバイソン木村の名前でそれなりの地位を与えられたとしてもそれは意味がないですしね。いまの私の精一杯でやっていくしかないと思います。一からやるか、それとも昔の自分を目指してそれに近づくようにするか、問題はそこですね」

苦しみながら現状を冷静に分析するバイソン。肝心のプロレス面について語る。

「私は不器用で気持ちでぶつかるタイプのプロレスラーだって言われてきたけど、復帰するときに気力プラス技術の選手になりたいって思ったんです。でもいまは気力の方もついていけないなって感じです。体力面では持久力がないです。ある程度のダメージには身体があるんで(笑)、対応できるんですけどね。会心のチョップもまだ出せていません」

問題は山積みである。しかし、悩んで悩んで出した結論が〝プロレスがやりたい〟だったはずである。暖かい声援で迎えたファンのことを考えたら、弱気な発言ばかりはしていられない。

「逃げられないですね」

きっぱりと顔を上げてそう言った。

「アジャとの試合のあと、本当の気持ちはつい〝3年なんてすぐ埋めてやる〟って言っちゃいました。そう宣言することで引くに引けないところへ自分を追いやってしまったっていう感じですね。それとやっぱりすごく悔しかったんですよね」

〝悔しかった〟と言ったバイソンはプロレスラーの顔をしていた。その表情に〝バイソンの目だけは死んでなかった〟というアジャの言葉が重なる。

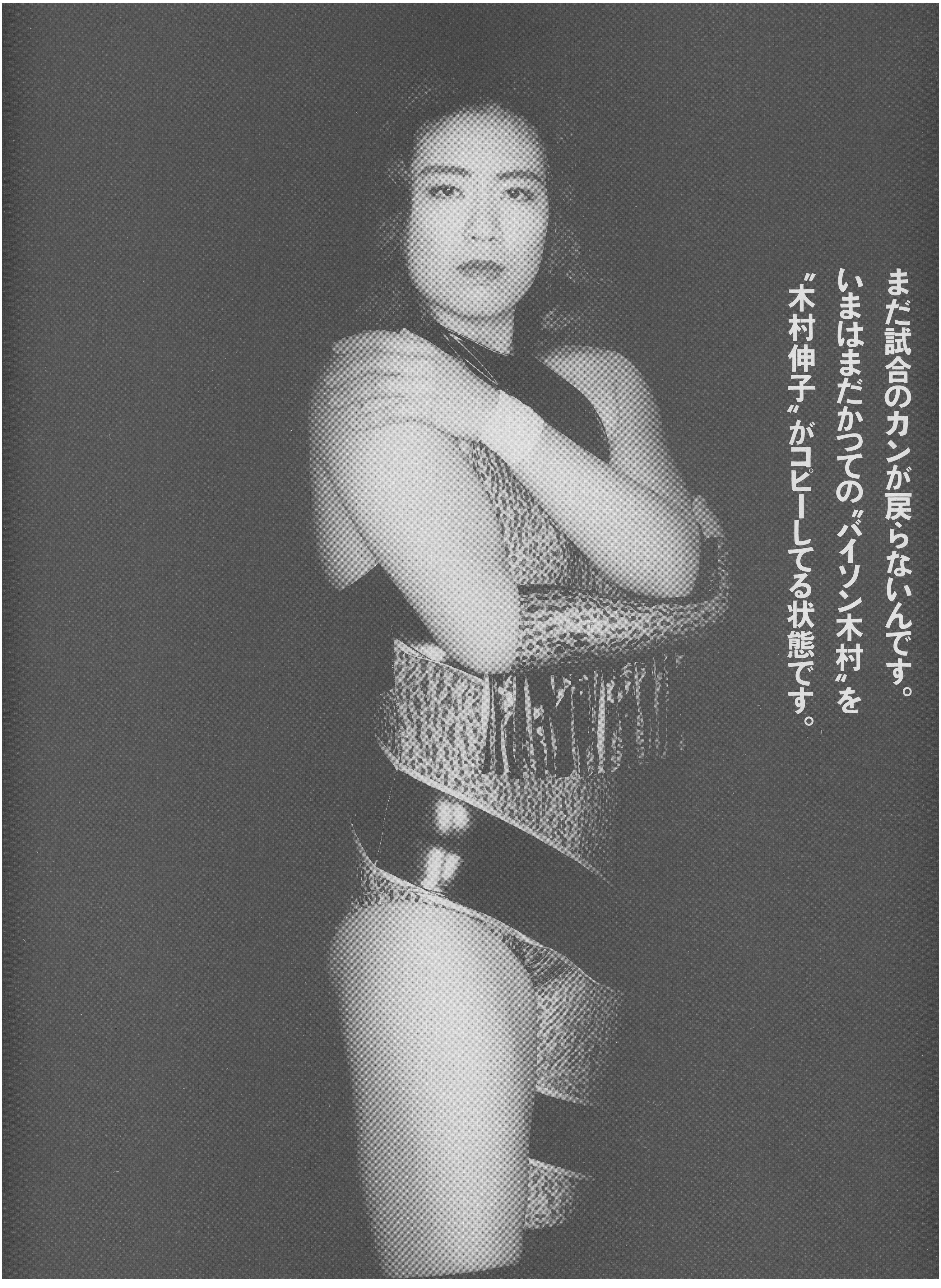
「私は〝アジャといい試合ができるようなプロレスラーになる〟と言う目標があります。いますぐにシングルで対戦するチャンスを与えられたとしても、いまの私でははっきり言って無理です。お客さんに納得してもらえる試合はできません。でも、必ず胸を張ってその日を迎えられるようにします。そうでなければここへ戻ってきた意味はないですから」

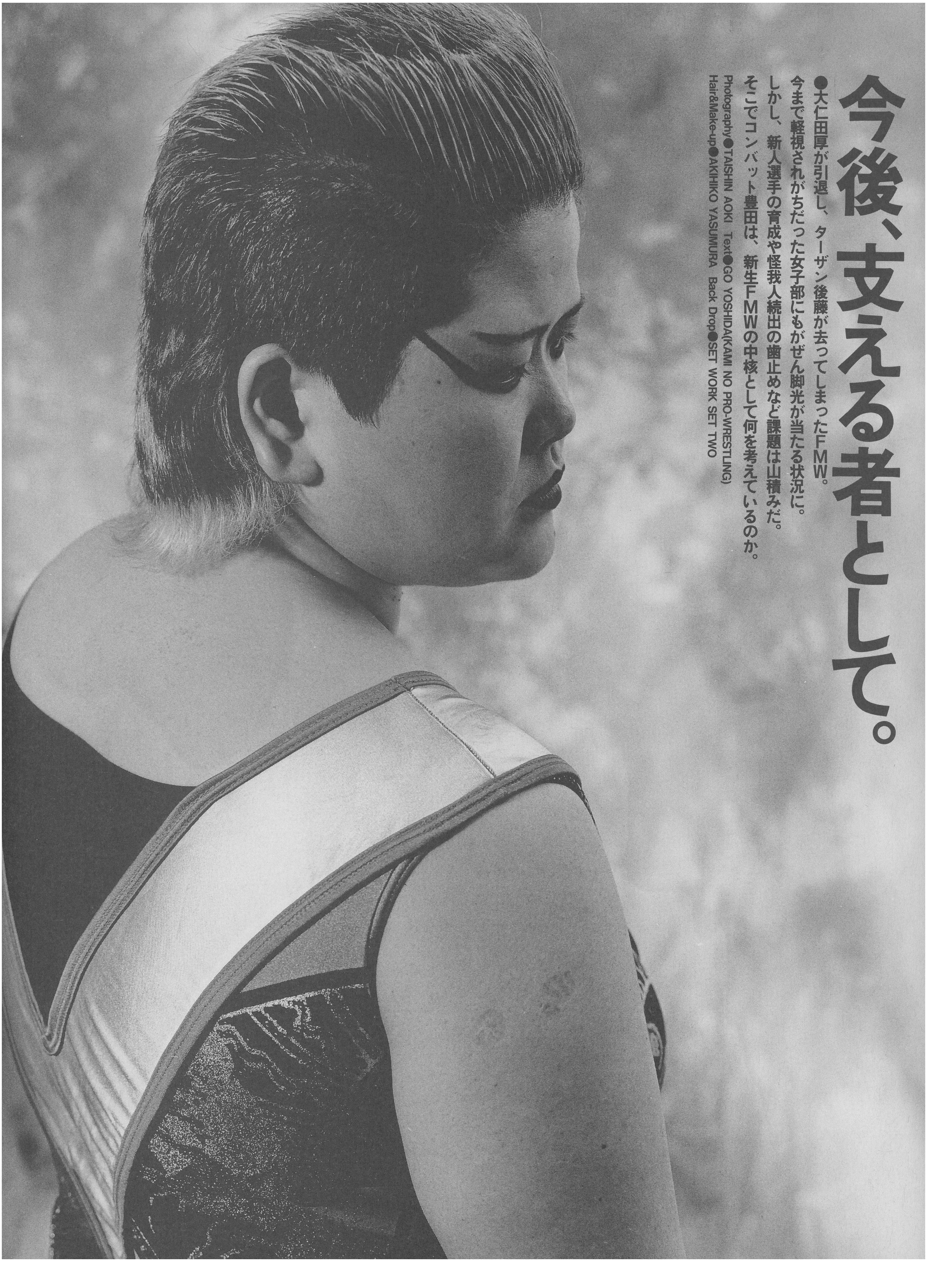
真っ白な紙に新しい絵を描き始めるようなわけにはいかない。もう途中まで描いてしまった紙しかないのだ。そして前に描いたものはもう消せない。でもきっとその紙にこそ、夢の続きが描けるはずだ。

バイソン木村様。もしあなたが、あなたよりずっと後輩の選手に負けるようなことがあったとしても、それは少しもあなたの魅力を損なうものではないです。それがその時々のあなたのすべてでぶつかってくれた結果であるなら。あなたの勇気と頑固さと切なさ。全部さらけだしてください。いま、私たちが望むことはたったひとつ。

〝ありのままのバイソン木村が見たい〟

BISON KIMURA Profile
バイソン木村【電神隊】本名：木村伸子。S42年3月9日生まれ。東京都目黒区出身。S61年9月にデビュー。170センチ、70キロ。

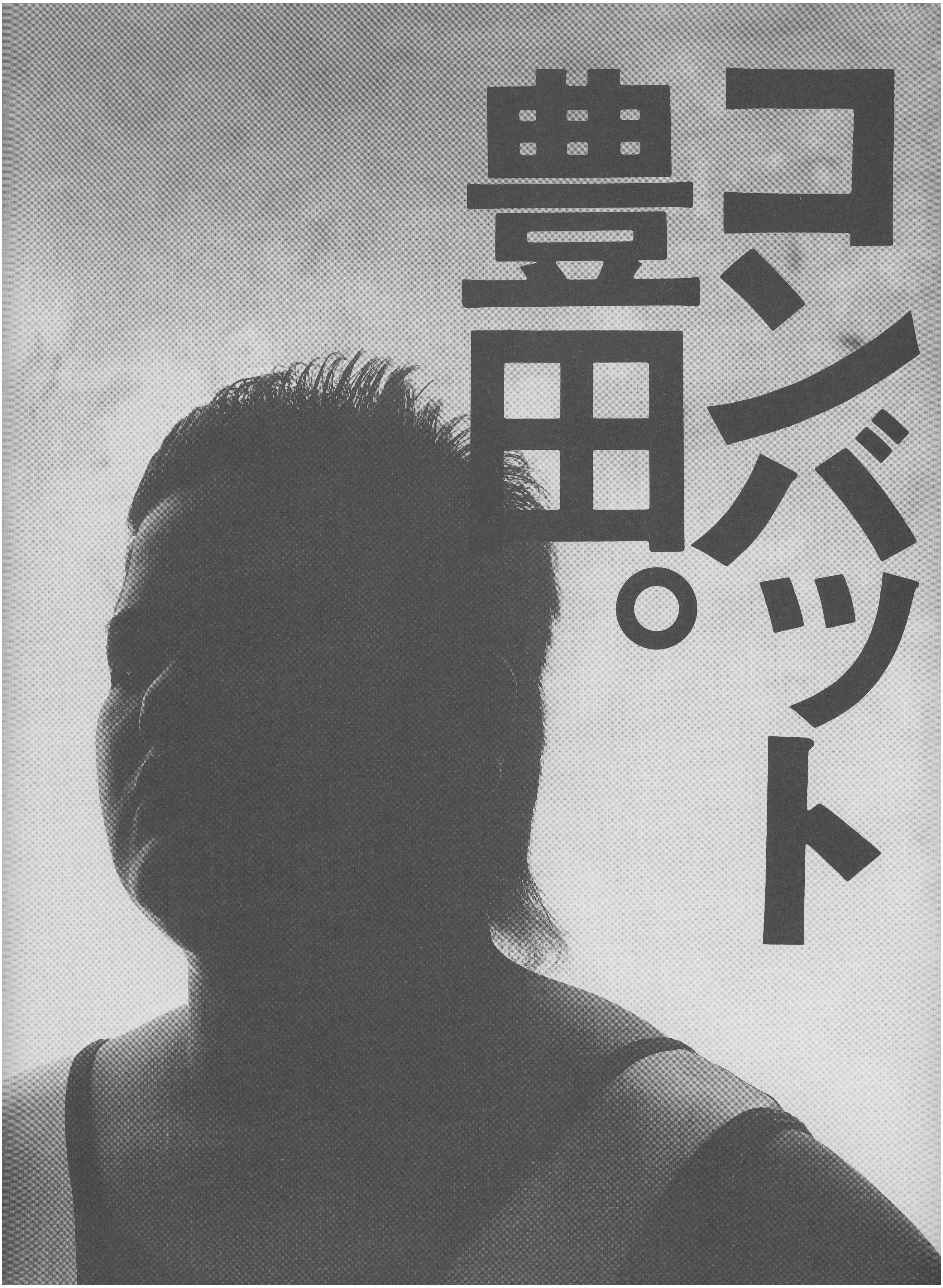

まだ試合のカンが戻らないんです。
いまはまだかつての〝バイソン木村〟を
〝木村伸子〟がコピーしてる状態です。

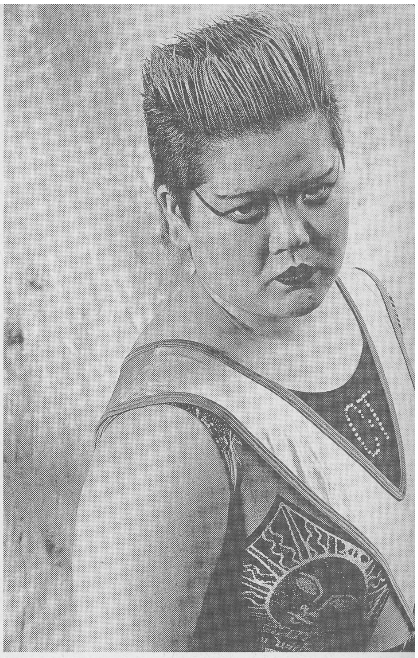


今後、支える者として。

●大仁田厚が引退し、ターザン後藤が去ってしまったFMW。
今まで軽視されがちだった女子部にもがぜん脚光が当たる状況に。
しかし、新人選手の育成や怪我人続出の歯止めなど課題は山積みだ。
そこでコンバット豊田は、新生FMWの中核として何を考えているのか。

Photography●TAISHIN AOKI Text●GO YOSHIDA(KAMI NO PRO-WRESTLING)
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA Back Drop●SET WORK SET TWO


コンバット豊田。



ウチは飛んだり跳ねたりできない。だからこそ、女子も大仁田さんの意志を引き継いでいかなければ。

―豊田さんはボクが取材した中で、最も性格の良い女子プロレスラーなんですよね。

豊田　それじゃ駄目なんですけどね（笑）。でも最近は意地張らないで、自然体でもいいかなって思ってるんですよ。甘いのかもしれないけど、プロレスでも人を思いやるというか、プロレスを思いやるというか、自分はそれが出すぎるかもしれないし。

―でもプロレス界っていうのは正直な話、人を裏切っても何をしても、最終的にファンの支持を得られれば勝ちなんじゃないですか。

豊田　世の中恐ろしいもんで（笑）。でも、自分もチャンスがあれば誰かを押しのけてって思うところもありますから。結局のところ、この世界は出た者勝ちなんですから。

―そこで、コンバットさんは出ることができるのかということになるわけですが。

豊田　自分じゃなくて、団体の問題なんですよ。大仁田さんがいなくなって、いまは自分たちだけって感じじゃないですか。自分たちがFMWに入った当時って自由だったんですよ。何でもありの団体だったから、ほんとに好き放題やってた部分があって。それが選手会っていうものができて……。

―気がついたらスタイルができていたと。

豊田　ええ。上から押さえつけられて、がんじがらめになってた部分も確かにあるんですよね。だから初心に戻って、押さえつけられていたものを良い方向に発散できれば。でも道理に外れたことはしませんけどね。みんなが「自分たちでFMWを作っていくんだ」っていう責任感を持ってやっていかないと、絶対ダメですよ。いまは他団体でもお客さんが離れていってるじゃないですか。ただ目立つとか、凄いことをただやればいいというわけじゃないんですよ。やっぱり内容もあるし、お客さんの胸を撃つものをやらなきゃいけないし。でも、人の心を撃つって難しいんですよね。自分が一生懸命やれば伝わるって思ってる部分もあるんですけど、世の中そんなに甘くないですから（笑）。みなさんシビアですからね。どういうことすればみんながビックリして、また観に行こうって思ってくれるのか……。それにウチは女子だけの団体じゃないから、女子が目立つのは難しいんですよ。

―でもこれからは男子より目立つ、と。

豊田　これからはズバリ言って上がいないわけですから、男子を喰うことを狙っていきますよ。男子と女子も、お互い刺激しあってやればいいと思うんですよね。もう二度と同じ過ちを繰り返さないように（笑）。

―つまり、この騒動は好きなことやるチャンスでもあるわけですよね。

豊田　でも、なかなかねえ（苦笑）……。もうちょっと傲慢になるというか、自分の思いを遠慮せずにやろうとは思いますけど。

―コンバットさん的には、ハヤブサさんのエース体制に不満とかはないですか。

豊田　それはありません（笑）。まだ男子が上だと思ってた部分が心の中に残ってるから、そう思うのかもしれないですね。でも、これからどうなるかはわかりませんよ。男子ができなかったら女子がやるしかないと思うんでしょうしね。男子と女子が間接的に闘っていけば、いつかメインを取る可能性はありますから。取りますよ、絶対に。

―まあ、最近はFMW女子も活性化されたせいか、すっかり無秩序な、何が起きるかわからない状態になってますよね。

豊田　ねえ。土屋と前泊も、あんなにブーイングされて、自分もあそこまではブーイング浴びたことはないですからね。これは厭味じゃなく（笑）。でも、どんなに悪いことをしても思いは一緒だと思うんですよ。ただ、その表し方が自分たちとは違うだけで。

―上の人間がしっかりしてれば、下の人間は好き勝手できるわけですからね。

豊田　でも、自分たちがもっとしっかりしてればっていう部分も、あるんですよねえ（苦笑）。そしたらあの子たちにそこまでやらせなくてもって……。（急に）こういう甘いことを言ってるからダメなんですよ。

―はあ（笑）。個人的には、とりあえず有刺鉄線とか電流爆破を女子がやるとおもしろいんじゃないかと思ってるんですが。

豊田　あ、それは工藤も自分も大仁田さんに言われたことなんですけど、大仁田のやってきた心のプロレスというか邪道のプロレスを女子が受け継ぎたいと思ってるんですよ。やっぱりほかとは違ったことをやっていかなきゃと思いますから。

―つまり、女子もデスマッチに突入と？

豊田　まだわかりませんけど、それが流れになると思います。そうすると「女子がそこまでやることない」と言われると思うんですよ。大仁田さんでも言われたんですから、ましてや女子だから一般社会から絶対にいろいろ言われると思うんですね。でも、そこで諦めたらダメなんです。批判もあるだろうけど、関心もあるんだろうし。

―じゃあ、今後のFMW女子はひとまず安泰というわけなんですかね。

豊田　でも、いちばんの問題は人がいないんですよ（笑）。信じられないぐらい少ないから、昔の同期とか呼び寄せようかと思うぐらいで。誰も呼びませんけどね（笑）。

―しかも怪我人まで続出してますからね。

豊田　けっこう加害者って場合が多いんで、あまり大きいことは言えないんですけど（笑）。でもそれなりに責任感を持つと、怪我とかしないと思うんですけどねえ。勝手に怪我させといて、そんなこと言うなって言われるかもしれませんけど（笑）。だって試合が組まれたら、足がはずれたってやらなきゃいけないんですよ。まあ、要は怪我しちゃいけないってことなんですけど。

―あなたが怪我させるんですって（笑）。

豊田　でもプロレスってどんなにいがみ合って「殺してやる」とか言ってても、実際に殺したら相手がいなくなるから、嫌になっちゃいますよ（笑）。（急に）でも相手も「潰してやる」って言ってきますから、こっちも甘いこと言ってられませんよ。怪我させるの怖いから手を抜くとかできませんから。だけどズバリ言って練習も後藤さんが教えてきたから、いまのいちばん下の選手は、受け身とか全部男子型なんですよ。自分たちもFMWに入った当時は男子型に変えようかと思ったんですけど、やっぱり急に変えると怪我しちゃうんですよね。

―あっ、後藤さんがいなくなったから、もう練習を見たりとかしてるわけですか？

豊田　ええ。FMWは小さい選手ばかりだからスピードは必要だと思うんですよ。でもみんなトロいんです。これは練習で身につくものだと思うんですけど……、。いままでは基礎体力っていうか、会場に入っても腕立て伏せとかばっかりだったんですよ。だから、それは変えていかなきゃいけないんです。それだと自分みたいな大きい選手との試合も成り立たないですし。無理してやるとすぐ怪我しちゃうんですよ（苦笑）。

―はあ、難しいもんですねえ（苦笑）。

豊田　いままで後藤さんが教えてきたのは何だったんだって言ったらアレだし、すごく大切に育ててくれてたんですけど、いちばん下の選手は入門して1年以上経ったのに受け身をまだ知らないんですよ（苦笑）。もう唖然としたんですけどね。

―ああ、練習はいままでは後藤さんに任せっきりだったわけですからね。

豊田　まあ、任せっきりにしてたのも悪いのかもしれないんですけど、自分たちは口を出せないっていうのもあるんですよ。

―はあ、ボクはこれまで、後藤さんは練習の鬼だと聞いてたんですけどね。

豊田　それは基礎体力だけなんです。だからそれで腰痛めたり、膝怪我しちゃったりで、デビューする前にボロボロですよ……。でも、後藤さんがやってきたことをまったく否定するわけじゃないんですよ。体ができてないのに受け身とかやらせても体に響いてきますしね。でも、そればかりやってたって仕方ないじゃないですか（笑）。

―前からそんな部分も教えたかったけど、できずにいたってわけですね。

豊田　できませんでしたね。逃げてたのかなあ。やっぱ逃げちゃいけないですよね。逃げるってことは良くないです。だから自分の信念というのをみんなに持って欲しいし、自分も持ちたいと思うんですよ。

―で、豊田さんの信念とは？

豊田　FMWを絶対に潰したくないんですよ。上がいなくなった途端にダメになったなんで絶対に言われたくないんですよ。

―そのためには何を？

豊田　女子が大仁田さんの意思を引き継ぎます。でも、「有刺鉄線をやりたくなることはありませんか？」とかよく聞かれるんですけど、やりたくはないですよ（苦笑）。セコンドで、ちょっと足に触れただけで凄い痛いんですから、あんなの誰がやりたいと思いますか。こういうものでしか表せないっていうのはアレかもしれないですけど、ズバリ言って全女とかみたいに華麗に飛んだり跳ねたりとかは、ウチにはできないんですよ。現時点ではね。「だからそんなの逃げるんじゃないか」って言われちゃえばそこまでなんですけど、でも「逃げる」って言葉は使いたくないんですよね。だからカッコよく言えば〝大仁田さんの意思を引き継ぐ〟ってことになるんですけど。

―それでゴタゴタは乗り切れますかね。

豊田　乗り切らないと、先は見えませんから。みんなもやってくれると思うけど、自分も自信持たないと。自分らが不安がってたら、下はもっと不安になるし。だけど、みんな変わると思いますよ、わかってるはずだから。わかんなかったら馬鹿ですよ。

COMBAT TOYODA Profile
コンバット豊田【FMW】本名：豊田記代。S42年10月26日生まれ。和歌山県和歌山市出身。S61年9月にデビュー。168センチ、100キロ。

コンバット豊田。
今後、支える者として。

みなみ鈴香、レスラー訣別。

●平成7年5月7日。みなみ鈴香引退。――10年間にわたり彼女を応援しつづけたファンのみなさまと、〝鈴木美香〟さまにこのページを捧げます。

昭和60年同期組、
みなみ鈴香を想う。

堀田祐美子

Yumiko Hotta

5月7日は“美香（みなみ）ちゃんが引退した”という実感が全然わかなかった。巡業に出てからも“美香ちゃんは休んでるんだろう？”どっか行ってるんでしょ？”“絶対に帰ってくるよね？”って感じだったし。でも、やっぱりバスの席がひとつ空いてるし、会場の控室の中もひとり少ないんだよね。なんだか、辛いよね。やっぱし、同期だったから……。

チコ（長与千種）さんの付き人を一緒にやってたころが、一番の思い出かな。あのころ美香ちゃんにはいろいろと相談に乗ってもらったり、仕事を全部やってもらったりお世話になったけどね。美香ちゃんは私と違って、どんなに辛いことがあっても決して表面に出さない人だったから、けっこう頼っちゃったりしたけど（笑）。……ありがとう。

最後に美香ちゃんにメッセージ！　仕事をしようなんて考えないで、お見合いでもして結婚しなさい。絶対いい奥さんになれるんだから……ね！

北斗晶

Akira Hokuto

海狼組（マリンウルフ）を結成する前に行ったタイ遠征がみなみとの一番の思い出だね。堀田と西脇のファイヤージェッツが売り出しにかかったところで、何だか二人だけ取り残されたみたいで、“辞めちゃおうか”“いや、チャンスがくるよ”って語ってたんだよね。

アタシがわがまま言ったり、突拍子もないことをしようとするとき、“私もやろー”って付いてくるのが堀田、“宇野ちゃん、そんなこと言わないで”って止めてくれるのがみなみだった。だから、みなみはお母さんのようにいつも陰でアタシのことを見守ってくれた。悪いところを正直に“ワルイ！”って言ってくれる人間なんてこの世に一人か二人ぐらいしかいないんだから……。

ファンのみんなも脳裏には焼きついたと思うけど、どうかみなみ鈴香のことは忘れないでほしい。……少なくもアタシはみなみのことは絶対に忘れない。絶対にね……。

Photography●TAISHIN AOKI
Text●SHINO HOJOH
Hair&Make-up●KOHJI SHIMAZAKI

一番いいときに辞めさせてもらったんじゃないかな。北斗がいて、堀田がいて、先輩も後輩もいて……。豊田軍団、W井上、ラス・カチョーラス……みんな立派に成長しました。自分は幸せですね。

平成7年5月7日、後楽園ホールにおいて、プロレスラーみなみ鈴香は〝完結〟した。長与千種に憧れてプロレス界に足を踏み入れた少女、鈴木美香は10年の歳月をかけてそのレスラー人生をまっとうしたのだ。

その間、彼女が華やかな脚光を浴びることはなかったが、その確かなテクニックとどんな技も受けきる度胸の広さには定評があった。ここ数年、彼女は〝隠し持っている本物の強さを見せてほしい〟と言われ続けた。が、ついにみなみが大きく弾けることはなかった。たぶん、遅かったのだろう。人々が彼女にその台頭を望んだ時期が……。

「誰にも負ける気がしないっていう時期は確かにありましたね。そうとう上の人ならともかく。海狼組を解散して少し経ったぐらいかな。気力も体力も充実していたんですね。試合が終わっても、もうひと試合できるな（笑）っていう感じでぜんぜん疲れなかったですね」

そう、確かにそれはあった。〝いまって本当はこの人が一番強いんだろうな〟と思わせた。その強さは底を見せず、ナチュラルで無理がなく「女ジャンボ鶴田」の異名を取った。ただ、そのころはまだみなみの番ではなかったのだ。

「合わなかったんですよねえ。そういう波長が（笑）。雑誌やファンの人に〝結果を出してくれ〟みたいによく言われるようになってからはもう……なんかできなかったですね。もっと早く言ってくれればよかったのに（笑）」

いわばストーリーを盛り上げるための〝ダメ〟の時期。〝さあ、君の時代だよ〟と言ってもらえるまでの待ち時間に、レスラーみなみ鈴香のピークは過ぎていった。

引退を決意する直接の原因となったのは首の負傷である。一昨年の11月に一度、痛めた。そのときにはすでに医者から〝もう辞めた方がいい〟と言われていたという。

そしてまた、昨年の11月、試合中に激しい痛みが彼女を襲った。

「対戦相手が遠くに見えて、そのあとは記憶がなくって、控え室で大泣きしてたらしいけど、気がついたら救急車の中だったんです。前に痛めたときよりはひどくなかったんですが、二度目だったから……。引退しようと決めてからは、すごく痛くなって、手が痺れたりすることが多くなったし、受け身も思うように取れなくて……」

受け身が取れない……受けの天才と言われていた彼女にとって、それはどんなにか辛い事実だったことだろう。

「いまは普通にしていれば、そう痛いこともないし大丈夫です。長期欠場して治療するとか手術をすれば、もしかしたらまたプロレスができる身体になるのかもしれないけど、26歳っていう年齢を考えたら、待てないですね。10年間、精いっぱいやってきたし、それなら別の人生を選んだ方がいいという結論が自然に出ました。ただなかなか言い出せなくて、発表は3月の横浜アリーナまで引っぱってしまいました。そのときの試合ではもう三田のデスバレー・ボムが怖かったんですよ。相手の大技を受けることが怖くなったらおしまいだなって思いました。それまでは相手の技が怖いなんて思ったことはなかったですから」

この試合に敗れた直後、リング上で植田コミッショナーに引退の意志をことづけた。なぜ、マイクを持って自分で観客に告げなかったのだろう。

「お客さんの反応が怖かったんですよ。ブーイングされたり、〝えーっ！〟とか言われたらどうしようかと思って……。応援してくれてる人がいるのにって」

みなみらしい。彼女は最後まで必要以上に注目を浴びることを避けた。植田コミッショナーから告げられた〝みなみ引退〟は現実味がなかった。しかし、その日は静かにやってきた。

「いい引退試合、引退式をさせてもらったと思います。三田と下田は試合前から涙ぐんでいたって聞いたし、北斗が見に来てくれるかなくらいは思ってたんですけど、まさか中野さんまで……それで二人が試合してくれるなんて……」

胸に押し寄せる万感の思いをせき止めるようにみなみはハタと言葉を切った。そして潤んだ目をしばたたかせながら、小さな深呼吸をしたあと、こう続けた。

「一番良いときに辞めさせてもらったんじゃないかな。北斗がいて、堀田がいて、先輩も後輩もいて、みんなに送ってもらって……幸せだと思います」

かつて海狼組（マリンウルフ）という名タッグ・チームがあった。北斗晶、みなみ鈴香。二人は運動能力の高いプロレスで観客を魅了した。しかし、北斗は突如、ヒール転向を宣言し、海狼組（マリンウルフ）は解散した。

「海狼組（マリンウルフ）は楽しかったですよ。ただ北斗はもともとヒール志望だったし、彼女がベビーフェイスを辞めたのは正解だったと思います。この世界はそう長くできるものではないですよね。まして女子の場合は。だからやりたいようにやった方がいいんです」

みなみは北斗を温かく送り出した。その北斗は彼女なりの苦労を重ねながら、デンジャラスクイーンとして一大旋風を巻き起こした。その去就が注目されたが、ごく最近、現役復帰を明言した。

「まさか私の方が先に引退することになるとは（笑）……北斗もそう言ってます」

北斗は〝レスラーは死ぬまでレスラー、死んでもレスラーだ〟という名セリフを吐いた。しかし、みなみは〝私はもうレスラーではない〟と言い切った。

北斗のレスラーであることへの誇りと情熱は強烈だが、プロレスを愛するがゆえにあえてレスラーであった日々を封印し、訣別を告げたみなみの〝あきらめる勇気〟の潔さもまた美しい。引退を撤回した北斗。引退するみなみ。「海狼組（マリンウルフ）」という名の遠い青春を胸に二人はそれぞれの新たな試練へ向かう。生き方は違ってもプロレスに対する愛情に変わりはない。

「すごい10年を過ごしましたよ。プロレスをやっていなければこんなにたくさんの人と知り合えなかったし、知らない人に応援してもらうこともないわけだし。普通に暮らしていたら、26歳までにこんなにいろんな経験はできないでしょう。幸か不幸か全国、津々浦々にも行けましたし（笑）、韓国にも……ああ韓国はもしかしたら一番楽しかったかもしれませんね」

日本ではつい自分に与えられた役割に縛られ、思い切り自由に闘えることのなかった彼女にとって、韓国遠征はしがらみから解き放される良い時間だったのかもしれない。そんなみなみを日本でも見せてもらいたかったものだが、彼女を分をわきまえすぎた選手にしてしまった責任の一端は私たちにもあるのかもしれない。弾けてほしいという気持ちと同時に、彼女には渋い〝レスリングマスター〟でいてほしいとは思わなかっただろうか。

「華やかなトップの座に憧れなかったわけではないけれど、何ていうか、いままでにも私のような先輩の選手はいたし、下の選手が育つためにも必要ですよね。まあ〝自分が自分が〟って思う選手がいっぱいいる中に、ポツンと私が入っちゃったかなとは思いますけど。がむしゃらにぶつかっていくようなプロレスを、自分もやってみたいと思って試合に臨むこともあったんですけど、やっぱりできなかったですね。お客さんも、そういう目では見てなかったと思うし」

名脇役に徹したまま、みなみは去る。その横顔には満足感と未練が微妙に交錯する。

「ファンの人とかみんなに〝会場に遊びに来るからまた会えるよ〟って言ったんですけど、やっぱり当分は無理だと思いますね。テレビやビデオも観られないと思うし。またやりたくなっちゃいますから。たぶん、堀田や北斗ともしばらくは会わないんじゃないかな。とにかくプロレスから一度離れないと新しい人生は始まらないと思います。バイクで出かけるときにも事務所の前は通らないようにしてますから」

大好きなプロレスを徹底して意識的に遠ざけなければ、鈴木美香には戻れない。彼女が支えてきた全日本女子プロレスの将来は後輩たちに託す。

「豊田軍団、W井上、ラス・カチョーラス……みんな立派に成長しました。去年、W井上のWWWAタッグに堀田と組んで挑戦したんですけど、久々に緊張しましたね。向こうは若さに任せて……っていっても年齢は変わらないんですけど（笑）、何をしてくるかわからない勢いのあるプロレスをやってて、最近では一番印象に残る試合です。それとタッグを組むことが多かった渡辺には、会社はもっともっとチャンスを与えてあげてほしい。すごく良くなってきていますから。ASARI、玉田、前田もがんばってるし。あとはその下の新人たち。他団体の新人選手が良いとか言われるのはやっぱり悔しいですね」

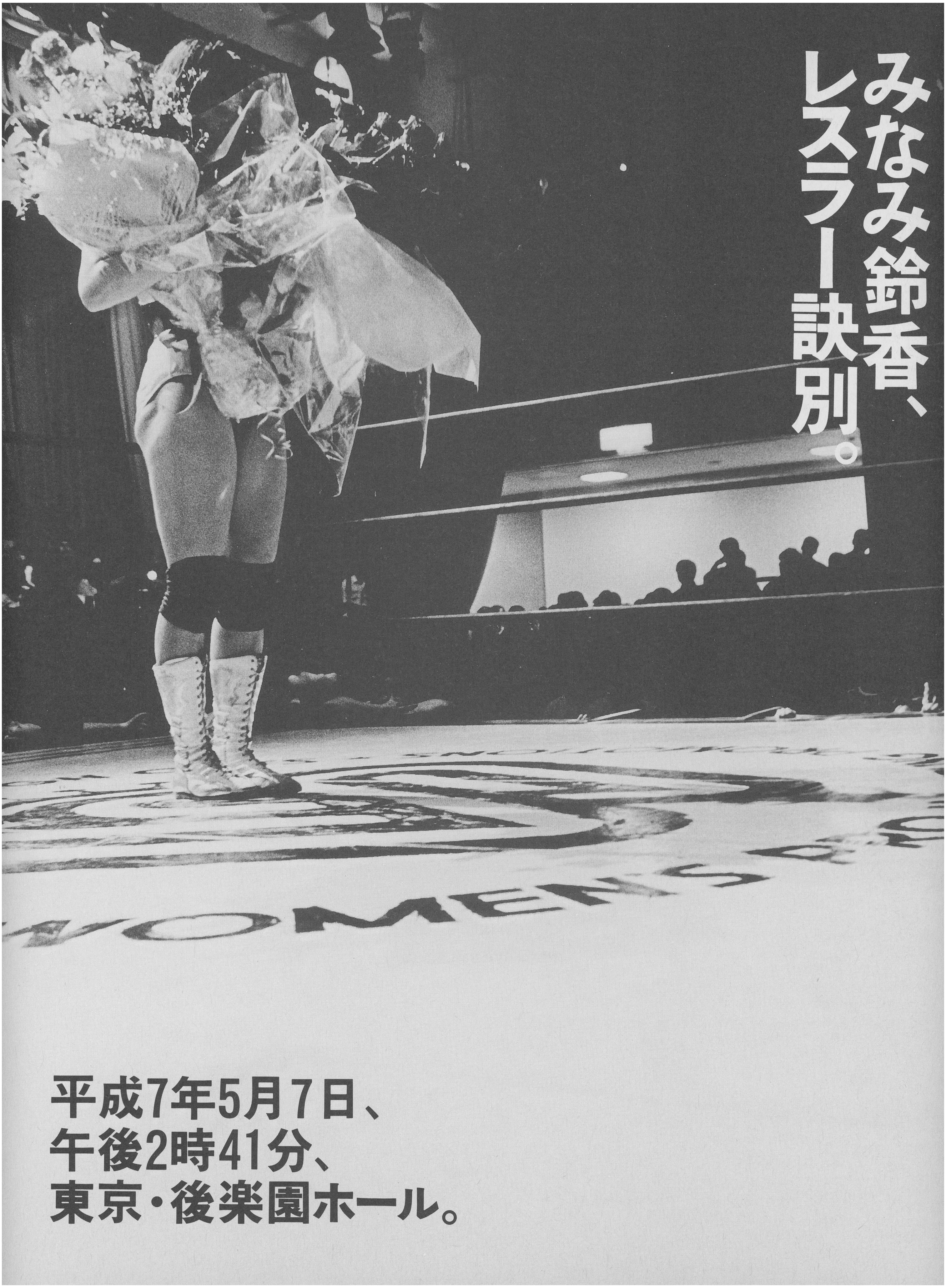
最後の最後までみなみらしく、後輩たちにそんなメッセージを残した。

ついにWWWAシングルの赤いベルトを巻くどころか、挑戦することさえもなくみなみはリングを降りた。形の上では頂点を極めることはできなかったみなみだが、彼女の雄大なレスリングを私たちが忘れることはない。みなみ鈴香の存在価値。みなみが成立させてくれたたくさんの名勝負。……そう誰もみなみ鈴香にはなれない。

「自分のやるべきことは全部やりました」

みなみ鈴香はプロレスラーだった。

みなみ鈴香、レスラー訣別。



みなみ鈴香、レスラー訣別。

平成7年5月7日、
午後2時41分、
東京・後楽園ホール。

出張所 CORE

女子プロレス グランプリ

●ちゅどーん!! 『女子プロGP』読者さまのためのページ"出張所"がパワーアップして帰ってきたぞーい。増ページ&増企画、その結果ミクロな文字と写真がブチ込まれまくりの近眼養成&老眼読者を完全無視したひど〜い内容になっちゃったの〜。ま、ともあれ最後までよろしくお付き合いくだされ。

読者さまの魂のほとばしりを見よ!!

ドキッ♡ 1万字だらけの読者投稿

○そいでは"魂のほとばしり1万字スペシャル"、前号の感想からスタートするっちゃー。

●表紙を見たとき、違う種類の本かと思って手を出してしまったぞ(おいおい…)。でも中を見たらポラロイド写真に「おかずにしちゃダメよ♡」「ア…いっちゃった…」などと書かれているページがあったので、あーやっぱりその手の本で良かった。(千葉県/岩崎興人)

○いったいどのテの本なのじゃ。

●初めて本誌を買い『出張所』に目を通して思ったことは「妙な雑誌!」But…す〜っごくおもしろいよね。次回も絶対買うゾ!!(埼玉県/清水呂美)

○"妙な雑誌"とゆーのは、ウチの場合最大のホメ言葉ってこと、覚えといてね♡

●キレイな写真とほかでは見られない切り口のインタビウ、そしてちょっと"おポンチ"なページ…。よいぞ、よいぞ。これからも突っ走ってくれ! GO!GO!(和歌山県/北十字くん)

○"おポンチ"(笑)。ま、そのとーりなんスけどね根がそーだから。だからこそ…。

●いささかライターが下品なのが気になります。「〜ッス」という口調も考えもの。貴誌には他誌にない威厳を持ってほしいです。(山形県/志田清人)

○このように威厳を期待されても困るんス。そう、なぜなら"おポンチ"だからなの♡

●理屈っぽいプロレス雑誌にはうんざりしていた。何だ、この雑誌は! おもしろすぎるぞ!(東京都/匿名希望)

○逆に、理屈がなさすぎとも言える(笑)。

●何の業界にせよ、ほかと違う方法論で成功を収めるというのは凄いことです。これからもスタイルを変えずにお願いします。(東京都/山本浩二)

●何より編集部の人が楽しんで作ってる感じが伝わってくる『女子プロGP』。これからも輝いてる選手のインタビュー&写真をたくさん載せてください。(東京都/山田けいこ)

○やっぱ作る側も楽しく、が本誌の基本姿勢なのだ。楽しみすぎとゆー声もあるが(笑)。

●いま一番輝いている女子プロレスラーの魅力をダイレクトに活かした素晴らしい内容でした。豊田のセクシャリティ、デビルの含蓄、大向のイノセントを小細工なしに誌面に反映させたところは感動的です。最近プロレス雑誌の創刊ラッシュですが、貴誌はペダンチックやひとりよがりに陥ることなく、部外者まで引きずり込むエンタテインメントぶりに好感を覚えます。(大阪府/アルベルト)

●プロレス雑誌も"多団体"時代ですね。自然淘汰されないように生き残ってください。(山梨県/丸山浩一)

○そーそー、これ編集長もよく考えるんスよ。『週プロ』『ゴング』が新日・全日とするでしょ。でもって『ホニャララ王国』と『爆闘ホニャララ』(ぜんぜん伏せてねーよ)が○○○と×××でぇ(ここは差し障りがあるのでちゃんと伏せる)、『紙プロ』はFMWなんだよな、たぶん。じゃウチは人数少ないしギャラが安いから△△△か!?(すんげーヤバイので伏せる。お好きなダメ団体を入れてくださいませ)そんなのイヤ〜ン♡

●女子プロ・ファンにはとっておきの1冊だ〜。この本見て"あの人もいい〜、この人もいい〜"と超ミーハーになる私。(北海道/宿村小百合)

○そーやっていろんな選手を気にして会場に行ったりしていただければ幸いなのですよ。

●初めて貴誌を買ったのですが、インタビュアーの方、ツッコミがきついですね。プロレスラーを前にして怖くないのでしょうか。(大阪府/松田博史)

○んな考えは毛頭なかったッス。でも冷静になると…まいっか♡

●僕たち女子プロファンのために、目にクマ作って、胃液ゲロゲロ吐きながら、給料少なくてもがんばってください! あと、俺と豊田真奈美の結婚式の独占取材さしてあげようか。(埼玉県/かまちゃん)

○はぁ…。

●真奈美姫の表紙にクラッときて、山さんのページを見てドキッときて、神取アニキ(笑)のページを見て目の前が暗くなり、気づくと2冊買ってました。(北海道/听 久美)

○君もキツいギャグで落とすねぇ。

●P16の豊田真奈美嬢の髪は異様なまでに長いのでは!? 間違ってたらゴメンチャイ。(愛知県/神取真奈美)

○実はプチ付け毛を使ってるのじゃ。気づいた人いるかなぁ。

●豊田真奈美は黒が最も似合うと思っていたが、真っ白な衣装を身にまとった彼女はまるで別人のようで、母のような優しさを感じてしまう僕であった。(千葉県/鳥飼尚人)

○こんな崇高なイマジネーションを広げる読者さまがいる一方、タツヤはただ単に現場で鼻血ブーしまくるだけなのであった。

●咲ちゃんは本当にいい味出してるね!! もう最高♡ そこで1曲。♪咲スキ、咲スキ、咲スキ〜、愛してる〜。(広島県/石橋春香)

○ヤング&チャイルドな君にはわからんかもしれんが、これはTVアニメ『一休さん』の主題歌の替え歌なのだ。勉強になったねぇ。

●『プレポラGP』はヤラセでしょ。ヤラセよね、ヤラセと書って♡(東京都/れん)

○いやっ♡

●私は府川由美ひとすじになるため、昨夜フラれてきました。由美ちゃんなぐさめてくれ〜。(神奈川県/松岡信次郎)

○由美ちゃんひとすじになるためにフッたのなら話はわかるが…。プチ間抜けだぞ。

●この場を借りて一言。「おい由美(府川)、気合い入れて早く強くなれ!!」…編集部の皆さん、暖かい目で見守ってやってください。(神奈川県/府川武史)

○これって府川由美の実のアニからのお手紙なのじゃ。そこで府川選手にこの件を報告したところ「お願いだから載せないでくださいね♡」と例のつぶらな瞳で懇願されたが、で

おイラストの数々。

岡山県/山川哲史
※男の心意気がよく書けてます

神奈川県/八田博信
※ひっじょーに可愛いです

高知県/ノリスケ・ボム
※元気いっぱいな感じがグーです

●ミクロなスペースながらも、今回から読者さまの手によるイラスト投稿のスペースを用意したッス〜。これらはすべて、アンケートはがきの出張所へのお便りスペースに描かれたものなのじゃ。我もと思う人は、アンケートはがきの質問項目をホワイトで消したうえ、ほとばしったイラストを書いてちょ。必ず黒インクの筆記用具で描けば、掲載される確率も2倍、2バ〜イ。もちろん、官製はがきによる投稿もOKだ。

●この本を初めて見たとき『好（すき）プロレスグランプリ』かと思った。（鹿児島県／安楽正和）

も載せちった。ゴメンチャイ♡

●府川由美!! 100円あげるから僕とランデブーしてくれ!!（茨城県／菊地幸一朗）

○お兄様も読んでるんだからやめなさいって。

●釧路の会場でお仕事をしている府川選手を生で見た。ほれたー。わたしは府川選手のものよ、抱いて、めちゃくちゃにしてー。（北海道／稲田善光）

○ほらキミもだよ。

●困った顔の女フェチの私にとって、柳沼の顔はトップロープからのノーザンライト・ボムより某写真家の写真集よりキクゼ!! 最後に、山さん僕も愛してます!! 説得力ない？（神奈川県／青木和英）

○ない。

●本当にすごいッス。やってくれます『女子プロGP』。あまり矢樹ちゃんであ・あそ・遊ば…つぁっ、あー。安川アニキィ、最高ッス。さすが横浜ジェームス・ディーンッス。いくッス。爆発ッス。でもオイラの矢樹ちゃんの方が無茶苦茶ええッス。最高ッス。本気（マジ）で!! てな感じ。（愛知県／ピョンピョン系はバーリトゥードが好き、ヘクション!!）

○どーでもいい長いぞチミのペンネームは。

●ヤ・ギ・ヒ・ロ・ミ。ぼくだけの〝こまったちゃん〟！ これからは君のこと〝ロミー〟って呼んでもいい？（神奈川県／川崎浩介）

○ロミーですか…（笑）。

●VOL.6は前半が長谷川咲恵だらけ、後半がブリザードYUKIだらけってのはどうじゃ。あ、真ん中に矢樹ちゃん困らせてとりあえず10ページ。（千葉県／千葉高徳）

○今回の表紙撮影のときも矢樹ちゃんは困りまくってたので「矢樹ちゃんって、いつから困るようになったの？」と聞くと「ひー、『女子プロGP』で初めて取材受けてからですぅー、ひーひー」と答えておりました。そーいや他誌で困る矢樹ちゃんってあんま載ってないな。俺っちって罪作り？

●めすいぬちゃんがかなりのテクニシャンであることは、あのソバットと裏拳を同時に放つ大技で証明されていたが、まさかケンカでもあれほどとは…（何しろ神取をアルティメット殺法でKOしたのだ!!）。どこかの団体とタイアップして、ぜひ実際のリングにめすいぬちゃんを登場させてください。（神奈川県／甲田哲也）

○問題は誰がめすいぬちゃんのマスクを被るかなのじゃ。テクニシャンでケンカ巧者、さらに小型選手の方がイメージも合う。ってことは風間ルミ社長っスか!? 体型も含め、ってオイオイ。

●昔〝ジャリん子チエ〟というアニメがありました。大阪のチエちゃんはめっちゃ相撲が強くて、人情味のアツイ女の子でした。あのチエちゃん、大人になったいまはJWPのダイナマイト関西になったのではないでしょうか。（東京都／上野真智代）

○関西選手の本名と巧みにかけた、ちょいとポエジーな投稿でやんすねぇ。

●関西さんのボラ写真のキメポーズ、オ×ニーネタが多いですね。お願いですから、やめないでください。（福岡県／徳本弘明）

●関西選手はプロレスはSEXだって言ってたけど、じゃあ関西選手はSEXをしたことあるんですね…怖い。（北海道／秋田谷香織）

○かと思えば、こんなスンズレイ（©加藤茶）な投稿も。怖いはないでしょ（笑）。

●山さんのピンナップ最高!! この次は山さんのおしりヌードと、足の裏がみた～い!! ワルイ!?（福岡県／黒川いづみ）

○ワルかないけどさぁ…。

●府川由美とチャパリータASARIと俺でタッグを組めたら最高ッス!! これぞまさしく夢のタッグかもしれないぞ。（神奈川県／斎藤大輔）

○〝俺〟は余計だと思う。

●井上貴子さんへ。たいへん、写真集にはお世話になってます。また新たな写真集をお願いします！（神奈川県／橋本明博）

○どうお世話になってるの？（笑）

●貴子は抜ける！ アジャは抜けない！ でもブルならいい!?（大阪府／大谷友紀雄）

○いろいろあるから、ノーコメント。

●尾崎魔弓もいいけど、KAORUもいいな、どっちをお嫁さんにしようか？ やっぱりアジャ・コングにしよう。（静岡県／中澤謙介）

○いろいろあるから、ノーコメント（笑）。

●IWAの市来貴代子&新谷朋江選手。インディーズの星になるべくファイト！（静岡県／橋本一夫）

○大日本プロレスにも女子選手がすでにいるとのこと。女子でもインディーズが盛り上がってくれると楽しいよなあ。

●渡辺智子選手が欲しいッス！ 部屋に飾っておきたいから次号でプレゼントしてください。（静岡県／中村滋利）

○ホント、渡辺智子選手ってくまちゃんのぬいぐるみみたいだもんなあ。でもあげない。

●咲ちゃんのジンギスカン踊りと、京子さんの腰振りダンス。このダンサーズ・ツーショット見てみたいです。ピンナップもいいなぁ。あっ!! でもこの2人、全女vs豊田軍団で闘ってる最中だからムリかな？ あと京子さんには〝オッペケペー踊り〟もしてもらいたい。何だそりゃっ。マッタク、しょーもなことばっか言ってすいません。最後に、タツヤさんのマユゲ好きです。（東京都／清水陽子）

○最後の一言もかなりしょーもない（笑）。

●堀田の祐美ちゃんの目ってホントくりくりしててかわいーの♡ 日本中どこ探しても、あんなにキレイな目してる人、いないと思う…！（東京都／高橋里奈）

○コレ、編集長も同感。取材とかで会って話すとき、けっこードキドキしちゃうんだよねマジで。良い女ですぜ。

●堀田ちゃんの笑ったときに出るえくぼとドラえもんみたいな体型。すごく可愛くて大好き♡（東京都／中村幸枝）

○ほめてんのかバカにしてんのかわからんぞ。

●会場で堀田選手に握手してもらってとても嬉しかったです。でも家に帰って、あることに気づいたんです。私の手が納豆でネバネバなことに。堀田選手、ゴメンナサーイ。（富山県／高瀬玲奈）

○こんな恥ずかしい話、よう自白してくれた。ここで告白しなければ、堀田選手はいつまでも「富山には怪奇ネバネバ娘がいた」と思ったままだろうからなあ。あ、もっとも堀田選手がそのことを覚えていたらの話だけど。

●P47のイーグルがメチャクチャかわい～。前から大ファンだったけど、きれいな顔と大きなオナカが好きなのです。（秋田県／デ〇・フェチ）

○…父さんはもー何も言わん…。

●僕の好きになったレスラー。神谷美織→バット吉永→みなみ鈴香…。最近はレジーに魅かれている。お願いだからレジー、アメリカに帰んないで!!（千葉県／渡辺康祐）

○そーゆー好みを持つホシの下に生まれる人って必ずいるんだよねぇ…。

●女子プロレスって見たくなかったんです。まだ女性に対して幻想を持っていたかったから（笑）。でも神取、工藤、豊田のインタビューを読んで、また3人の目を写真で見て、そいつは失礼なことだと思いました。うん。みんなプロの目をしてる。（宮城県／荒川敦志）

○じゃあいまは、女性への幻想がすっかりなくなったってか（笑）？

●貴子さん、WWWAタッグ100代目王座トーナメントの黒の水着を観たとき、私は女でありながら「鼻血」が出そうになったじゃねーか!! あぶない世界にはまったらどーするんだ!! でもこれからも愛してるぜ!! 次号はW井上のピンナップ付けてね（貴子はもちろん黒水着で）。（大阪府／鼻血ブー）

○ご期待どおり黒水着でお届けしましたぜ。ブーするなり〝じゅんっ〟するなり好きにするなりよ（プチお下劣）。

●近日中に女子プロのシナリオを執筆する！ まだ食えねえけど、俺はやるしかねえんです。ズバリ、豊田・福岡・矢樹の3人が主役だ！ ところで、ライバルは『紙プロ』みたいですね。あと『デラプロ』を見るようで懐かしいですわ。（富山県／金盛修也）

○いやー、べつに『紙プロ』さんをライバルなんて思ってもおりませんし、それに『デラプロ』は読んだことねえんです（マジ）。

●JWPの臨海スポーツセンターの試合を観に行ったよ～ん。千葉さんに忘れ物をしたので尋ねたら、ものすごく無愛想で不親切だった！ 君は二重人格か!?（大阪府／濱村香織）

○何とそんな失礼なことを！ そこで、左ページにこんな写真マンガを作ったので溜飲を下げてくれい。

●ほとんどの人は知らんと思うが、尾崎魔弓とキャンディー奥津とプラム麻里子と福岡晶は、テレビ愛知制作の時代劇『森蘭丸』で〝くの一〟役、しかもプロレス技をガンガン使ってたぞ!! ちなみに尾崎だけにはセリフがあった。（愛知県／小坂哲矢）

○あと地方ローカル局にレスラーさまが出演すると、とても全国ネットでは言えないデンジャラースな発言がバンバンあったりするんだよね。そんなチクリも待つ!!

●『プレポラGP』のお色気2選（特に神取とデンジャラスクイーン関西、見た瞬間イッちまったよー。セクハラ金井＋流血王様、今度はぜひ豊田や府川にもコレやらせてくれ。やってくれないとイヤーン♡（北海道／自称北海道ジェームス・ディーン）

○今回のプレポラGPを見てみるのじゃ。

●俺はいままでの発行回数で良いと思う。時間をかけないと良いものはできないし、週刊や月刊になったら〝待つ楽しみ〟がなくなってしまうと思うのだ。（埼玉県／早川喜久）

○そのとおり、って俺が言っちゃいかんのか。だがですよ!! 冷静に考えてごらんなさいませ。980円の『女子プロGP』が年に4回発行されて1年の出費は3920円。てことは1か月計算だと『週プロ』よりも安い約327円、1日あたりハリスガムよりプチ高いけど約11円とゆー、実にコストパフォーマンスに優れた本とゆーことじゃねえですか!!～ってゆーのがヤクザな商売の典型的言い回しなので気をつけてくださいね～。

●まっしーへ。次はFMWに行ってください。SKiのときからファンです♡（大阪府／森田 潤）

○まっしーとは〝大奥探検隊〟の藍田真潮ちゃんのこととみんなご存じだな。このあとのペエジで登場するので乞うご期待なのじゃ。

●バイトで編集長になれるなら、正社員になりますから社長にしてください。つぁっ、あー。（群馬県／木村 誠）

○バイトが編集長になったんじゃなくて編集長がバイトに格下げされたの（笑）。それにだな、社長とゆーとキミ、世界に名だたる天下のソニー・グループの頂点ってことですぜ。なんて恐ろしいこと言うんだこのガキャア！ でも読売新聞に取材されたのはバイトの方という、ホントに世の中は不思議なもんだねぇ。

●豊田軍団の悪口を言うヤツは神が許そうとオレが許さん!! 安川、お前もついでに許さん!!（東京都／鈴木 豊）

○タツヤは〝ついで扱い〟ッスか（笑）。

●こんなにたくさんの女子プロ記事はこの本でしか読めないので、ぜひずーっと続けていってほしいです。タツヤさんがんばってください。（静岡県／中村滋利）

○編集長はがんばらんでもいーのか？

●安川さん大好き！ かっこいい！ 色男！ 素晴らしい！ 日本一！ 今後も全力でがんばってくれよ～！（東京都／熊木将博）

○編集長はがんばらんでもいーのかっての。

●『がんタツわいど』のページを増やしてほしいです（別にタツヤのファンではない）。いくら長い長いインタビューが載ってても、1枚のフザけてる写真の方が選手の性格・人柄がわかって嬉しい。（宮城県／阿部明）

○それが狙いでもあるのじゃ。

●前号では〝何だこりゃ〟と思ったけど『がんタツ』おもしろいよぉ。ごめんねぇタツヤさぁ～ん♡ こんな私をゆ・る・ち・てぇ～。で、私も4月から念願!? の女子大生になる

すんごい絵。

●この雷神隊3人衆のイラストは神奈川県の浅野修一さんの作品。『女子プロレスGP』Vol.5に掲載された写真をもとに描かれたものだが、ミョーなスゴミを感じさせるのは俺っちだけッスかねぇ？

女子プロレスグランプリ出張所CORE

のを記念して…タツヤさぁん、私はいかが!? （大阪府／師匠）
○いいんスかぁ!?
●『がんタツわいど』はおもしろいけど、選手のイメージが壊れちゃうよー! もう壊れたけど。 （石川県／青柳有希子）
○そうやって大人になってゆくのじゃ。
●P72を開いたとたん、冥王星まで届きそうな声で「あーっ!」と叫んでしまいました。だって安川さんが神取さんにセクハラされてるんですもん♡ おい、うらやましいぞっ! 私と代われっ! …もとい。やられたら、やり返せっ! おねーさんは応援するぞ。ただし、あとでどーなっても知らない♡ （千葉県／天野Jack2世）
○んな無責任な。
●おいタツヤ! 自分の胸を触らせといて、逆に府川選手の胸を触っちゃいねーだろうな。それにしても府川選手、可愛いねェ。 （新潟県／匿名希望）
○ホントにねェ♡
●おいタツヤ、俺の由美chanに胸を揉んでもらってキタネーぞ!! その部分、俺にも触らしてくれ!! （茨城県／永井　悟）
○タツヤがモーホーに目覚めたらどーするよ。ただでさえホモ説が濃厚（ジム通いが好きな体育会系などから）なのに。
●「まなまな」だぁ～!? ふざけんなよタツヤ! 豊田真奈美選手をよりによって「まなまな」だとコノヤロー! こうなったら〝反タツヤ同盟〟を作ってやる!! 豊田真奈美選手がホンマに好きで、タツヤにヤキモチ焼いてる人、集まってくれ!! もし集まらなかったら1人でやってやる。（兵庫県／佐藤　大）
○だが続けて「ホンマはタツヤさんのファンです。おかげで豊田さんの記事が多いですから、これからもがんばってください」とある（笑）。ま、プロレス的ですなあ。
●全女の後楽園ホール大会終了後、ホール入口でタツヤさんを見ました。「あータツヤだー」と言おうと思ったけど勇気がなくてやめました。 （東京都／桑原浩隆）
○最近、会場で声をかけられることが多くなったタツヤ。しかし最近は後ろ指さされたりタックルされたり（実話）と大笑いの今日このごろ。だから、タツヤを会場で見つけてもイジメちゃイヤ～ン♡
●タツヤ嫌い。もっとマジメに仕事しろ!! （広島県／木下洋文）
○フマジメに見える仕事をマジメにやるのがタツヤの仕事なのだからカンベンしてちょ。
●タツヤさんのニヤけた顔は、ウチの兄に似てとっても嫌です。（京都府／白崎友香）
○タツヤ似の兄を持つとゆーのは、こと女子プロ好きにとっては不幸かもしれん。
●安川! テメーぶっ殺すぞ。堀田さんにパイルドライバーしてもらえるなんて100億光万年はえーよ! ボケナス! （神奈川県／羽野　梓）
○若干12歳のチャイルドにここまで罵られてるよ安川くんは。タツヤを羨ましがるのはけっこーだが、こーゆーリスクもあるんだから良いことだらけじゃおまへん。タックルもされるし（笑）。でもま、誹謗中傷だけじゃない。
●安川さんって! イカスのね…♡ （埼玉県／鈴木里栄）
●タツヤ、オレのものになれ。 （岩手県／坂本　勉）
●タツヤくん、君はぼくだけ見ていればいいんだ!! （岩手県／山本貴仁）
○14歳のギャルはおろか、31歳・男や16歳・男にまでこう言われる始末。いやーん、キミたちひょっとしてモーホー?
●タツヤさん、僕を弟子にしてくれる件、忘れてないッスよね? 僕は師匠のためなら…ウフ♡ あと、JWPのリングアナ千葉!! 今度はオレが潰す!! 待っててね♡ （秋田県／佐々木達也）
○前号でタツヤにラブコールしてた佐々木達也まで!! 結局、タツヤのカラダ目当てだったのね、～なーんてなことばっか書いてると、
●このコーナーに載るメッセージは（特に男の人）、ほとんど選手へのラブコールばかりでイマイチですね。おたく系の本ぽくて嫌だなあ。レベル低～い。（栃木県／山本ゆうな）
○と、タツヤの口ぐせで言うところの「つぁっ、あー。自分をバカにしてるでしょ」とゆーハガキが来るので気をつけませう。また、
●初めて買って〝出張所〟を読んだけど、これってエロ読者の集まりなの? （山梨県／ごめんね。）
○とか、
●下ネタが多いのは読者のハガキが原因なのか、そうではなく下ネタ好きの編集部のせいなのか…。別に私もキライじゃないけど。でもほどほどにね♡ （宮城県／近藤靖悌）
○なんて投稿も。いちばんの原因は〝カントク〟（おコラム参照）のせいだと思う。でも、
●読者ページでいつも大笑いしちゃう。それで女子プロ・ファンの人って本当に大好きって思えちゃう。『女子プロGP』作ってくれた人、心の底から愛してるよ♡ （東京都／長島千絵）
○わかってくれる人がいるからこのまんまで行くのじゃ!! でも続けて「本の薄さが気になるトコロ。前回の厚さが恋しーよー」と書いてあったが、ページ数は創刊号から変わってないのココロよ。薄く感じるのはおもしろすぎてアッという間に読み終えてしまうから内容がないのか…。前者でなきゃイヤ♡
●うちの兄貴が表紙に頬ずりしてたよ。崇くんがんばりやー。（東京都／ポンポコ一寸木）
●バイトの崇くん、やめないで! 全然、知らない人だけど…。 （東京都／児玉朋幸）
○とまあ、初代編集長でありながらいまじゃすっかりバイトに降格させられた（正社員だけど）バイトの崇くんごときにまで励ましのお便りが。編集長の方がメニーメニー仕事をしとるっちゅーのになぜじゃ!!～と思ったら、編集長あてのほとばしりも…。
●音楽誌のような構成は他に類を見ないほど素晴らしい! あと、P106の「編集長の～」には本気で感動しました。しかしプーのフリーターなので、投稿ぐらいしかできない自分が悔しいです。 （東京都／成松道博）
○編集長の生活っぷりはプー以下なので安心めされい。しかーし! ムスメからの励ましの手紙が1通もありましぇ～ん。俺っちはヤングでぴちぴちなギャルに励ましてもらいたいのよ～ん。てなわけで次号は編集長ヨイショ月間だ! って勝手に決めんなよ。ほだらばVOL.7まで、ばいなら（©斎藤清六）。

おひまい

●KAORUせんしゅは、せきねつとむににてるとおもいます。だけどすき。（神奈川県／大津順治）

REAL 魂のほとばしり。

●上の〝魂のほとばしり〟みたいな、おちゃめなのやオチャラケた投稿ばっかりなのにご不満の貴兄に捧ぐ!! ときにはマジメに、女子プロレスについて熱く語りたい方々のためのスペースを用意したので、こっちにも投稿してねん。

●豊田真奈美選手がアクションを起こしたことについて、ほかの選手がどう考えてるのか本当のところを知りたいと思います。私は彼女のファンだから、ひいきして見てしまうのかもしれないけど、確かに対抗戦の流れの中で、ヘンに仲間意識みたいなものが生まれてしまっていると思うし、プロレスラーなら上を目指したいというのが当たり前なのではないでしょうか?

三田・下田みたいに「2人で出られないなら意味がない」とか言ってドームの出場権を放棄する人よりずっと、正直なプロレスラーだと思うんです。全女は伝統もあるし、良い団体だと思うけれど、対抗戦をやりすぎて全女だけの試合のおもしろさみたいなものが失われていってしまうような気がするんです。

ビューティ・ペアのころからずっと全女を観てるので、もっとがんばってほしいです。特に山田選手なんかは、元パートナーとして豊田選手に賛同するんじゃないかと思ってましたが、違うんですね。

豊田選手や長谷川選手たちはいま〝つまはじき者〟なんでしょうか? 北斗選手やブル選手、全女を辞めた人たちの意見も知りたいです。 （東京都／森田和子）

●全女で、いま〝豊田潰し〟に出てる選手が多いが、自分を見失ってないか?例：〝楽しい〟井上京子のプロレスが〝残酷な〟プロレスに変わっている。

63年組を見てもわかるが、同期の絆なんてしょせん薄っぺらなものだ。豊田真奈美はそれに気づいたのだ。彼女は、マッチメイカーのモルモットにされるのを嫌ったのだ。

豊田よ、絶対に全女を変えてくれ! ただし、ヒールにはなるな。（岩手県／舘川元騎）

●アジャの記事は良かった。すごく!! この記事を読んで、ドームのVトップ・ウーマン・トーナメントのビデオを見直した。アジャが闘っている姿に涙が出た。なんだか泣いてしまった。

アジャってブルースだと思った。〝ホーム〟だと思った。どこへ行くんだろう? どこへ行けばいいんだろう? それはここだよ。こなのさ…と、JANISの〝Cry Baby〟じゃないが、それに近い何かが、アジャにはあると思った。

北斗でも泣いたが、それとは違う。アジャはブルースだよ。アジャはアジャなんだよ。

アジャが〝ホーム〟なんだよね。北斗の泣き顔見たときのアジャの表情。そこにはなんとも言えないアジャの顔があった。試合のあと、そして本気で泣いていた。何もないところで、泣いていた。そうだね、まさに〝孤高の王者〟だと思ったよ。試合に勝っても、負けた…としても、アジャはずっと王者だと思う。 （東京都／兼平洋子）

●ジャガー横田さんがリングに復帰してからというもの、私はプロレスことが気にかかってなりません。この本で本音が聞け、涙が出ました。もう一度ファンとして、応援していきます。いろいろと試行錯誤されているようですが、チャンスを見つけてデビルさんと試合をしてみませんか? チャンピオンではなく、チャレンジャーとして。ライバルと言われていただけあって、彼女は本物のプロレスができる人です。原点に戻ったら答えが見つかるかもしれません。「リングの上では18歳」の気持ちで、がんばってください。 （高知県／武市　亮）

●去年のくどめ戦でマスクを脱いだKAORUに惚れてからずっと注目してきたが、やはりどうも欲がなさすぎる気がする。ファンがどうこう言う問題ではないと思うが「長与を倒したいというのはまだ心の中にない」とか言ってるのを聞くと、こっちが焦ってしまう。

確かに女子レスラーの選手寿命は延びてきているが、まだまだ先は長いというわけでもない。ライバルももっと大事にすべきだ。尾崎魔弓のような良い選手と、もっと意地むき出しでガンガンやり合えば、KAORUの価値も上がるだろうに…。あと、人の良さがリングにまで出てるのか、デビル雅美やダイナマイト関西相手でも〝受け〟のレスリングをしている。後輩相手ならともかく、上のレスラーにはもっとガムシャラに行かないと…と思う。周りの評価はどうか知らないが、吉田万里子リ・チャレンジ第1戦のようなKAORUがもっと観たい。

KAORUには「強さ」「レスラー」といった要素と「女」「美しさ」「陰」の要素が絶妙にブレンドされた試合や闘いぶりを見せてもらいたいのだ。また、ヒールと言わないまでもジャガー横田チックな情念的なもの（ないのか?）を出していってほしい。 （東京都／西嶋　啓）

●矢樹さんはどーして写真に写るとき口をすぼめるの?（北海道／笠原孝広）

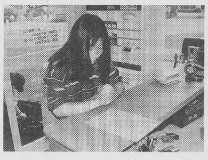
女子プロレス大好きアイドル・藍田真潮の

女子プロ大奥探険隊。

第4回『府川由美とバンジー対決』。

●女子プロレス好きのタレントとして知られる藍田真潮（通称まっしー・現在『はなきんでーたH』レギュラー）。彼女が女子プロレスの深層部に迫るコウナアがコレ。しかし今回は、なぜか全女の府川由美選手とバンジー対決という意味不明の企画になった（笑）。

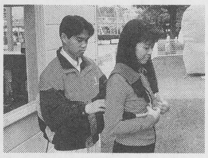
①さあ、2人がやって来たのはよみうりランドが4月にオープしたバンジー・ジャンプ。高さ22mの鉄塔からダイブするキョーフの施設なのだ。



②実際にバンジー体験する前に、まずは簡単な契約書（?）を書かされる。とはいえ住所・氏名を記入する程度のもの。

③そのあと体重計に乗って、自分に合ったベルトを選ぶことになる。それと同時にここでチケットを受け取る。ちなみに体重は109kgまでOK。

④いよいよベルト装着。府川由美ちゃんは思わず鉄塔を見上げ、これから味わう戦慄の体験に怯える。「高いところはダメなんです〜」



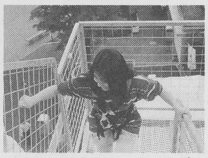
⑤ベルトは安全性を期するため、非常に複雑なものとなっている。まずは上半身にベルトを装着する。

⑥続けて腰と両足を通す、下半身用のベルトを装着。最後にバンジー（弾性ゴム）をつなげるフックを付けて完成となる。

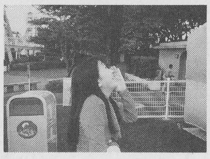
⑦これがベルト完全装着図。ほとんどパラシュート隊員みたい。バンジー・ジャンプというと足首に巻く印象が強いが、より安全性が高い。

⑧「そんじゃ、さっそく飛んできま〜す♡　こんなの楽勝ですよ」と勢い良く鉄塔の階段を昇ってゆくまっしー。

⑨「や、やっぱムリッス〜」と、わなわな震えながらあえなく断念となったまっしー。〝情けない〟というのは簡単だが、でも笑えない。



⑩やむなく1人でトライせざるを得なくなった由美ちゃん。階段はスケスケの金網状で、下が丸見えだからたまらん。



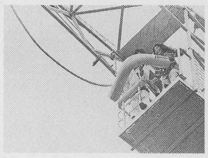
⑪「がんばってちょー」と下から声援するまっしー。さっきまでの怯えようはウソのように、すっかり人ごとだ（笑）。

⑫ついにジャンプ台に到着。これがまた高いの高くないのって。先に記したスケスケの金網は最上階も同様で、それが怖さを増長させる。

⑬10分経ってもなかなか飛ぶフンギリがつかない由美ちゃんを尻目に、係員が持ってきた色紙にサインをするまっしー。鬼である。

⑭「やー、やっぱ怖い〜」と絶叫する由美ちゃん。そんな由美ちゃんを係員は茶化すのだが、もはやギャグを返す余裕すらない。

⑮「あーん、もー待ってるの飽きちゃったー」とすっかり退屈しまくるまっしー。まったく、自分勝手な生き物であるなキミは。



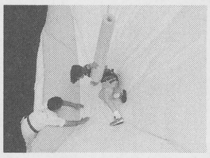
⑯「飛びたくないよー、でも飛べないとみんなにバカにされるし、私はレスラーだもん、でも怖い〜」と、さまざまな思いを巡らす由美ちゃん。

⑰「いーがけんに飛んでくんないかなあ、もー待ち飽きちゃったよー」とブーイングまでするまっしー。でもその気持ちが、わからぬでもない。

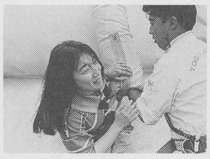
⑱38分経過したころ、ついに由美ちゃんが動いた!!「えーん、怖いよぉ」と半ばベソかき状態ながらも、ついに一歩踏み出した!!

⑲これが決定的バンジー・ジャンプの瞬間だ!!　由美ちゃんは今回、比較的初心者向きの飛び方でトライ。上級者は後ろ向きやヒネリを加えるらしい……。

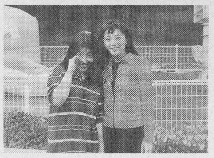
⑳バンジーは下りるときの感覚がとにかく恐ろしい。だが逆に上がるときはミョーな快感がある。その上下運動を数回繰り返すのだ。



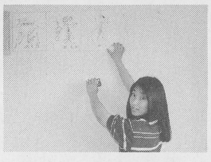
㉑ようやく終了。下には巨大なエア・マットが置かれており、そこに着地することになる。由美ちゃんにとっての地獄が、いまここに終わった。



㉒ようやく地上に生還した由美ちゃん。「あーん、怖かったですぅ〜」と半泣きのその表情は、もはや一般人のソレだ。



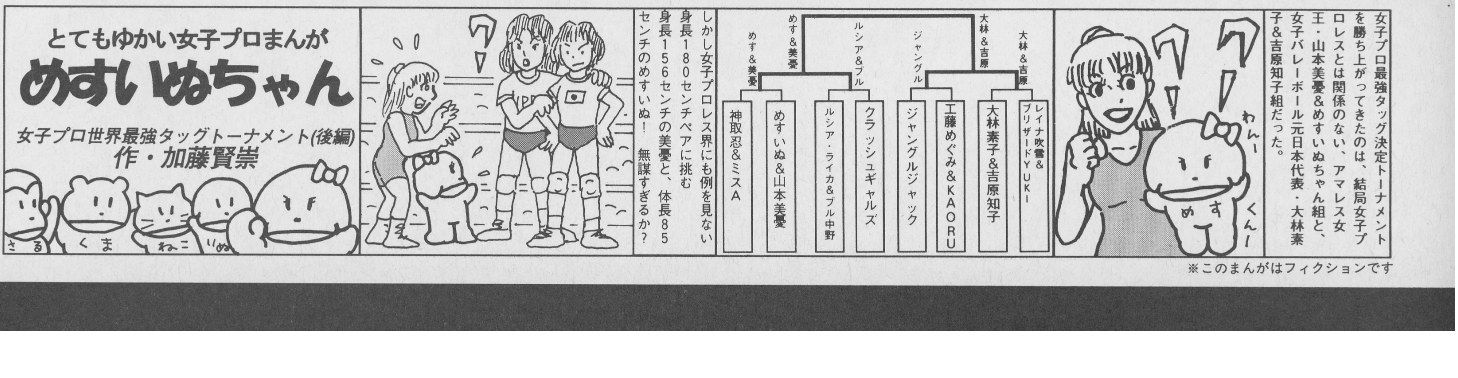
㉓「ホントに怖かったんですから〜」とまだ怯える由美ちゃんを笑顔で慰めるまっしーとツーショット。まったく、まっしーってヤツは……



㉔勇者の証として認定証をもらった由美ちゃん。そしてサイン色紙を残し、今回の対決を無事制した。よくがんばったぞ由美ちゃん!!

●てなことで、死者を出すことなく（笑）無事に終了したバンジー対決。ところでコレを読んでるキミ!! 女子プロ・ファンを自称するのなら、あの由美ちゃんが実践した（実際にジャンプするまでオープン以来最長の38分もかかったが〈笑〉）バンジーを体験してみないか?

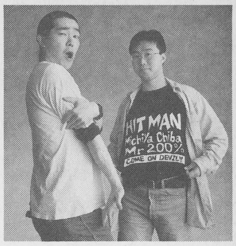
○料金：2500円（2回目以降は2000円・入園料は含まず）
○年齢制限：12歳以上
○体重制限：38〜109kg
○お問い合わせ先：よみうりランド／東京都稲城市矢野口3294　☎044-966-1111



※このまんがはフィクションです

●千葉リングアナのコーナーをもっと増やしてください。乱入でも可。（神奈川県／元川くん）

プレポラ・グランプリ。



TOP 20

●『女子プロレスグランプリ』読者プレゼントの中でも最大の人気を誇る、レスラーさまの直筆サイン入りポラロイド。世界に１枚しか存在しない傑作・珍作ポラを、本誌編集長金井とJWPのリングアナ・流血王こと千葉達也がディレクション／チョイスしてみた。

ビザールでござーる

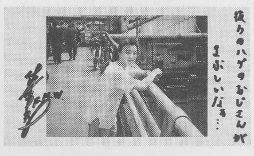
●ただVサインの写真を撮ってそれにサインでは芸がなさすぎ―― そんな考えから日々エスカレートしゆくプレポラ撮影。今回ストリートファイト・スタイルで撮影した尾崎魔弓選手の場合、そのまんまの格好でソニー・マガジンズの『GB』編集部の机で、チェーンを振りながら電話応対というシュールな光景を撮影。さすがに恥ずかしかったらしく、撮影終了とともにただちに現場を脱出した。

またバッドナース中村選手の場合、撮られた写真とメッセージのギャップが奇妙なノリを生んでいる。このメイクで〝恋人募集中〟と書かれても……。

がんばれ山さん

●左足骨折というアクシデントに見舞われて、現在休業中の山田敏代選手。しかし、そんな状態にもめげず取材現場に訪れ、相も変わらずの山さんスマイルをこのプレポラでも披露してくれた。編集部一同、１日も早い復帰を願っております。

ひどいにゃあ



FMWの未来う担うぴち²セブンティーン、中山香里選手。腕の骨折から無事に再起、日々精進する今日このごろなのだが、ポラに書くメッセージはエグい。

「後ろのハゲのおじさんがまぶしいなあ」……これは彼女が無邪気である、と解釈すればいいんでしょうかねえ。それにしも、子供は時として残酷な生き物である。

H!! H!! H!!

●全身からフェロモン出まくりのポラを集結させてみた。兄貴の好みに合わせてよりどりみどりよ♡　スリム美人がお気に入りの方には下田美馬選手。さりげなく表紙を要求するあたり、さすがいじめっ子タッグの片割れ。一方、肉感的なバディをお望みの場合はバイソン木村選手。撮影小道具として使ったオーガンジーの布をまとい、よりインビな雰囲気が増強された。

なお、ロリ系好みには府川由美選手を。今回は撮影できなかったセーラー服タイプの水着を無邪気に持つ由美ちゃん。ほとんどブルセラ的犯罪写真となった……。

おちゃめなトリオ

●今回の巻末特集は豊田軍団。しかし長谷川咲恵選手の目の負傷により、急遽３人だけでの撮影を余儀なくされた。そんな非常時でも、実に明るい豊田軍団。咲ちゃんの分もフォローするようなハッピーなスリー・ショットを撮影することできた。咲ちゃんも早く加わってよ!!

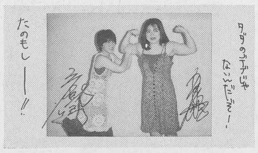
そして第２代プレポラ・デンジャラスクイーンは……W井上じゃー!!

●前号の覇者はオナニー・ポーズというお下劣なショットで天下を取ったＤ関西選手だったが、今回はタッグで下品な写真の数々を収めさせていただいたW井上が第２代プレポラ・デンジャラスクイーンの栄冠を勝ち取った。ちなみに、こちらはポーズの強制はいっさいしておりません。すべて彼女たちの創作ッス。

ワッキー参上!!

●〝がんタツ〟でその美貌を披露して以来、人気急上昇中のLLPWナンバー２美人広報・ワッキー枠島。つい最近、晴れてLLPWの正社員となった彼女のプレポラもあるので、好事家はぜひとも応募したまえ。ちなみにサインは本人のものではなく、大向選手のイタズラ書きではあるが。このほか彼女の秘儀〝提灯アンコウ〟のポラも撮影に成功したが、彼女の将来を考えて、ここでは公開しない。会場で見せてもらうように。

ゆかいなツーショット



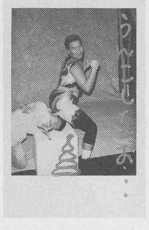
●今回の『女子プロGP』は２人のレスラーの同時取材が多かった。表紙巻頭を飾ったＣ奥津選手と矢樹広弓選手は、私服の際に腕を出すを恥ずかしがって本番では撮影できなかったが、「プレポラなら……」とご披露してくれた。極端すぎるぞコレ。

でもってLLPWの風間＆神取コンビでは、風間社長の止まらぬアイドル・ポーズに関係者一同は凍った(笑)。冷めきった神取選手の表情がグー。

ダメだコリャ!?

●最近JWPの一部選手でトレンディなポーズ（苦笑）が〝ゴリラ顔〟。そのパイオニアが、この福岡晶選手だ。……このポラ公開で何人ファンが減ったことでしょう。一方、前号の表紙のポーズを決める神取忍選手。……これは逆にファンが増えるかも、と言っておきたい（笑）。

初代プレポラ・デンジャラス・クイーン、Ｄ関西（通称・カントク）の作品でごじゃる



●惜しくも防衛はならなかったものの、Ｄ関西選手のポラも、かなりのレベルをキープ(どんなだ)。今回は排泄をテーマに、千葉道也まで動員しての力作となった。このほかＤ雅美選手のポーズ指導にも積極的で、まさにポラ撮影の申し子。

イヤ～ン♡コンビ

●LLPWのお色気担当である（!?）大向美智子戦手が、遠藤美月選手まで巻き込んでのイヤ～ン♡ポーズを撮らせてもらった。大向選手の「ヤン♡」にはドキドキするが、遠藤選手の「好きにしてっ!!」には……ごめんなさい、私ゃウソはつけねぇ人間なんです。

涙の営業ポラ

●〝女子プロレスの申し子〟〝第２次女子プロ・ブームの立役者〟といわれた彼女も、GAEA旗揚げで何かと大変みたい。プレポラを通じてチケットの営業を書かれてしまいました。でも、彼女から直でチケットが買える人って、幸せ者だよなあ……。

てなわけで、今回はこれまで。ここに紹介したプレポラは、本号のプレゼント対象商品なので、122ページを読んでガンガン応募しておくれ～い!!

※最近のけんそーさん：ニッポン放送の毎週月曜日夜９時半から放送中のマルチメディア番組『秋葉原ヤング電気館』で千葉麗子ちゃんと一緒に喋ってます （次ページ続く）

レスラーさまの、団体別 おコラムⅡ。

●「いくぞぉ〜っ」が一番カッコイイのはやはり豊田真奈美。しかし福岡晶の控えめな「いくぞー」もいい。（静岡県／竹内邦彦）

●『出張所』リニューアルにともない、今回からコラムの内容もガラッと一新。女子プロ多団体時代に対応してみたぞ。各コラムあてのリクエストやお手紙もお待ちしておるのじゃ。

全女 私の野望。

第1回「ブル中野の野望」。

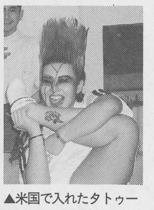
三禁という、現代日本ではかなりストイックな掟のもと、日々精進する全日本女子プロレスのレスラーさま。では、その禁が解けるとき＝引退の際、この三禁絡みの野望はいかなるものか——それを語っていただくこのコウナア、記念すべき第1回はブル中野さま。NY遠征中に、かなりの心の揺れがあったようで……。

＊

中野 女子のレスラーで、結婚して幸せになった例をあまり知らないから、山崎五紀さん夫妻とNYで会って、私の先輩として誇りに思えるというか……。五紀さんみたいになるのが理想なんです。いまって、ぜんぶ自分のためにやってるわけじゃないですか。それが今度、家庭のためとか旦那さんのために尽くすのとか見て、こういう幸せもあるんだなあって。

——五紀さんと出会って、がぜん結婚に対する野望が沸いてきたと。

中野 やっぱ、プロレスラーですね相手は。



▲米国で入れたタトゥーを見せるブル様の婿は…

——レスラーと結婚したい理由は？

中野 やはり同じ仕事をしてる人がいいし、子供をレスラーにしたいから。

——女の子が生まれたら、全女に入れます？

中野 全女か、自分で団体を作る。それとか、両親で試合のセコンドするのも楽しそうじゃないですか。

——いま、男子レスラーで「この人!!」って思える人は？

中野 あまり会う機会がないからなあ……。

——例えばベニー・ユキーデって、確か父親がボクサーで母親がプロレスラーでしょ。

中野 あぁっ、いいなあ!! そういう風にしていきたいなあ。

——やっぱ最強のレスラーを作るためには、ブルさまにないものを持つレスラーがいいのでは。

中野 じゃあ、飛べる人かな？

——ルチャドールとか。かけあわせ的にみて（笑）。

中野 あのね犬じゃないんだから（笑）。

LLPW 紅夜叉の通販極（きわ）め道。

紅の姉御の新必殺技を読者に募った『キメるぜバカ!!』であるが、読者さまが編み出した技のほとんどが「バカにしてるでしょ!!」（©安川タツヤ）的なものばかりで収拾つかなくなってしまったので勝手に終了。そこで姉御に、新コウナアの企画申し立てを敢行してみた。

＊

紅 なんだテメェ。前回の記事でアヤシイと思ってたら（前号は技とは無縁のペット話だった）、案の定終わっちまったじゃねーか。最近煮詰まってるから何かのヒントにしようと思ってたのによ。ちゃんと続けろバカ。

——ま、そんなこと言わず（笑）。でもってですね、新コウナア開始にあたり、姉御が最近凝ってることをお聞きしたいと。

紅 そうだな……通信販売か。サイズがでけーからよ、市販のモノじゃなかなか都合が良くなくて。

——下着とか。やっぱ姉御の場合Eカップッスからねぇ。特にブラジャーなんか、おばさん向けのヘンなデザインしかないでしょ。

紅 Eカップは余計だよ。ま、下着でもけっこー掘り出しもんはあるな。

——じゃあ最近の姉御は、日々カタログを取り寄せては悦に入る今日このごろって感じッスか。

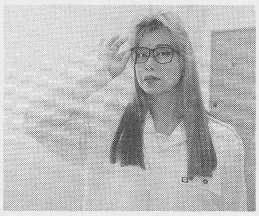
紅 わりーかボケ。

——ボケ呼ばわりしなくても……（笑）。ここんとこ通販業者も増えたし、いろんなメーカーもあるでしょ。どこらへんを？

紅 もーいろいろ。ニッセンとか三越とか、外国のものまで。

——最近個人輸入とか流行ってるでしょ。日本語の解説がちゃんと付いてたりして。

紅 そうそう、LLビーンとかな。……じゃあ次回からよ、通販販売の何たるかを極めたオレさまが通信販売で買ったモノとかメーカーの紹介、買い方のコツとか教えてやるよ。ま、楽しみにしてろや。



▲通販が趣味という意外な一面を持つ紅の姉御。次号からその奥義を説く!!

JWP ダイナマイト関西ヘアヌード計画。

何ともダイナマイトな企画を思いついたもんだ。読者プレゼントポラでのお下劣ポーズに始まり、最近はほかの選手へのポーズ指導などにも積極的なダイナマイト関西。毎号ごとに繰り出すオリジナリティ満載の痴態指南に、本誌編集部では〝カントク〟の称号を与えられている事実、さらに自らのヘアヌード写真集の版元を探しているという驚愕の情報（自己申告）から、今回の計画が立ち上がったという次第。

＊

どのようなヘアヌードを撮られたいか……語りきれへん。ウチの団体ではキューティーや尾崎やら、この前は福岡ごときにまで写真集出されてもうたけど、まだアイツら甘いよ。JWPの選手ってどうしても一線が越えられないやろ。だからチエちゃんが一線も二線も三線も越えたものをお見せしようと（笑）。だいたいやな、そういう企画をウチに持ってこないことじたいがおかしいで。

ほかの人のヘアヌード写真集を見るか、って？ バンバン見てるよ。研究やん、だってカントクやもん。どういうアングルがいいか、どういうポーズが男をソソるかとかな。最近も見たで、キューティーとか尾崎とかデビルさんのをお風呂で（笑）。無修正で気持ち悪くなったわ、ガハハハハ!!

そや!! 最終的にはチエちゃんがカントクとして、誰かのヘアヌード写真撮ろ!! よっしゃよっしゃ。やっぱチエちゃんはシャッター押すだけでええ、カントクやもん（笑）。モデルはチエちゃんが探してくるから。それかファンの子で関西に撮ってもらいたい人募集とかな。そうしよ!! チエちゃんが履歴書全部チェックするから。スリーサイズ全部書いてくるようにな。写真も忘れんといてや。……で、ガタイの良いヤツはプロレスにスカウトする（笑）。

＊

とのことです（笑）。はたして応募者は!?

▲自身のヘアヌードはおろか他人の撮影まで野望を抱くカントク。応募者はいるのか!?

FMW 中山香里のぴち²の主役。

第1回「私と宇宙人」。

宇宙人と聞いて、信じる人と信じない人とがいると思いますが、自分は今だにネッシーとかを信じているので、宇宙人も絶対にいるはず！ と思っています。一時期有名になったミステリーサークルも、実は人工的に作られたものだそうですが、自分は「あれは絶対UFOが降り立ったものだ」と思っています。

よくTVの「緊急特番」とかのUFO特集では、日本とかでも、いろいろなUFOの特集では、日本とかでも、いろいろなUFOが目撃されていますが、こんなに信じている私でも、まだ一度もお目にしたことがありません。でもTVに出てくる宇宙人は、見た目から怖い顔をしてて、人間を誘拐して実験などをしてしまうとても悪いヤツのようですが、私の頭の中にいる宇宙人は、そんな悪いヤツとは180度正反対のとても良いヤツで、火星に住む火星人です。見た目は、よくマンガとかに出てくる赤い巨大タコのような感じで、名前は私が勝手につけたのですが、パピロン君といいます。宇宙人に性別があるかどうかわからないのですが、呼びやすいのでパピロン君と言います。

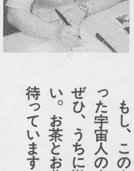
パピロン君は、別に地球にやって来て、悪いことをするということはなく、ただ火星にいて、のびのびと暮らしているという感じです。TVを見ていてときどき「宇宙人は何を食べてるんだろう」と思うことがあるのですが、パピロン君はなんとなく、果物なんか食べているのが似合いそうですが、火星に果物なんてあるのか……が疑問です。

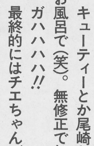
そのあたりを、UFO研究家の矢追さんにでも聞いてみたい所ですが……。

パピロン君はあくまで自分の空想なのですが、でもこんなにも広い宇宙なので、絶対宇宙人はいるはずです。だからパピロン君も必ず火星で暮らしているはず!! と思います。

もし、この文を読んでくださった宇宙人の方がいましたら、ぜひ、うちに遊びに来てください。お茶とお菓子でも用意して待っていますので……。

文●中山香里





illustration●KAORI NAKAYAMA

※またJ-WAVEでも毎週火曜日の夜6時から『J'S CALLING』という番組もやってるぞ。リクエスト受付中の生番組だ （さらに次ページへ）

GAEA JAPAN

ボンバー光のボン²クッキング。

▲タクシーは運転できれば料理もこなす。ボンバーは、そんな女だ（どんなだ）

ガイアではいま、ボンバー光が熱い（Ⓒトウナイト II）。

そんなわけで、ファイト内容はおろか、試合後のウイットに富んだマイク・アピールがイイ感じのボンバー光選手のコウナア。テーマはずばり、料理だ。先日ガイアの道場にてクッキング中のところを突撃取材。

＊

——料理って昔からやられてたんですか？

光　はい。料理好きなんです。

——ちなみにいまは何を作ってるんですか。

光　ピーマンの味噌炒めを。

——では、作り方を教えてください。

光　ピーマンを切って、味噌を混ぜてフライパンで炒める。以上です。

——はあ（笑）。これは誰と食されるんですかい？

光　KAORUさんと。

——新人はゆで卵の白身にほとんど味を付けない食事をなさってますが、上の選手は？

光　食べないんです。そう、付けるといえばイチゴとか柿にマヨネーズで食べますよ、ウチの方では。

——はぁ!?　どこの出身ですかボンバーさん。

光　富山ですけど……嫌いですか？

——いや、嫌いも何も、そんな風習はねぇですよ東京では。

光　うそ、そうやって食べません？　ウチの地元では、果物ですけどそうやって食べます。そういうもんなんです。

——果物に付ける風習が（笑）。

光　……ウチだけかもしれないです（笑）。

——例えば東北の人は味付けが濃いじゃないですか。富山ってどうなんですか？

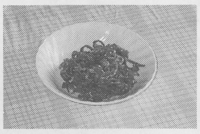
光　ウチの方は薄いです。関西と同じぐらい。

——作る場合にも、そうなっちゃいますか。

光　はい。味噌汁とか、みんなに薄い薄いって言われるんですよね。

——でもって、今日のクッキングはピーマンの味噌炒めだと。

光　これがまたご飯いっぱい食べられるんです。


▲これが完成したピーマンの味噌炒めである

IWA JAPAN

市来貴代子のなんでもデスマッチ。

キミはIWA　JAPAN女子の試合を観たことがあるか？　だいたい興行の第2試合に組まれてて、マッチメイクは市来貴代子と新谷朋江のみ（一応、練習生で女子が1人いるけど、まだデビューは未定）だが、それはそれでなかなか味わい深いものがあるなりよ。

市来はLLPWから、新谷は全女からという既成団体の出身者。だが、それぞれの団体にい続けたら数々の制約があるため（それを否定はしないけど）、いかにも新人ちっくな攻防しかできなかったはずだ。

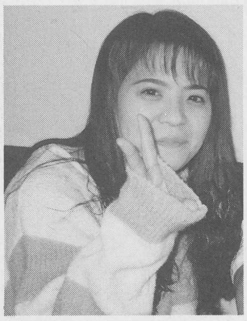
だがですよ。IWAの女子は彼女たちたった2人で作り上げてゆくもの。よって絶対的な自由がそこにはある。だもんでも―大技ビシバシ使いまくってのびのび闘ってたぞ。

プロレスとして冷静に観るなら、キャリア不足ゆえしょっぱいし拙い。でも、自分のやりたいプロレスができる場で堂々とプロレスをやる市来&新谷には、非常に好感が持ててしまうのだ。

あ、さて（Ⓒ小林完吾）。そんな中で、最近ちょぴっとずつではあるけど、己のキャラを確立しつつあるのが市来貴代子。前号のインタビューで「私はヒール志望。LLPW時代から紅夜叉さんに憧れてたんですけど、いまは井上貴子さんみたいに意地悪な感じがいいですね」と語っているが、いま会場で見せるファイトはまさにそれ。試合を重ねるごとにふてぶてしさはパワーアップ。対戦相手が毎回同じなので、なかなか大変であろうが、ぜひIWA女子部の確立に向けてがんばってもらいたい。

でもってだ。IWA女子の活性化のためにはデスマッチも辞さないとゆー発言まで出ちゃう市来貴代子に、ボクたちの愛の手を差し延べてみないか？　つまり、市来VS新谷で、女子初のデンジャラスなデスマッチを募集したいのだ。

んで、それは必ずしもリング上で行われる必要はないッス。例えば〝朝までわんこそば食いまくりデスマッチ〟でも、〝上限1万円・買い物やりくり上手デスマッチ〟でもOK（笑）。みんなでいろんなデスマッチを考えて投稿してちょ。


▲現役レスラーとして初めて、前号の完成記念打ち上げに参加したときの市来選手

●知る人ぞ知るナイスバディ、JWPのレフェリー乱馬翔の水着特集をお願いするッス!!（神奈川県／佐藤俊幸）

キヨ・ホンダの世界

幻の女子レスラー、キヨ・ホンダの正体を解き明かすこのコウナア、いよいよ核心に迫ってきたぞ。

で、だ。前回は92年3月に〝週刊大衆増刊〟というカタチで（笑）発行されたムック『超プロレス』（双葉社）に、キヨ・ホンダの正体を知るキーワードが隠されている、と記した。この本の奥付を見ると、執筆／編集協力にプロレス評論家の大家である門馬忠雄先生に菊池孝先生、さらには現在みちのくプロレスの名レフェリーにして多団体男・テッド田辺氏の名もうかがえる。写真は原悦生氏などと、かなり大物が揃っており、編集者のコネクションの強力さがうかがえる。

そして〝PRODUCTION DIRECTOR〟（実質上の偏執のイニシアチブを握る者）のクレジットには……YUSUKE WALLY YAMAGUCHI、つまり元『ゴング』編集者からレフェリーなど、プロレスのさまざまな現場に居合わせた山口〝ウォーリー〟雄介氏の仕切りによる本だったのだ。そして、この本の中の企画記事『USA500』とゆーアメリカン・レスラー500人のカタログで、こんなお方の紹介が……。

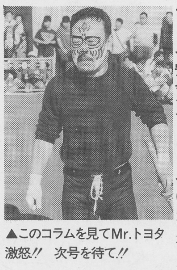
ミスター・トヨタ。

そう、初期みちプロでスペル・デルフィンや新崎人生らのルード側についた悪徳マネージャーが、すでに存在していたのである（91年ごろアメリカ南部の独立団体に出没、と記されている）。さらに読み進めると、こんな一節が。

「——同じく日系の女子プロレスラー、キヨ・ホンダと共に悪らつなファイトでファンの憎悪を浴びる」

てことはだ。91年にキヨ・ホンダがリングに立っていた、しかもミスター・トヨタにキヨ・ホンダ。ともに自動車メーカーが名字という、何ともおしゃれ小鉢ちっくで安易なネーミングではないか。そんな事実に気づいたある日、某団体の関係者から衝撃的な情報が!!

次号こそ、感動の最終回なのじゃ。


▲このコラムを見てMr.トヨタ激怒!!　次号を待て!!

女子プロ・想い出波止場

さて、前回に引き続き女子プロレス史上に燦然と輝く歴史的かつとびっきりモンドでカルティーな音源を、本誌の読者様にだけこっそりお教えしちゃおーというこのコラム、今回は、スーパーヒールの女王・デビル雅美選手が全女在籍時の83年、トリオ・レコードからリリースした『デビル・命の限り』をご紹介させていただきます。

女子プロレス界のヒールとしては初のレコード・デビューという快挙を成し遂げたデビル様ですが、この曲はその強烈なインパクトを持つタイトルを見ればわかりのとおり、ギンギンムード演歌調フレイヴァーの溢れる非常にソウルフルなナンバー。歌詞の方も、〝女だてらに悪さの限り　ひどいヤツだと笑うがいいさ〟とか〝そうさ私は玄海育ち〟〝生まれ育った故郷の空へ　錦飾って帰りたい〟などというハードなフレーズがてんこ盛りという贅沢さ。いわゆる大衆演劇の花・朝香光代の母モノ時代劇に村田英雄の『王将』、そして吉幾三の『俺は田舎のプレスリー!』という演歌の王道エキスを、1曲という小宇宙の中で巧みに凝縮し、コンフュージョンさせた点には特に注目したいところです。また歌唱という点では、デビル選手の体つきからはえらく想像しづらいと評判のカワイイ声も聞き逃せないポイントといえるでしょう。

B面は『最終電車』。こちらは恋人との別離の悲しみを一緒に乗り合わせた女性と慰めあう、というテーマなのですが、中の一節にある〝大きな袋を二人で持って　一緒に海まで沈めにゆきます〟というフレーズが妙に引っかかります。袋の中身はディメンティアとかピンク・キャディラック、はたまたザ・スコルピオンか……（天田麗文？）。うーん、とっても猟奇的だわ（笑）。かの〝しじゅうから〟でもリクエストNo.1（うそ）。年1回のディナーショウでは純白のドレスに身を堤、熱唱するデビル様の定番にもなっているこのナンバー、マニア必携の名盤ですぞぅ。

（中村絵麻）

▲髪形や水着が時代を感じさせるジャケ。激シブである

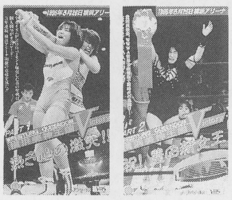
※さらに中部地方のみだけど、中京テレビの毎週土曜日深夜12時25分から『KISS MISS CHICK』という情報番組の音楽コーナーで、テイトウワと一緒に喋ってる（まだ続く）

Video!!Video!!Video!!

女子プロレス特選ビデオ紹介

全日本女子プロレス『大阪美神王国 SUCCESS PART1〜2』

●3月21日・大阪城ホール大会の模様を2巻組でノーカット収録。注目するのは何といっても第100代WWWAタッグ王者決定ワン・ナイト・トーナメント。1巻目に収録されている1回戦から全チームが熱く激しい戦いをしているので、とてもじゃないけどポテチー片手の鑑賞なんてわけにはいかない。2巻目の準決勝ではさらに熾烈な潰し合いを展開しているので、とてもじゃないけど煙草をくわえながらの鑑賞、なんてわけにもいかない。それでも、W井上ファンの貴方は、最後の最後にゆっくりと美酒を味わうことができるはず。輝かしい優勝の余韻に浸りながらね。（全日本女子プロレス興行／2巻組定価18000円）



全日本女子プロレス『横浜美神王国 VICTORY PART1〜2』

●3月26日・横浜アリーナ大会の模様を2巻組でノーカット収録。この日、豊田がアジャを破り見事、WWWAシングル王者に輝く!! いうなれば豊田時代の幕開けの記念樹的ビデオ。試合後の豊田の北斗への対戦直訴は来たるべき全女乱世の序章なのかもしれないぞ。そのほかにも三田＆下田のUWA世界タッグ最多5度目の防衛、山田の1年ぶりのオール・パシフィック王座返り咲き、堀田vs飛鳥の因縁のアルティメット・ルール対決、ブル様vs京子による涙、涙の師弟対決、と話題が盛りだくさんの内容。さらにはゲスト解説で、この日に引退表明し5月にリングを去ったみなみの声も聞けるッス。（全日本女子プロレス興行／2巻組定価18000円）

JWP JAZZ&SOUL『ダイナマイト関西VS尾崎魔弓』

●3月17日・博多スターレーンで行われた興行の完全ノーカット版。何といっても尾崎魔弓が己の新境地を開いた、D関西とのストリートファイト・マッチ収録が最大のポイント。テレビ未放映の戦慄の映像が。JWP事務所でも通販してるので、詳細は☎03-3839-4161に問合せを。（JWPプロジェクト／110分／定価7000円）

GAEA JAPAN『復活！長与千種』

●長与千種が全女〜JWP参戦〜GAEA JAPANを旗揚げするまでのヒストリー・ビデオ。試合の映像はもちろん、新人レスラーのオーディションやトレーニング風景などが織り交ざった、まさに現在のオール・アバウト・長与千種&GAEA JAPANといった感じ。KAORUやボンバー光もゲスト出演しているぞ。（バップ／60分／定価7800円）

LLPW『宣戦布告』

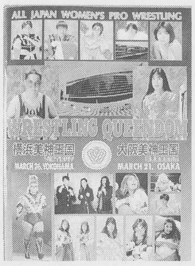
●LLPWの95年上半期の最大のトピックが、半田美希の造反。本作は基本的に2月10日・後楽園ホールの模様を収録したものだが、この日は半田が現在の状況に至る序章なのだ。2月24日〜3月3日までの半田の一連の不可解な動きをハイライトで追加収録。青野敬子のデビュー戦も入っているぞ。（ポニーキャニオン／90分／定価4980円）

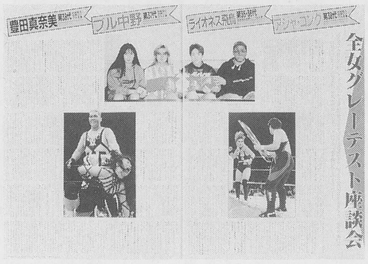
LLPW『猪突猛進』

●3月17日・後楽園ホールのてんこ盛りな内容を凝縮。立野vsE沢井のLLPW認定シングル選手権、最後の対抗戦!? 全日本タッグ選手権、そしてH斉藤vs半田美希の制裁マッチのほか、3月25日・銚子市体育館での風間vs半田の模様もダイジェスト収録という、非常にオトクな1本である。（ポニーキャニオン／90分／定価4980円）

Books!!Books!!Books!!

今回はグーなパンフとイキなミニコミの紹介だよ!!





全日本女子プロレス・オフィシャル・パンフレット『WRESTLING QUEENDOM』『全女MOVEMENT95』

●パンフにおいても全女がイチバン!? やはり、圧倒的なボリューム、上質な紙質、バラエティに富んだ誌面構成に企画などなど。いまや『女子プロレスグランプリ』の最大のライバルが、この全女パンフなのである。例えば3・21大阪＆3・26横浜の各興行で売られた"WRESTLING QUEENDOM"のパンフは全70ページ。完全スタジオ撮影による選手紹介ページ（デビュー以後のデータ＋魂のほとばしり原稿付き）や、豊田軍団マイナス豊田真奈美の対談に写真まんがなどがぎゅうぎゅう詰め。また最新の『リングスターPROGRAM』は井上貴子が表紙の40ページ＋豊田軍団＆井上京子＆バイソン木村のポスター付き。圧巻は、飛鳥・ブル・アジャ・豊田というWWWA第35〜39代王者の座談会。入手希望の方は会場で直接買うか、☎03-3493-6541まで。

ミニコミ『なんたって全女！』

●熱烈な全女ファンの同人誌。マンガあり小説あり選手へのオピニオンありと、作者・浅田武朝サンのほとばしりが1冊に凝縮されまくりだ。送料込み600円を郵便定額小為替で〒154東京都世田谷区駒沢3-6-14 下山荘201 浅田武朝まで。また詳しい本の紹介を希望の方は80円切手同封で上記までお問合せを。

JWP公認FC通信『No.1』

●JWP公認FC"No.1"の会報。VOL.4の最大の注目点は、何といってもナイスミドル・篠崎清社長の業界初ロング・インタビューに尽きる。なんたって全部で12ページ。プロフィールから選手管理、芸能活動にプロモーションなどなど、業界の内部までエグるディープな内容になっている。ただ、今年の3月10日発行になっているのに、このインタビュー収録はジャスト1年前など、多少古めなのが気になるが。お問合せは、〒049-01 北海道上磯郡上磯町富川2-6-10 武藤善正まで80円切手同封でね。

●この本を買おうとしたら小4ぐらいの女の子も買おうとしてて、何だか嬉しくなりました。（北海道／100代目王者おめでとう）

※そして、8月25日にCD-ROM（MAC／WINDOWS）『がんばれ！ いぬちゃんロケンロール編』（バンダイビジュアル）がリリース予定なのだ

ライブ・スケジュール。June→

●団体問い合わせ：全女 03-3493-6541／JWP 03-3839-4161／LLPW 03-3945-7926／FMW 03-5496-0671／IWA JAPAN 03-3352-3366／GAEA JAPAN 03-3715-1514

☆全日本女子プロレス☆

6月7日（水） 長野・茅野市総合体育館
10日（土） 山梨・田富町パチンコニューワールド駐車場特設リング
16日（金） 宮城・名取市民体育館
17日（土） 宮城・追町民体育館
18日（日） 岩手・種市町民体育館
19日（月） 岩手・二戸市体育館
20日（火） 北海道・苫小牧市総合体育館
21日（水） 北海道・留萌スポーツセンター
22日（木） 北海道・帯広市総合体育館
23日（金） 北海道・旭川大成市民センター体育館
24日（土） 北海道・釧路・鳥取ドーム
25日（日） 北海道・北見市立体育センター
26日（月） 北海道・名寄市スポーツセンター
27日（火） 北海道・札幌中島体育センター別館
28日（水） 北海道・室蘭市体育館
29日（木） 北海道・小樽市総合体育館
30日（金） 北海道・函館市民体育館
7月1日（土） 青森・弘前市克雪トレーニングセンター
2日（日） 秋田・大館市民体育館
3日（月） 青森・五戸ドーム
4日（火） 福島・原町市体育館
8日（土） 千葉・八日市場市青果市場（予定）
10日（月） 群馬・伊勢崎市民体育館
12日（水） 茨城・出島勤労者体育センター
13日（木） 茨城・下妻市立総合体育館（予定）
14日（金） 千葉・松戸運動公園体育館
15日（土） 埼玉・大宮スケートセンター
17日（月） 新潟・長岡市厚生会館
18日（火） 新潟・柏崎市総合体育館
19日（水） 新潟・新発田市カルチャーセンター
20日（水） 新潟・リージョンプラザ上越
21日（金） 長野・長野市民体育館（予定）
22日（土） 長野・穂高町総合体育館
23日（日） 茨城・潮来町ショッピングセンターアイモア（予定）
25日（火） 群馬・サティ太田高林店北駐車場特設リング
26日（水） 茨城・取手競輪場坂下駐車場特設リング
28日（金） 埼玉・玉川村ヒーローオークション駐車場特設リング（予定）
29日（土） 神奈川・平果地方卸売市場
30日（日） 長野・上田市民体育館
31日（月） 東京・後楽園ホール
8月4日（金） 埼玉・西武球場駅下駐車場特設リング
5日（土） 埼玉・秩父市民体育館
6日（日） 山梨・上野原旧上野原中学校グランド特設リング
8日（火） 山形・山形県体育館
9日（水） 山形・余目町総合体育館
10日（木） 秋田・本荘市民体育館
11日（金） 山形・新庄市体育館
12日（土） 福島・船引町民体育館
13日（日） 東京・後楽園ホール
16日（水） 東京・八王子マルチパーパスプラザ（予定）
19日（土） 静岡・沼津駅北管理地特設リング
26日（土） 東京・荒川区南千住駅前イベント広場特設リング（予定）
28日（月） 愛知・岡崎市体育館
29日（火） 愛知・江南市民体育館
30日（水） 大阪・大阪府立体育会館（第1）

☆JWP☆

6月11日（日） 東京・後楽園ホール
16日（金） 東京・両国国技館
23日（金） 福島・鶴ヶ城体育館
24日（土） 山形・山形県営体育館
25日（日） 秋田・秋田県産業会館別館
26日（月） 岩手・岩手県営体育館
7月3日（金） 埼玉・深谷市民体育館
9日（日） 東京・後楽園ホール
16日（日） 新潟・越路町町民体育館
22日（土） 静岡・静岡産業館
8月3日（木） 東京・東京テレシアター
9日（水） 熊本・熊本市体育館
10日（木） 福岡・博多スターレーン
17日（木） 大阪・大阪府立体育館第2競技場
20日（日） 埼玉・大宮スケートセンター
27日（日） 東京・後楽園ホール

☆LLPW☆

6月23日（金） 神奈川・クラブチッタ川崎
7月8日（土） 埼玉・草加市スポーツ記念体育館
18日（火） 東京・駒沢公園体育館
8月4日（水） 東京・後楽園ホール

☆FMW☆

6月14日（水） 岐阜・恵那市民会館
16日（金） 島根・益田市民体育館
18日（日） 佐賀・佐賀スポーツセンター
19日（月） 大分・中津市勤労者体育センター
20日（火） 熊本・人吉市文化センター
21日（水） 宮崎・延岡市民体育館
22日（木） 福岡・博多スターレーン
23日（金） 山口・山口県体育館
24日（土） 岡山・笠岡市体育センター
25日（日） 京都・醍醐グランドーム
27日（火） 東京・後楽園ホール

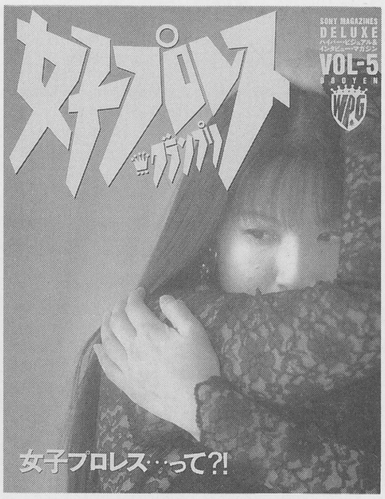
☆IWA JAPAN☆

6月7日（水） 長野・長野市民体育館
7月11日（火） 大阪・大阪府立体育館第2競技場
12日（水） 山口・柳井市民体育館
13日（木） 山口・小野田市民館ホール
14日（金） 福岡・博多スターレーン
16日（日） 東京・立川競輪場駐車場
17日（月） 埼玉・JR川口駅東口広場

☆GAEA JAPAN☆

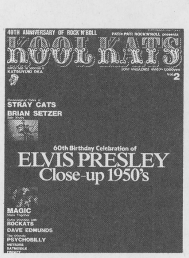
6月18日（日） 東京・後楽園ホール
7月29日（土） 東京・後楽園ホール
8月5日（土） 新潟・新潟市体育館

バックナンバーのお知らせ



●ここで、『女子プロレスグランプリ』のバックナンバーについてのお知らせッス～。現在、在庫が残ってるのはナナナント!! VOL．5だけなのよ～ん。つまり、創刊号からVOL．4まではなくなっちゃった～い。ゴメンね。でもって、入手方法はカンタン。お近くの書店で「『女子プロGP』VOL．5を売ってくりくり」と言えば、1～2週間でゲット可能。さあ、BUY OR DIE!!

とっておきのマガジン紹介

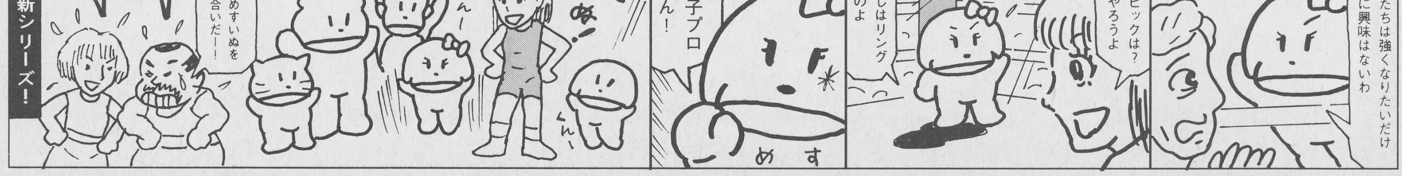


▲ともにソニー・マガジンズから絶賛発売中!!

●っぁっ、あー。安川ッス。突然ですがクールな本を紹介するッス。バイトの崇クンの本業の芸能誌『月刊クラビッツ』（480円）と自分が編集に携わったロカビリー専門誌『KOOL KATS VOL2』（1000円）ッス。ちなみに自分のルーツはココにあるッス!!

で、投稿を待つよ

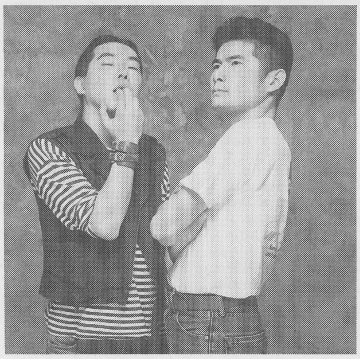
●てなわけで、より内容がコアティックになった〝出張所〟もこれでおひまい。いかがだったかな？ 内容を詰め込みすぎた分、単純に労働すべき作業が増えて、自ら墓穴を掘っちゃった～い。でもって、このコウナアは読者のみんなで作るコウナア。キミたちの女子プロレスに対する熱い想いをブツけてみたり（魂のほとばしり、REAL～、イラストなどなど）、女子プロのディープな部分を問うてみたり（大奥探検隊）、レスラーさまのおコラムにリクエストしてみたり（おコラムⅡ）などなど。中にはキミたちのご協力がなければ成立しないコウナアもあるから、ガンガン送りつけてみるのじゃ!! また、読者さまが半ば強引にコウナアを作り上げてしまうのもオッケーよ～ん（例：イラスト、ミニコミ紹介）。そんなこんなでこのページへの投稿方法を。巻末にアンケートはがきを使うも良し、官製はがきでも良し。封書でも文句は言いません。キミたちの熱いほとばしりが、このコウナアを生かす!! んで、あて先は――。
〒102 東京都千代田区五番町6-2 ㈱ソニー・マガジンズ『女子プロレスグランプリ』編集部・出張所CORE係まで。ペンネームでの投稿もオッケーッス。ほだらば、投稿待ってるわ～ん♡



編集長の、魂のほとばしり

『女子プロGP』は、エゴイストの宴である。

過日、長与千種選手のインタビューをしているとき、こんなことを言われた。
「ホント、プロレスってビジネスにならないと思いません？ これほどお金にならない商売もないし、それを知っててやってんだからバカですよねぇ私たち」
また、ある日後楽園ホールで会った、プロレス雑誌のえらいひと（笑）にも、こう言われたことがある。
「キミたちのところは、どうやって毎回作ってるんだい？ お金がかかって大変だろう、あの作りじゃ」
もうひとつ。引退前の大仁田厚にインタビューしたときに出た言葉。
「プロレス業界はな、4・2東京ドームと5・5川崎球場でブームが終わる。そのあと2〜3年は冬の時代になるな、きっと」
さらに、あるライターに言われたこと。
「女子だけじゃない内容にしたら？ 例えば『男子プロレスグランプリ』にしてみるとか。その方がもっと売れるとは思うけどねぇ」
そう、ビジネスとしては決してオイシイ類いのものではなく、大半のページがスタジオ撮影ゆえ製作費もバカ高（だからギャラが削られて、安い〈涙〉）、そして業界もいまや冬の時代にさしかからんとする厳しい状況。さらに〝女子〟オンリーという制約。これだけ、必ずしも良くはない条件の中、なぜ僕たちは『女子プロGP』を作り続けるのか。もちろん女子プロレスが好きってのは大前提として。
それは、この本を作るときに毎回味わうスリルを悦んで体感したいのかもしれない。
ドキ、ドキ、ドキ、ドキ!!
『女子プロGP』を作っているとき、僕はいつも不安と緊張と興奮と恍惚と闘っている。
なぜかって？ この本は、毎回の発行が保障されている定期刊行物じゃない。だから、1回コケたらもう2度と出せない。つまり、絶対ヘタを打てない、過酷な条件の中で闘っている。
ドキ、ドキ、ドキ、ドキ!!
そのときの心情は、まるで次から次へと罪を犯しつつ、なかなか摘発されない犯罪者のようなものか（たとえは良くないが）。「もうダメだろう、もうパクられるだろう」と思いつつも罪を増やす。そしてその犯罪の最中には、常に高揚感を伴ったドキドキ感がつきまとう。そう、ちょうどイタズラっ子がイタズラの最中に味わう、あの感覚。もしくはケンカの真っ只中に多量に分泌されたアドレナリンによる〝速い感覚〟。それを何回も何回も味わいたいから、僕はこの本を作り続ける。
ドキ、ドキ、ドキ、ドキ!!
その際には、とことんゴージャスに振る舞う一方、制約が多ければ多いほど、完成したときの悦びは大きい。それを体感する場が、僕にとっての『女子プロGP』なのだ。
こう書いてると、「じゃあお前は、自分勝手なエゴを満足させたいがために本を作ってるのか」と言われるかもしれない。……その通りでーす（笑）。ぼくちんエゴイストッス〜。
でも、それが受け手＝読者さまの要望を満たすものだったらどうするよ。52ページの長与千種選手のインタビューを読んだ？ ウチらも、おこがましいが長与選手みたいな心境で、この本を毎回作っている。
テメェのカラー（作りたいものと置き換えても良い）を存分に出し、そして自ら楽しむ。その結果、読者さまが同調したり共感を得たりすることで支持を受ける。それが、僕の雑誌作り、編集というものに対するスタンスだ。そしてこれが、前号で記した〝ファンとの距離感が絶対的に近い〟ということ。
不定期な刊行ゆえレギュラーの仕事をおざなりにせざるを得ず、ハッキリ言って『女子プロGP』に関わってから収入減りましたよホントの話。だからみんな、編集長にお布施するぞお布施するぞお布施するぞ〜。でも、そんなテメェのエゴだらけで作った本がみんなに支持されるということ。これほど嬉しいことはないし、これほど読者さまをありがたいと思うことはない。ありがとね♡
そして、この本を支持する読者さまと僕は、いわば〝共犯者〟だ。そのキーワードは女子プロレス。みんな、もっとワクワクさせる試合が観たいし、ドキドキさせてくれるような本音の声が知りたい。『女子プロGP』は、それらが体験できるささやかなパーティーの場であるわけだ。でも、ちっぽけな催しにはしたくない。とことんゴージャスな宴にしたいわけ僕は。その方がカッチョいいじゃん。
そして僕は、そのパーティーの主催者だ。でも、だからといって君たちにおもねるような姑息な真似はしたくない。僕は〝紙の芸者〟なんかじゃないんだから、過剰な奉仕はもっぱらゴメンこうむりたい。
そんな、ワガママで自分勝手な主催者の宴である『女子プロGP』。だけどさ、このパーティーそのものは楽しくないか？ だったらもうちょっと、付き合ってよ。　（金井　覚）



▲『女子プロGP』編集長のセクハラキング金井と副編の横浜ジミーの近影。みんなバカにしてるでしょ!!

編集長からのお知らせッス。

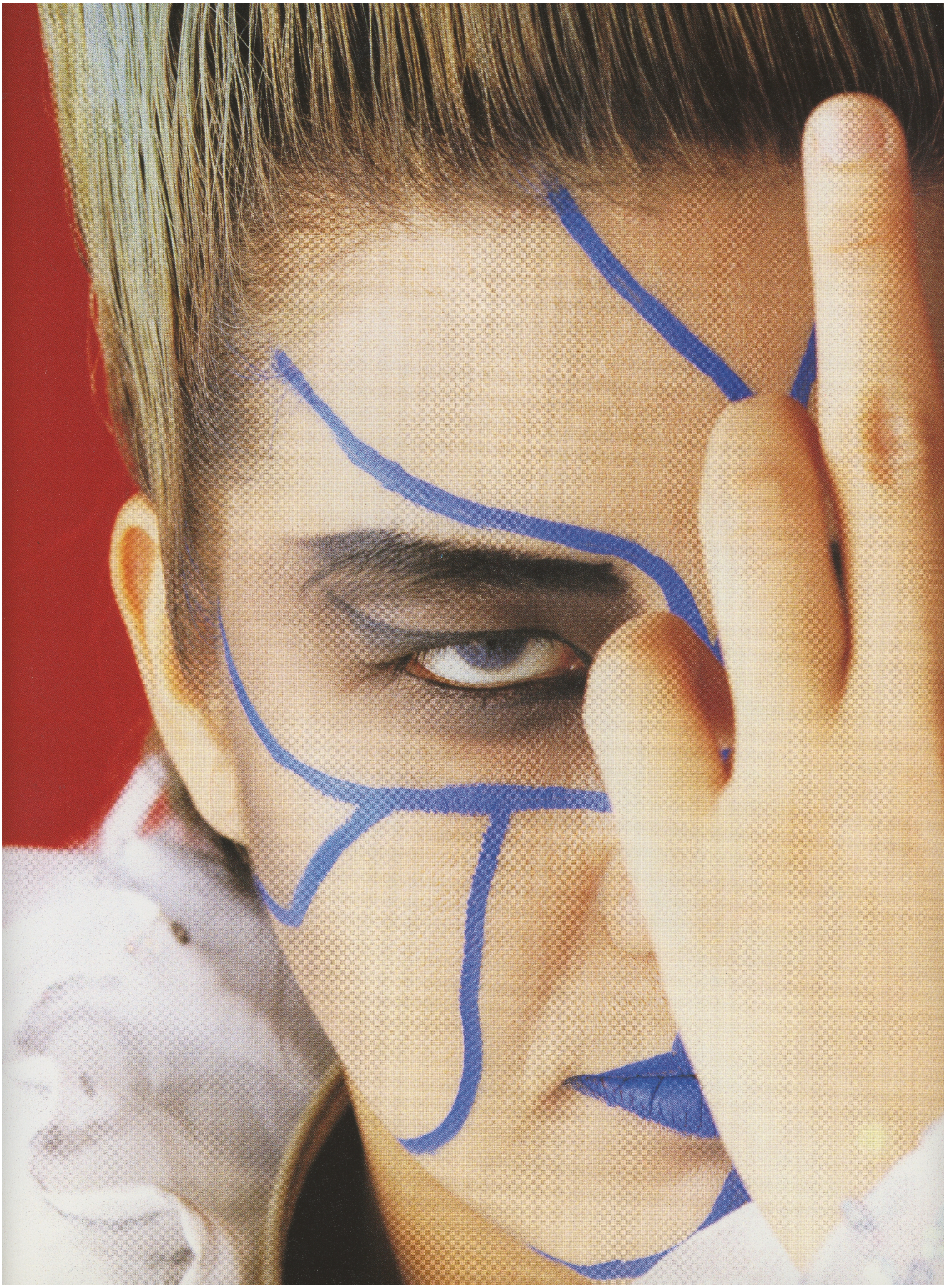
NOW PRINTING

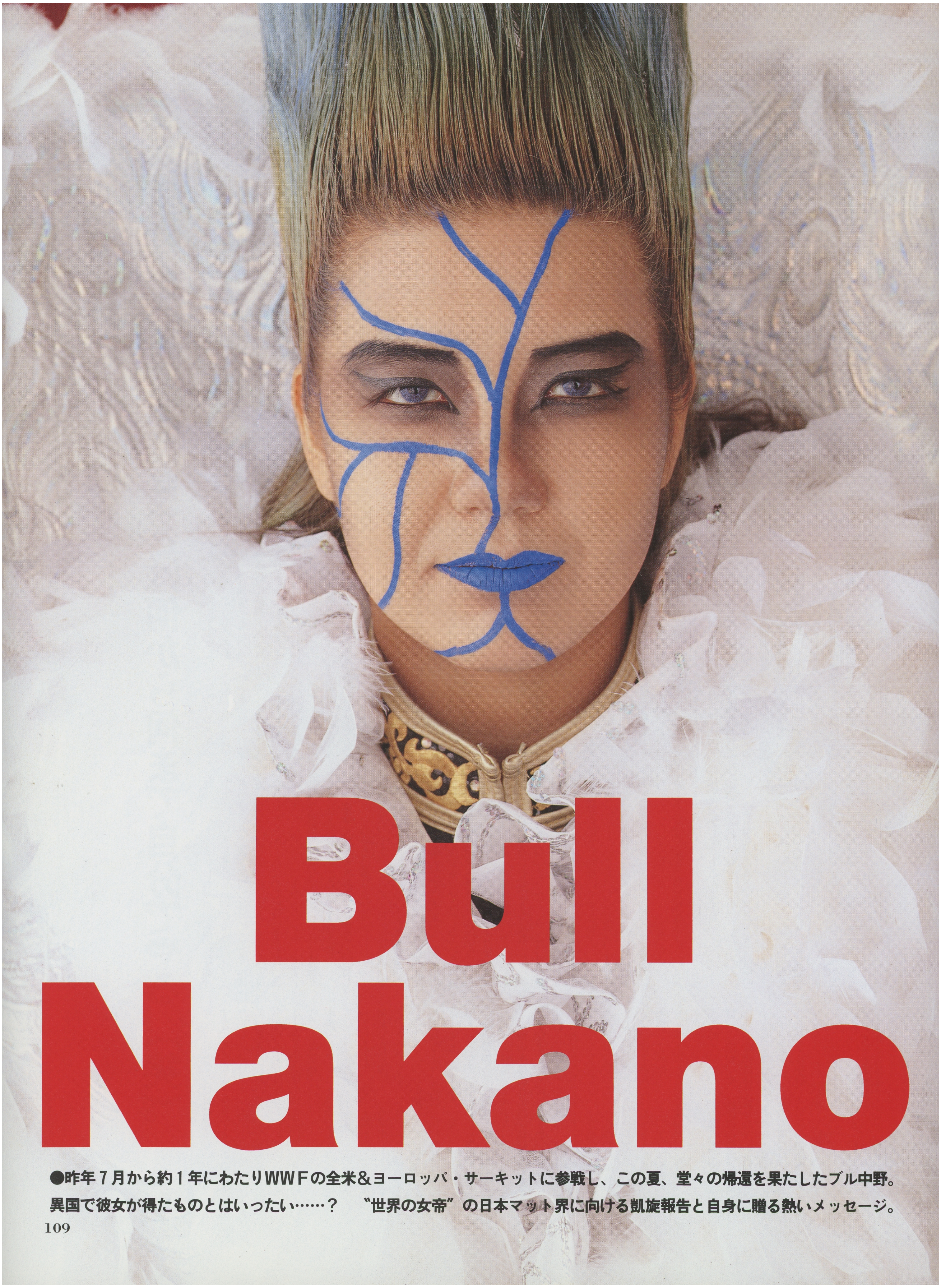
前号でも告知したが、本誌セクハラ編集長・金井覚の処女（童貞）単行本『アイドル・バビロン　外道の王国』が太田出版から（たぶん）夏ごろに刊行が決定!! “外道”“ダメなひと”などと呼ばれるハードコア化したアイドル・マニアの理解不能な言動を追った、初のドキュメント・ルポ。詳細は寝て待て（笑）!!

※この写真まんがはフィクションです。が、安川タツヤのノリはノンフィクションです。……やっぱバカにしてるでしょ!!

女帝、帰還す。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA
Text●SHINO HOJOH
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA





Bull Nakano

●昨年７月から約１年にわたりWWFの全米＆ヨーロッパ・サーキットに参戦し、この夏、堂々の帰還を果たしたブル中野。異国で彼女が得たものとはいったい……？　“世界の女帝”の日本マット界に向ける凱旋報告と自身に贈る熱いメッセージ。

女帝、帰還す。

渡米教訓。身のまわりのことは何から何まで自分でやる（笑）。

—長期のWWF遠征、お疲れさまでした。日本のプロレスとアメリカのプロレスの一番の違いはどういうところに感じましたか。

中野　日本ではプロレスは闘いですけど、向こうではショーですよね。アメリカでは〝人に観られる〟ということをすごく意識しています。そういう意味ではプロだなあと感じることが多かったですね。とにかくまず、人に観られて恥ずかしくない身体づくりを徹底してやってます。食生活も筋肉のことを第一に考えてますよ。鳥肉しか食べないとか、プロテインも常に個人で持ち歩いて決まった時間に飲むようにしています。そんな人たちを見てると、いままでの自分の身体ってみっともなかったなあって反省しました(笑)。ただ大きければいいってもんじゃないですよね。

—アメリカのレスラーはステロイドとかで筋肉美を作っているのかと……。

中野　私もそう思っていたんですよ。そうしたら、2週間に1回ぐらい検査があって、もしそれにひっかかったら、もう使ってもらえなくなります。だから、それであの肉体美を保持しているのはすごいですよね。

—ほかにもいろいろ新鮮に感じることは多かったでしょうね。

中野　そうなんですよ。日本にいるときは仕事のことは会社が決めてくれるし、身のまわりのことは新人がやってくれる。でも、逆に自分では何もできない。それが怖いから、自分はリングの上で存在感を出そうとしてたっていう感じでしたけど、アメリカでは、何から何まで自分でやらなければならなくて、それがかえってリングの上以外の自分の自信になったんです。だから、今回こっちに帰ってきてからも、怖くないっていうか、もし何かあっても自分でどうにかできるなって思ってますね。

—貴重な体験でしたね。特に中野さんの場合、すごく若くしてプロレス界入りしてそのあとずっと全日本女子の中にいて、いきなりアメリカですからね。

中野　そうなんですよ。頭の中、中学のまんま止まってますからね(笑)。初めはつらかったですけどねえ。とにかく、言葉はわからないし、何よりアメリカ人の気持ちがわからないから、どうすれば会場が沸くのかわからないんですよ。日本人は耐えて耐えて……みたいのが好きじゃないですか(笑)。でもあっちではそういう暗いものは受けないし。アメリカの歴史を勉強したり、英語もなるべく話そうと……(笑)。

—そういう状況の中で、次の試合会場への移動も大変だったでしょうね。

中野　飛行機と車で移動するんですけど、飛行機の乗り方もわからなくて、人のあとを追いていったりして(笑)。

—そういうときはアランドラ・ブレイズ選手は教えてくれないんですか。対戦相手といっても唯一の知り合いなわけですから。

中野　いや、全然(笑)。彼女とは何十回も試合しましたけど、プライベートな付き合いはほとんどないですね。まあ、彼女は典型的なアメリカ人っていうか。以前、日本にいるときから、自分の名前を上げるためにはそこまでするかっていう、ちょっと薄情なところがあったんですけどね。ただ向こうではそれが当たり前なんですよ。

—最終的にはアメリカのお客さんの心を摑んだっていう手応えはありましたか。

中野　すごく実感があったんです。会場も私のファイトに沸いてくれたし。あともう少しいたらバッチリだなって思ってたんですけどね……。

—ちょっと唐突な感じで〝ベルトを取られたら帰国〟ってことになったような……。

中野　そうですね。でもまあ初めは半年の約束だったから、そう考えればだいぶ延びたんですよ。自分としては、とにかくアメリカで有名になりたいって思ってますから、WCWあるいは、ほかのインディペンデント団体にも自分からどんどんコンタクトを取って、写真やプロフィールをプロモーターに送ったりしてみたいと思っているんです。候補はいま三つぐらいあるんで、自分で決めて契約するつもりです。北朝鮮の話も猪木さんがたまたまニューヨークにいらしたときに会いに行って、そこで営業の方から〝ぜひ〟と言っていただいて……だから会社の了解とか取らないで自分で決めたんです。いままで自分で仕事を取ってくるなんてことなかったじゃないですか。だからこの件も自信に繋がりましたね。

—そうすると、日本の女子プロレス界はあまり視界に入ってないようですね。

中野　……そうですねえ。ただね、ごく最近になってWWWAの赤いベルトをまた獲りたくなったな、と……(笑)。

—それ、凄い(笑)！

中野　いまって、次は自分だって思ってる人ばっかりだと思うんですよ。豊田真奈美が獲ったことによって、ある意味でチャンスが広がって。そういう抗争はそれはそれでおもしろいんじゃないかと思います。ただ絶対的な存在っていうのがいなくて。アジャもそこまでいってなかったと思うし。あの赤いベルトは何ていうか、全女の大黒柱、一番の親分が巻くベルトですから、そういう絶対的な存在感のある人がいまいないのはちょっと寂しいかなって。ただそういう中で豊田は本当にがんばりましたよね。それは認めています。

—そうですね。彼女は見事な有言実行で時代を呼び込みました。だからこそ、ブルさんにも北斗晶選手にもライオネス飛鳥選手にも赤いベルトを目指してもらって、ベルトの価値をさらに上げてほしいですね。それにあのベルトを卒業したり、無視した形でエース級の選手が存在すると闘いの図式はわかりにくくなってしまいますよね。

中野　それは本当にそうですね。人間的にも実力的にも、会社にもほかの選手にももちろんファンにも認められる人が巻く最高峰のベルトですからね。だから例えば北斗でも……いまの北斗なら獲れると思うけど、あのブームの最中のつっぱってるときには獲れなかったと思うんですよ。この人には巻けないベルトだなって思ってました。先の見えない立場の選手でしたから。まあ、私も今回帰ってこなければ、もう一度獲ろうなんて思わなかったんですけどね。

—復帰したライオネス飛鳥選手と対戦してみたい気持ちはありませんか。

中野　戻ってきたからには私のギロチンを受けていただきたいと思ってます(笑)。

—それと、ガイアの旗揚げ戦を観てきたんですけど、新人がすごく良かったんですよね。これは全女もうかうかしていられないぞっていう印象を受けましたけど。

中野　うーん。そうですね。全女はいま、みんな自分のことに精一杯で、なかなか新人の練習を見ることもできなくなってるかもしれませんね。それに……みんな〝全女のため〟とかいう意識は薄いんじゃないかな。

—ブルさんが戻ってきたら、そのあたりも変わるかもしれないですよね。

中野　うーん。でもね、もし万が一、私が赤いベルトを獲ったとしても、私は日本に留(とど)まってはいられないと思う。絶対、アメリカに行きたいと思うだろうし……ああ、ちょっと難しくなってきちゃったな(笑)！

—それほど、アメリカは魅力的なところになってしまってるんですね。

中野　そう、アメリカで有名になるんだっていうことを考えると、アメリカは日本の何倍も広いし、いったいこの先、何十年プロレスやればいいんだろうって。たぶん死ぬまでやっても有名にはなれないとも思うし。そう思うと時間がもったいないんです。北斗もメキシコでがんばってたし、私や北斗や、いつかはアジャや京子が日本の女子プロレスを世界に広めていかなきゃいけないと思ってます。それに選手の側にしても、25歳定年がなくなったから、みんな致命的なケガでもしなければ辞めないと思うんですよ。そうなると全女が人があぶれてくる。だから北斗はメキシコで、私はアメリカで名前を売っておいて、いつでも日本の選手を呼べるようになっていかないと……。

—選手の活躍の場を広げていきたいということですね。

中野　プロレスを辞めたあとみんなに思ってほしいんだけど……プロレスやって幸せだったなあって。きっと腰が痛くなったり、何か具合の悪いところは出てくると思うけど、それでもやって良かったって思ってほしいし、みんなが悔いのないレスラー生活を送れるような状況を作れればと思います。

—もし、今年もう一度『V★TOP WOMAN』があったとしたら参加しますか。

中野　参加して、絶対、獲りますよ。獲ってないのはあのベルトだけですから(笑)。

—頭の中はあれこれプロレスに対する夢でまだまだいっぱいですね。

中野　でもね、ニューヨークで山崎五紀さんに会ったんですよ。幸せそうで、元プロレスラーでもこういう普通の幸せが摑めるんだなあってしみじみ思って。ちょっと結婚もいいかななんて気持ちが……。

—結婚するんだったらどんな人と？

中野　プロレスラーと。子供は絶対、プロレスラーにしたいですからね(笑)。

このインタビューの数日後、彼女は北朝鮮へと向かった。遠征後の彼女に〝何か気持ちの変化はありましたか〟と尋ねると〝やっぱり、当分結婚しません。目一杯プロレスやります！〟と言って笑った。

女帝ブル中野。その胸の内にあるものは、ギラギラした〝野望〟ではなく、みずみずしい〝希望〟である。

BULL NAKANO Profile

ブル中野【全日本女子プロレス】本名：中野恵子。S43年1月8日生まれ。埼玉県川口市出身。S58年9月にデビュー。170センチ、98キロ。

Bull
Nakano

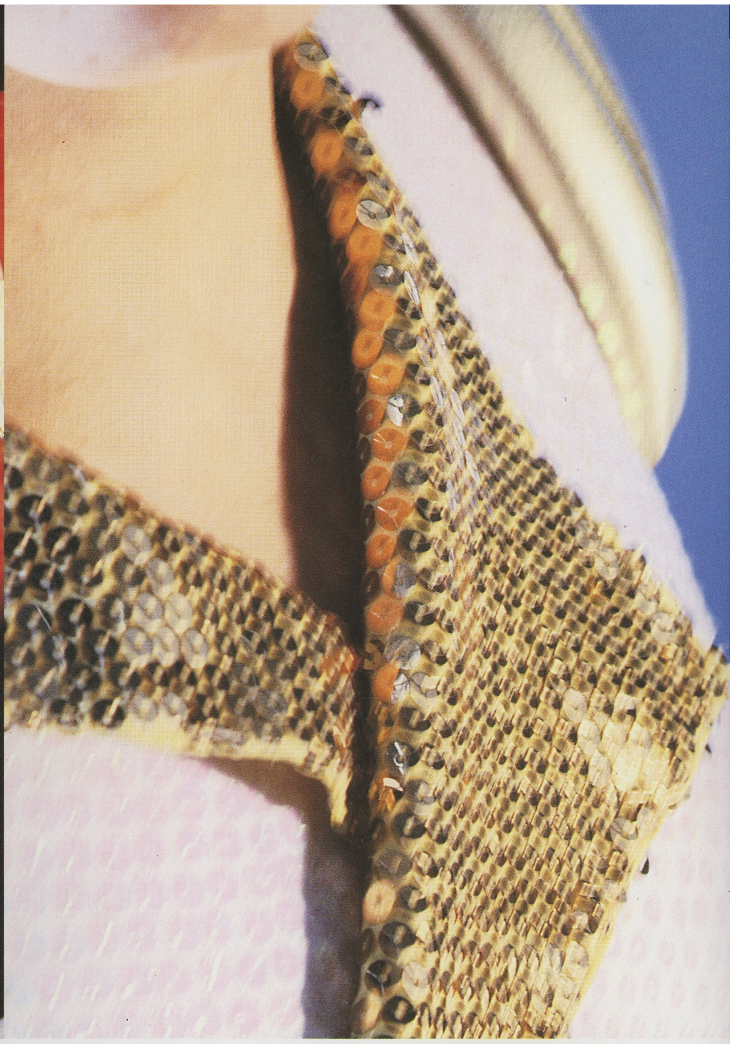
yota

hida

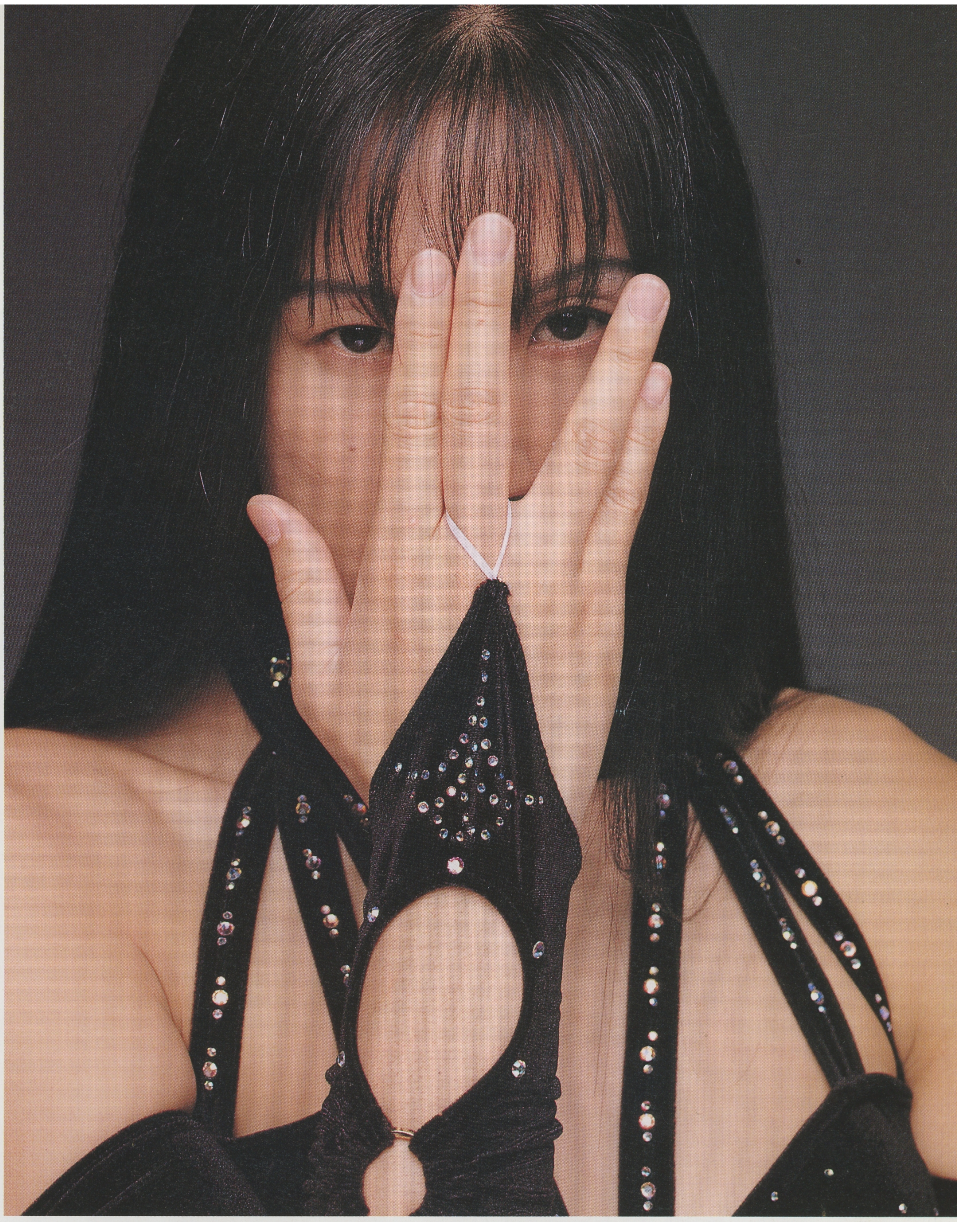
gawa

●豊田真奈美、吉田万里子、長谷川咲恵、伊藤薫の４人が、呼称“豊田軍団”による３か月の暗中模索の期間を経て、このたび、本格的な“集合隊”として始動した。様々なバッシングを背に浴びた彼女たちの逆襲なるか？今夏、女子マット界に４つの熱風が吹き荒れる――。

Photography●KAZUHIRO KITAOKA　Text●HIDENORI KOKUBU
Hair&Make-up●AKIHIKO YASUMURA



Manami To
Mariko Yos
Kaoru Itoh
Sakie Hase



豊田真奈美

私が赤いベルトの価値を落としてはいけない。私が軍団の重荷になってもいけない。

試合をやってても、つまらなくなってたんです、当時は。まぁ、カタチ的な目標は、WWWAを獲りたいっていうのがあったんですけど。普通の試合は目指すものがないまま、ただこなしてるだけなんじゃないかって感じになってきてて。やっぱり、やってる方がつまんなければ、観てる人もそうなんじゃないかと思うじゃないですか。だから、ドキドキワクワクしながら、試合をしたいなって思ってたんです。でも、そのときの全女は、なんかそういうことができるような雰囲気じゃなかった。そしたら、もし、このまま終わるぐらいなら、私が一発行動を起こそうかなと。どうせ、同期とも考え方が合わなかったし。別に、嫌われ者になってもいいやって感じで……。

で、博多の試合。あのときは4対4で、62年組対63年組っていうようなカードだったんですね。なんて言えばいいんだろう。当時、自分はこのまま62年組の中にひとまとめにされたんじゃ、止まっちゃうって想いがすごく強くて。イライラしてたというか、このままじゃダメだダメだって気持ちがすごいあって。で、それがピークに達してああいう行動に至ったんです。

動いてみて、本当、すごかったですよ。いまでもそうですけど、4人でやっていくことになった次の試合から、すごい風当たり強かったですからね。もう、はっきり言って潰されるって感じ。1人に集中攻撃して、組んでる人が1回も出られないままカウント取られちゃったりとか……。

でも、批判の手紙はまったくないんですよ。普通だったら、自分たちのファン以外の人から〝何、くだらないことやってんだよ〟って手紙がきてもおかしくないですよね。だけど、〝誰々のファンですけど、豊田さんたち4人のことも応援してるんでがんばってください〟って手紙がすごく増えたんです。それと〝全女は馴れ合いになってきてた。そういうときに、こんな行動を起こしてくれたからすごくうれしい〟って内容のものも多い。っていうか、ほとんどそういう感じですね。だから、ファンの人も自分と同じことを考えてたんだなって。でも、本当、ハズさなくて良かった。今回、こういう行動を起こして嫌われてもいいと思ってたけど、もし、これで選手からも批判されて、ファンの人からもそうなってたら、私、こうやってインタビューも受けてないと思いますもん。正直なところ。

そうですね。これまでを振り返ってみると、3人が精神的に強くなったんじゃないかと思います。私の場合は、『週プロ』にも書かれましたけど、もともと心臓に毛が生えてるって言われてますから（笑）。以前は、吉田とか精神的にすごく弱かったんですよ。3人の中で一番精神力があるのは、たぶん伊藤かな。でも、あのコでもすごく参っちゃってたんですよ、本当に。だけど、最近、みんな強くなってきましたよね。この間、後楽園のWWWAタッグで急遽、長谷川の代わりに吉田と組むことになったんですけど、そのときに、この3か月間で本当、マリちゃんは変わったなと思いました。

いままでのマリちゃんだったら、途中で張り手とかになったら引いてたんです。でも、この前は京子に負けてなかった。同期の京子、貴子にしたら〝まだまだ、ウチらの足元にもおよばない〟と思ってるかもしれないけど。でも、私から見ると、もう同じレベルに近づいてきてるなと思います。

赤いベルト？　やっぱり、すごく重いですね。獲ったばかりのころは〝WWWAチャンピオン〟ってコールされると、〝あっ、チャンピオンになったんだ〟ってうれしかったんですけど、最近は自分が獲ったことで価値を落としちゃいけないって気持ちが強くて、何も持ってなかったら、いろいろ考えずに試合ができるのかもしれないけど、いまはヘタなことはできない。――というプレッシャーの方が強いですね。以前のように、簡単にはキレられないぞって思うときもありますし。

いまね、個人的に少し止まっちゃってるのかなって。自分のやりたいことが、あまりにもポンポンポンと実現して、何かに行きづまってるわけではないですけど、これから何をやろうかなと考えてるところなんですよ。でも、止まってる場合じゃないですよね。シングルも獲ることができたんだし。こうやって軍団を作ることもできた。次は、WWWAのタッグを獲るというのがいまの一番のテーマかな。

3人のことが重荷になる？　そんなことは考えてみたこともないです。みんな、ドンドン伸びてくれると思うし、実際に、いまそうなってますから。逆に、自分は〝あのコたちの重荷になりたくない〟っていうのが強いんですよ。〝この軍団に入らなければ、カタチに縛られなければ、自分はもっと上にいけたのに〟ってなるのが一番辛い。だから、そのためには、自分も3人に負けないようにがんばるしかないかなと。

3人には、もっと自分が1番なんだって気持ちを持ってもらいたいですね。ウチのパンフレットで貴子に〝豊田さん以外はカスばっかり〟って書かれたんですね。でも、私は、貴子と3人がそんなに離れてるとは思わない。もう、自分に自信を持っていいぐらいの実力はあるんですよ。だから、もっともっと自信を持てば、もっともっと上に行けるはずです。で、みんなが良くなっていって、3人と赤いベルトを争えるようになるのが理想。だから、それまで、何とかしてベルトを守ります。

MANAMI TOYOTA Profile
豊田真奈美【全日本女子プロレス】本名：同じ。S46年3月2日生まれ。島根県益田市出身。S62年8月にデビュー。167センチ、65キロ。

吉田万里子

もう、やられてばかりじゃいられない。
自分自身のため、勝負にこだわっていく。

もし、後楽園で咲ちゃんに負けてリングに残っていなかったら、軍団に入ってなかったのかな？　わからないな。でも、すんなり動けたというかぜんぜん迷いはなかったですね。もちろん、いまでもそうですけど。あのときは最初、咲ちゃんが豊田さんとやっていこうってなって、次に伊藤ちゃんが出てきて。で、最後に自分がって感じになったんですね。入った理由は一緒にやっていこうというより、軍団に参加した方がいっぱいチャンスがもらえるかなと思ったから。それが一番大きいですね。

これまでを振り返ってみて？　最初の1か月はすごく長く感じましたね。もう、試合では容赦なしでしたから。試合が終わったあとに、″生きててよかった″って。ちょっと、大げさかな（笑）。でも、それぐらいすごかったです。本当、想像以上でしたから。控え室も4人だけになったりして。バスでも……。もちろん、バスはみんなと一緒なんですけど、やっぱりね……中には″そんなこと言ってても、実はバスの中じゃ話してるんでしょ″って言う人もいますけど、本当に話さないんですよ。まぁ、バスの中ではだいたい寝てるか本読んでるか音楽聞いてるかだから、もともとあまり話したりはしないんですけど。でも、前以上に話さない。

そういう状況になったから、精神的に強くなったんじゃないかと思います、伊藤ちゃんも咲ちゃんも。豊田さんは、言うまでもないっていうか。これ、軍団に入ったからこそわかったことだと思うんですけど、やっぱり、豊田さんは精神的にすごく強い。だから、WWWAのチャンピオンになれたんだと思います。体力があって、試合で強いだけではダメ。頂点のベルトを獲るには、体力、試合、そして精神面。全部が揃ってないと獲れないんじゃないかって。豊田さんを見てて、そう思いますね。

それと、豊田さんのことでいうと、やっぱり試合でもすごい。思いきりの良さとか発想とか。たとえば、作戦会議っていったら変ですけど″相手を肩車して、豊田さんがキックをやりましょう″ってなるじゃないですか。そのときに豊田さんが″じゃ、背中からやろうか″って。これ、すごく難しい問題で、やられたらやりかえしたいし、負けたらフォール取りたいしっていうのはあるんですよ、自分の中にも。でも、同時に心の端に、相手にケガをさせたくないって気持ちもあるんです。で、自分たちはプロなんだから、二つのギリギリのラインで戦わなくちゃいけない。その線をどこにするかがすごく微妙なんです。だから、誤解してほしくないんですけど、豊田さんがムチャをするっていうのではなくて、自分が上に行くには、もう少し思いきりを良くしなくちゃいけないのかなって。相手に遠慮しすぎてるのかなって。最近は、少しそう思うようになりましたね。

自分の場合だと、けっこうガンガンやられた試合が多かったんですよ。多かったというより、ほとんどそうだったんです。せっかく、軍団に入って″これからがんばらなきゃ″ってときに良くなかったんで、″このままじゃいけない″って。そう思えるようになったことが、いままでの収穫かな。これまでは、焦って上に行かなくても除々に登っていけばいいやって考えてたんですよ。自分でも本当にギリギリまで追い込まれないと、自分は焦らないのかなとも思ってたし。だけど、軍団に入ってやられてばっかりで。もう、ノンビリしてる場合じゃないし、なんとかしなきゃって。

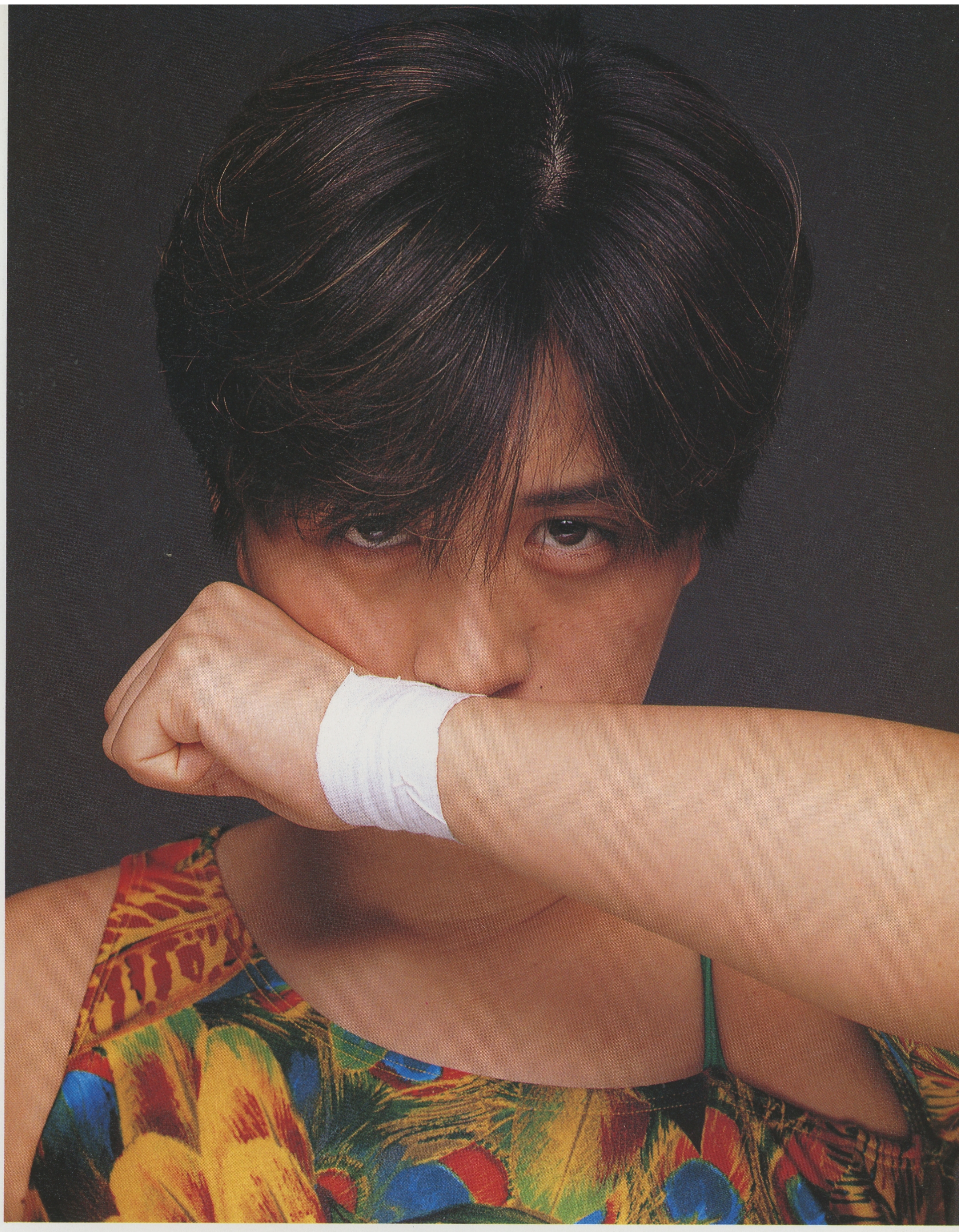
だから、これからはちょっと勝負にこだわっていきたいと思ってます。前は、負けても″良い試合″だって言われると、それはそれでいいのかなって。もちろん、負けてもいいやと思ってたわけではないし、悔しさがなかったわけじゃないんですけどね。何となくそこで満足してるようなところがあったような気がするんです。でも、この先、自分が上を目指すんだったら、やっぱり勝たなきゃダメですよね。いくら良い試合をしてたって負けたら何にもならないし、チャンピオンにだってなれないし。

目標は、やっぱりWWWAのシングル。でも、いまの私じゃ、全然、そんなこと言えるような状況じゃないですから。とにかく、これから少しでも近づけるようにがんばるしかないかなと。それと、やっぱり、お客さんの心に残るような試合をしたいですね。女子プロというか全女の場合、試合数も多いじゃないですか。それにプロレス界じたいの流れも早いし。1週間前のことまではいいですけど、1か月、2か月前になったら誰もそんな昔のことは覚えていないよって状況ですよね、いま。その中で時間が経っても″あのときの吉田は良かったよね″って言ってもらえるような試合ができればなって思ってます。

この先？　どうなるんでしょうね。軍団として何かをやりたいというより、みんな個人個人の目的があって集まってきたわけですから。軍団になったからには、みんなでどうにかしていかなくちゃいけないってことで、話し合ったりもしてるんですけど。

ただ、個人的には欲も出てきたし、やっぱり軍団に入ったのに、ぜんぜん変わらないって言われるのはイヤだし。どうにかしなきゃという想いは強い。でも、いまの自分は余裕のある状況ではないんで、とにかく個人的に結果を残すのが先。当面の目標は『ジャパングランプリ』。ここで勝たないとダメですよね。で、みんながそれぞれがんばって、軍団としても良い方向に行ければいいなと思っています。

MARIKO YOSHIDA Profile
吉田万里子【全日本女子プロレス】本名：同じ。S45年2月15日生まれ。広島県御調郡出身。S63年10月にデビュー。164センチ、65キロ。



伊藤薫

未だ自分の"足りないもの"が見つからない。いまは試合をしながら"それ"を探すしかない。

何でもよかったんですよ、きっかけがあれば。こんな言い方したらあれですけど、例えば"ナベと組んで"ってことだったら、それでも良かったんです。豊田さんについていこうと思って、入ったわけじゃないですからね。自分たちの下って、ASARIなんですよ。ASARIは2年離れてるんです。ってことは、下から追ってくるということもなく、かといって上に追いつくわけでもなく、本当、ずーっと中堅で止まってて。お客さんもいまいち引きつけられないし。7年目にもなって、"全日本シングル"って言ってる場合でもないし。このままじゃないっていう焦りは、ずっとあったんです。そんなときに、豊田さんが1人でやるっていうことになって。だから、自分を変えるきっかけになれば、何でもよかったんです。正直なところ。

で、3か月が過ぎて、そうだな。"自分が変わりたい"って言って入ったんだから、"どんな風に変わってくれるんだろう"って、期待してくれてるファンの人も少しはいると思うんですよ。でも、その人たちに何も返せてないというか、ぜんぜん変わってないのかなって。軍団として考えてみても、"4人が集まった。じゃ、これからどうしたいの"って言われたときに、答えが出ない状況だし。色がハッキリしてないんですよね。どこかまだ4人がバラバラというか、まとまってない部分があると思うんですよ。例えば、豊田さんと長谷川が組む日もあれば、自分と豊田さんが組む日もある。自分と長谷川、豊田さんと吉田さんがタッグになる日もある。だけど、4人のうち誰と誰が組んでも、うまくできるというレベルにはなってない。まぁ、結局、バラバラッと集まった人間がやってるから難しい部分はあるんですけど。

個人として考えてみても、やっぱりまだ変われてないですね。この前、録画したTVの放送を観てたら、ジャガーさんが"伊藤は身体は小さいけど、バランスがとれている。でも、上の方に出てこないのは何かがひとつ足りないからだ"って言われてたんですね。それを聞いたときに、自分でもそうだなって思ったんです。でも、それが何だかは自分でもわからないし、たぶん誰も説明することはできないものだと思うんですよ。ファンの人が自分の試合を観て、感動してくれるようになれば、それが不足してるものを見つけられたときだとは思うんですけど。でも、なかなか……。まだファンの人の反応もイマイチですし。変わりたい。でも、どういう風にそうなればいいのかは自分にもわからない。だから、やりながら探すしかない。そう思って軍団に入ったんですけど、まだまだ……。

だから、この数か月、正直、空回りしてるのかなという感じですね。なんかこれでいいのかな。これで良かったのかなって。気持ちが入りすぎたり、考えすぎちゃったりして試合が良くないことも多いし。以前は、ノビノビとやるだけやってみたいな感じだったんだけど、軍団に入ってからはなかなか思うようにできないみたいな。確かに、これまで良くしてもらった先輩を敵に回すことにもなったってこともあります。でも、一番大きいのは焦りかな。軍団としての色が出てないことに対してのそれ。だけど、自分で決めたことだし、やっぱり、このままでは終わりたくないし。また、終わらせようとも思ってないし。とにかく、早く軍団としてのカタチが作れるようにがんばるしかないですよね。

この4人はうまく言えないけど、戦友みたいな感じ。ずっと前ね、ファンの人にこう言われたことがあるんですよ。"全女の試合はいつも一定のレベルを保っている。それはすごいことだけど、いつ観ても一緒。だから今日観られなくても次の日に行けばいい"って。うれしいような悲しいような話ですよね。で、ある先輩が"そのためには、結局みんなが仲良しじゃダメなんだ"って言われたんですよ。で、自分もそう思うところもあったから軍団に入った。だけど、軍団に参加したことで、また、その4人が仲良くなってるみたいな(笑)。すごく変な現象ですよね。もちろん、軍団はこれまでみたいなただ"仲が良い"だけではありませんよ。仲は良いんだけど、馴れ合いじゃない。それぞれが目的を持って、同盟を組んだっていうか。だから、変な例えですけど、戦友みたいな感じかな。

それから、これもある先輩の言葉なんですけど。今日は、ファンとか先輩の話が多いな(笑)。"プロレスがおもしろいのは、それぞれの考え方が違うからだ"って、聞いたときは、そうかもなぁって思ってたんですね。で、実際、自分がみんなと離れて4人になって考えてみると、本当にそうだなって実感しますね。プロレスに対して共通する部分はある。でも、違うと思うことは、誰でもあると思うんです。先輩、そして同期に対してもね。で、それぞれが持ってる違いが、プロレスのおもしろさを構成する要因なのかなって。最近、そう思うようになりましたね。だから、軍団の中でも違いはあっていいと思うんですよ。たぶんその差がうまく出たときに、軍団の色が表現できるような気がしますし。

ただ、"豊田軍団"って言われてきたのは、やっぱり自分たちの力のなさが原因ですよね。自分たちにしてみれば、違うんだぞって思ってるんですけど。だから、とにかく、4人で何かを築きつつも、自分が変わることが大事。で、最終的には4人の中でも上を目指して、伊藤薫って名前を残せるようにしたいと思っています。

KAORU ITOH Profile
伊藤薫【全日本女子プロレス】本名：同じ。S46年10月20日生まれ。京都府京都市出身。H元年10月にデビュー。160センチ、65キロ。

長谷川咲恵

反省はしても、もう後悔だけはしない。失敗を恐れずに私は前を向いていく。

軍団に入るってことになったとき、私はあまり考えてなかったんですよ。たぶん、伊藤ちゃんはすごく考えたと思うんですね。あのコの性格からして、決して軽い気持ちではなかったと思う。私は自分が変われるんだったらやってみようかみたいな感じかな。結成当時に、よく軍団に入った心境を聞かれたんですね。そのときは、こう答えてたんです。〝このままじゃ「咲ちゃんはがんばってる」って評価だけで終わっちゃう。だから、とにかく何か変えなくちゃいけないんじゃないかと思った〟って。これは去年の11月の東京ドーム大会の前にも言ってました。でも、あのころとは少し切迫感が違うというか。これまで、あまりにも私生活とレスラー・長谷川咲恵の差がなかったですからね。本当、私生活のまんま。良い意味で言えば、きさくで気取らない咲ちゃん。でも、悪い意味で言えばただのバカですよね、プロとしては（笑）。

いまは、こういう状況になった以上は、とにかくカタチからでもいいから、何か変えていこうと思っているんですよ。例えば、バスから降りたらファンの人が寄ってくるじゃないですか。以前だったら、お菓子食べながら歩いてたり、イェーイとか言ってふざけてたりしてた（笑）。でも、いまはスーッと会場に入っちゃうんです。で、自分でやっときながら〝オーッ、緊張感あるね〟って（笑）。会場でもピリッとするようになったし。そりゃ私の性格だから、会場でツーンとしてるのがどんだけ苦しいかっていったら（笑）。ファンの人からしたら、ふだんの顔が見れてうれしいってなるのかもしれない。でも、私はプロだから、観られる立場だから。そう考えると、これって、すごく重要なことだったんだなって思ったんです。もちろん普通は、いつものヘラヘラというかバカな私でかまわないし、爆発したっていいし（笑）。だけど、せめてプロのときぐらいはプロらしくしないといけないって。そう思うようになりました。

それと、この軍団に参加するようになって、反省はしても後悔はしないようにしようって決めてるんです。いままでは、グジグジ考えてばかりいた。後悔ばかりしてたんですよ。だけど、後悔しても終わっちゃったもんはしょうがないから。先のことにしても、いろいろ考えても、何が起こるかなんてわからないし。とにかく、前向きに行くしかないかなと。この前、大阪でWWWAタッグのトーナメントがあったじゃないですか。あのときも〝あーあ〟とは思ったんです。でもクヨクヨ考えてもしょうがないし。これからがんばろうと。で、自分がいつもこんなこと言ってるから、最近は何かあるとき豊田さんも〝しょうがない。明日があるさ。今日はもう終わり。前向きに行こう〟って（笑）。たぶん、自分も軍団のみんなもそうするしかないんじゃないかな。だって、もう始まっちゃったんだから。何が起こるかわからないし、これからどうなるかわからないし。でも、気持ちだけは前を向いていくしかないですよね。

そう。軍団に入ったときに『週プロ』に載りましたよね。あのときに、首の状態はかなり悪いって言ったら、すごい反響があったんですよ。〝そんなに悪かったとは知りませんでした〟みたいなのが。みんな、暗くなってるんだもん（笑）。ビックリしちゃった。でも、本人、全然、そういうのを気にしてませんから。まぁ、確かに、これ以上良くなることはないんです。だけど、別にかばうつもりもないし。ケガで引退することもないし。リングに上がっている以上は、大丈夫ですから。ごまかしてやるぐらいだったら、たとえ短時間でもガッとやります。くどいようだけど、自分、ケガで引退することだけはないですから。もう、バット（吉永）の引退式でコリゴリ。というか、あんな悲しいのってなかったから。

この3か月。今日は一歩進んだと思うときもあるし、マイナス10歩だったなってときもある（笑）。軍団作って、こんなに反響あるとは思わなかったですから。やってみて、あぁ思ったよりも大ごとになってるって。だから、毎日すごく緊張感があるんですよ。いままで気を抜いてたわけじゃないんですけど、忘れちゃいけない緊張感を思い出せたかなって。そういう気はしますね。

ただ、正直に言えば、少し無理をしてるのかなって思うとこはあります。さっき言った私生活とレスラーの部分を分けるってことでもそうだし。だけど、いまは途中の段階。自分を作って苦しいときもあるけど、変わるのはこれからじゃないかと思ってます。だって、やんなきゃ、〝じゃ、お前、軍団に入る前とどこが変わったんだよ〟ってことになっちゃいますよね。身体はある。でも、イマイチ、自分を大きく出せない。いまの自分には、やっぱり何かが足りない。それは、わかってるんですよ。だけど、わかってできないのは、わかってないのと一緒か（笑）。うーん、わかんなくなってきた。YUKIのこともあるし、こういうことにもなったし。いま、自分で何をどうしていいかわかんない状態かもしれない。

でも、何もやらないよりはやった方がいい。これは最初に言った、軍団に入った理由にもつながるんですけど、たとえ、失敗に終わってもいいんです。自分でそれがマイナスだったことに気づけばね。それはそれでいいのかなと。もちろん、失敗に終わらせようなんて、全然、思ってないですよ。たぶん、みんな、これから軍団がどうなるかはわかんない。でも、とにかく、全員が前向きにやってれば何とかなると。私はそう信じています。

SAKIE HASEGAWA Profile
長谷川咲恵【全日本女子プロレス】本名：同じ。S45年6月17日生まれ。栃木県上都賀郡出身。H元年12月にデビュー。170センチ、70キロ。

豊田、吉田、長谷川、伊藤の4人は結集した。しかし、そこには師弟関係も友情も存在しない。あくまで高達を志した個人の〝集合隊〟なのだ。

劇的であったと思う。全女をおもしろくしようと、1人立ち上がった豊田に3人が駆け寄る。王道を駆け上ろうとする豊田が反乱を起こすことじたい、信じられない出来事なのに、そこに予想だにしない吉田、長谷川、伊藤の3人が合体。

よく言われるように、プロレスが筋書きないドラマであるとすれば、それはこれ以上ないドラマチックな瞬間だった。そのメンバーが集まったときの状況。彼女たちに、予想以上の反発を見せた選手たちとの対決の構図。〝豊田軍団〟は、プロレス的な要素をフルに満載して出航した。

が、この軍団は予想を裏切る集団である。プロレス的な匂いをあれほど発散させながら形成されたのに、なぜだかプロレスっぽくないのである。それは多分に4人の関係に起因すると思われる。

彼女たちには、主従関係がない。これまでレスラーが集団を作る際には、メンバー内での力関係がはっきりしていた。ブル様がトップに君臨していた獄門党しかり。北斗が率いていたラス・カチョーラス・オリエンタレスしかり。

しかし、この軍団には名目上、盟主は存在しない。もちろん、吉田、長谷川、伊藤も認めるように、実力的には赤いベルトを保持する豊田が抜けているのは間違いない。が、〝自分の下に付くっていう気持ちで、入ってきたんじゃないから〟と豊田自身が言うように、ほかの3人は豊田を慕って参加したわけではない。

また、豊田の〝全女を変えたい〟という趣旨に共鳴したわけでもないのだ。共通点は2つのみ。1つは変化。吉田は〝これまでよりチャンスがもらえるかもしれない〟長谷川は〝変えなくちゃいけない〟。伊藤は〝このままじゃいけない〟。豊田の全女を変えると程度の差こそあれ、4人が望んでいたものは〝変化〟である。

しかし、共通はしているものの、4人の目的はすべて個人に帰結する。誰かと組んで何かを達成したいという気持ちより、自分の目的を成就するために、軍団を選んだんだって気持ちの方が強いのである。当然、そこには先輩のためならとか、軍団のためなら命を賭けるというプロレスにありがちな浪花節的な匂いは漂わない。

でも、個人的には、それでいいのではないかと思う。ファンは軍団に、友情、あるいは師弟関係といった闘いとは違ったストーリーを求めがちだけれど、よく考えてみれば、個人の結果にこだわるのはプロとしては、しごく当然のことである。

そして、プロ意識が強いほど、伊藤のように〝結局、自分のことを守れるのは自分しかいないんですよね。4人で組んでいて力を合わせることはできても、自分を守れるのは、やっぱり自分しかいないんですよね。だから、ひとりひとりが強くならなくちゃダメ〟って思うのではないかと感じるから。

ただ、だからこそ今後、軍団としてどうやって闘いを展開するかは、メンバーの誰にもわからない。これが共通点の2つめ。個人を有線させればさせるほど、軍団としてのテーマは見えづらくなってくるのだ。

ヒール対ベビーフェイス、遺恨戦。なんでもいい。が、豊田軍団には軍団としての命題、全員がどうやって闘っていくのかというのがはっきりしていない。まぁ、ある意味では、これまでの闘いを遺恨戦と呼ぶことも可能かもしれないけれど。いまの闘いが一段落したあとに、全体としてどういう方向性を目指すのか。依然として、それが見えてこない。

もちろん、先のことは誰にもわからないし、これまでの彼女たちの闘いは十分に見応えのあるものだったと思う。そして、ここでも彼女たちはみんなの予想を裏切った。

これまで4人はどちらかといえば、ファンに温かく見守られる立場にいた。あの想像を絶する苛酷な闘いに耐えられるのだろうかと危惧したファンも多いと思う。が、途中、長谷川の戦線離脱という事態があったにせよ、彼女たちはこれまで闘い抜いて

きたのである。
　インタビュー中、〝これまでやってきて変わったと思うことは？〟と質問すると、〝精神的に強くなった〟と彼女たちは答えた。この数か月間を経て、確かに彼女たちは変わった。それがそれぞれの目指す最終的な変化のカタチでないにしろ、いま4人は、確実に何かに変わりつつある。
　〝何か〟。インタビューしてるときに、何度となく出てきた言葉である。伊藤は〝中堅で留まってるのは、何かが足りないから。それは自分でもわかってるんだけど、誰にも教えてもらえないし。考えて出てくるものではない。やりながら見つけるしかない。それを探す目的もあって、軍団に入ったんです〟と答えた。
　長谷川は〝何もしなければいまのままで終わってしまう。何かを変えなくちゃいけないと思って〟と軍団に入った心境を表現した。
　吉田の場合、軍団に参加してから〝焦りが出始めたんですよ。これまではノンビリとしてたんだけど、どうにかしなきゃと〟思うようになった。
　3人が求める〝上に行くために、足りない何か〟。それを、豊田は〝自分が1番だという気持ちを持ってもらいたい。そうすれば、もっともっと上に行けるはずですから〟という言葉で表わした。
　そういえば、彼女は赤いベルトを巻く以前からこう言っていた。〝この世界でトップに立ちたいと思ってるなら、自分が突っ走んなきゃいけないとこありますよね、自分ひとりで〟と。
　トップには1人しかなれない。だから、たぶんトップに立つ者は、ある意味では個人主義でなければならないのではないかと思う。タッグ、軍団。一緒に組むことで、心を許す時期があったとしても、最終的にはその相手を乗り越えてでも、自分が1番になるという気持ち。それを持っていなければ頂点を極めることはできないような気がする。だからこそ、この軍団は一緒に闘いながらも、シングル・プレーヤーであり続けるのである。
　おそらくこの4人は、ずっと、何かを求め続ける。豊田もまた、トップに立って、〝いま、ちょっと止まってるんですよ。次、何をやろうかと考えてるところなんです〟と言いながら。
　今回の行動を通し、吉田、長谷川、伊藤の3人はギリギリまで追い詰められ、思考よりも動くことを要求される状況を選んだ。
　豊田は一緒に戦う人間を持つことにより、強いだけのトップから、赤いベルトを持つ者の宿命である集団の顔になるべく、全女の実質的なリーダーになるためのノウハウを学ばなければならないようになった。
　4人は〝結果的にそうなっただけ〟と言うかもしれない。が、たぶん、これは今後、4人がさらに成長していくための〝何か〟に通じるものであるような気がする。
　豊田軍団がこれから、どのように動いていくかは依然としてまるで見えない。長谷川は言う。〝今後のことはわかんないですよ。もしかすると、誰かが抜けることだってあるかもしれないし……〟。
　でも、それはそれでかまわないと思う。なぜなら、彼女たちが別れるときこそ、みんながこの軍団の理想形として言っていた、軍団内でトップを争える時期がきたという証であるはずだから。
　そして、予想を裏切ってくれることこそ、プロレスの1番の醍醐味なのだから。

Manami Toyota
Mariko Yoshida
Kaoru Itoh
Sakie Hasegawa

こんな事をしていれば，10年もつ店が
1年でダメになるかもしれない。　（猪木語録より）
オマエ，赤字だろう!?　（藤波語録より）

関西ファンの拠点

BODY SLAM
バディースラム

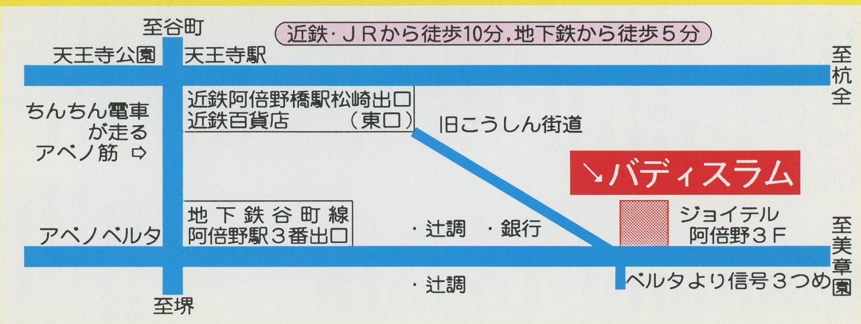
通販OK!

ビデオ・衣類・パンフ　etc.　珍品もあり？
チケット情報
8月30日（水）全日本女子プロレス
大阪府立体育会館　発売中

バディスラムへの道

通販・チケット・珍品各種…怪しい店へのＪＲ天王寺駅からの道順
①東口の改札（出口に向って一番左寄り）から外に出る⇨②横断歩道を渡った所にある階段を降りる
③近鉄連絡口の地下街を左斜め前方に数ｍ歩く⇨④エスカレーターで地上に出る⇨⑤道なりにひたすら前進する
⑥4～5分も歩くと道が左右に分かれているので左を向く⇨⑦するとまた道が左右に分かれているので右へ進む
⑧ほ～ら，正面に信号が見えてきたでしょ⇨⑨信号の手前で左のビルを見上げてみよう⇨⑩ビルの３Ｆに突入せよ！
でも迷ってしまった場合にはＴＥＬするのが早いかも…。

ここやで
おいでや



〒545　大阪市阿倍野区松崎町3－15－14　ジョイテル阿倍野302

営業
月～金　PM12:00～PM9:00
日・祝　AM10:00～PM7:00
土曜日　AM11:00～PM9:00

TEL FAX 06-622-3068

話題のガールポップ・ムーブメントをリードするスーパー・ミュージック・マガジン

GiRL POP Vol. 14

●A4判●定価600円

●表紙・巻頭

鈴里真帆

●音楽シーンで人気急上昇中のガールポップ期待の新人、鈴里真帆をいち早くフィーチャー。デビューからこれまで、そしてこれからの彼女のことがばっちりわかる大特集！

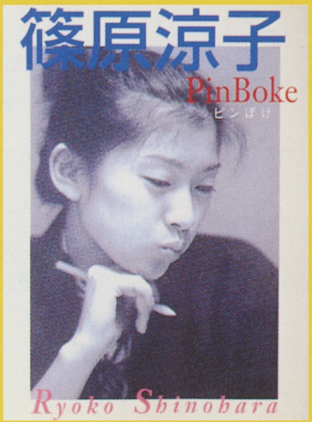
●その他の登場アーティスト

森高千里／谷村有美／久宝留理子
YUKI (JUDY AND MARY)／市井由理
渡瀬マキ／加藤いづみ／久松史奈
橘いずみ／近藤名奈　他

好評発売中！

涼子初めての単行本　「私のすべてを告白しました…。」

篠原涼子 ピンぼけ



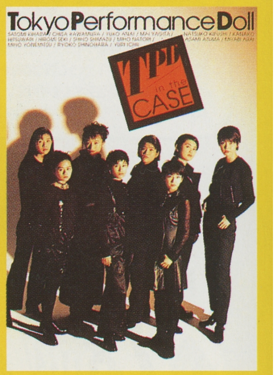
人気急上昇の涼子が自ら書いた、ファン待望の一冊。ＴＶでは見られない素顔の涼子とプライベート写真、涼子の恋愛論、マル秘レコーディング日記、オリジナルの絵、書き下ろしの詞、涼子の部屋を紹介……。

●定価１６００円

TPDのぜ〜んぶが入っているスーパーでスペシャルなBOOK

TPD in the CASE

東京パフォーマンスドール オフィシャル・アーティストBOOK



TPDのアーティストBOOKが、
なんと「GiRL POP」から発売された。
TPD歴史と現在が詰め込まれた一冊だ。
絶対これはゲットすべし。

★伝説の「TPD BOX」未公開カット
★米光美保、篠原涼子、市井由理ロング・インタビュー
★全ディスコグラフィ徹底解説　他

●スペシャル・ケース入り
●定価２８００円

ソニー・マガジンズ
〒102 東京都千代田区五番町6-2　TEL03-3234-5811

※定価は全て税込価格です。

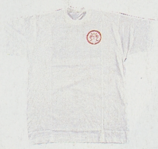
Present

●ラストを飾るはお約束プレゼント・コウナア。左のアンケートハガキに答え、希望商品番号＋アイテム名を書いて平成7年7月7日（当日消印有効）までに送ってね。ハガキの内容が良いと当たりやすい……かも。

①JWP／6・16両国大会Tシャツ（5名様）▷いち早く提供!! 今号でも大活躍(!?)チエちゃんからあなたにど〜んとプレゼント。ついでにキッスもつけてどうや？

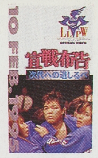
②全女／ビデオ『3・21大阪美神王国』（2名様）▷WWWAタッグ争奪トーナメントほか収録の2本組。ピンナップにも登場のW井上の100代目載冠シーンにぽっ♡

③LLPW／ビデオ『猪突猛進』（2名様）▷全日本タッグ、LLPWシングル選手権試合ほか収録。ついに半田造反の模様がビデオ化!! 対風間戦は必見だぞ。



④GAEA JAPAN／Tシャツ（5名様）▷1stメモリアルもの。これ着てアナタも会場で「やられたらやりかえしぇー」と黄色い声で応援してね♡

⑤福岡晶／直筆サイン入り写真集『DO IT.／』（1名様）▷ラッキーな1名様だけにひーちゃんからのメッセージ付き。何が書いてあるのかなぁ？



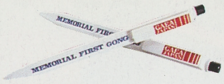
⑥LLPW／ビデオ『宣線布告』（2名様）▷LLPW認定シングル王座挑戦者決定戦ほか収録。そのときいったい何が？ 半田密着ハイライトなど注目すべし。

⑦全助／ビデオ『3・26横浜美神王国Victory』（2名様）▷WWWAシングル戦、WWF世界女子選手権試合ほか収録の2本組。はっきり言っておもしろい!!

⑧JWP／両国大会Tシャツ（3名様）▷カントク大奮発!! 5月シリーズに会場で売られたTシャツをプレゼントしちゃうんだと。この太っ腹!!

⑨全女／試合パンフレット『RINGSTAR』（5名様）▷最近の全女のパンフはクオリティが高くなったなあ。貴子ファッショナブル館がしんぼーたまらんッス

⑩JWP／矢樹広弓Tシャツ（5名様）▷表紙登場!! おめでとう記念大放出だ〜! イラストがよく似てるよね、それにしても。"困った顔"バージョンも出ないかなあ。



⑪GAEA JAPAN／ボールペン（10名様）▷旗揚げ記念で作られたもの。なかなかシャレてていいぞ。さぁ、これでごひいきの選手にあなたの燃える愛を書くのだ。

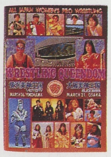
⑫FMW／5・5記念特製ジャンパー（2名様）▷大仁田引退マッチにあわせて作られた本誌初の男子レスラーものグッズだが気にするない。

⑬編集部／3Dプリント写真（計48枚）▷新企画!! あなたのごひいき選手が3Dになって登場。希望選手名を必ず明記してちゃぶだい。

⑭JWP／6・16両国大会Tシャツ（5名様）▷JWPの選手がイラストで登場。バックには"絶賛発売中"のロゴ入りの非売品なのじゃ。

⑮FMW／工藤めぐみ下敷き（3名様）▷大好評にお応えしてまたまた登場!! バパンバパンバンバン、勉強してるかー（Ⓒ加藤茶）

⑯大向美智子／愛用ミサンガ（1名様）▷何とご本人ご提供の使用済み系。クンクンして可っておいおい。"CHAMA"って入ってます。妹さんが作ったものだとか。



⑰全女／『WRESTLING QUEENDOM』パンフレット（5名様）▷ゴージャスな作りの1冊。3・21大阪、3・26横浜両大会が一緒になってます。

⑱FMW／工藤めぐみオリジナルTシャツ（3名様）▷Vol.4に続き大好評にてまたまた登場。それにしてもくどめって人気が高いなぁ……。

⑲ブル中野／ガウンから抜け落ちた羽（1名様）▷お待たせしました超レア物でございます。ブル様マニアの方に是非ってほしいな♡ 家宝にどうぞ!!

⑳掲載全選手／直筆サイン入りポラロイド写真（計71枚）▷プレポラGPに掲載されたポラも対象。希望選手名を必ず明記。世界にたった1枚しかないから人気NO.1じゃ。

Editor's Note

●ホワァチャ〜!! 新パシリッ娘のまるちゃんッス。一人前になれる日を夢見て精進してるッス。ところでまるちゃんの夢はイヌの子を産むことッス。ワンワンかわいいッス。♡……自分のことバカにしてますでしょ!!

Izumi Maruyama

●やはり自分に嘘はつけないものだ。"未来を見ろ"と自身に言い聞かせ、無理に思い出を心の奥にしまい込んでも、余計に奥底で"想い"が募ってしまう。僕は、正直に生きよう。もうすぐ"あの人"が帰ってくる——。

Tatsuya Yasukawa

●ホワァチャ〜!! チーママ編集長の金井ッス。今回はJWP&LLPWの3周年特集だったッス。でもやっぱ"若手プッシュ好き"の本誌としては今回の表紙になったッス。……やっぱ自分のことバカにしてますでしょ!!

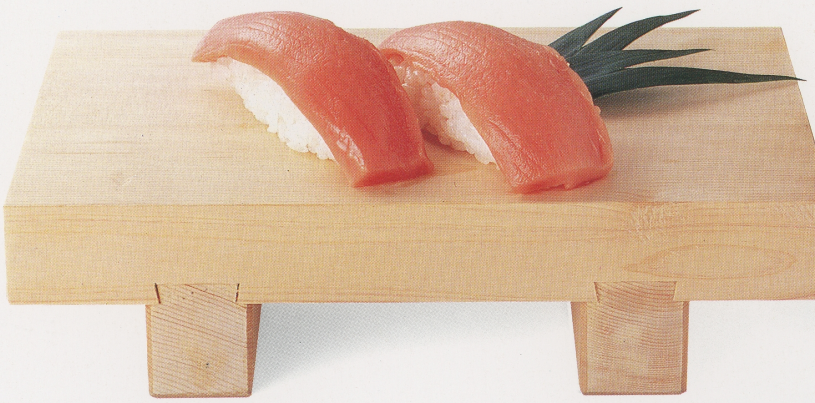
Satoru Kanai

●ホワァチャ〜!! バイトの崇くんッス。みなさんの支持のおかげで、またまたクビがつながっちゃったッス。おかげで家内共々、人並みの生活ができるッス。……ホントに自分のことバカにしてますでしょ!! ひどいなあ……。

Takashi Haga

女子プロレスグランプリ
1995年（平成7年）7月15日発行
発行人／塚本忠夫
発行所／株式会社ソニー・マガジンズ
住所／〒102 東京都千代田区五番町6-2
電話／03(3234)5811〈販売〉 03(3234)5101〈広告〉
03(3234)6711〈編集〉
印刷所／凸版印刷株式会社
Ⓒ1995. Sony Magazines Inc.
定価980円（本体951円）

WOWOWひと月分。



WOWOWは月々3,000円で、加入できるようになりました。

WOWOWが、ずっと身近に!
加入料・視聴料あわせて
月々 3,000円
31回目からは、月々2,000円(視聴料)だけとなります。※消費税別

加入料(27,000円)と手数料(3,000円)の合計30,000円を30回分割
月々1,000円として視聴料(月額2,000円)と合わせて月々3,000円のお支払いでOK。
31回目からは月々2,000円(視聴料)だけとなります。デコーダ及びデコーダ内蔵製品をお持ちの方、ケーブルテレビ局でお申し込みの方は、
加入料(6,000円)と手数料(1,000円)の合計7,000円の7回分割になります。
8回目からは月々2,000円(視聴料)だけとなります。※表示料金はすべて消費税別です。

WOWOW加入のお申し込みは、お近くのWOWOW代理店(電機店・ケーブルテレビ局など)へ。
お近くにお店が見つからない場合や、その他のお問い合わせは、TEL.03-5952-8080(WOWOWカスタマーセンター/9:00〜20:00 年中無休)

ずっと、おもしろい

WOWOW
BS-5ch

LLPWオフィシャルビデオシリーズ

LADIES' LEGEND
PROFESSIONAL WRESTLING
SINCE 1992

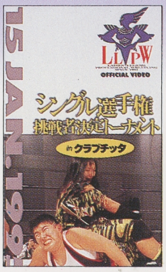
OFFICIAL VIDEO

NOW ON SALE

若手、ベテラン入り乱れての壮絶初詣バトル!
大向の成長ぶりも必見!

女念
〜とどめ知らず〜

■'95.1.6 後楽園ホールにて
90分¥4,980(税込)■PCVE-10279 VHS・カラー



NOW ON SALE

立野のベルトへの挑戦権を懸けた
〈弱肉強食〉バトル!

シングル選手権
〜挑戦者決定トーナメント〜

■'95.1.15 クラブチッタ川崎にて
90分¥4,980(税込)■PCVE-10288 VHS・カラー

NOW ON SALE

神取、憤怒!戸惑う風間!
青天の霹靂、半田が謀叛!

宣戦布告
〜次代への道しるべ〜

■'95.2.10 後楽園ホールにて
90分¥4,980(税込)■PCVE-10295 VHS・カラー

NOW ON SALE

半田よ!何処へ行く!?

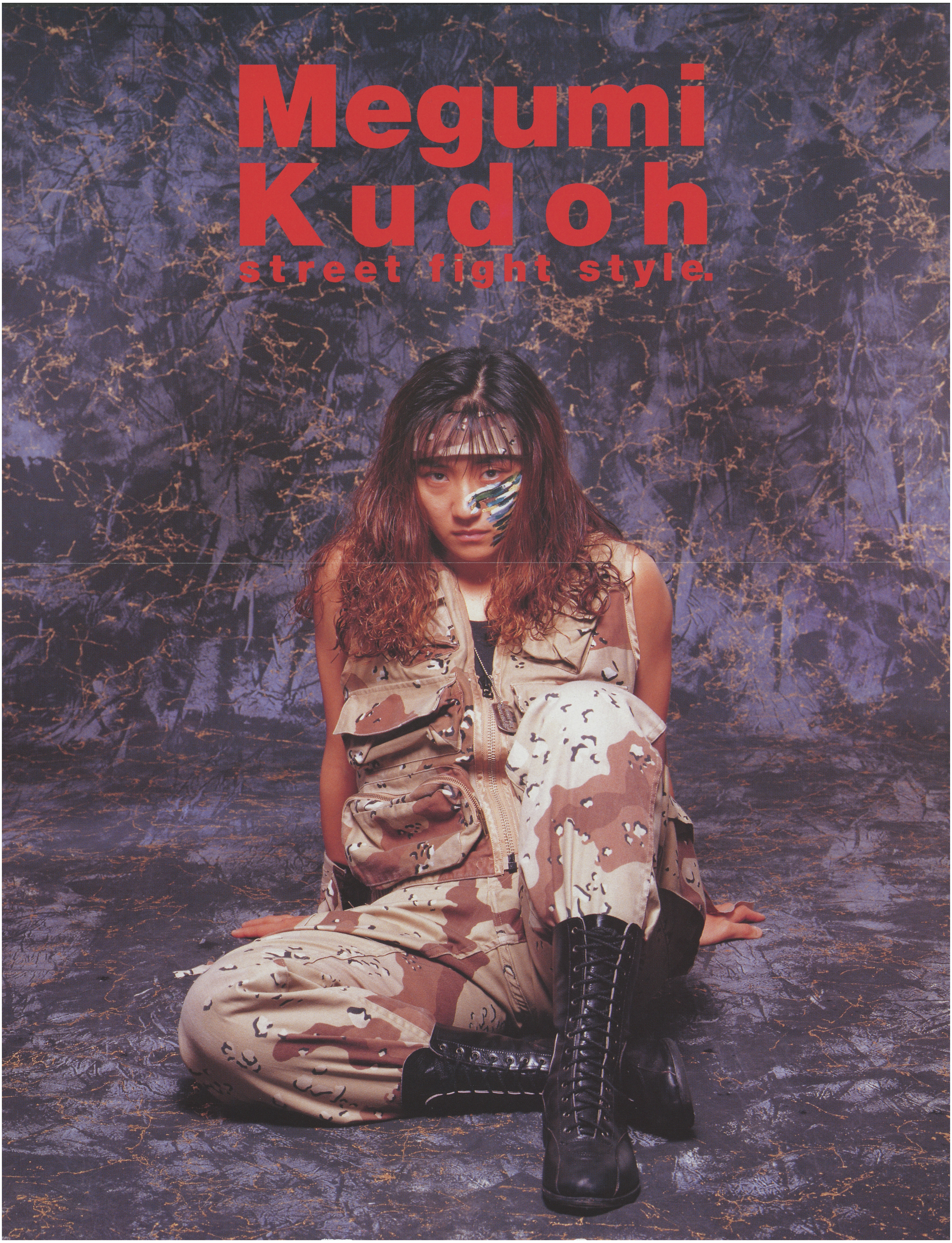
猪突猛進
〜ゆるぎない牙城〜

■'95.3.17 後楽園ホールにて
90分¥4,980(税込)■PCVE-10305 VHS・カラー

●各巻観戦クーポン券付き!

PONY CANYON INC. ■お買い求めは、レコード店・デパート・ビデオ店・書店などで。お近くでお買い求めになれない場合は、ポニーキャニオンショッピングクラブ 0120-111-326へ。お問い合わせ 03(3555)6671

長与千種。
with Monta


Megumi
Kudoh
street fight style.

Yumi
Fukawa

kyoko
and
takako